果樹園 一九一号 昭和四十七年一月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円

果樹園

第191号

画仙・棟方志功(十) 小高根二郎
老境 田中克己
晩秋 織田喜久子
上高地 高梨一男
室戸岬十一章 吉本青司
応召日記(一) 蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(十)

小高根二郎

2 版画への開眼

太平洋画会の入選を契機に松木が上京し、阿佐ガ谷のアトリエで、志功と待望のアーチストとしての生活を始めたという貉ニュースは、故郷大湊の宮川菓子店にくすぶっていた古藤正雄を、矢も楯もたまらず駆りたてた。古貉の一匹としての名誉にかけても、上京する決意を堅めたのだった。古い軍港の町に錨を下している格好の、頑固な鍛冶職の父直吉を説得するなぞということは、古藤にとって、ほとんど不可能事に属した。万やむをえず、非常手段として奥の手である仮病戦術を起用した。彼は重症の脚気を装った。足が鉛のように重く、その上に痺れるので、自転車を漕ぐことができなくなった。従って、得意先である海軍官舎の御用聞きもできず、毎日店でゴロゴロしてるより仕方なかった。目障りの上、又一向に直る気配もないところから、当分の間、自宅療養をすることになった。が、厠に立つにもチンバをひきひきのていたらくで、いつ復業できるか、その見込みさえ立たなかった。二年余りで青森の甘精堂の徒弟奉公をしくじっていた。今度も一年ばかりで、また宮川菓子店の勤めも挫折するわけである。息子の不甲斐なさに業を煮やした直吉は、時に癇癪玉を爆発させた。が、癇癪玉は病状を悪化させはすれ、一向に薬餌の効を発揮しなかった。さすがの直吉も匙を投げかけているところに、古藤の悲願に勘付いている店主の宮川が説得にきた。息子の方ではなく、親父の方を…である。どうやら正チャの病気は、陸奥の寒い空気や水コに原因があるらしい。いっそ思い切って、暖い東京サに転地療養させてみたらばどんだべな？ という提案であった。実は、直吉とて息子の悲願を知らないわけではなかった。彼が木彫家になりたいと、幾度か願い出たつど、にべもなくはねつけてきたからだ。が、もう本人も二十歳だ。こゝらで性根を打込む仕事に取り憑かれなくては、一生を棒に振ることになりかねまい。しようがねェなァ、それだけ東京サ好きなれば、野倒死(のたれじに)を覚悟で東京サ行げ！ ということになったのである。

古藤の脚気はたちどころに治癒したことは勿論である。喜び勇んで彼は上京すると、ぬかりなく目黒の新聞販売店に住込んで、朝夕の新聞配達に従事した。青森時代とは打って変ってタフな健脚ぶりであった。やがて、どうやら東京の案内にも明るくなってくると、志功たちの阿佐ガ谷に近く、中野駅前の新聞販売店に鞍替をした。時に配達の足を延ばせば、憧憬のアーチスト王国——古貉たちの巣の臭をかぐことができるからだ。志功・松木はすでに、神頭邸前のつぶれそうな二階屋から引越していた。引越したといっても、すぐ

近くのテニス・コートの隣接地で、歯が抜けたあんばいのその空地に向い合って建てられた平屋に、二人は分宿していた。寄合世帯でワイワイ気勢をあげるだけでは、互に沈潜した精進にさしつかえがあると悟ったからだ。そういえば志功は、この秋の帝展にも落選していた。三度目の勝負にも負けたのである。この悲痛さには声も出なかった。ただドモ又のように、うん！ うん！ 悲運を唸るばかりであった。例の橋本花子は昨年についで今年も入選していた。志功が心の神棚に祀っていた上野山清貢などは、ゴッホ風な「パラダイス」で見事に特選をせしめていた。志功の悲痛はここに極まったといってよかった。

ある早暁、まだ暗いうちに朝刊の配達をすませた古藤は、余勢を駆って一ッ気に阿佐ガ谷まで駆け抜けると、志功のアトリエに立寄ったことがあった。テニス・コートの側から、氷った硝子戸越しに暗い屋内を覗き込んだ。が、まだ寝入っているらしく物音もしなかった。朝日影は、霜柱が浮いたデコボコのコートに、橙色の舌を伸ばしだしていた。硝子戸には桧葉模様の凍結がしていた。古藤はその凍結に、はずんだ熱い息を吐きかけた。桧葉模様はみるみる融けると、頬を伝う涙のように硝子板の上を流れた。その流れの底に、やがて眼を閉じた志功の寝顔が、浮き上ってきた。つねに光を求めてやまぬ彼は、窓辺に近く寝ていたのだ。なつかしさで、「棟方さん！」と呼びかけたかったが、その寝顔は一向に志功らしくなかった。苦虫を噛みつぶしてるような顔である。どこかで見覚えた、誰かに似ている。そうだ。ベートーヴェンなのだ。それも赤十字青森支部で見た「ドモ又の死」で擬装用に使った、あのデス・マスクにそっくりなのだ。彼が生涯の悲運な真剣さを、氷遠の眠りでも型ったように、志功もまた不運の真剣さを、夢の中まで持ち込んでいるのだ。それもそのはず、志功は昨夜眠りしなに、重い闇のカンバスに向ってデッサンを描いたからだ。それは、橋本花子からデッサンがないと忠告されて以来の夜毎の習慣だった。仰向けて描く手は重かった。指先はいつか、特選の栄に輝やいた上野山の「パラダイス」の構図をなぞっていた。特にその画面の下方の、シャコ貝の中で産湯をつかっている赤ん坊……。その抱きとりたくなるようなふくよかな線を、幾度も、幾度も、宙に描いてみた。漆黒に金泥で描かれたような幾つもの赤ん坊は、芳崖の悲母観音の赤ん坊のようにシャボン玉にくるまると、次から次に宙へ舞い上っていった。と、思っていると、重い手が胸の上に落ちてきて、志功はいつか寝入っていたのだった。古藤は真剣そのものの志功の厳粛な寝顔に一礼すると、道草の時間を取り戻すために、中野へ向けてすッ跳んだ。

焔の幻影

回想　三島由紀夫

坊城俊民

三島由紀夫との交友三〇年に及ぶ著者が、学習院における二人だけの交流を通して、三島の萌芽と開花と散華の予感と回想を語る。三島由紀夫の研究に必読すべき哀悼の書。

■目次■

「詩を書く少年」のころ
「春の雪」優雅について
三島由紀夫の手紙一、二、三、四
「豊饒の海」文体と思想

¥780

角川書店

その日の夕刻、夕刊を配り終った古藤は、志功のアトリエを再び尋ねてみた。今度は土産として、ぬくぬくとした巴焼の新聞紙包を懐中にしていた。が、あいにくと志功翁は不在であった。コートを距てた向いの松木翁を訪れてみたが、これまたアルバイトに出掛けたかして不在だった。せめて土産物なりと置いて帰ろうと、志功のアトリエにとって戻した。戸口は開けっ放しだった。六畳、三畳、台所だけの見通しのいい屋内には、売れない絵と額縁の山が壁にもたせかけてあり、その他の家財といえば、鍋、茶碗、箸一膳だけであった。六畳の間いっぱいに、歳末売出しポスター（四尺×二尺）が十枚、撒いたように拡げてあった。濡れている泥絵具を乾かしているのだ。高円寺商店街からの依頼品だった。恵比寿、大黒の福の神が描いてあったり、松竹梅をあしらったものもあった。又、クリスマス・セールを象徴したつもりだろうか、チンチンを露出した幼いキリスト像も混っていた。上野山の「パラダイス」の赤ん坊にどこやら似ていた。が、さすがに夜毎、闇のカンバスに描き馴れたデッサンである。流れるような暢達の線は、ふくよかで気品の溢れた愛の子神を形づくっていた。その一本一本の線に、巧まぬ稟性が脈々と波打っているのに驚ろいた古藤は、手本として、この一枚が欲くなった。ひとつ木彫のモデルにしてもいいと思ったからである。が、考えてみれば、ポスターの一枚一枚が志功翁の米塩につながる貴重な商売用だ。一枚が缺けても取引にさしつかえができよう。ポスターをあきらめた彼は、壁に立てかけた四つ切りの木炭紙を綴じたスケッチ・ブックの一冊を開いてみた。黒のコンテで懸命に描いてある。どの一枚も投げやりな描写はない。デッサンとしてではなく、タブローの心構えで描き込んである。対象から逃げてはいない。さりとて対象を追ってもいない。まさに対象を摑んでいる。古藤は何より、その心構えというか、気魄に呑まれた。その中の一枚を、作品のパターンとしての手本ではなく、制作魂の模範として、なんとしても欲しかった。川辺を描いた一枚があった。向う岸には木群が望まれ、

老境

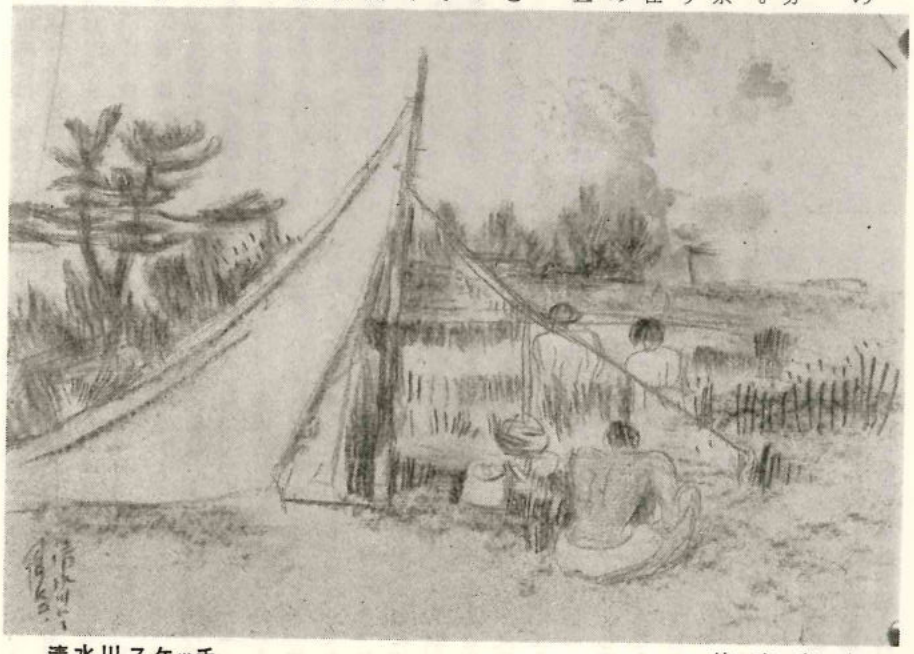
田中克己

わたしが天国に招かれる日のことをいふ
と
友はみな悲しさうな顔をする
わたしは一度死んだのでもう二度と死ぬ
ことはない
わたしの信仰はわたしにさう教へる
わたしはその日その時以後
もう今のやうに罪を犯すことはなく
静かに生きつづける
わたしはあらゆる物を愛し
あらゆる物を眺めることを許され
怒りや恐れや憂ひに心を痛めることから免
がれる
今はまだそこまでゆかないが
だんだん近くなって来ているやうに思ふ
怒りっぽかったわたしを知ってゐる友だち
は
このごろわたしのおだやかになったのに気
づいてゐる
罪深かったわたしは静かに女子学生に学問
を教へ
その好学の心の薄いときにはちょっと悲し
い顔をする
これがわたしの老境で
なんといふ幸せ
わたしは主に感謝したてまつる。

川面には、そこここに葦が生えている。松と雑草が生い茂ったこちらの川岸には天幕を立ててある。力強く支柱は地を穿って立てられ、左側だけ日除けのためだろう、幕が張られている。支柱の右には綱だけが張られ、その綱から、炊さん用の鍋が下げられている。その前に、猛ましい上半身を裸にした青年が、胡坐をかいて調理でもしているあんばいだ。その向うに二人仲好く肩をならべている。左の方は麦藁帽をかぶり、右の方はオカッパ風の長髪だ。おかずを釣るために糸を垂れてる姿勢である。画面の左下に、「清水川にて」「SHIKO」としるしてある。

故郷を出てきたばかりなのに、古藤の胸はなつかしさが一杯に溢れた。清水川といえば、大湊から青森までの行程の中間、夏泊半島の手前の川だ。調理をしてるのは藤本貉、麦藁帽は山田貉、長髪は松木貉に相違ない。青光画社の楽しいピクニックなのだ。古藤の耳に、葦間を縫って流れるせせらぎが響いてきた。うねる水の紋様の稜角は、まばゆいほど光にひらめいた。そのひらめきより明るく、ハエたちは、そこ、ここに、一閃した。古藤は巴焼をばくつくのをやめて、残りの入った新聞紙包を、それと分るように畳の上に置くと、清水川風景をスケッチ・ブックから抜き取った。そして、折れぬように、新聞の残部にくるみこむと、来たときのような勢で、すッ跳んでいった。爾来、この清水川風景は、古藤の秘仏のような秘蔵品となり、現在もむつ市大湊の自宅の玄関に、こっそり、且公然と飾られている。

かくて、志功が心をこめて描いたポスター十枚は、歳末の高円寺の街頭でにぎにぎしく景気を呼んだ。が、残念なことに、ミソカまで、その芸術的な宣伝力を発揚することはできなかった。と、いうのは、突然、大正天皇が崩御されて、暮も推し詰った二十五日に、大葬がとり行われることになったからだ。敬弔の意を表するため



清水川スケッチ　　棟方志功

に、日本国中は歌舞音曲をとり止め、喪の色一色に塗りつぶすことが要請された。当然、志功描くところのポスターも、有終の美を発揮するまでもなく、茶毘にふされてしまったのである。

昭和元年は師走の七日だけで、明ければもう昭和二年だった。志功は数え年二十五歳の働き盛になっていたが、この秋も女神たち—ローマの臥女神や、不忍池の弁財天に惚れてもらえなくて、帝展に入選できなかった。まさに四回目の落選だった。この春に女子美術を卒業した橋本花子は、今秋もゆうゆうと入選していた。連続三回の入選である。「女にしてこの偉業。まさに天才……」という彼女の晴れがましいニュースが、連日郷土新聞に賑やかに報道された。その記事を読んだ賢三から、送金のついでに沈痛な忠告がきた。聞くところによると、画壇という所は、いろいろと閥や流派があるそうな。学校サ入らねば……、師匠サとらねば……、世に出られぬようなら、金はなんとかするはで、学校サ入れ！　それとも師匠サ取れ！　と、いつになく激しい語調で書いてあった。志功は下唇を噛んだ。眼尻に悲痛な涙が浮んだ。この甲斐性なし奴！　父幸吉の墓も拝まないで、一体、幾年をすごすつもりだ。毎月きちんと手に入る、几帳面な兄からの送金。二十円の中の十円は賢三から、他の十円は伯母よねから、ということであった。伯母からの分は賢三が家を建てた時の彼女からの借金の毎月の返済分を、ワだばいらねでスコーサ送ってやれ……という、彼女の特志によって加えられたものだった。つまり、現実には二十円丸ッぽ、賢三の財布から出ていたわけだ。或る月、志功はこの定額の他に、さらに十円の追加を無心したことがあった。しがないバスの運転手の懐中に、そんな余裕があるはずはない。折から吹雪の季節だったが、賢三はオーバーをぬいで質に入れると、その追加分を送ってくれたこともあったのだ。この事実はともあれ、金はなんとかするからといってくれただけで、志功の眼に有難涙が溢れた。しかし、美術学校に入ることも、師匠につくということにも、反撓を感じた。それは痩我慢でも、意地でもなく、信念だった。志功は頬に伝う涙を掌で拭うと、「師匠をとると、その師匠以上にはなれぬので、生涯師匠はとりません」と、送金の礼状の末尾に、きっぱりと書き足した。

晩秋

織田　喜久子

信州のさる公害地で
土壌のなかのカドミュウムを
植物に吸収させて除去する実験をしている
大根が固くちぢまり、日まわりの苗が枯れ
るなかで
セイタカアワダチソウばかりは
他の十数倍のカドミュウムを吸って
高々と花をつけている

終戦直後に渡来して
日本の山野を黄色い炎で席巻したこのギャングは
最近、公害花として悪名高いが
公害花が公害を食うと、どういうことになるか

わが家に近い休閑地では
スモッグを吸って肥えた彼らの大群落が
綿毛の穂先をびっしりそろえて揺れやまぬ

事実、その秋の帝展の委員は、高間惣七、熊岡美彦、安宅安五郎、新井完、柚木久太、清水良雄たちであった。橋本花子の師匠である高間は、その筆頭に名をつらねている。これらの委員たちの上には、さらに大師匠や大親分がたむろしていた。独立不羈で真に独創的な作家の存在など、芸術に無縁な役人が差配する官展である帝展では、もともと許されなかった、といって過言でなかった。つきつめれば、渡世にもとずく権威主義的な緬張りと、見識を形に入れた馴合とが、とりしきるアルチザンの領分なのだ。従って、この領分に出入するには、勘合符や合言葉とでもいうべき、エコール（派）やエピゴーネン（亜流）が入場券として必要だった。その証拠というわけではないが、前掲の栄誉ある帝展委員の誰が、五十年後の今日、その地位にふさわしい名をとどめているであろうか？

兄へ、師匠をとらぬと、決然と書きやった志功の信念の根底には、明らかにこの覚知があったのだ。それはまだ、懐疑を一歩踏みだしたぐらいの境涯ではあったが、遙かな視野に、やがて進路がひらけてくるような仄かな気配が感じられた。

「そのころから、油絵の在り方に疑いを持つようになりました。油絵には何か腑におちぬものがある。これはなんであるか。この疑いはどこからくるのであろうか。——

当時、日本の洋画壇には、和田英作、中村不折、中沢弘光、岡田三郎助、藤島武二氏などという大家がいて、帝展出品の洋画家はみなその傘下にありましたが、わたくしは、梅原竜三郎、安井曽太郎の両先生こそ洋画壇の二ツの大きな峰であると思いつめていました。梅原、安井の神様のような両先生でさえ、西洋人の弟子でなかったか、——日本人のわたくしは、日本から生まれ切れる仕事こそ、本当のモノだと思ったのでした。そして、わたくしは、わたくしだけではじまる世界をもちたいものだと、生意気に考えました。」（「板橋道」）

この油彩画に対する本質的な懐疑。大師匠・大親分が睨みをきかせている親分子分関係で成り立っている画壇に対する不信。その偏狭な日本画壇の中では、僅かに巨峰と仰ぐに足る梅原・安井の両先生だって、元をただせばルノアールの教示にあずかったり、ジャン・ポール・ローランスの手ほどきを受けた弟子ではなかったか？　犀利に外に向けたこの批評眼は、当然、次には志功自らの内部にも向けねばならなかった。

「目が弱いわたくしは、モデルの身体の線も見えて来ないし、モデルも生涯使わないで行こう。こころの中に美が祭られているのだ。それを描くのだ。先生もいないし、存分に材料を買う資力ももっていない。し

歌の深さ

安田章生著

西行・定家・花園院・光厳院・茂吉その他を論じ、中世文学の伝統のなかに歌の深さを探究して、現代詩歌への指針を提示した書。

■目次■

I
歌の深さ／短歌の現代／無我の詩心／古典和歌と現代短歌との間

II
万葉集と古今集・新古今集／古今集論／新古今集論／花園院／光厳院

III
日本芸術の伝統と情操／古典和歌のユーモア／和歌的抒情神と近代文芸／小林秀雄と中国文学／定家と西行と茂吉と／現代短歌の有心・無心

¥850

創元社

かし、洋画でいう遠近法をぬきにした、布置法による画業を見出したかったのでした。それには、日本が生む絵にもっとも大切な、この国のもの、日本の魂や、執念を、命がけのものをつかまねば、わたくしの仕業にならない。——このように、若い気焔をもやしたてて、自分をたたき、たたいて、自分の置きどころをさがそうと思った……のでした。」（同前）

つまり、生まれながらの弱視のワには、ワに向いた描法があるはずだ。同じモデルを使ったとしたら、橋本花子に見える線が、ワには見えっこないのだ。しかし、心の内のモデルを描くとしたら、花子に見えない線だってワに捕えることができる。夜毎、床の中から漆黒の闇に描く自在の金描……。それは軌跡を残さぬからこそ千変万化の自在の可能性に恵まれるのだ。そうだ。心の中に祀られている美を描くことだ。なにを拘束された外界の物象に限る必要があろうか？　それは志功にとって重大な目覚めであった。それに、遠近法に限定された洋画の伝統に、なんとないあきたらなさを感じた。なぜ折角の美が、遠近によってえこひいきされたり、差別待遇を受けなければならないのか？　遠くにあるからこそ慕わしく、近くに存在したって忌み嫌われる物象があるではないか……。遠近が倒錯したとて、それが美にとって何の不都合があろうぞ。西洋の近代画家で、比較的に遠近を平等に取扱ったのは、やはりゴッホだ。アルルのハネ橋の向うをゆく馬車。プロヴァンスの積藁や、花咲く桃畑の、遙か彼方の家や、果樹園や、山稜。ローヌ川や、糸杉の田舎道の上に、電燈のようにまばゆく光る星々。サン・レミの近景を呑み込むようなでっかい夕陽…。この遠景に対する彼の公平な愛情は、誰あろう、わが北斎に学んでいるのだ。お馴染み、江戸日本橋から望んだ倉屋敷の向うの城や富士山。浅草本願寺の屋根からはっきり見える中空のトンビ凧。武州千住の川向うの立樹の群。神奈川沖は浪裏の富嶽。七里浜や、浪江山中の富士より遠い入道雲。酸州片倉の茶畑の遙か彼方の茶摘女……。この北斎得意の遠いものに寄せる恋慕に似た愛情が、いつかゴッホの遠景に対する公平と平等を培ったといっていけないだろうか？　それほどゴッホは愛弟テオドルに数々の北斎礼讃を書き送っている。

「ベルナールと作品を交換した際に、日本のものをたくさん渡してしまった。だか

上高地

高梨一男

穂高連峰を背に
河童橋にイめば
岩魚の泳ぐのが見られる

黄葉の唐松の群落と
梓川の清流と
その諧調を越えて
逆光の空に

赫肌の焼岳そびえ
頂上ちかく一と筋の白煙を噴いている

——それらただずまいを写し
波がしらのない波を立てている
大正池
岸の化粧柳に
薄ら寒い夕風は吹き
離々として
立ち枯れの木々
白骨のように
水を抽ん出て

ら、北斎の富士三百景と風俗画を選んでくれ給え。」

「僕は、またパリに一日でも行ける機会があったら、ビングのところへ寄って、北斎やその他のよい時代の素描を見るつもりだ。」

「僕は今日の夕方、実に珍しく素晴らしい絵画的な効果を見た。ロアール河の岸に繋がれた大きな石炭船だ。上から見るとそれは驟雨にぬれてきらきらと光り、水の色は黄味のある白と真珠色が混って、リラ色の空と夕日のオレンジ色の帯、町が紫。船の上には汚れた青や白の服を着た人夫たちが往ったり来たりして積荷を陸あげしていた。まさしく北斎そのものだった。」

「君は北斎を見て、『この波は爪だ、船がその爪に捕えられているのを感じる』と手紙に書いていたが、北斎もまた君におなじ叫びをあげさせたわけだ。もちろん、北斎はその線と素描とによってだがね。」

「僕はビングの複製の中では、一茎の草となでしこと北斎がすばらしいと思う。誰が何と言っても、平板な調子で彩色したどんなありふれた日本版画でも、僕にとってはルーベンスやヴェロネーズとおなじ理屈で素晴らしいのだ。」（岩波文庫「ゴッホの手紙」ゴッホーボンゲル編 裕伊之助訳）

この北齋恋とでもいえるゴッホの熱烈な傾倒が、版画から学び取った遠景憧憬や、点景人物の生動する活気や、深淵のようなブルッシャン・ブルーや、さては放胆な構図となって、彼の作品に現れたのは当然だ。いわば、ゴッホの燃える画魂の内で、わが浮世絵師・葛飾北齋は、まさに青不動尊として祀られていたのだ。美の神は、なにもギリシャやローマや、フランス等の遠い異国にばかりおられるわけではない。ワの五尺の肉体に、身の置き所と住み場とを与えてくださっているこの日本にだって、立派にいらっしゃるではないか！ この覚知は、「日本人のわたくしは、日本から生まれ切れる仕事こそ、本当のモノだ」という自覚を志功に目覚めさせた。そして「布置法による画業」「この国のもの、日本の魂、執念、命がけのもの」を自分の仕業（しぎょう）とすることを念願させたのだった。

版画試作　　棟方志功

この試みは、やがてハガキ大の版画として制作された。隣接地であるテニス・コートの向うの荒蕪地に取材したのである。立ち枯れた雑草がはびこる空閑地に、にょっぽりと電柱と裸の樹が生えている。その向うには、いかにも新開地らしい不揃いの家並がつらなっている。スカイ・ブルー、ライト・レッド、ブラックの三色刷だ。刀には、すでに今日の志功を想わせる雄勁さが脈打っている。この版画を刷った官製ハガキは、弘前市植田町竹内方に帰省している先輩下沢木鉢郎に送られた。消印は昭和二年十二月八日。発信地は東京ホンゴー弓町一ノ八とあり、「志弟」と墨書している。すでに国画会の版画部で地位を占めている先輩に、批評を乞う謙虚な心ばえがにじんでいる。

神風連実記

荒木精之

神風連の精神を説いて、この著者の右に出る者はない。作家であり、歴史家であり、そして神風連には最も詳しい著者が、ながい沈黙をやぶって、その全容を明らかにした。もえたぎる情熱を内に秘めながら、叙述は正確な史料にもとづき、あくまでも冷静である。かれらの師（林桜園）の教えに筆をおこし、同志の最後にいたるまで、私たちは安んじて異常な事件の推移をたどることができる。それは近代史の上で「一つの異彩」であった。しかも「日本的な深い本源」に根ざすものであった。

大阪朝日新聞
¥930

東京都千代田区丸の内三—三—一　新東京ビル
新人物往来社

応召日記 (一)

蓮田善明

昭和十三年

十月十七日

神嘗祭当日召集をうく。

十月十八日

このノート副島氏より贈られたり。

本日微雨、霽れ間に出立。途中明治神宮に詣づ。詩と決心の境域なり。われ、ここより出発す。

宮城前にて遙拝。

車中不二山見ゆ。初の雲間に雪の絶頂のみ見え、やがて裾野の蹤々たるを見る。裾野の果までを廻顧してさらに絶頂をみる。高く聖なり。秋の午後の日に白く光る山頂は、精神の炬火をともせるごとし。天に到りしかも地へ下る。山肌うす赤く日に映ゆ。

夕藹の浜名湖、しづかなるたそがれの微光にやはらかな波の光り、釣舟点々、眠るがごとく、よく見れば、これより仕事につくためにはたらけり。しづかなる夕景なり。

西空の美しき夕焼の、車のくらき窓外の湖景にガラスに映りて二重となり、夢幻の如し。

圭堂、田尻両少尉と同席。

第六師の応召将校十名ばかり。年輩も僕より二、三上のもの多し。

おほきみにささげしいのち
伊東静雄氏筆　　いとう

大阪にて、栗山、池田、伊東兄妹四氏に会ふ。別れたのちたいへん淋しい。

十月十九日

快晴。午前十時十五分、博多の手前にて靖

国神社へ黙祷、聖上御親拝の時である。

十月二十日

昨日午後三時三十三分植木着。
帰ってみると白地ののぼりが門に立ち、家に加勢人の女たちがあり、仰山な用意がある。親類からも集まってゐる。
町や役場学校、組内に挨拶、夜二階に寝る。

午前四時半に起される。下ではもう起きて用意に忙しい。昨夜中不眠ではなかったかと思ふ。眠いが、朝の空気すがすがしい。寝床中でも今日の身体検査のことを案ずる。少し左胸が痛むのである。もしハネられたら何といって押すべきか、腹切るまねでもするかなどと芝居げたことまで考へる。

室戸岬 十一章

吉本青司

1
室戸岬は岩ばかり
室戸岬は波ばかり

2
潮菊の花を手折り
潮菊の匂いをかいだ

3
潮菊は花しべだけの花だった

4
ここには文明がない
原始の空をみたければ
原始の海に立つがよい

5
密教の海はまろく
敬虔のいのりにあふれる

6
荒行の海の行者は
ここで宇宙に出会ったのだ

7
岩陰に独り坐すれば　潮音に
いまもあなたの声が聴こえる

8
ここには文明がない

ロマン的国文学論

塚本康彦

国文学界の新鋭の果敢なる第三国文学論集

Ⅰ
折口信夫と保田与重郎／蓮田善明の遺著／「大東塾十四烈士自刃記録」寸感　その他

Ⅱ
高木市之助著「国文学五十年」／寺田透著「わが中世」／観世寿夫覚書　その他

Ⅲ
故時枝誠記先生追悼／森本治吉先生へ捧げるわが惜別の歌／人物小景

¥870

東京都新宿区市ヶ谷田町二ノ五
現代ジャーナリズム出版会

伝統と現代社

五時半御堂にて父の霊位に拝する。久しぶり自分で燈明を点じ、待つうちに長兄来る。そして次兄や姉たちに急ぎ来るやうにと催促させる。いつまでも長兄らしい。みんな揃って長兄読経、その間に焼香、読経後、金盃にて冷酒をいただく。爆竹。

9
愁いを去って貝殻のようにいる

10
ここは原始である
海がせかいをのんでいる

11
黙々と初冬の海の青にとけ
みんなが岩になっている
海をこよなく愛したひとたち

ひかり

枯草に立っているのは誰でしょう
ほとんど噴上げに見まがうように
立っているのは誰でしょう

Kさんに

としとったひとに少女がいるのはいい

闇

思いだすことのもどかしさ
記憶を食ったのは何者だ

来賓

ふとひらめいてくるのは
インスピレーションではありません
それは　やさしさ
足音もなくおとずれる来賓
たいせつな　当然の待ちびと

午前

ふんわりとひつじのように
ボールのかたちをしたきくの花
ちいさなはなびらの窓から
もえてる花の芯がみえる
まんだらの芯がみえる

行為

山の上のもりの近くに
小さな家を建てよう
小さな家で　小さなことを考えよう
よのことはさみしいことが多いから
めざめて夜空の星のように
小さなことを考えていよう

客来る。大へんだ。幸ひ盃をさしに来る人は少い。長兄、よい挨拶をする。役場の小佐井氏代表にて祝辞。六時半頃僕簡単に挨拶。近日大便ヤ、ヒケツ。今朝気持よく通ず。

母に挨拶す。母「起こしてくんなはり」と姉に云ひ、「起きてお前の召集はうれしい。誰か出てくれなければならないと思ったのでうれしい。涙をみせまいと思ってゐたがこれはうれし涙バイ。もし生きて帰れたら又会ひたいが、それもどうなるか分らぬが、覚悟してゐる、国のために身体を惜しますはたらいてくれ、これがわたしの願ひ。しつかり働いてくんなはり。」といってくれる。こちらも涙を拭く。台所や傍らで耳を傾けてゐた女たちも涙ぐんでゐるのがある。実に母はえらい。しづかにこれだけ（実はもつと決意の明るさで話された）言はれた。飯をくつて行け、腹一杯くつて行けといはれるので、二杯くつて立つ。七時すぎ。家の前で万歳。神社で送別。町長、分会長、学校長、以下老先生の四人の挨拶、町長は指揮官としての自重と激励を与へてくれた。僕一通りの挨拶後、小学生に向つて簡単だが激励を語る。自動車で出発。爆竹。小学生の明るい顔が窓外に流れる。

果樹園　一九二号　昭和四十七年二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

果樹園

第192号

画仙・棟方志功㈢　小高根二郎
回春記　天野忠
年末所懐　田中克己
詩経私鈔㈠　森亮
飛翔　吉本青司
応召日記㈡　蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功㈢

小高根二郎

3　悲願成就—帝展入選

先輩下沢木鉢郎につれられて、志功が代々木中原に版画家・平塚運一を訪れたのは、昭和三年の春であった。もともと平塚は、下沢が中央美術社の給仕時代、そこから出ていた『中央美術』の編集委員であったから、まさに下沢にとっては先生に当るわけである。昨年の暮、志功から版画の試作を送られていた下沢は、この火の玉のような後輩のために、自分よりも高所から、啓示なり、示唆なりを与えてやりたいという、親切からだった。もう一匹の古貉松木も一緒に……と思ったが、折から彼の親父が国許から大工と左官を連れてきて、沼袋南三丁目二六三番地にアトリエを建築中だったので、誘えなかつた。

丁度師匠の平塚は、新秋にアルスから出版される予定の『版画の技法』を執筆中であった。巻頭に手本として掲げるつもりにしている作品を、下沢と志功に披露をした。色刷り版画—恩地孝四郎「秋」（美人四季の内）、川上澄生「初夏の風」、平塚運一「木場」、エピナール版画「マリエ・テレーズ・シャルロット夫人」。黒一色の作品——恩地「静物」、川上「馬車」、後はいずれも平塚の自作「兵営に沿ふ道」「堅田」「札幌風景」「代々木風景」「大門」「葱」「木崎湖風景」等であった。いずれも評判の代表作であるので、下沢はその一枚、一枚に、うなずいて見せ、その彫り、ぼかし、刷りの技巧に、溜息をもらしもらし感嘆した。そして、その感嘆が終ったところで、一枚ずつ志功に回してよこした。

当初、志功も下沢の感嘆の久しさに、息を合せようと思った。それが礼儀だからだ。ところが、しょっぱなの恩地の「秋」から、いきなり異和感で見当を狂わされてしまった。その作品は、「美人四季」「L'AUTOMNE」と刻んだ文字の下に、黄色い横向きの和装の女がおり、枯れた草のつもりであろうか、えたいのしれぬ物を、赤く厚い唇にくわえている。どこか下種いカフェーのポスターかチラシの感じで、抽象を得意とする恩地本来の作品らしくなかった。ここにあるのは媚だ。版画が伝承してきた、民衆にお世辞笑いを振舞おうとする、危険な媚だ。この媚を選りに選って、手本の冒頭に据えようとする平塚の意図も、売らんかな……という媚が見え透いているような気がした。あやふく爆発しそうな異和感は、しかし、次の川上澄生の馴染みの「初夏の風」でなだめられた。口馴れた〈かぜ　と　なりたや〉が、つい滑り出そうになって、あわてて志功は口を押えた。作品をじかに手にとると、国展会場で硝子板を透して感じたもどかしさではなく、爽涼な感触、ふくいくとした味わい、濃艶な情緒が、じかに心に融れてきた。用紙は栃木県烏山産の「ほどひら」で、手で支えているのが重いほど、千均の重さに感じられた。志功を未知の版画

果樹園　一九一号　昭和四十七年一月一日発行　（毎月一日一回発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

新潮選書
詩人伊東静雄
小高根二郎
新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。
井上靖
¥550
新潮社

出征兵の車と見て沿道でも時々万歳を浴びる。八時すぎ営門につく。もう少からず来てゐる。

寒い。附添人は下士酒保附近で待合せる。身体検査、通過、軍医が左胸をいつまでもきいてゐるので心配。甲を押してくれた時ホッとして安心。うき〳〵してくるのをじつと押へた。コレラの注射。看護下士にでなく「上手の方にやつて貰はう」と軍医中尉の髭氏にやつてもらふほどの冗談も出る。聯隊副官が、つまらぬ揚足取のやうな注意を与へる。一向要領を得ぬ。例へば「いろいろの靴をはいてゐるが、編上や短靴はいけない等々」。それから、宿舎略図と身上概況書を出せといひ、宿舎略図を出して帰れといふ。まだ宿の定まつてゐない者が多いのだ。身上概況書の例も渡してくれたが、これも全く別の書類だ。——といふ工合。昼食の時又、露骨なことをいふ。

雨になつた。

今夜城戸氏宅に泊る。実に人のいい、親切な、そしてさつぱりした久しぶり純粋熊本人の雰囲気の中に一夜を明かす。

*　*　*

編集後記

十一月九日。蓮田敏子さんから久しぶりに元気なおたよりをいただいた。一昨年の十月二十五日、善明二十五回忌で出会った三島由紀夫氏の思い出を書いた「日本歌人」八月号と、三島氏と「文芸文化」の関係を書いた「国文学、解釈と鑑賞」十一月号をお送りしていたが、「日本歌人」の方の拙文を、わざわざ田原坂公園の善明碑まで持つていつて、その碑前で朗読してくださった由であった。

そういえばこの日、善明の先生であつた斎藤清衛翁からも、「陣中詩集」を愛読して下さつている由のおたよりをいただいた。

二十三日。棟方志功氏から来信。「いよいよ画仙伝も佳境に入つて参りました。きわめて鋭く懸命な中にユーモアを入れた好筆をよろこんでゐます」と勵ましの言葉が綴つてあつた。毎月多くの方々から、共感やら、勵ましや、教示を恭くしている。ついでながら御礼を申し上げる。

二十五日。早くも三島由紀夫氏の一周忌を迎えた。去年散髪屋の椅子の上で臨時ニュースを聞いた時の衝撃を思い出した。丁度剃力を首に当てられているところであつた。ニュースの放送は全くしどろもどろであつた。自衛隊への討入りが報じられ、やがて負傷者が出た旨と三島氏の自殺行爲が報じられた。生死はまだ不明である由を報じられて、咽喉元に剃刀を当てられていた私は、「つかまるな！」「縄目の恥をうけてはならない！」と心の中で叫んでいた。その時刻英霊に黙禱を捧げた。（O）

果樹園第一九一号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年一月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　六〇円

の世界へ誘惑した、この「初夏の風」。偶然、武者小路実篤の「この道よりわれを生かす道なし、この道を歩く」という言葉と一緒になって、歩む方向を示唆してくれた版画。あのゴッホを心酔させた日本の版画道……。志功はまるで賞状でも戴いてるあんばいに、両手で「初夏の風」を捧持すると、敬意を表するために、つい、こっくりと辞儀をしてしまった。

こんな志功にかゝわりなく、下沢は下沢で、木口木版である平塚の「木崎湖風景」に感嘆し、その技法にとりつかれていた。木材の縦割りをつかう板目木版と違って、横断面を利用する木口木版には、一種銅版のような風趣があるからだ。板目木版は伝来の日本のものだが、木口木版はフランスから舶来された西欧の版画法だ。堅い年輪を彫るには、まるで金属面でも彫るぐあいに、突き彫りという手法が使われる。真線か、縦横に交錯させた彫溝で造型する鋭角的な画面は、ちょっとスマートな異国情緒を醸すのに役立った。下沢は先生に向って、木口を彫るには、いったい「どんな彫刻刀やノミを使うのですか？」と、アルチザンらしい質問をした。平塚は道具箱から、鳥口のような形をしたウチ、アイノコ、ビュランを取り出すと、すかさず下沢は「拝見」と掌で拝受して、縦横から、切ッ先を眺めすかしつしていた。次で、この使用法は？という質問が飛んでくる……と見て取った平塚は、新旧の弟子の関心を一つに収束するために、柱に鋲留めしている自作の下絵へ、二人の眼を誘った。（平塚が芝築地玉舟翁から苦心して伝授された木口木版の秘伝。弟子とはいえ、そうやすやすと伝授するわけにはいかない。）

「ねェ。今度はこの下絵を作品にしたいと思うんだがネ。雲の形がなかなか気に入らない。あゝでもない、こうでもないと、もう、かれこれ、一と月から勘考してるとこだヨ。」

と解説した。なるほど左右に立樹と建物を配したデコボコ道が、下から上へと突き抜けた天井には、瓢箪形の飛雲、団子型の浮雲、棚引きタイプの象徴雲が、墨とコンテと鉛筆で、互に重なりあって描かれている。その三種の雲形の、どの線に決定したものかと平塚は腕組みをすると、いかにも殊勝げに、頭を左右にかしげて見せた。この平塚の温厚な言葉は、版画会の重鎮でありながら、若い二人に謙虚に意見を求めたようでもあり、又、初心の志功に向って、いったん版木に刀を下してしまったら後へは退けないから、まず下絵の段階で、念には念を入れて構想を練ることが肝心だ……という教訓を、それとなく垂れたのだとも受け取れた。そのどちらに解釈したのであろう、志功は、

「一と月なんてもつたいない。私なら、構想が湧くと、すぐその時、その場で、ぷッつけ版木に刻み込んでみせますよ。構想の方が、逃げようたって、もう逃がしはしませんよ。」

といって、得意気にニコニコ笑っていた。この志功の放言に、平塚は腕組みを解くと、両拳を膝に置いて放心した。空いた口がふさがらなかった。今まで、こんな傲慢な自負を吐いた新参は、見たことも、聞いたこともなかったからだ。こ奴は大変な天才か、それとも手におえぬ大莫迦だ。そう、平塚は改めて分厚い近眼鏡の底に燃えている、志功の火のような眼を見直した。ところで、下沢の方はすっかり狼狽していた。とんでもない後輩を、先生に紹介したものだと、後悔したからだ。志功が彫ったことのある版木といえば、たかだかハガキ大のそれにすぎまい。それきしの大きさなら、誰だって一っ気に彫ることは可能である。ところが先生の下絵は、縦一尺三寸横一尺七寸以上もあろうという大物である。思い付きぐらいの構想で、一っ気に仕上げる

回春記

天野　忠

遠いところから　ひょっこり
へべれけの老友がやって来て
——泊めてくれえ　という。
このあばらやには
ぢちばば二組しか蒲団がない
まったく久しぶりで　よぎなく
わしは女房と同衾と相成った。
……
一時　二時　三時……時は移れど
互いにもじもじ　眠りもやらず
居心地悪く　てんてんはんそく……
……
暁近く　おお　わしらは
まるで古のれんのように　他愛ものう
もつれて　もつれて……何たる……
白い眉毛をそよがせながら老友は
仏さまのようにねていた。

なんて、とんでもない話である。それにしても、帝展連続落選四回の駈出しが、なんという身のほど知らずの放言をしてくれたものだろう。平塚運一といえば、石井鶴三、戸張孤雁、織田一磨、恩知孝四郎、川上澄生、山本鼎、前川千帆などと肩をならべて、創作版画協会の木版部門をしょって立つ大家である。下沢は穴があれば入りたいと恐縮した。大黒さんの使者——白鼠のように敬虔にちじこまった彼は、まだ一言ありたげに、眼を剝いて先生の下絵を見上げている大貉の袖を、そッ……と引いた。これ以上失策をしでかさぬうちに、早々と退散した方が、得策だと判断したからだ。袖を引かれた大貉は、その意味がわからず、「なんだば？」と反問した。「先生は執筆にお忙しい……」と、白鼠はそっと大貉に耳打ちすると、袖を引いて玄関に来た。そこにお茶を運んできた平塚夫人は、「ありゃりゃ、もうかえられるですだかナ？　もっとゆっくりしてゆかれりゃァようござんすのに……」と、もう三和土（たたき）に降り立っている二人を追って、盆を差し出した。二人は立ちながら茶を頂戴していると、夫人の背後に、見送りに立って出た平塚は、「また来給え」と、寛容な挨拶を振舞った。志功の放言に、大莫迦ではなく、たぶん天才の片鱗を認めたからであろう。

この平塚の好意に甘えて、志功が再び代々木中原を訪問したのは、九月ももう半ばになってからであった。アルス美術書の一冊として刊行された『版画の技法』が、弟子の一人である下沢にまで恵送されてきたので、その御礼に参上する彼に、今度も連れとなったのだ。画室には、兄弟弟子の前田政雄や畦地梅太郎が、すでに詰めかけていた。平沢は上機嫌だった。『版画の技法』の刊行を契機に、その口絵に添えた「兵営に沿う道」その他に、画商から注文がかかったからである。彼は古い版木を取り出して重版を刷るとこだった。部屋を作業場とを仕切るように、古莫蓙が敷かれていた。その真ん中には、さらに毛布の切れが重ねられ、その上には、絵具を吸って、まるで金属の鋳型のように見える版木が、どっしり据えられていた。版木の右手の薄板には、絵具皿、刷毛、バレン、油を滲ませた綿、アラビヤゴム、雑巾などの用具が、手の届く範囲に、抜け目なく配られていた。版木の向う側には、用紙である奉書が、板の上に分厚く待機していた。昨日一と晩、水をたっぷり含んだ吸取紙とサンドイッチにされ、沢庵石の重しをかけられて、絵具が乗やりすいよう、潤いが与えられているのだ。

版木の左手には空の板が置いてあった。刷り上った作品の置き場なのである。整然としたこれらの配置の前に、前掛けをした平塚師匠は、薄座蒲団に端然と坐っていた。用具置き場の向う側で、前田と畦地とが代り番つにすっている墨が、できあがるのを待っているのである。志功は師匠と真向いの位置――つまり、奉書の前に遠慮なく位置していた。師匠の制作動作がすっかり見透せるからだ。下沢は作品置き場の横にチンマリ蹲んでいた。

場内には真剣勝負の前のような殺気が流れていた。いや、それより、切腹場面の緊迫した陰湿な空気かもしれん。やがて師匠は諸肌脱ぎとなる……。そいだばッはまるで検視役だ。ふッ！ と、そんなげんでもない幻想が湧いて出て、志功はあわてて掻消した。どうして、そんな幻想が湧いて出たのか？ 第一、師匠のしている分厚い前掛けがいけない。それが諸肌脱ぎの幻覚を呼んだのだ。ワだば断然モンペだ。それに頭には鉢巻、肩は襷の、敵討ちのいでたちだ。油彩の仇を版画で討つんだ。つい、拳に力が入ったところに、静寂を師匠の声が破った。

「板画は彫ることよりも刷ることがやっかいなのだ。たいていは板面というと彫ることを土台にするけれども、刷ることを大事に考えることが大切だ。」（「板極道」）

と、弟子達がすりあげた墨汁を、大硯から絵具皿へ移し、それにアラビヤゴムを三四滴こぼすと、刷毛でゆっくりと調合した。

志功は、この平塚の教えに、いささか擦れ違いを感じた。彫ることはワキ、刷ることがシテという論法だからだ。刷りが作業上で面倒なことは分る。又、墨汁にアラビヤゴムを混ぜる極意のような、刷りには、アルチザン的な熟練や、幾つもの秘法があることも想像できる。しかし、創作版画の建前からは、やはり彫りがシテ、刷りがワキであらねばなるまい。刷りだけの技巧を競うなら、逆立ちしたって、専門の刷り師にかないっこはない。

このシテ・ワキ論の擦れ違いは、一ヵ月もネチネチと構想を練る慎重性や、前掛け姿の宗匠趣味への反撥と一緒になって、志功の胸に、なにやら、もぞ痒さを醸成した。そのもぞ痒さは気管を伝って次第に上昇してくると、一っ時、喉元に屯して、コソコソと鼻孔をくすぐった。その攻勢があまり突発的だったので、志功はいきなりクシャミを爆発させてしまった。掌で口をおゝう暇もなかった。淫液が眼前の奉書の上に散乱した。これから刷ろうという大事な用紙である。場内は一瞬……真空化した。志功は口を押えて恐縮した。平塚は版木を掃こうとした刷毛を再び絵具皿に戻すと、慄える拳を両膝に置いて放心した。出合頭に抜打ちにあった感じだったからだ。前田、畦地、とりわけ下沢は、青天の霹靂を予期した。先生は日頃穏和であるだけに、堪忍袋の緒が切れた時の爆発力を想ったからである。平塚はしかし、爆発しなかった。彼は左手を伸ばすと、志功の淫液が滲んだ奉書の端をつまむと、刷り上りを置く板の方へ撓ね退けた。

「棟方君は風邪だね。」

そう一と言、平塚は漏らすと、改めて絵具皿から刷毛を手にとった。下沢は眼前に散っている奉書の鼻紙を、ていねいに四つに畳むと、「おい！ 帰ろう……」と、志功にめくばせをした。

いつ連れだっても、どうして、こうも、志功は失敗をしでかすのか？ 一人でくればよかった……。そう、後で下沢は、きまって臍をかまされた。が、当の御本人の方は、先生の家を出ると、すぐもう、春風、夏雲、颯々とした秋風のような、ケロリとした天衣無縫さなので、憎もうにも憎めなかった。また、また、用向きができて先生を尋ねる時になると、つい、志功を道連れにしてしまうのであった。

年末所懐

田中克己

主の御計画の中に入ってゐるなら
わたしは地の上にゐる最後の年に
ガリラヤの湖　ヨルダン川が見られる
エルサレムの町にゆき南に下って
主の聖誕の地ベツレヘムにも行く
わたしはそこで主を讃美する詩を作り
そのあとわたしは筆を折る
それまでわたしはこの筆を大切にしたい
人の悪口は書かず愛情にみちた文章が
ちびたこの筆から滴り落ちるやうに――
主よ　父なる神にこの願ひをおとりつぎ
下さい

ケロリとしているようで、案外志功の方も平塚運一の寛容さは肝に銘じていた。

「平塚氏は非常にいい方で、少しも偉がらず親切な方でした。奥さんもいい方でした。そんな人たちの中で、わたくしも板画という世界は、非常に身近な中で育っていくものだと思いました。おごらず、てらわず、板画のやさしさ、親しさの中から、本当の板画の美しさが生まれてくるのではないかと思いました。いい道に入ったと、わたくしは嬉しくてたまりませんでした。

そのころからわたくしは、からだの中に宗教の世界がひそんでいるということを、なにか知らず識らずのうちに感じとって来たような気がしました。とくに板画の世界は、この絵画の場合のシテ道という以外に、ワキ道というものから出発する。やはりこの道でなくてはならない大道が開けているのだということを知りました。」（「板極道」）

志功は平塚の家で、下沢が辟易するほど幾度も失敗をくりかえしたが、それは温暖な平塚家のアト・ホームさに、つい気がゆるんだせいであった。が、他方、生涯師匠をとらぬ覚悟の志功にとって、温暖な平塚は、親和すべき先輩たりえたが、凛烈な師匠たりえなかったからであろう。しかし、平塚の方は、あくまで志功を弟子の一人に見なしていたような節がある。後年、志功がひとり、民芸の大師匠・柳宗悦の邸を尋ねることになった時、

「棟方君。柳先生の目黒のお邸には、どこにもここにも、国室級の宝物がゴロゴロしている。あわて者の君のことだ。うっかりして、つまずかぬよう、気をつけ給え。」

と、ねんごろに訓戒を垂れたものだった。

シテ・ワキ二道から到達する版画の大道が、チラホラ志功に見えてきたからかして、帝展出品の油彩画の制作は、珍らしくこだわりなく、ゆとりをもって進捗した。モチーフは、浅虫の歌人・船水公明家の果樹園に取材した。二年前の原子邸の果樹園と同じモチーフ、同じく想像画である。違いといえば、前者は初夏、後者は秋という、季節ぐらいのものだ。それに、今までの出品作は、どれも栄光を担うにふさわしい場所で、制作されたとはいえなかった。まず、太郷弓町の車夫・渡辺勝兵衛方の、昼でも電灯をつけねば薄暗かった居間。次で、麹町紀尾井町の教材出版社の、物置みたいにごたついた小部屋。三度目は、阿佐ガ谷六丁目は神頭邸前の、風でも吹けば地震のように揺らいだ古屋。四番目は、

同じ阿佐ガ谷の、家中に厠の臭いが立籠ったテニス・コート脇のあばら屋だった。しかし、今度は違っていた。竣工したての、屋根にドイツのカイゼルの兜のようにトンガリのある、松木貉のアトリエの二階なのだ。新鮮な木の香がぷんぷんした。下北半島名題のアスナロなのだ。本島では一番早く夜明けを吸った清爽な新材の匂いで、志功の肉体の細胞の一つ、一つが、ピチ！　ピチ！　音たてて蘇ってくるような気がした。そういえばパレットに絞られたマチエールも、宝石や菜果をそのまま熔融したやうな躍きを湛えていた。大好きなヴァーミリオン（朱）はカーマイン（紅色）と呼び合って、石榴の粒果のようだった。ディープ・グリーン（深緑）とウルトラマリン（群青色）は熔け合って、部分的に翡翠を結晶していた。レモン・イエローはそのままレモンだった。が、イエロー・オーカー（黄土色）と抱き合った部分は、金箔の威厳に化身していた。パープル（紫）はすでにたわわな葡萄だった。すべて、それらのマチエールは、媒体であるシルバー・ホワイトの呼び掛けで、絵筆に抄われる前に、もう豊饒な秋を奏でだしていた。

志功は、旅の歌人・若山牧水が丁度二年前に泊ったことのある船水家の果樹園の一隅を幻想した。幻想するだけでよかった。絵筆の方が勝手に、二十五号のカンバスの上を走り回ったからだ。たちどころに葡萄棚ができあがった。それに葡萄の蔓は這い上り、棚を縫って放恣にわだかまった。葉は半ば黄ばんだ病葉となり、その蔭から、あまりたわわでないので、かえって命を燃やすパープルの房が、乳房のように垂れ下った。その棚の手前の金色の日溜には、撫子、カンナ、トリトマ、野蘭が、残り少い青春を競い合うように咲き盛った。ピンク、ヴァーミリオン、オレンヂ、ホワイトがイエロー・グリーンの応援をうけて、互いに相手を制しようとしながら妍をきそった。特長のある彼女らは、どこかで人に勝ち、又どこかでは人に譲っていた。この競合は、日溜の金に照応して、溜息の出るような、凄然とした新秋の光耀を形作った。この光耀をよそ目に、志功が一番好きな、可憐だが、猛ましい昼顔は、少し皮肉な微笑を放ちながら、身を宙にくねらすと、葡萄棚に取りつこうとしていた。

志功が絵筆を置くと、もうタブローが出来上っていた。志功が描いたというより、絵筆が勝手に描いたといつた方が、真相に近かった。足掛け五年の精進で穂先がちびた筆たちが、愛用者のヒイキに報いるため、二十六歳になった彼の残余の青春を、彼に代って、ことごとくタブローに投入してくれたような形だった。

志功は輝やくタブローに向って合掌をした。よくも描いてくれた……という、絵筆に対する感謝である。合掌が終って、題を『雑園』と命名した。できたぞッ！　という志功の呼集で、階段を駈け昇ってきた松木貉と高橋とは、まばゆいほどだと眼を細めて嘆賞すると、このまばゆさに負けぬぐらい燦然とした額縁を、アスナロの余材で作ってける……と、祝福の言葉を餞けてくれた。

本金の箔を置いた友情の額縁に守られて、やがて『雑園』は搬入された。実に五回目の出品なのである。この入落とその後の詳報は、待ちに待った志功の筆に委ねなければなるまい。

「いよいよ発表です。胸をはずませて今か今かと待つていました。すると、

「『雑園』ムナカタ・シコウ」

わたくしは、空気が無くなってしまったような心持になりました。腰も無くなったように、メタメタとなって、あの美術館の鉄柵をにぎっていた手の力も無くなってしまいました。そこにくずれてしまいました。べったり土にすわったまま、わたくし

詩経私鈔 (一)

森　亮

大川

渡らうと思へば歩いてでも渡れるこの川
　が
どうして人の言ふやうに大川なの。
毎日うつつの目に映る宋の国が
遠国だなんて大嘘よ。

だけど今日まで結局越えなかつたこの川
　は
深いと言へば深いのでせう。
わたしがおとなしく、腰をあげないとこ
　ろを見ると
宋はやつぱり遠国に違ひない。

六一番（衛風、河広）。ヘレン・ウオデルの翻案と言った方がよいやうな自由な英訳によった。英訳では正直言ってストーリーが違ってゐる。宋は春秋時代の十二列国のひとつ。

は父母に挨拶しました。「帝展に入選しました」……。そして、わたくしに返って、書道博物館のギリシア女神に、「先生！　おかげさまで入選しました。ありがとうございました」とお礼をのべました。

全世界が明るくなつたようでした。すべてのモノが、わたくしの前に押し寄せて来るような、心持になっていました。わたくしの知っている人たちが、みんな目の前に来てくださるような気持になりました。なんの貧乏もなく、なんの不足もない、こう充実したモノが、身体いっぱいに湧き上って来るような気がいたしてまいりました。来年も、また再来年も。入選、入選、入選。

そのころの帝展入選は、今の特選以上にさわがれたものです。各新聞社からインタビューにくる、フラッシュをあびせられる。落選と入選とは、これほどにも人生を染め分けるものかと驚いたのでした。しかし驚いたのはこちらばかりではなかったようです。新聞社の記者の方々も驚いたようでした。こっちは、大きな藍絣を着た青森者であったのですから。

その晩、そのままの恰好で、すぐ青森行の汽車に乗りました。青森駅からまっすぐ父母の墓へ行って、約束どおり帝展へ入選しました、と報告しました。どっと涙があふれて、立つこともすわることも出来なく、くたくたに、わたくしは、そこにくずおれてしまったのでした。」（「板極道」）

九、出会いの季節

1　餞けであった竜飛の旅

帝展に入選したということは、一人前の画家になったという、社会的な認証のようなものであった。この認証を貰ったからには、今さら次兄賢三や、「横丁のお母サ」こと伯母よねの好意——毎月二十円の送金——に、甘えつづけるわけにはいかなくなった。

肉親や親戚の者が集った入選祝いの酒宴のさなか、亡き父母、幸吉・さだの分まで上機嫌になった賢三は、定額の仕送りの他に、さらに十円の無心が志功からあった真冬、オーバーなしで春までバスを運転した苦労談を披露した。それは別に恩を売る根胆からでなく、この身を切るような苦労にこたえて、志功よ、よくぞやってくれたという、兄弟愛からの感激の発露だったのだ。いささか泣き上戸の彼は、鼻水をすすりあげつつ、この表白を少し悲壮に繰返えしただけであった。いや、むしろ繰返えすのが、至極当然といって

飛翔

吉本青司

増田晃の詩集を読んでいて
〈白鳥〉の二字が目にはいった　それが
急に時間を遡行させた
それは
四万十川の青い流れに浮かぶ　一羽の
しろい白鳥であった　その
小さな一点のいのちの風情を　たれに
告げやるすべもない日々が
そこにはあった　とおい
山荘までのバスを待つあいだ
まだ熟れきらぬぐみの木のほとりで
しばらくそっと　それを見ていた
ほのかに哀愁を漂わせた白い羽が
何ものかをあさるように　ひととき
川面をすべっていたが　やがて
優雅な羽ばたきとともに　それは
しずかに舞いあがった　そして
寡黙なわたしの呼びかけにこたえたもの
　か
おおきくつばさをひろげ
会釈のけはいを
ゆるやかな弧に託しながら
西山の疎林のかなたに消えさった
残されたあとの視界はどんなであったか
さだかにそれとも記憶はない
しかし
寂しい江川崎の町並と
四万十川にかかった一筋の沈下橋が
旅の孤影をいっそう克明にしたことだけは
たしかであった
増田晃の詩集を読みながら　今
すぎさった日々の深さが
一羽の白鳥のかたちとなって　あの
なつかしい空間によみがえる

まりの発明について

鞠持たせ給へりや。誰々かもしつる。
源氏物語　若菜

まりはいつも回っている
あるかないかの中空にほっかりと浮かんだ
ゆかしみとかしこさの気ぐらい
はかなげな
マルチーシュの小犬のぱつんと黒い目が
すばやくものをかいまみるように
何かをいつもみつめている

よかった。と、いうのは、彼は総領でもないのに、妻小百合、息子馨を養った上に、脊椎カリエスで寝たっきりの妹ちよ（志功の二つ年上）の面倒までみねばならなかった。その上に志功の世話である。志功を背負い、弟妹の手をとって、姉まで誘導して火の手の中を避難した、あの十八年前の大火の場合と、事情は少しも変っていない。いかに働き手の彼であっても、息が切れそうな思いをしたことは、再三ならずあったからだ。「横丁のお母サ」も一杯機嫌で聲を張り上げた。

「一！　おめえも呑んでばかりいねェで、なにか祝いの一言でも、しゃべったらどんだば？　それども唄コでも出す気だか？」

彼女はもともと一が嫌いだった。総領のくせに家を跳びだし、都合のいい時だけ顔を出す……という、理由からだ。折角、師範学校まで出してもらいながら、ついに教師にもならなかった。教生の時に、箸にも棒にもかからぬ悪童共に手を焼くと、出席だけとると後は決って自習を宣した。彼等は待ってましたとばかり、教室を抜けだすと、階段下にたむろした。階段は節穴だらけだった。彼等はそれを望遠鏡にすると、上を通る女教師の袴の中を覗くべく待ち伏せた。（当時は下着をはいていなかった）。そして発見があると喊声

馥郁とかおる合弁花のように　まぼろしの
　ように
そこには何ものも無いかのように
空気の博物館のように
無限の糸にくるまって　端初もなく末端も
　なく
繰りかえす　回りつづける　まり
夜空のすばるのように
その語源のように
内にある聖域を占めながら
何ものかを堪えている
黎明の　日の女神のように純血を沸騰させ
変移しながら
ときにまた　月天子の温容
透明なゆめとたましいの所在を示唆しなが
　ら
まり
まりはうつくしく長い道のりを
数しれぬ宇宙に属し
柔軟な弾力と情緒の流転をつづける

をあげた。これは筆者が一から直接聞いた話であるが、幼い頃から女友達としか遊ばなかった繊細な彼は、これらの悪童共を矯正する勇気と忍耐とを、初めから放棄したのだった。

「横丁のお母サ」には、その根性のなさが、第一に気に入らなかった。それに移り気で器用貧乏だった。教師をあきらめた彼は、潜水夫になった。船を陸揚げせず、海に浮かべたままで船底を修理すると、大した荒稼ぎになった。幸吉伝授の鍛冶の技法が役立った。月収三百円。県知事様にもひけをとらぬ高給取りだと、夜毎金にあかして浮かれ歩いた。そのうち嫁フミが歯槽膿漏が原因で、一郎、栄、一彦の三子を残すとあっけなく死んでしまった。志功が上京をした翌年である。よし、フミの敵ば討ってける…と、一は鉄砲友達の野間歯科に入りこんだ。治療の見習いをしているうちに、いつか技工士になってしまった。そのうち松木満史が木彫「寒日童女」で太平洋画会に入選した。その制作中に、たまたま松木のアトリエに遊びにいっていた一は、今度は木彫に魅されてしまった。残った木ッ端を貰って試彫してみると、ポリポリ……と指から味わゝれる、玄妙な造型の蠱惑に、こたえられなくなった。面白さは義歯の造型の比ではなかった。幸い野間は高村光太郎の彫刻講義録をとってくれた。「自体具足小宇宙の感じ」という言葉に感銘、又、写真版の光太郎の「鳳（うそ）」に悟るところがあった。松木の上京後は、自分も木彫で身を立てようと熱中した。そこに野間の出奔事件が起った。義歯に代って、木彫を本命とせざるを得なくなった。（後年「野鼠」で院展に入選、晩年には書まで手を出した。）

「横丁のお母サ」は、この一の移り気な器用さが大嫌いだった。この間も小さな観音像を彫ってくると、「これで銭コ借してけろ」と無心をした。「おめえの彫った観音コだば、極楽サ案内せずに、地獄サ連れてゆぐべ」と、彼女は痛烈な皮肉を浴びせると拒絶した。「お母サだば、賢やスコーにばかりひいきして…」と、一は不平を鳴らしたが、駄目だと知ると、あっさり引退った。彼は工場街を彷徨すると、塀越しに聞くモーターの音だけで、機械の調子がすぐ判った。その音で修理を売込み、すぐ小金にすることができたからだ。この器用さは、父幸吉からの遺伝に相違なかった。幸吉は、鎌でこい、蝶番でこい、船釘でこい、錨でこい……の器用さを誇りながら、ただ頑な名人気質で、気の向い時、気に入った仕事しか手掛けなかった。それに釣と酒にうつつを抜かして、自分で貧乏と不幸を招いたようなものだった。その幸吉に劣らず、一は器用だった。しかも守備範囲は遙かに広かった。潜水の船底修理がそれだ。歯科の助手をやれば、主人の忠一より一

の方が痛くないと、子供たちは一の方にかかるのを好んだ。木彫をやれば試彫から体をなした。そうこうするうちに院展にも入選した。それも自分で出品したのではなく、たまさかに帰郷した古藤正雄が東京に持って帰って、勝手に出品したものであった。晩年の書は、筆者も知っているが、志功に劣らず雄勁であった。依頼者の高校教師から、どれだけお礼をしたらよがすべ？　と問われて、志功の兄者だからそこらへんの見当がつくべ……と見得が切れるほど、見事な筆勢だった。それに包丁も使えた。突然雪晴れの日に訪れた筆者に、しばらく待ってけろ…といって、厨でコトコト音させていたと思うと、やがて帆立貝の酢の物にアブサンをぶら下げて現れた。酒の肴に串餅を買ってこさせた幸吉より、遙かにいける口である。ともかく才能にかけては幸吉以上、器用さにかけても、五回目で帝展に入選した志功など、足許にも寄れぬ才人であったことは間違いない。

「ひとつ出さねか……」

と、「横丁のお母サ」の催促で、一は顔を歪めて唸りだした。永年の放蕩で鍛えあげた渋い喉だ。唄は津軽の嫁いびりを主題とした、物哀しい太鼓を伴奏とする「弥三郎節」だ。

＜一つァエー　木造新田の下相野
　村の端ンずれコの　弥三郎エー
　（アリや弥三郎エー）
＜二つァエー　二人と三人と人頼んで
　大開の万九郎から　嫁もらった
＜三つァエー　三物揃えてもらった嫁
　もらってみたどこァ　気に合わねェ

「横丁のお母サ」は、節が四つ、五つ、六つと進むうちに、自分の妹であり、一、賢三、志功の母であったさだを、いつか思い出していた。夫の幸吉は養子、彼女は家付娘であったが、四十二歳の一生に十五人もの子を生み次いだ苦労の生涯は、まさに弥三郎の嫁にひけはとらなかった。＜遅く戻れば　苛びられる＞、＜日に三度の　口つもる＞、＜十の指コから　血を流す＞という弥三郎節以上であった。幸吉が癇癪のあまり投げてよこした鉄瓶や、その他の器物から、子等を守って、額や手から血を流したことは、一再にとどまらなかった。そのさだの労苦を償うに足る栄光を、この帝展入選をきっかけに、やがて志功はもたらすに相違ない。そう思うと、彼女はいつか涙を浮かべていた。一が滞りなく、＜隣り知らずの牡丹餅コ　嫁さ食さねで　皆かくす　コレモ弥三郎エ――＞で、十の節を

定本 伊東静雄全集

初版刊行より10年、伊東静雄の詩にたいする評価はますます高まりつつある。増補改訂版につづいて、その後、新たに発見整理された資料、とくに貴重な蓮田善明、島尾敏雄宛書簡などを加え、さらに総体的に綿密周到な校訂、再編集を施し、現時点で望み得る最高の完璧な全集をめざして、この定本をおくる。日本の暗くきびしい時代に稀有の美しい思想詩を創出し、日本の近代詩に消しがたい痕跡を残して去った宿命的詩人、今こそ完全な姿で我々の前に現出する。全詩篇、散文、日記、書簡、他に解説、注釈及び詳細な研究文献目録を収録。

￥3,800

京都市下京区仏光寺高倉
人文書院

唱い終ったところで、

「スコさん。おめえ東京で、うっと、うっと、苦労コしてきたんだべ。うちの堅四郎についでって、龍飛の浪コでその苦労サ洗ってこい。」

といった。津軽半島の突端、海峡を距てて北海道を指呼の間に望む龍飛崎は、奇岩怪石の裂け目の土地に、二十三十の戸数の魚村がたむろしている。魚以外はなにも取れぬその部落は、「横丁のお母サ」の中の上得意であった。つまり、米を前貸ししておいて、金が入る漁期に集金に回るのである。養子の堅四郎（ネプタの忠太郎の弟）が自転車で回るので、それについていけというのである。

志功は自転車に写生道具を積むと、「横丁のケンチャ」の後を追って懸命にペダルを踏んだ。泊る先々で、鰈、鯛、鮑の塩焼や烏賊の刺身などの海の幸が、志功の舌を放楽させた。いや、それ以上に彼を放楽させたものは、無限につらなる空と海、それに山々であった。

「今のわたくしに海、山の広い大きな世界をひらかせてくれたのは、津軽半島一周の因縁でありました。津軽の旅路の贈ってくれましたものを、いつまでもいつくしんでいます。このことは、いつまでも忘れることは出来ません。」（「板極道」）

つまり、これが、一人前の画家になったスコへの、「横丁のお母サ」の餞けだったのである。

東京に戻って、以前にも増した苦闘の日々を迎えた志功は、よく家郷での祝宴や、「横丁のお母サ」が餞けてくれた龍飛の旅を、思い起こした。それは助けを恋う、さもしい心緒からでなく、自立を自分に言いきかす決心からであった。ワだば、もう立派な一人前の画家だ。二度と賢三兄や、「横丁のお母サ」の援助を、夢みることがあってはならない。そう、言い聞かすめたであった。

この頃古藤も、松木のアトリエに転がり込んできた。「雑園」で帝展に、「哲学堂風景」で国展に、それぞれ入選した棟方・松木両先輩の栄光にあやかろうという、念願からだった。彼は中野の新聞販売店に通って新聞配達を続けた。又、青森中学を出て日本美術学校に入学していた鷹山宇一も、下宿代りのネグラとして利用しだした。毎朝四人は顔を合わすと、「けッぱれー」という激励の辞を掛けあって、それぞれ勉強なり、生活資金を稼ぎに散るのだった。

志功は、歳末売出しのポスターのアルバイトをやったことのある、高円寺のデザイン社に通った。朝早くから晩遅くまで、泥絵具やペンキだらけになって働いた。ショウウィンドウのバックであれ、ディスプレイであれ、看板やポスターであれ、なんとでも懸命に取り組んだ。帝展出品作の制作と同じ、骨身を惜まぬ努力をした。が、一向に給金を支払ってくれる気配がなかった。そういえば以前の歳末売出しポスターにも、代償を支払ってくれていなかった。もっとも大正天皇の大葬で、師走まで有終の美を発揮することなく剝がされてしまったにしても、用紙と泥絵具とは志功の自弁であった。原料代も、労力も、丸ッぽ損という勘定である。今度も、どうやらその手らしかった。助手募集というポスターにつられて応募したものの、どうやら徒弟あつかいで、昼・夕食の支給が、その代償であるらしかった。主人の狡猾さに憤慨するのも汚らわしくてやめてしまった。

今度は共同で自力厚生をはかろうというわけで、額縁製造業を思い立った。アトリエの余材であるアスナロはまだあった。第一に、志功の帝展入選作「雑園」を権威づけた前例も、ゲンがよかった。松木は原材料を提供した。元大工の高橋はそれを鋸で曳き、木組の造型に奮闘した。そこに古藤は得意のノミを振って唐草を浮彫りにした。志功はヤスリが

けや塗装の仕上げを担当してソツがなかった。得手得手の近代的な分業で能率もあがった。製品は手分けをして販売に当った。裕福そうなアトリエめがけて売込みにかかった。が、多くの場合、額縁の方が芸術的でありすぎ、肝心のタブローの方はアルチザン的でありすぎた。つまり、調和がとれぬという理由で、なかなか商談がととのわなかった。結局、苦労した製品は、自分のタブローのための準備品ということに落ち着いた。

ただし、ここに例外があった。額縁製造でできた木ッ端がもったいないので、古藤はそれで茶托や猫を彫った。猫はエナメルで黒く化粧をした。試みに新宿の夜店にならべたところ、たちまち売切れてしまった。勢に乗って古藤は、深川の木場からしこたま木ッ端を仕入れてくると加工した。特に黒猫は幸運のマスコットとしてブームを呼んだ。一晩で三円五十銭から五円の結構な水揚げになった。

自分の特長を生かした古藤のこの成功に習って、地声の馬鹿でかい志功は、その声を元手にすることを思いついた。折から次兄賢三が世話になった吉尾自転車店の長男一男も転がり込んできた。商家育ちの彼は世慣れていた。手っ取り早い納豆売りを提唱した。志功は地声を生かした呼び売りに力を入れ、彼は勝手口に立ち回って、得意の口舌で口説き落すという戦法である。志功は「ナツット、ナァットー」と、やけに大声を張り上げた。その援護射撃で、彼は勝手口から台所に突撃すると、勇敢に敵さんと渡り合った。かみさんはたちまち奥さんに祭り上げられた。女中は嫁入りがま近いだろうと予言された。はなを垂らした餓鬼共も、即座に坊っちゃん嬢ちゃんに格上げされた。そのくすぐり戦法で、要領よく藁苞（わらつと）をいくつか売りさばいた。が、彼が奮戦している間、志功は電柱に所在なげにもたれて休戦していた。ときには飼犬に吠えたてられているのだった。納豆の売値は一本五銭。三本売れば一本儲けになる仕組みだった。従って、毎日毎日が納豆腹になり、自然アトリエには醗酵臭が立籠める結果となって、間もなく廃業をせねばならなかった。

次に転業したのは靴修理の注文取りだった。先の吉尾の伯父が、青森は大町の角で、陸奥屋という大きな靴店を張っていた。が、商売にしくじって東京へ逃げてくると、ハンバリ屋を開業した。その注文取りの請負いだった。納豆売りと同じく、大きな地声が元手だった。「古いカガトが取れた、ハンバリ靴の、御用はありませんかネ？」とだけ、触れて回れば仕事になった。一人分がペアだか

夢の系列

島尾敏雄

Ⅰ 紀行文
市壁の町なかで／サン・ファン・アンティグオにて

Ⅱ 短編小説
孤島夢／アスファルトと蜘蛛の子ら／夢の中の日常／兆／鬼剝げ／むかで／島へ／夢にて

Ⅲ エッセイ
夢にいて／小説の素材／他二十三篇

¥950

東京都千代田区神田駿河台三の九
中央大学出版部

ら、十足も担ぐと、ずしり……と肩にこたえた。それに日がな一日、赤子のやうに脊負って歩いてると、干枯らびた皮革も血が通っていた昔に蘇ったように、ゆくぬくと暖っているのであった。なにの技術がいるわけでない、この注文取りも、咽の方はともあれ、足の方が悲鳴をあげて、そう永くは続かなかった。

そのうちに、声そのものを売物にする商売へ転向する機会に恵まれた。活動写真の弁士である。弁士といえば、忠太郎の絵看板で剔染みの「常設館」では、まさに雲の上の存在であった。オールバックの長髪にチョビ髭。紋付羽織、袴、白足袋の正装で、銀幕のかたえに驕奢に控えると、スタンドの下に台本をひろげ、物語の進行につれ、男女の声色を使い分けて朗々と説明した。子供心に、気位高く伊達な吟遊詩人と想われた。

「さいわい、浅草の映画館の弁士を知っているという人に紹介されまして、今は忘れましたが、役者のような名前——何々小入道とか何とかいいましたが——の弁士のところへ弟子入りができました。しかし実際行ってみてわかったことですが、くらい舞台の中で台本を、目の近いわたくしには楽に読めるわけがなかったのでした。その先生の弁士は、新弟子のわたくしに向って、芸者からおくられたものらしい真っ赤な襦絆のような下着を着物の下に着て、それをちらちらさせながら、次の文句をひといきに三べんいってみろといいます。しかもそれを一日に百べんくりかえせというのでした。わたくしは、これもよい絵描きになるためだとさとりを開いたつもりになって、大きな野蕃な声をはり上げっぱなしで、

……しゆうえいか（場所の名が）の華ぞと
人は伝えける、燈台守のまな娘が、数奇に富める半生の、恋と幸との二すじを、つづりて描ける絵物語の一篇を、いでや

これよりものがたらん……

というのでありました。…中略…

その弁士が、例の赤い襦絆をのぞかせ、これも真っ赤な厚い座ぶとんから、二本の毛脛をなげだし、

「おい、洗面器をもってきて、足を洗え」

というのでした。なんという非礼だ。なんという傲慢さだ。わたくしは、むやみやたらに腹が立ってきました。

「何をいうか、この罰あたりメ、この足腐れ！」こころの中ではそんな想いもありましたが、これがこういう社会の層の内かと想って、その爪ののびたヒナヒナの足を洗ったものでした。」（「板橋道」）

物覚えのいい読者は、ここで少年志功が、師匠忠太郎のカガトの醜悪さに愛想をつかし、永遠の逃亡をした事実を想起されたに相違ない。この足に対するいっかどの見識を持っている志功が、しかも一人前の画家になった日に、よくぞ堪えがたきを堪えたものである。この罰あたりメ！ この足腐れ！ と心の中で絶叫しながら、不能なへのこのようにヘナヘナの足を洗った彼は、幕揚げの五郎さながら下唇をへの字に噛んでいたに相違ない。

応召日記（二）

蓮田善明

十月二十一日

午前師団長に申告に行く。待合せ中、午砲鳴り皆びつくりして笑ふ。I・N二氏相変らず口数多く賑か。台上にて市を下瞰す。天晴れて爽快。鹿児島生れのおかみさん、おばあさんと鹿児島の話をしてゐるうち、カルカン饅頭と一字不明んの御馳走にあづかる。師団長に申告出来ず、昼食して帰隊、午後二時大矢野へ出発。

出発前N少尉、又副官の例のお小言をくふ。

但し、N（N大学教授、僕と中学同年級）はおつちよこちよいで、しかも学者なのだ。身上概況書の「希望」欄に、論文を完成したい、その方が出征するよりも国家のために貢献することが多いといふやうなことを書いたらしい。戦地へ行くことを恐れてゐる（後でトラックの上での彼の話でも彼はたゞ国際関係の複雑したところで腕をふるひたいなどとはいふが第一線に出たいとは言つてゐない。それだけ正直なのだ。しかし今の身ではもつと覚悟がほしいのだ）けはひを、又一人よんで話せばいいのに、副官が意味ありげにNを呼び、顔をじつとみつめ、それから皆の前で「個人的なことを抛つて行くべき時だ」といつたのである。その方が理屈が通つてゐるし、又Nに対して皆「バカが」と思ひ「卑怯」と思ひ、彼がやつつけられたことを面白く思ひつゝ、副官に反感をもつたのである。Iは今朝友人の出征を見送りに行つて身上概況書がおくれて十時半の集会までも出してゐなかつたのだ。これに附加して皆の時間励行が又小言されたのである。叱られながら、しかもそこにユーモアを見出して行く、卑怯だと思つても別に非難もせず、容しあつて、これを材料にしてユーモアを作つて行く皆のモラルが非常に面白い。

午後一時五十分集合は、やつと時間に間に合つたが、トラック二台に荷物と兵五六名に将校が三十七名ではのれない。ここに又拙い処置がある。結局交渉してもう一度来た。そして出発した。みんな愉快である。僕は第二トラック。同中隊のT君の智慧で後向きになつてゐるので砂は食はない。町をぐる〳〵廻つて郊外に出、村や町を抜け山間に入り、四時近く哨舎につく。二十里位あるといふ。途中稲のみのり、柿の赤い実の一杯残つてゐる木もある。渓流の水も美しい。小学生たちが所々で「万歳」と叫びかける。村のおかみさんや娘さんたちもやる。冗談がとぶ。交懽しながら行く。色の白い、ほんとに美しく健康な娘さんの顔も目を惹かれる。

日本の風景、日本の子供、女たち、そして同乗の連中。

初めしばらくはNを中心に「愛国心の嫌疑」に関して張合ふ。誰も彼を意地わるく責めるものもない。彼のうるさい饒舌をいやがる顔いろをするものもない。むしろ彼をなぐさめたり相槌さへうち、彼を悪人や愚物扱ひにしようとしない。Nは自己弁護とくだらぬ国際観や戦争観、事変観をのべ

加藤郁乎句集

球体感覚

加藤郁乎の句は現代詩のフラグマンであるとしても、もはや俳句ではない。すでに俳句に於てノン・フィギュラティフの宣言はその自証である。この透明な球体の感覚者は位相差の影の認識であり、硝子の噴水、タングステンの描線、螢光を浴びた鬼面子である。

吉田一穂

特製限定・三十三部　一八、〇〇〇円
普装限定・三百十七部　七、五〇〇円

東京都世田谷区北沢一―一四―一三
芸術出版　冥草舎

てゐる。「しかし副官もあゝたが考へるやうに悪くは考へてはゐないですよ」かうあしらふものもある。Nはたしかに慌てゝゐる。

彼の臆病と人の好さ（一人滔々？とまくし立てる論議はいつもピントを一寸ずつ外れてゐる。）とのみが益々みにくゝ、憐れになつてくる。

Nと向き合つて腰を下ろしてゐた某（福島県からかけつけた）が、「召集令の来た時は、十分間は考へたナ」といつて自他ともに大笑ひしたりする。主としてこの男がNの相手をしてゐる。

カーブにくるとひつくり返りさうになる。円座の足と銃が一所に集まつてゐるので、ゴチャ〳〵と自他の区別がつかなくなり、足が銃床に押されて痛む。

ついてから監督少佐に申告し訓辞をうける。静かに伏目がちに労はるやうに話すのは、一寸軍人ばなれをしてゐる。これが副官への反感も逆効果を及ぼして好評となつた。

廠舎もすさまじいもので、ボロに近い兵服であるが、軍隊生活に馴れたものばかりで、かうした風景も段々社会のカドをとつてゆく。第二中隊は毛布を一枚多く入れてくれてあつたし、どう間違つたか、この供給品と合せて十一枚もある。

いい風呂がある。もう南京虫も出ないさうだが、ハイトリ粉を撒いてねる。左右でいびきがきこえるうちに自分も眠つてしまつた。

十月二十二日

四時ころ寒くて目がさめてしまつた。どうもならぬ。とう〳〵そのまゝ六時まですごした。

起き上ると気持よし。舎後の崖の上で洗面。つめたい水である。四角の水溜の中に一杯あるのを洗面器でちかに汲んで草の上において洗ふのである。そこから東南の山なみの起伏が望まれる。うす卵色の空、うす紫の最も遠い山、から青や緑や、黒やの一つ〳〵の山の色がちがつてそれがしとやかに調和してゐる。

八時集合。訓示、その他、日課が始まる。演習台上の展望壮濶。教官も二人ともよし。

夜間演習の時、Nが決死隊に出た。帰つてから、彼の鼻息はえらくなつて、自分は決死隊（名だけで、演習は中止になつた）に出してくれと副官に手紙を出すといひ出す。

十月二十三日

やはり五時に目がさめる。起床後舎前で、靖国神社遙拝。

午後は休養だが、外出はできぬ。少佐の南京攻略戦の談をきく。夜三人で酒保に行きビール三本のむ。就寝後、目がさめて眠れず、夢ばかりみて二十四日五時に起きて小便に行く。六時前三分の二位のものは起床。

Nは皆の連署をもらつたら上申するといふ。「愛国心の火の玉のやうなオレを見そこなつてゐる。師団長はじめ二時間づつ五回くらいオレの講義をきいてくれたら、オレの今書かうとしてゐる皇道精神が分るだらう」といふのである。しかし午後十中隊の連中が山の中で小宴をやつて帰ると、Iが「N君は論文はやめたさうだ」と大声で報告し、みんなを笑はす。

Nはあらゆる場合にしやべり、質問するので、もはや「困つたもんだなあ」といはれ、ピエロになつてゐる。彼に野戦への命令が来たら――といふ空想さへしてみたくなる。しかし案外彼も覚悟は出来るであらう。「あんた一人決死などといつても、それは指揮官といふことを忘れてはいけな

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

い」と軽く忠告したものもある。

十月二十四日

Nは又炉のそばでしやべり、人これをかこんでひやかし半分の話。とう〳〵米国女の陰毛の話になり、「絹糸のやうだ」といふ。「人からきいたんだ」と弁解する。大笑ひ。しかし話題の多い男である。相撲フエンシング。この男は小柄だが裸になると逞しい体をしてゐて、相撲も幹部候補生の頃、対県大会の聯隊の選手として出たといふ。顔は頭が小さく、前額が少し禿げ上り、目小さく瞳毛がながくて童顔である。髭もたくはへてゐる。どうみてもインテリでない。

白旗山で午前十一時まで軽機分隊に於ける射手の各個動作。運動行進との連繋である。中尉の教育法今日は又特に静かである。雪信山まで行つて終る。今日も暖い好晴。

輜重少尉一名出征のため出発。サイドカーで出発。皆出て万歳をする。かしこまつて答礼しつゝ出て行く。

編集後記

十二月十四日。京都で人文書院社長渡辺睦久氏と松本幸男にお会いし、できたての「定本伊東静雄全集」をいただいた。予想以上の美事な出来であつた。外函の濃紺、外装の煉瓦色はよく調和して、典雅で重厚な伊東の作風にうつてつけだつた。特に煉瓦色は初版の時に好評だつたので、今度改めて染めさせたとのことであつた。内容の豊富になつたことも、十年前の初版とは比較にならない。詩十一篇、散文八編、雑六篇、書簡六十四篇の多くを加えているからだ。この予想もしなかつたほど多くを加え得たのは、他ならぬ拙誌の仲介で、読者である諸家諸氏から広汎な支援がいただけたからであつた。改めて誌上から感謝申し上げます。又、その内容の検討と校合校正に可能なかぎりの壺力をいただいた鈴木税氏、人文書院の堀田珠子さんに、衷心から有難うを申し上げます。

十二月十七日。所用あつて上京したついでに、鎌倉山に久し振りで棟方画仙をお尋ねした。アトリエを踏み場もないほど取り散らかして、眼の不自由を物ともせず制作に専念されてる趣を拝見して、一番弟子の私は安心した。昭和四年から花々四十二年、よくも変らぬ指導をいただけたものである。先生が毎朝裸足で徒歩訓練をされる芝生を見下す茶間で、チヤ夫人のおてまえでお薄をいただいた。

本号には天野忠氏のめでたい詩を頂戴した。爺サマと婆サマの詩は近頃珍重すべきものだ世の多くの爺サマ婆サマの寄稿を歓迎する。

(O)

果樹園 第一九二号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年二月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 六〇円

果樹園 一九二号 昭和四十七年二月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円

果樹園 一九三号 昭和四十七年三月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円 送料三〇円

果樹園

第193号

画仙・棟方志功㈢ 小高根二郎
自立 宮城賢
かくれんぼ 中野信子
感謝 田中克己
詩経私鈔㈡ 森亮
釧路湿原にて 高梨一男
応召日記㈢ 蓮田善明
呼香港 鈴吉本青司
編集後記 へ美堂正義

画仙・棟方志功㈢

小高根二郎

2 筆者兄弟・太郎二郎との出会

絵のためではなく、食うだけのために、文字通り悪戦苦闘に追い込められていた志功は昭和四年の夏の声を聞くと、早々と青森へ引揚げた。家郷に帰りさえすれば、食うだけのことはなんとかなり、全力を帝展出品作に投入できるからだ。昨秋かちえた入選の栄光は、なんとしても今秋も点しつづけたかったからだ。

その七月、たまたま合浦海岸に避暑にいっていた筆者（弘前高校二年生）と兄太郎（大阪高校三年生）は、帰郷中の志功画仙に出会うという光栄な運命を担ったのである。父が第八師団司令部に勤めていたので家は弘前にあった。休暇で、父の前任地だった大阪の高校に入っている兄が帰ってきたので、勉強と水泳の目的を兼ね、一緒にやってきていたのだ。宿は合浦公園のすぐ近く、弘高の数学担当教授のY一家と相宿だった。弘前のY教授の隣に父の部下の安岡大尉（章太郎氏の父上）が住んでいた。筆者の記憶に誤りがなければ。その安岡大尉の世話で合浦の宿が決り、Y一家と相宿になったようだ。安岡大尉はその夏の移動でどこかへ転任し、合浦から戻った初秋には、よく家に遊びにきて陽気な笑を振舞った太った小母さんも、のほッ……と育った一人っ子の小学生の章ちゃんも、再び影をみせなかった。

余談はさておき、朝の涼しいうちに太郎二郎は英書の勉強をした。来春東大の美学に進学を予定した太郎はペイターの「ルネッサンス」、将来は画家志望であった二郎はコンラッドの「島の追放者」を、辞書を引き引き読んでいた。午前十時になるとさすがに暑気に堪えられなくなった。どちらからとなく、「おい！ 行こう」と声をかけて黒フンドシをしめると渚はすぐだった。が、とっかかりのそこは賑わいすぎるので、少し右手に離れた寂しい渚を選ぶと、ザンブ！ と青い潮に身を踊らせた。十九と二十一の若い肉体にとって、冷く重い潮を裂き、潜ることは、さながら清浄な放蕩だった。ひとしきり泳いで身が冷えると、砂浜にあがって甲羅を干し、胸板を焼いた。あたりには浜茄子が赤く群がり咲いていた。そうして青い大空に浮く白雲を眼で追っていると、どちらからとなく歌になった。センチメンタルな哀歌をひとくさり、次でシューバートの「夜鶯」となり、はてはバイロンの「チャイルド・ハロルドの旅」になるのであった。

と、或る日、二人は午前の水泳をすまし、宿で昼食をとるべく公園をよぎっていた。すると左の池畔の藤棚の近く、燃える大地に画

架を立てて盛んに絵筆をふるっている小男がある。どうせヘッポコだろうと二人は行きすぎた。が、丁度二郎は昼食後に油絵を描くのを習慣にしていた。F二十号に「フンドシ姿の自画像」を描いてるところだった。その闘志を燃やすためにも、炎天下の灼熱と戦って絵筆をふるっている小男に、敬意を表しくおく必要を感じた。「ちょッと覗いてくる」と、二郎だけ来た道をとって戻し、すでに画家の背後にたたずんでいる二、三の鑑賞者の群れに加わった。画架には八号のカンバスがのっかっている。対象は藤棚とその向うの立樹だ。色彩はライト・レッドとヴァーミリオンの主調に、僅かながらォークル・イエローにプルッシャン・ブルー。従って、緑の葉も、青かるべき空も、真ッ赤ッカに燃えていた。

「この絵ッコ、火事だけッた」。そう、鑑賞者の一人がつぶやいた。二郎はこの小男は色盲かもしれんと判断した。彼は子供のような筒袖の久留米ガスリに袴をはいていた。頭から滝のように汗を流しながら、パレットの上にお汁粉のようにトロトロに融いた絵具を筆にのせると、さッ！ と横刷きに画面に撫でつけた。こんなお汁粉式の油彩画法は初めてだった。彼は時おり右袖で頬を伝う汗を拭った。袖にはライト・レッドが付着していたので、その色は頬にかすれた。彼は眼を剝いて、うン！ うン！ 唸りながら筆を運んだ。時には、筆をパレットを握っている指に託すと、腰のタオルを鷲摑み、頭から顔を撫で回した。そのタオルは絵筆を拭う用にも供されているので、今度はヴァーミリオンが頬に走った。ただでさえ火照った顔は、孫悟空のように真ッ赤になった。それに薄い頭頂からは湯気も立っていた。まさに、絵も、顔も、火事ッコだった。

やがて絵は完成したらしく、彼は一息入れると、画面の右下隅に、念入りに「志功」とサインをした。二郎は、あゝこの男か……と思った。と、いうのは、昨秋の新聞で読んだ青森裁判所の給仕をしながら帝展に入選した出世美談を、覚えていたからである。鑑賞者は二郎の他にはもう誰もいなかった。志功はやおら三脚椅子から立ち上ると、画架を解き、絵具箱を閉じた。そうして袴についているホコリを軽く掌で払った。いよいよお引揚げかと思っていると、彼はどうしたことか、今まで描いていた立木に向って直立不動の姿勢をとった。そして絵具で汚れている両掌を合せると、今まで描いていた風景に向って、しきりと何かを祈念しているのであった。こんな変った画家は、今まで見たことも、聞いたこともなかった。そういえば、さっきの油彩のお汁粉描法も尋常ではなかった。二郎はこの孫悟空のような青年画家を、なにがなんでも先生に選ぶべきだと直覚した。

「棟方志功先生ではありませんか？」

と、二郎は声をかけた。そして自分は弘高のサイプレス画会の会員であること。近くの宿に兄と避暑に来ていること。もしお暇があるなら、昼食がてらに立ち寄っていただき、いま描いている「フンドシ姿の自画像」を批評してくれませんか？ と頼んだ。思いがけず自分の姓名を親しげに呼ばれた志功は莞爾と笑った。ゴッホ気狂の彼は、ゴッホの看板のようなサイプレス（糸杉）にあやかった画会の、メンバーであると聞いただけで、十年の知己のような親愛さが湧いたらしかった。志功はぶしつけなフンドシ姿の少年の案内にもかかわらず、宿まで寄り道してくれた。

昼食の菜は鯖の塩焼だった。その皿の足し増しでもするあんばいに、二郎はフンドシ姿の自画像を、襖に立てかけた。似ているとか似ていないとか、なにがしかの批評を期待したからだ。しかし、なぜか志功は批評せずに、「いいじゃなァ……」と、掌で二郎の額を撫で上げるまねをした。お前もいい加減スキ者だな……という、同好者としての共感らしかった。彼はできたてホヤホヤの自分の八号を柱に立てかけた。お汁粉描法のトロトロに光る画面をなめずるようにして、箸を口へ運んだ。そして、普通の油彩の画法は、まず影の部分を塗って、それから次第に光の部分を盛り上げていくのを常道とするが、自分のは反対で、最初に光の部分を塗り、それから影の部分を描き分ける独自の手法だと解説した。この方が光の部分のマチエールが濁らず、純粋さが保てるのだと、トロリと光った樹幹の部分を、いとしくてたまらぬというように、幾度も指先で撫でさするようにした。すでに給仕画家なんぞの、凡庸な見識を遙かに抜いていた。二十六七歳の弱冠ながら、天っ晴れ不世出の天才の片鱗が躍如としていると、二郎は思った。

躍如としているのは見識だけではなかった。先ほど二郎の額を撫で上げようとした奇行が、食後になると、仕掛花火のようにポッ！ ポッ！ 出た。話が自分の好きな画家の傑作になった。ゴッホの絶作——広漠とした黄金の麦畑の上、嵐を含んだプルッシャン・ブルーの大空にかけ、逞ましい群烏が一斉に飛んでいくタブローを、はからずも異口同音に賛美した。

「あのゴッホのようにありたいですよ。烈しく逞ましくありたいですよ。麦畑も、烏も、太陽でさえも、焼きつくすほどのものでありたいですよ！」

志功は眼を剝き、口角泡を飛ばし、持っている箸を、絵筆のように振り回して絶叫した。合浦とつい眼と鼻の先、ゴッホの絶作の風景に似た藤田組の広場で、小野忠明に油彩画の手ほどきをうけた時を、思い出したからだ。二郎は色彩画家モーリス・ドニの話を出すと、その甘美な色彩を飴にしてしゃぶるあ

自立

宮城賢

ひとりで立つ
二本の脚さえあればわけはない
のにこれがいちばんむつかしいのだ
わたしは脳裡に刻んでいる
はじめてのわが子が
はいはいから伝いあるきをへて
はじめて両脚で立った日のことを
にっこり笑み
手を拍って賞める親の声につられて
つい歩みだそうとして
よろけてしまったが……
あの笑まいは人のはじめての自立の笑まい
わたしたちは誰しもその日から
ひとりで立つことをくりかえしてきたが
二度目の自立はなかなかやってこない
そして二度目でじゅうぶんなのだが……
ついさいきんも
わたしは詩がすっかり書けないもので
所用にかこつけてある人をはじめて訪れた
らその翌日からふしぎに書けるようになっ
たばかりなのだ
その人はわたしの畏敬する〈自立〉の人で
きっとこの訪問は妙薬だったのだ
（わたしは常備薬を用いていない）
多くの家族を手で支えながら
みずからはその脚で立つことはむつかしい
ことだが
そのとき手と脚は
葉を支える枝とみずからの全体を支える幹
をもつ
樹木の分身にちがいない
そうして幻想から醒めきるには
おのれの手と脚にかえるほかはなさそうだ

んばいに、志功は左右に上半身をゆすりだし、最後に大揺れにゆすぶった。そして「いいなァ」「いいなァ」を連発して、上半身を泳がすと、対座している二郎の額を、今度はまともに左手で軽く叩いた。話は税関吏画家アンリー・ルソーに移った。のッぽりとのどかな大空に浮んだ離れ雲に、飛行機や、飛行船……。志功の大揺れはやまなかった。そこに太郎はルネッサンスのボッティチェルリを出した。「ヴィーナスの誕生」に「春」である。女神たちは軽羅をひらひらさせて花の咲く野で輪踊をはじめた。橄欖の森からは華やかな嬌声が音楽のように聞こえて、空からは天使が蝶のように舞い降りてきた。志功は橋本花子の実家、原子邸の裏庭の果樹園を思い出した。興奮した彼は、身を乗り出すと正座している太郎の両膝を鷲掴みにすると、それを上下にゆさぶった。自分の大揺れを止めるためらしかった。「いゝなァ」。「いゝなァ」。志功はついに立ち上って、明朝あの池畔で八十号の帝展出品作を描くので、よかったら競作をしよう……と二郎に宣言すると、大地を踏み鳴らすように威勢よく帰っていった。

習朝いつもより早く起き抜けた二郎は、約束の池畔で志功を待ちうけていた。絵具箱を左肩、その左手に十二号のカンバスをさげ、右手には折り畳んだ三脚椅子を木刀のように摑んでいた。それを一度、二度、三度、しごくと、射し初めた朝日影を斬ってみた。まさに武蔵を待つ小次郎の心意気である。棟方志功なに者ぞ！　決闘場所はゆかりの池畔、あの藤棚の下である。最寄りのベンチに腰をすえた小二郎は、おもむろに首をめぐらすと明けていく視界を睥睨した。が、武蔵同様、志功はなかなか現れなかった。死角になっている池畔のどこぞに、もう画架を立てているやもしれぬと、念のため一周してみた。が、どこの物陰にも、うン！　うン！　唸りをあげて描く、小粒で精悍な彼の姿は見当らなかった。再びベンチに腰をおろした二郎は、はやる心を押えるために深呼吸をしてみた。あせっては事を仕損じる。と、朝食前の空き腹がきゅ――ッと音をあげた。それに気の早い小学生たちのグループが、浮袋などを手に手にガヤガヤと現れだした。もう我慢がならなかった。いや、給仕稼業の彼のことだ。なにか突発的な都合ができたのかもしれん。そう、思い直した二郎は、彼が昨日画架を立てていた藤棚下の同じ場所に、三脚椅子をすえたのだった。昨日の彼の作品と競作にするために……である。が、まるで暗示にでもかかったように、志功流のお汁粉描法さながら、二郎はパレットの上に絵具をトロトロにして融いているのであった。

これは後で分ったことだが、二郎が池畔に出向いた時は、すでに志功は八十号のカンバスに、水面を破って空間に跳躍する大鯉を描きあげると、ゆうゆうと引揚げた後だったのである。二郎は志功の速筆にも舌を巻いたが、それ以上にびっくりしたのは、重い八十号の大カンバスを、近所の子供達が頭の上にいただきながら、一里の道のりを往復したことだった。「絵馬鹿」時代でも、弁護士控所の拭き掃除に、しげ子をはじめ、若井てる子、宇野さい子が応援してくれていた。その馬鹿コが絵コの神様に栄進した今である。子供達の熱狂的な支援がついたのも当然といっていい。

3　八甲田仙人・鹿内辰五郎との出会

出品作が完成した気休めからであろうか、志功が八甲田山の酸湯（すかゆ）温泉に遊んだのは、それから間なしであった。馴染みの弁護士の一人である川口栄之進（弁護士会長）が、温泉を経営している弟の白戸友雄に、志功を無料で遊ばせてやってくれ……と、紹介をしたのだ

った。これ幸いと、志功はつんつるてんの絣に、豚の尾ッポのような三尺をしめ、カンバスや絵具箱を笈のように背負うと、アシダカ（鼻緒を親指の元で結んだ素朴な藁草履）をはいて、青森から酸湯までの七里の山道を、絵を描くときのように、うゥ！　うゥ！　唸りながら登っていった。汗みずくで、一日がかりに登ってきた志功を出迎えたのは、山仙と異名をとった八甲田の名物男・鹿内辰五郎であった。厨房の横の強力小屋から、雲のようにぬッ……と現れると、

「川口先生さまから、話コがあった絵がきは、おめえだか？ワだば山仙の辰五郎だ。」と嘯いた。まさに画仙と山仙との出会だった。弱視の志功だが、眼の前の五十がらみのこの大男が、尋常な男でないことが、すぐ分った。と、いうのは、鉄道員のような黒の詰襟服の胸一面に、キラキラと勲章を飾っているからだ。が、よく見ると、それは勲章でなんかなかった。メダル。バッジ。その他吊しうる装飾的な意味もない表章だった。それに肩から、軍隊払い下げの真鍮ラッパを朱紐でぶら下げていた。

「宿のことで用事ッあったら、なんでも言え。又、山のことで分がんねェことッあったら、なんでも聞け。」

そう、おごそかな託宣があつた。下士官が新兵を諭すような口調だった。肩から両具を下していた志功は、直立不動の姿勢をとると、

「よろしくお願いしすヂャ……」

かくれんぼ

中野信子

次郎は
いつも
ひとりぼっちで
かくれんぼをする

匂い伸びる合歓木の下で
ポケットの芋虫を確かめると
いそいで
ビー玉をかぞえおわる
それから
まるく身をこごめて
言葉を持たない
芋虫になる

誰れも次郎を見つけることはできない
誰れも次郎を探そうとはしない
待ちくたびれると
次郎は
いともたやすく
かくれんぼの鬼になる

〝もうーいいかい〟と
つぶやきながら
繁みの深さに紛れこんでゆく

かくれんぼは
終日　続けられ
次郎は　かるい眩暈を覚えはじめる

すると
降りてくる夕闇のむこうで
直線と直線が作成する
交点のように
かなり幾何学的に
ふたつの次郎が出くわすのだ

かくれんぼの森の中で
次郎と
その小さな魂は
まじまじと
見つめ合うことができる

と、深く頭を垂れていた。

事実、辰五郎は、「なんでも聞け」と豪語するだけあって、八甲田に関するかぎり、何にでも通暁してる仙人だった。明治十三年生れだから、志功の母さだより一つ下の齢格好だ。少年時代から腕ッ節が強く、郷土出身力士の八甲田とは、いい取組みをしたものだった。十五歳のとき、酸湯温泉の建設にあたって、強力として雇われた。人の倍ぐらい担ぐので重宝がられた。それが仙人となるきっかけだった。だが、適齢で、弘前歩兵第卅一聯隊に入営した。腕ッ節だけでなく、肺活量も抜群だったので、ラッパ卒に起用された。検閲に際し、聯隊一のラッパ手であると、折紙を付けられた。明治三十五年一月に敢行された有名な八甲田「雪の行軍」には、弘前歩兵第卅一聯隊側で参加した。ところが青森歩兵第五聯隊側は山中で遭難。辰五郎は選ばれて捜索隊に加わり、先鋒となって捜索と救助に活躍した。除隊後は東北帝国大学高山植物研究所、青森営林署の巡守をやったり、酸湯、十和田、蔦、谷地、田代の案内人を生業とした。従って八甲田山中、知らぬ谷や沢とてなかった。蔦で晩年をすごした文人大町桂月は、十和田の探勝には必ず山仙・辰五郎を伴った。彼のアスナロのような実直な性情、山猿のような奇行を愛した。蛙でも、ナメクジでも、蝮でも、原人のようにぺろり……と生食をする彼を〈ナメクジを食う男ありブナ林〉と句によんだ。

又、植物学に造詣の深かった郡場フミ女史（前弘前大学学長郡場寛理学博士の母堂）にも重宝がられた。彼女の命で山中を跋渉して高山植物を採取して回ったので、いつか植物学にも明るくなり、山案内にも、その該博な知識が色どりを添えた。

次の日、山仙は、酸湯の背後に負っかぶさるように聳えている八甲田大岳へ、志功を案内してくれることになった。途中の仙人岱で鷹を舞わせてみせる……という趣向だった。山仙は白覆をつけた黒の帽子に、例の勲章の正装で、肩から朱紐でラッパをぶら下げ、さらに篠笛を脇差のように帯に差した。志功は画具を笈のように背負った。糧秣係として売店の大原誠一（現酸湯温泉社長）が随行することになった。赤ん坊の頭ほどもある握飯を三個、風呂敷包にして尻の上にくくしつけた。この珍妙ないでたちで三人勢ぞろいした。五十、二十七、二十一の年齢である。そこで山仙はラッパを取ると唇に当てた。威勢よく突撃ラッパをいきなり三回吹奏した。〈デテクル　テキ　ハ　ミナ　ミナ　コロセ……〉の切迫したあの韻律である。喨々とした響きは、大岳にはね返り、遙かしりえの山襞に幾重にも木魂した。朝霧にまどろんでいた撫、ナナカマド、青森トド松は、はっきりと眼を覚まして、エメラルド、サップ・グリーン、ヴィリジャン、或いはダーク・グリーン の緑に燃え立った。そこで

「出発！」

歌集　白木黒木

前川佐美雄

昨年の十二月、私は奈良から茅ケ崎に移り住んだ。奈良とちがってここには亡霊や怨霊がゐない。私は憑かれない。これを機会だと思った。……それで昭和四十一年から四十五年まで、五ケ年間ぐらゐが適当だらうと思ってまとめてみた。およそ六百五十首・それがこの集である。

さむざむと時雨しをれば白木黒木などいひて室に戻り来るなる

西行も芭蕉も行きしその道の行者路の黄いろ冬をまどはす

山鳥の胸の裂くを見し山鳥はいくつぶか樫の実を食ひゐたる

¥1200

角川書店

感謝

田中克己

わたしはたびたび死ぬ思ひをし
スマトラでは一週間意識不明だった
北シナでは自殺を考へつづけ
引金をひくか手榴弾の紐をひっぱらうか
　と迷った
その後わたしは一度たしかに死に
生きかへってもう二度と死なない
わたしの孫たちはみな可愛く
わたしの喜びの一部である
わたしは歌ふのが好きで
一週間に一度、教会で歌ふほか
機嫌のよい時には歌ってゐる
わたしは鴎外先生より長生きし
鴎外先生よりしあはせである
わたしの感謝とよろこびとを
主イエスの御名によって
天なる父に捧げます、アーメン。

という山仙の音幅の太い号令がかゝった。いきなり稜角の鋭い焼石がごろつく山徑だ。山仙は、そこを鹿のように跳び跳び先導すると、

「蹴ッ張れ！」

と、はや肩で息を切っている二人の若者をどやしつけた。そして、珊瑚色の実をつけた苔桃が這う岩場に立って、待ちうけた。一歩、一歩、山気を呑吐しなければならぬ急坂にかかると、山仙は腰の篠笛を抜いて「御山参詣」を吹き鳴らした。津軽富士へ、豊作の御礼参りをするとき、口ずさむ呪文だ。〈懺悔懺悔　六根懺悔　御山ザ八大　金剛道者　一々礼拝　南無帰命頂礼〉。その韻律にあわせてサイギ、サイギ、ロッコン、サイギ……と呟くと、志功のカガトに自然はずみが出た。登攀の難渋が霧散して軽く足が運んだ。展望がひらけた場所に出ると、山仙は曲を吹き変えた。二人に一と息入れさせるためだ。古い流行歌〈俺は河原の枯すすき〉の「船頭小唄」になり、その余韻を踏んで、次に最近流行の〈宵闇せまれば〉の「君恋し」になったりした。嫋々とした節回しに、誘われたように郭公が、そこ〻で応えた。再び急峻にかゝると、跳人にでもなりたくなるような、浮かれた「ネプタ囃子」になった。〈ラセ　ラセ　ラセラセ、イペラセ　イペラセ〉。鉛のように重い志功の脚も、つい浮かれささざるを得なかった。この絶妙な韻律の誘導で、案外疲れしらずに、二人は険しい登攀を制服すると、いきなり高原に出た。

日陰の山襞には岩になった千年の残雪がまだ這っていた。そこから間断なく融ける清冽な滴が、心澄む泉や、典雅な穏沼を随意に形成していた。花季はとうに過ぎているのに水芭蕉が、燃え残った貴重な黄燭を、白い円筒の花弁が、懸命に風から守っていた。この花燭を点綴して、トキ色の睡蓮は季をえ顔に群落をなすと、神霊でさえも誘惑しかねない精気で、咲き盛っていた。その精気に誘われたかのように、黒揚羽が群をなして現れると、水面に口づけて飛び去った。その怪妙な翹音が聞こえるほどの静謐があたりを占めていた。志功と大原は膝までとどく菊のなかにたたずむと、初めて荒い息を整えた。霊場のような清浄な山気だった。山気は動くともなく動いていた。そして風よりも微妙な涼気を醸していた。この世の何の物音もしなかった。蒼穹は無窮に高かった。

「ここが仙人岱だ！」

そう、山仙はおごそかに告げた。遙か向う、小岳は濃緑に蔽われ、一面に紫金に灼けた断崖をのぞかせてそばだっていた。ここで彼は

改めて篠笛を横に構えた。厚い唇がとがって歌口に近付いた……と思った瞬間、縹渺とした序律が浮き上って彼方へ消えた。「津軽獅子舞神楽」だ。次で浮き立つ音幅の広い韻律は、水芭蕉と睡蓮の午睡の間をくぐり、細波ひとつ立たぬ水面を伝って、水際近くに群生している綿菅の果穂をゆすり、やがて紫金の断崖を撫で上げると、無限の空へ拡散した。次で、シャリコ、シャラリコの旋音が輪舞のように湧き立った。この時、

「ありゃア…… 鷹コだ！」

と、つい大原が叫びをあげた。紫金の崖の一角に羽ばたいた点は、みるみる大空を乗り切ると、T字形になって、刻一刻……近付いてきた。

「ンだ！ 鷹コだ……」

と、志功も呟くと、そのゆうゆうの飛翔を迎えた。鷹は三人の頭上までくると、微かに身じろぎした。その延びた両翼の真中に、くっきり正円で純白の斑紋が入っているのを、志功は見逃がさなかった。

「神鷹だ！」

そう、直覚した志功は、矢庭に泡の中に両膝をつくと、両掌を合せて遠去る飛影を見送った。その遠去る飛影を笛の伸びのある音色が追った。シャリコ、シャラリコ。すると、その霊妙な旋音の糸につながれたあんばいに、鷹は中空の気流に遊びながら、おおらかな円を描いていたが、やがて軌跡をまっしぐらに戻ってきた。待ちうけた志功は、再び眼を剝いて神鷹を仰いだ。まぎれもなく白抜きの日の丸だ。定紋でいえば丸餅「一も」だ。黒田家の紋所だ。この円を四角にすれば、いわゆる角立角餅の「二も」だ。つまり津軽家の紋所となる。円は角の原形だ。まるで先祖の玄蕃義利を九州から見送ってきたような神鷹だ。或いは筑前の宗像神社のお使いかもしれん。いや、いや、これはまさしく大岳山頂の八甲田神社のお使いに相違ない。志功は胸先からワナワナ戦慄がこみあげてきて、わッ！と叫ぶと、鷹の後影を伏し拝んだ。全身を韻律の権化にして無心に篠笛を吹きつづける山仙……。画具を背負ったままの格好で、土下座して神鷹を拝みつづける志功……。憑かれたような、この二人のひたむきな姿を見て、大原は握飯を腰にして、棒のように突ッ立っているわけにはいかなくなった。彼も志功をまねて土下座すると、神鷹、山仙、志功の三つの

山仙鹿内辰五郎顕彰碑（地獄沼畔）

化物を拝む形になってしまった。神鷹が三舞い、四舞い、五舞い……十舞いもした頃、山仙は篠笛を吹き納めた。彼は矢のように岩壁に向けて帰っていく鷹を見送りながら、

「ワだば、こした紋所のある鷹コを舞わしたのは、はずめてだ。けだし神鷹だべ。志功よ、おめエはきっと世界一の絵がきになれるぞッ！」

と、嘯くと、篠笛を脇差のように腰に収めた。この言葉は、山仙が志功を画仙として認めた認承だったのだ。

この仙人岱行を契機として、山仙・画仙の交わりは終生つづいて変らなかった。七年後の昭和十一年、志功は「日本し美し」を国画会に出品、柳宗悦に認められて出世の糸口を摑むが、その年の中秋十月八日、「おめエはきっと世界一の絵がきになれる」と折紙を付けてくれた山仙の恩顧に報いるため、酸湯から五分ほど上った地獄池のほとりに建てられた顕彰碑に

山仙　鹿内辰五郎頌碑　棟方志功書

と、志功は渾身の情熱を湧き立てて書いた。丈余の碑石は山仙さながら今日も十和田街道を見下している。ちなみに山仙は昭和四十年三月、八十六歳の長寿を全うして死んだ。

4　赤城チャとの邂逅

山仙から画仙の認承を受けた志功先生を、二郎が弘前に迎えたのは九月中旬だった。夏休の労作を展示する弘高サイプレス画会の秋季展を、批評してもらうためである。会場は鷹揚城近く、目抜き通りの坂下にあるはデパートの三階だった。先生は合浦公園で出会った時と同じ、久留米ガスリ・小倉袴の書生ッポ姿で、腰には、魚屋が持って歩くような真鍮の矢立をぶっ込み、それに大福帳をぶら下げていた。久闊を叙すと、二郎は待ち呆けを喰った例の競作の話をもち出した。が、八十号の大作を一時間で描き上げると、まだ陽の出ぬ前に帰ってしまった……と聞いて、空いた口がふさがらなかった。しかも、モチーフは、空中にぴン！と威勢よく踏ね上った鯉だということで、当落なぞ初めから眼中にないような大胆不敵さに、あきれかえったほど感銘した。会員である弘高生たちが勢ぞろいするまでには、まだ間があった。先生は腰から矢立を抜くと、ちびた筆をなめなめ、窓から見下される大通りをいくセイラー服の高女生たちの後姿を、大福帳に次々と写し取った。

詩経私鈔 (二)

森　亮

あまなし

青々と茂つてやさしい蔭のこの甘梨の木。
伐るでないぞ、ぶつでないぞ。
召伯さまが立たつしやつたぞ、この下で。

青々と茂つてやさしい蔭のこの甘梨の木。
伐るでないぞ、曲げるでないぞ。
召伯さまが休まつしやつたぞ、この下で。

青々と茂つてやさしい蔭のこの甘梨の木。
伐るでないぞ、手折るでないぞ。
召伯さまが宿らつしやつたぞ、この下で。

一六番（召南、甘棠）。召公は周王室の一族で燕の地を与へられた。武王のとき西伯の位で政治を行なつた。詩中に召伯と呼ばれてゐるのはそのためである。地方を回つて庶民の訴へを聞いた際に土地の人に迷惑をかけまいとして甘梨の下で彼等に接し、又野宿したといふ。その善政をたたへたのがこの詩である。

上から眺めると、津軽美人の彼女らも、さすが家鴨に似ている。ぷリンぷリンと左右に振れる臀肉を、丸っこい線描で写し取る筆のす速さに舌を巻いた。どうやら同期生と下級生の会員はそろった。が、上級の松井だけはまだだった。棟方志功なんて帝展に出品するからには、どうせブルジョア画家の一人だから、言うことは聞く前に分っている……と屁理屈をいっていた。彼はブルジョアなんかではない。青森裁判所の小使あがりの貧乏画家なんだ、と二郎は反発した。が、松井のプロレタリア信条の門を潜れる真正の画家は、彼を措いて他に稀有であった。現に彼は、ストライキの決行を叫ぶ生徒大会をモチーフにしたタブローを、出品していた。集団が一斉に拳を上げている場面を、ドングロスに立体派風に描いていた。まこと、こんなストライキ風景を、二郎はこの春に見聞し、体験させられていた。松井と同期の上田重彦（石上玄一郎）らの教唆だった。なんでもS校長が夫人の入院に際し、校友会に積立ててあった十和田賚建設資金から無断借用し、今に返済していないという暴露だった。この動議は緊急に提出され、その真偽が分らぬままストライキ決行の決がとられ、その上に血判までさせられたのだった。二郎の小指には、その時の傷痕がまだ残っていた。結局、校長の辞職でけりがついたが、松井なども上田らに操られた革命ロボットに相違なかった。又、上田の同期に津島修治（太宰治）がおった。長身な上にモミアゲを伸ばし、高校風俗であった蟹カラな朴歯や板割草履などは絶対はかず、いつも磨かれた靴をはいていた。すでに小菅銀吉のペンネームで校友会誌に小説「哀歌」を発表し、天才ぶりを気取っていた。その作は、姉の祝言の夜、離れの廊下で芸者衆と相撲をとっていた父と、孫娘の初夜を覗いていた祖母とを、童話風に書いたものだった。又、題名は忘れたが、津島とおぼしき少年が押入の内で写真を現像していた。手が欲くなって通りがかりの兄嫁の助力を仰いだ。そのうち、ヒョンな気が勃然と起って彼女に挑みかかった。すると彼女は、濡れたフイルムを手にしたまま、歯の根をカチカチ鳴らして求めに応ずる場面を売物にした、十九・二十にしてはませすぎた小説だった。一見、禁圧された少年期の欲情のはけ場のような文学だったが、青森で有数な大地主の津島家に生を享けた彼の、因業な血統に対する、有羞な反逆と、後ろめたい罪の意識の表白だったとも、見られぬこともなかった。まこと、彼をそれほど追い込む学内の風潮と空気は確かにあった。先輩から左派の大立者田中清玄が出ていたので、文部省の監視の眼は特別に厳しかった。劇研究会が演題に大塩平八郎を選んだら、素顔で、詰襟服でやるなら許可をする、という条件が付けられた。三人以上の生徒の集会には教授の立会が要請された。が、もともとそ

かえり花

萩原葉子

「かえり花」は私の三冊めの随筆集である。前の二冊は自己閉鎖的なもので、私の生れつき消極的な性格が表に出ていた。今日私はそこから一歩出て積極的に進んで目を向けて行こうとするように変って来た。不思議にそうなると、今まで見えなかったものが見えるようになり、暗かったものが明るくなるのだ。その変化を「かえり花」という表題に現わしたつもりである。つまり私なりの回花なのである。

女の生活／言いたいこと／忘れ得ぬ人々／身辺のこと／若者への思い／思い出／積極的に生きる

¥550

東京都文京区関口一―三三

大和書房

釧路湿原にて

高梨一男

檻の中の
天然記念物は
暗い天を仰いで啼くばかりだ

水平飛行の能力を奪われて
異様な啼き声を発するばかりだ

しかし……

丹頂鶴は飛び立つ　垂直に
怒れる如く　垂直に

の教授の中にも、猫をかぶって倫理を講義する和服姿の柳田謙十郎や、独逸語の講義中に革命をちらつかせた、ルバシカ愛好の国枝教授などもいた。クラスから級長のMや、二郎と共に最年小だったTが突然・特高警察に検挙された。しかし、その検挙に対して、友情の絆で同情され、時代の犠牲者として英雄視される風潮が、どの学年、どのクラスにも浸潤していた。しかし、これらの風潮や、浸潤から二郎だけは完全に除外され、免疫にされていた。と、いうのは、あ奴は殺し屋の息子だ……というレッテルがはられていたからだ。運の悪いことに親父が勤める師団司令部は弘高のつい隣だった。退け時は二郎の方が少し早かったが、乗馬の親父はすぐ後から追いついた。いつも連れがあった。軍医部長で先任の井上大佐（靖氏の父君）だ。親父は獣医部長だった。井上の小母さんは時に家に見えられた。そんな時、「うちの靖は：」「うちの靖は……」とよくいわれた。四高は出たけれど、一向に医者になる気のないのを愚痴られたのである。従って、小父さんの方も、そ知らぬ顔でやりすごすわけにはいかなかった。連れだってる学友の群からはずれて、こっそり馬上の井上大佐へ脱帽したのだが、目敏い連中は見逃してはくれなかった。「なんだ！　貴様は殺し屋の息子か……」と、たちまち露見に及んだ次第だった。

余談はさておき、理屈屋の松井はついに現れなかった。しびれを切らした二郎は、先生を控室から会場へ案内した。会員たちはゾロゾロ先生の背後に従った。とっかかりはSの水彩だった。先生は画面二三寸のとこまで顔を近付けると、まるでマチエールを舐め回すあんばいに、子細に筆致を検分した。そして一と刷けや、一線、一点にまで、「ネー」とか、「やっぱりネー」と合槌を打った。それから一歩退いて大観すると、批評を聞くべく前に出ているSに向って、ニヤリ……と笑って見せた。そして「ネ……」といったきり、何の評言もいわなかった。Sもニヤリとした。次は二郎のタブローだった。例の二十号の「フンドシ姿の自画像」と、競作を企てた十二号の「藤棚の見える風景」の二点だ。先生は顔中を笑いでクシャクシャにすると、「ネ……」と二郎に笑いかけた。十二号の方に、自分の汁粉描法の模倣を見てとったからしかった。「いいじゃなァ……」と左手が飛んできて、二郎の額を軽く叩くところである。が、宿と違って、ここは神聖な会場だ。その衝動を先生は極力押えると、それをニヤリとした微笑にしたのだ。やはり、何の評言

もいわなかった。が、先生の批評は、その微笑にあるらしかった。後年、志功板画の推挽者となった料治熊太（会津八一の研究家。元「太陽」編集長）も、その事実を次のようにいっている。

「紺絣の着物に、縹（はなだ）色の兵古帯をしめ、片手にハンティングを持って、忙しげに作品から作品の前を通りすぎて行く青年がある。強い近眼めがねを光らせ、赤い大きな唇が時々微笑む、その微笑に、作品に対する批評があるのである。あまり背は高くないが、しっかりした足つきに、唯物でない感じがある。――展覧会の会場で、よく見るこの青年こそ、棟方志功のうつし世の姿である。」（「板散華」序、雑華堂のこと。）

料治の書いたこの志功像は、サイプレス画会より十三年も後の日のそれであるが、ニヤリとした微笑を批評にしている点は、いささかも変っていない。ともあれ、「ネー」「やっぱりネー」と、ニヤリ……とで、先生は会場を一巡したが、唯一つだけ例外があった。それは欠席をした松井の、例のストライキ風景に対してだった。先生の微笑は、その十五号の前で、瞬間、凍ったように見受けられた。かくて先生は洩れなく全作品を検閲すると、再た最初のSの水彩に歩を戻した。そして腰から矢立を抜くと、大福帳に批評文を驚ろくようなスピードで書き流した。まるで飛びたつ鳥のように奔放な書体である。ほとんど渋滞することがなかった。まさに一瀉千里の勢だった。またたく間に評文が出来あがると、それを大福帳からむしり取った。そして、「これからこれを弘前新聞社に届けます。後日意のあるところを読んでください。ではどなた様も……」と、会員一同に丁重すぎる挨拶をしたので、素人画家たちは照れたり、或いは答礼に戸惑ってしまった。脱兎のように帰ろうとする先生を、二郎は引き留めた。ポケットに、青森・弘前間の往復の汽車賃三円也を、ひねり包にして準備していたからだ。しかし、先生は掌を拳にして受け付けなかった。「勉強をさせていただいたのは、こっちの方です。どうしてそんなものが受けられますか！」と、頑として自説を曲げなかった。二三度応酬を繰返したが、やむなく二郎は、脱兎のように階段を馳け降りていく先生を見送るばかりだった。

召応日記（三）

蓮田善明

昼食後「麦と兵隊」をよみつゞける。手紙が配達された。隣のS氏にも「御許へ」が来た。酒保から帰つて、氏が開封してよんでゐるのを一寸横からのぞく。（この罪多き興味を許せ）いい筆で「御主人様」と書き出してあり、後は何かぎつしりとこまゝ〳〵書いてあつた。S氏は中学で一年上。おとなしく、スロモで、正直なところ少し神経がにぶく、頭も利かぬ。何かやつても実にへまをやつてゐる。この人に何か賢明なしとやかな若い（？）夫人が仕へてゐるといふ姿がほゝえましく想像された。

Nのことを小説に書いたらとこの間から考へてゐる。彼に出征命令が出て出発する。或は自分と彼とに来て出発し、山を下る途中まで、しかも彼にも彼なりにしつかり覚性（ママ）がくる、といふ筋。

午後、擲弾筒射撃法、――Nの奇行。一つは「連続三発」といふことをきいて、昨日習つてコン〳〵注意されたばかりだのに「何発位一緒に弾はこまりますか」これには皆もうたまらなくなつて大笑。その後まで僕は笑ひがとまらずにこまつた。愈々実際にやりはじめは目標転換の時、伏のまゝのやつに「なかば右向け右」とやつた。それから「連続三発」なら一度につゞけて引金を引いて出るのでなければならぬと愚問したらしく、若い教官もあきれてしまったらしい。ところが彼は得意らしく帰舎してからも自分の意見が合理的だと頑張つてゐた。

夕食後、原隊の将校が四十七名（？）出ることになつたとN教官が語つたといふことが伝へられた。皆の気持が緊張した。午後の教練の時きいたところでは、我々は新兵教育にでも当たるのかと思つてゐたら（

呼鈴

吉本青司

雛には間のある早春の一日　山房に移る
久万山の谷干城墓地の近くの先祖墓地の
そこから十分ばかり歩いた山の背の
山房の庭は方寸　木屑もそのまま
ただ目睫の小松の丘のただずまい　なつかしく
いじらしく　ひわどりの群れ鳴く声音を
財なきものの財宝と聴き
〈好日山房〉と口には出たものの
けっして余生をむさぼる気持ちからではなく
門戸もつけず
呼鈴ひとつで何ひとをも迎えいれるこころぐみ
夜は星々と語るにふさわしく冴え　遠く
街の灯さえ永い時間を隔ててみる想いである
そんな日に
南の島の密林に二十八年生きつづけた
兵士の話をきく
〈言なきこそ自然なれ〉
ことばに言ってしまっては　みんなだめになるような
そんなおそろしい時間
たちまち　今日の衣服を着せられた兵士の顔に
とまどいが見える
〈ほんとうに故郷に帰れるなら山に上って瞑想をしたい〉
このことばがすべてを尽くしている
大切なことは
目に見えないものを見　耳に聴こえないものを聴き
ことばにならないことばを語ること
糧を求めて騒音の渦中にくだり
毒害を拭って帰山する日々　ようやく
INORIの意味がわかったような気がする
ことば　ことば　ことば
沈黙　騒音　沈黙　そして
雲がながれる

反歌

偸安のいまの世界を蔑むのではない
詩と真実を想うばかりだ

実際さういふ教育者としての教育を主にしてゐる）、それに当るものはすでに歩兵学校に行つてゐてそれらがやることになつてゐるとN教官が言つてゐた。思ひ合はされて、「やはり行くのか」と思ふのである。行くのは覚悟して居り、又行きたいと思ひつゝ、やはり「行くのか」と何度か思ひ返すのである。行かないとすると、ぐづ〳〵退屈な気もする。しかし今頃からいつて駐屯軍にでもなつて、一二年も油断のならぬ敵地で、そこではもはや攻撃でなく受身の警戒であり、うつかりすると便衣隊あたりにポンとやられるなどいい図ではない。しばらくそんな話がつゞいた。

今夜は寒くなりさうだ。行李からチョッキとシャツを出して着る。靴下も新しいのとかへた。

同中隊のT君は、二年も駐屯したら、私のやうな細い仕事はできないから、向ふで仕事を探さうと思ひますといふ。銀行員である。

今日帰舎の折、森の道を通る時、ふと子供のことを考へた。殆ど子供のことを忘れてゐた。いや、晶一のことは忘れてゐず、あれの体のよはいこと、いい子になつてくれることなど、又あの子は立派にし上げたいと思つたり、無意識の中にも忘れてゐなかつたのに、平生叱つてばかりゐた晶一とは反対に、自分としてもかあいいと思ひかあいがつてゐた太二の顔をフッと忘れてゐることに気づき、思ひ出さうとつとめても仲々顔を思ひ出さない。体つきは思ひ出す。「オ父チャント　オカアチャント　ニイチャント　オテテツナイデ」といつてゐた言葉の調子も思ひ出す。しかし顔を思ひ出さた言ない。ふしぎな気がする。又、一二年のうちに帰つて会つたら、どんなに僕の出現を不思議がるだらうと思ふと、幼い子供の意識からでも自分が今消えて行くことがとてもさびしくなった。自分はまだ、戦争に行きたい〳〵などと考へてゐるが、（これも召集前とは大分変つた考へ方でそれを思つてゐる）、妻にしたところで、もし戦死しなくても夫を戦に出してゐる気持は大へんなものだらうと思つたりした。とう〳〵太二の顔は思ひ出せない。東京駅で、威勢よく送られる自分を見てゐる顔の中で最もロコツにいやなさびしい顔をしてゐたのは晶一だつたが、その顔がやせてゐたのが思ひ出され、自分の父が死にに行くことがもう分りかけてゐる少年の心がひし〳〵と打つてきた。太二も自分と一緒に汽車にのると泣いた。いよ〳〵出征する時は門司までもいいから来ていいでせうといつた妻の願ひを思ひ出す。つまらぬことだし、自分が涙でも出したのではこまると思ふが、このたゞ見られるだけでも顔を見るといふつまらぬことの中に非常に切実な強烈な真実がひそんでゐるやうな気がした。しかし妻と会つてやることが果して晶一にどんなだらう。彼には残酷な気がする。余り残酷でそのために晶一が病気になつてしまひはしないかと思ふ。

召集前に、今日の日の文化の建設について考へた時の自分の詩は幸福であつた。今それをすて、一軍人として参戦する段になるとそれがもつと直接で、自分のなしうることが小さくてまどろこしくなつてくる。

十月二十五日

腹の皮がハッて眼がさめる。横になつたり、寝返りしたりしてゐてとう〳〵四時頃から眠らずにしまつた。案外暖かいと思つたら雨がふつてゐる。雨にぬれて便所に行き洗面をする。雨雲の下に杉の木立から谷向ふの山々が又別な風趣をあらはしてゐる。八時近くより霽れてきた。

十月二十六日

三時前に目がさめたきり、目もさへて眠れぬ。妻の心が犇々と想はれる。かゝる女々しい想ひにみち、堪へえざるに至り涙をながす。しかも遂に会はずして、唯この日記一冊を残して死地に征くといふところに英雄主義でなく、日本人に運命づけられた人格生成の真理があるやうである。女女しくめめしく想ひ乱れ悲しむ。このまゝ死にゆく真の覚悟としては妻を想ひ子を想ふ。今肉親といふことがほんとに湧いてくる。しかも現実はそれが遂げられない形に於てあり、この否定を徹底せしめる方へ意志して進まねばならぬ。

もしこの日記がさうした記録であるなら、文学である。妻の日記がもし書かれるなら尊い人間の記録であらう。

今日は自分の日直である。午後擲弾筒分隊戦斗教練を高級参謀みて、小まかい、つまらぬ批評をする。

夜七時半より、三教官の送別会をやる。賑やかで盛会であつた。

妻、清水、池田（文）より手紙来る。妻の手紙を最後によむ。涙が出る。太二のこと書いてあるけれど、どうしても顔がうかばぬ。陰膳を据ゑてあるといふ。

夕月、針の如し。

十月二十七日

夜暖し。十二時巡察。星冴えたり。渓流の音。

午前、参謀本部、S少佐視察に来る。白旗山より電信山へかけて、一般分隊と擲弾筒分隊と連繋して攻撃。今日は何となし体に疲れあり。昨日走りすぎたのか？　帰舎してから顔が少し青いと人がいふ。しかし割合強い。二三日来倒れるものやへどを吐くもの、青くなつて退る者、その他異常あ

香港へ

美堂正義

1

大阪から四国九州
沖縄へ給油のために着陸
荒れた空模様も好天
台湾の東海岸を南下して南端から西方へ
香港の山々が目の下にある
権木と大きな岩石、岩石
日本の山々の森林からほど遠い
その赤肌の陸地の上空を旋廻する
ゆつくり、ゆつくりと島から半島が廻る
緑色の少ない大地
船が見える　ビルが見えてくる
やつと来たかと
窓硝子にひたひとをつけてゐる

2

香港第一夜の宿舎は
国境に向ふ汽車の通つてゐる公園の真向い
チャタム・ロードのホテルの五階
薄暮の室に着いてベットにごろり
火事があつたらとカーテンを開けば
向ふの丘に高い建物
目の下に人の住んでゐないやうなビル
二階からつき出たトタンぶき
物干らしいと想像するだけで
細いコンクリートの敷石の上に突き出て
一階にも破れトタンぶき
美しい街裏のさびれた家
隣の家裏もまた
そんな風景を見ながら
心が安らいでくる酒でもゆつくりと

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

るもの少くない。しかし用心しなければならぬ。

演習中砲兵の射撃を見る。二キロ位の山の腹に爆発する。発烟弾は特に目に見て凄い。草に火がついて草原が燃えてゐた。

明日愈々厳舎移転のため、午後休養、今迄の教官も帰熊。用意といふほどのこともない。梱包を兵隊にさせ、到着した「文芸文化」十一月号を見る。「青春の詩宗」自分には心みちるものがある。もつと枚数を多くして書きたい。

十月二十八日

浅の藪厳舎へ行軍。途中から、特に新厳舎の附近一帯の風景よし。円い丘の連り、萱原。萱の刈られた跡の縞とそのうすみどりが美しい。点々とある松の濃緑又佳。厳舎は前より明るい。蜂が何匹もゐる。

但し教官まづし。午後舎内の検閲もある。荷物着かず。毛布も。この一週間の演練に愉快ならざる空気きざす。夜Nの講演。歩兵操典の綱領をよむ。よく出来てゐるが、絶対最高者への献身が出てゐない。

夕刻より雨。幸ひになま暖し。夜南京虫に頭と耳をかまれてかゆし。新聞紙をひろげてねる。

編集後記

一月二十一日。今度美術出版の冥草舎を始めた西岡武良君が研究社で「英語青年」を編集していた杉山幸恵さんと結婚することになつて、たつての御依頼で仲人役を引受けた。愚妻ともども上京をした。披露宴には、日本女大で幸恵さんの恩師であつた福田陸太郎氏や、西岡君の知人で西脇順三郎研究をやつている早慶大の助教授方や、昔剪染の知念栄喜氏等の顔も見え、肩のこらない暖やかな宴であつた。いつの間にやら仲人役をやらされるような齢になつている自分等が今さらながら顧られたが、昭和二十一年の復員直後に結婚をした二人は、野戦から私が背負つて帰つた鉄カブトが焼飯その他の鍋代りをした昔を、仲人役として披露をした。

二十二日。鎌倉山に棟方志功御夫妻を二人でお尋ねした。昔宇治にいたころ、よく西下した画仙は立ち寄られ愚妻の手料理を食べていただいたからだ。画仙伝の質疑を例のごとくし、その後にチャ夫人のお点前でお薄をいただいた。その節画仙から、唯今執筆中の伝記は、画仙がパリー郊外オーヴェールにゴッホの墓に参るところで終るが、その後も続巻として執筆してくれるように……との、有難い言葉を頂戴した。

二十七日。吉本青司より山荘へ転居した由の便りをいただいた。凡そ氏の作品に現れるような詩趣豊かな所なのであろう。いつか閑雅な時を得てお尋ねしたいものである。

高知市加賀井二―二一―九　（O）

果樹園 第一九三号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年三月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　六〇円　送料　三〇円

果樹園　一九三号　昭和四十七年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円　送料三〇円

果樹園　一九四号　昭和四十七年四月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円　送料三〇円

果樹園

第194号

画仙・棟方志功(㈣)　小高根二郎
詩　経私鈔(三)　森　亮
ドルショックなんてない　宮城賢
林とことり　吉本青司
応召日記(四)　蓮田善明
山　椿　中野信子
伊東先生の想い出　尾城美子
土用二郎　高梨一男
編集後記

画仙・棟方志功(㈣)

小高根二郎

ところが、脱兎は意外にも一階の化粧品売場で、あっさり網に掛ってしまった。

「ありゃア……、青森の棟方さんじゃアないノ？」

と、化粧品を買っていた二十一、二ぐらいの年格好の、銀杏返しで、矢絣のよく似合う女性が問いかけた。彼より背が高く、硬太りした豊艶な体格が見事だった。顎から首にかけて抜けるような白さだった。

「ンだ。」

と、志功は返事をしたものの、「はテ、誰だったべ？」と思った。弘前の女性に知り合いはないはずだからだ。

「それエ……。いつか青森の野間さんところでエ……」

と、彼女は暗示したが、思い出の野間歯科に、眼前の堂々した女性と符合する、どんな女の面影もなかった。笑い上戸の琴に、泣き上戸の清……、それに看護婦の川村イトだけだった。

「それエ、看護婦の川村さんと……」

と、彼女がいいかけて、志功はやっと川村イトの親友だった赤城チャを思い出した。志功の上京前、まだ二人ともお下げ髪だった。彼女らは一緒に看護婦試験を受けて、チャは一回で合格したが、イトは落ちた。そのイトが野間の裏手の池の弁天様の祠の陰で、肩をゆすりあげて泣くのを、叱るように慰めたり、激励したりしていたチャを思い出した。友というより、体格も立派なことも手伝って、姉のように見えた。家は、沖館の忠太郎のすぐ近くで、鉄道の枕木運送の元締勘七の次女だった。

「赤城チャさんでねェだか？」

「そゥです。」

志功は初めてニッ……と笑って見せた。三階のサイプレス画会展で、会員達に振舞ったニャリ……とは、微笑の意味が違っていた。これには批評がなかった。批評でなく鑑賞だった。この微笑を受けて、林檎のように艶のいいチャの頬もほころびた。

「ドモ又さんも去年帝展ァ入選して……」

とチャがいったので、志功は驚ろいた。

「ありゃア、日赤青森支部の芝居ッ見ていただか?!」

と、志功はうれしさと感激とで、身も心も綿のようになってしまった。

「どごサへ？」

と、チャは志功の行く先を尋ねた。六・七年ぶりのこの邂逅を、このままサヨナラに結びつけるのは、なんとなし惜い気がした。富田町の小野医院に勤める彼女は、今日は日曜で休みだった。寛いだ娘心に、「ドモ又」の「とも子」役が、チラリと掠めたのだ。

「これから、弘前新聞サ、これを届けに…」

と、志功は大福帳からむしり取った原稿を彼

女に見せると、

「チヤさんはどこサへ？」

と問うていた。

「本日休診だハで、久しぶりに城サでも散歩しようと思って……」

と、いった。いく道筋は同じだった。一番町の大通をとろとろと昇って、元寺町にぶつかる直前の右手に、新聞社があった。奥が印刷所になっている、灰色のペンキ塗りの建物の前まで来たが、どちらからもサヨナラを言い出さなかった。四つの眼の瞳孔に、瞬間、火が燃え上ると、その焔が絡み合った。

「ちょっと待っててケレ……」

そう、志功はいうと、扉を排して内へ踊り込んだ。扉の前で待ってるチヤの眼に、さっき燃え上った焔が、初秋の午後の明るい日差に煽られて、まだ種火のように燃えつづけていた。鷹揚城をぐるりと案内した後、次はどこへ案内したものか？　と思案してるからだ。津軽家の菩提寺の長勝寺は遠すぎるし、最勝院の五重塔では暗すぎる。廂を延ばした雪季の人道――コモセのある目抜きの土手町をぶらついても、この日和ではパッとしない。いざ案内しようとなると、これといって見せ所のない陸奥の城下町だ。東京暮しで眼の肥えてしまってるドモ又さんには、珍らしい物とてないだろう。そう、チヤが心細く思った矢先、ふと撫牛子の鬼コが頭に浮んだ。小一里の道のりで少し遠いいが、あの鬼コなら、きっとドモ又さんは踊り上って喜ぶだろう。第一、あの鬼コはドモ又さんにそっくりだ。と、この思い付きの素晴さしさに、自然、彼女の頬に微笑が浮んだ。この時、喧嘩でもしてるような賑やかな声で、志功が新聞社から跳び出してきた。志功を追って、扉から、いたずらそうな若い記者の顔が覗き、チヤに向けてニヤリ……と意味ありげに笑った。そのニヤリのいやらしさに、いつものチヤならクルリと背を向けるとこである。が、どうしたことか今日のチヤは、袖口を唇に当てると、ペコリと会釈を返えしてしまっていた。突き当りの元寺町をすぐ左に折れ、志功と連れだって歩きながら、彼女は頬が火照ってきて困った。

「なんぞ言われしたか？」

「いや、いわれねェ……」

と、志功は否定したが、先ほどの記者との応酬が、喜びとおかしさになってこみあげてくるので、それを押えるため、彼女同様に顔を火照らせていた。

元寺町を行って、初めての辻を右に折れるとすぐ城になる。濠を距てて古びた石垣は、老松に押しひしがれて続いている。突き当りは追手門だが、津軽のジョッパリさながら横向きで客を迎えている。（実は、道の真向から攻撃を受けぬ用心なのだ）。城門を入れば急に広い道が開け、道端には丈高い老松が遙かに慶長の風を呼んでいる。二人は何を話の糸口にしていいか分らぬまま、内濠に沿って黙りこくって歩いた。連れのような、連れでないような、チグハグな距たりが、二人の間にあった。二の丸に入ると急に桜樹が多くなった。やがて鉄道省のポスターで馴染みの風景が近付いてきた。咲き盛る桜花。孤を描いて濠を渡る朱の下乗橋。その向うの白堊三層の天主閣……。間をおいていた二人は、橋の上で、ポスターの人になったかのように、初めて連れ添って歩いた。橋に間幅がないためである。そのまま鶴の松をよぎり、トントンと石段を昇れば本丸だ。その広々とした台地の西の空いっぱいに、厳然と岩木山は盤踞している。△不二見ずば不二とやいわん▽という歌があるが、富士より頂が三つに歯こぼれしたように峨々として、しかも生々しい。標高一六二五米だから、富士山の半分より五〇〇米ばかり低いことになる。たまたま莨西善蔵は帰郷すると、酔っぱらって弘前女学校教諭の石坂洋次郎を呼び出し、町で俥をひろって本丸に駆けつけ、真夜中の岩木山を鑑賞し

詩経私鈔 (三)

森　亮

よき人来たる

白鷺はこぞつて翼をひるがへし
西なる沢に降りる。
わたしの客もやつて来た、
同じ清らな身のこなしで。
かしこに鳥は群れ楽しまう。
ここでは客をわたしたちがもてなす。
――ひと昼ずうつと、夜もつづいて、
左様、ゆるゆる寛ぎ給へかし。

二七八番（周頌、振鷺）。周はそれに先立つ夏と殷の二王朝の嫡流の子孫を公爵にして土地を与へ先王の礼楽を守らせた。その人達が周の祭事を助けようと都にやつて来た。これはその歓迎の歌である。第五行を鷺のことを歌ったとしたのはアーサー・ウエーリーの読み方に従つたもの。最後の二行もウエーリーの英訳を参考にした自由訳。

たことがある。例の、あたりに大きな山がないお蔭で岩木山は立派に見えるという御託をならべるためだった。太宰治はここから見る岩木山より、故里金木町から眺めたトンガリ帽子のようなそれの方が好きだった。その証拠に、岩木を鑑賞するより、本丸の脚下、蓮池、西濠を距てて、ひっそりならんでいる五十石町・袋町・西大工町・鷹匠町などのただずまいを愛憐した。

「弘前高等学校の文科生だった私は、ひとりで弘前城を訪れ、お城の広場の一隅に立つて、岩木山を眺望したとき、ふと脚下に、夢の町がひつそりと展開してゐるのに気がつき、そつとした事がある。私はそれまで、この弘前城を、弘前のまちのはづれに孤立してゐるものとばかり思つてゐたのだ。けれども、見よ、お城のすぐ下に、私はいままで見た事もない古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒を並べ、息をひそめてひつそりうづくまつてゐたのだ。ああ、こんなところにも町があつた。年少の私は夢を見るやうな気持で思はず深い溜息をもらしたのである。」（新風土叢書「津軽」）

志功は画家だから、もっと卒直に岩木山自身に対峙していた。これは聳えてなんかいるのではない。支えているのだ。冷く、青く、澄明に灼熱して落ちかかる大御空の重圧を、大地はここ陸奥に力を結集して、懸命に耐えているのだ。頂がこぼれているのは、その攻防の余波なのだ。うねる山襞は筋肉の緊迫の現れだ。いや、これは持国天・増長天・広目天・多聞天――いわゆる四天王の死の圧力を、凝縮して支えている天邪鬼の命きりきりの抵抗の一線だ。そういえば、岩木山はもと厳鬼山と呼んでいた。その山麓には鬼神大夫や卍・錫杖と呼ぶ鬼共も棲んでいた。（その鬼とは巨人、つまり異人だという説もある）。近祖・月海、棟方角馬は、画家としての初仕事に、その鬼共を青不動図に招待していたではなかったか……。志功は、その由来や因縁を知る由もなかったが、茫々三百年の古城の歴史を睨みつづけてきた厳鬼山が、なにか胸に語りかけてくるものを感じていた。

「いつ来てみても好ごすネ……」

そう、むっちりした美事な胸を張って、同じように岩木山に対峙していたチヤは、ぽつりと呟いた。志功は彼女の言葉に、「ネ……」とやさしく同調してから、好きな啄木の歌を小声で朗吟した。

ふるさとの山に向ひて
いふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

底籠りのした音幅のある朗吟が、チャの胸にぴりりと泌みた。〈ふるさとの山に向ひていふことなし……〉。余韻を厚い胸に、もうしばらく抱きしめていたかった。サヨナラはもっと後にしたかった。

「棟方さん。足コ大丈夫なら、これからもっと面白いものサ、案内すべか？」

「面白いものって何だべ？」

「鬼コよ。撫牛子の……」

「そりゃア面白い。男の鬼コか？　女の鬼コか？」

「鬼コなら、男と決っていますべ？」

「いや、兄サがあったら、必ず姉サがある。」

ここで二人は初めて聲を合せて笑った。後はチャが「あべへ（おいで）」といわずとも、志功は彼女の歩く方へついてきた。二人は出会った場所の[は]デパートまでいったん戻り、そこから東方へ、百石町から和徳町に抜けるまで、三角形の二辺の和より一辺は短い……幾何の原理で、大通と小路とを、こもごも選んで進行した。途中、廓のある通も抜けることになって、さすが気丈なチャも内心たじろいだ。が、胸を張って素知らぬ顔で歩を進めた。カーキ色の兵隊が盛んに出入してる、格子のある家並から、ときたま黄色い聲が二人に向けても飛んできた。志功が背を屈めて、チャの背に隠れるようにして歩くからだ。志功はまだ女を知らなかった。青光画社の銘たちは、美の探求と称して、こっそり堤町の廓に出入したもんだった。松木のしつこいほどの誘いにも、志功は頑として応じなかった。二十七まで童貞の彼は、黄色い声には格別弱かった。そこを見抜いたヤリ手婆が、隼のように跳びかかってきたりした。

「志功さん！　並んで歩かねばマイネ！」

つど、チャは背後の志功の袖を強引に引いて、彼女の右手に並ばさねばならなかった。和徳本通に抜けると、志功は袂からタオルを取り出して、首筋の冷汗を拭った。その志功を脇目で見て、「兄サがあったら必ず姉サもある」と嘯いたほどでもない、彼の正体を見てとって、チャはふッ……と唇に微笑を含んだ。

屋並を抜けて青森街道にかかると、田圃の広がりの向うから、岩木山はまだ二人を凝視めていた。僅か城から小一里の道のりなのに、その姿が急に遠のいて見えるから不思議だった。少し疲れたかして、二人は黙りこくって歩いた。やがて街道の右手に、鳥居が見えてきた。神社の裏手は奥羽本線が走り、丁度、弘前から一駅青森寄りの撫牛子の駅に当った。「村社八幡宮」と陰刻してある石碑の前までくると、チャは

「ほら、鬼ッコ！　愛ごい鬼コ……」

と、いった。

「どごサ？」

と、志功は、あまり立樹もなく、広からぬ境内を見回した。社殿と神馬の像の他はこれといった物もない。

「ほら、頭コの上サ……」

と、いわれて志功は上を仰ぐと、まさに鳥居の笠木と貫の中間、額束の代りに、二尺ばかりの鬼がしゃがんでいるではないか。眼を剝き、両掌を膝頭にのせ、これから跳び降りようとするのか、それとも天へ跳び上ろうとするのか、又は「ここまでおいで……」をしているのか、にわかに判断できぬ姿勢である。志功は子供のように可愛いいこの鬼コに、思わずニッ……と笑ってしまった。すると鬼コの方でもニッ……と笑み返えしたようであった。二人は「挙身微笑」を感応し合った。あべへ（おいで）ワと一緒に東京サ行がねか？そう、誘いかけたくなるような思いだった。志功の眼底に愛憐の泪が湧いて、わッ！　と哭きだしたくなるようないとしさに、身をゆすられた。

「志功さん。あなたの童子に出会ったような気コするべ……」

と、チャがいって、志功は今度は彼女と挙身微笑を感応し合った。社の裏手は駅だった。青森に帰る志功を、チャはプラット・ホームまで見送った。いや、チャは弘前まで一駅であるが、偶然恵まれた今日の思い出を、そっとそのまま汽車に載せて帰りたかった。互に、どちらの汽車が先に来てもよかった。青森行が先に来た。志功は車窓から恥かしくなるほど上半身を乗り出すと、両手をかざして挙身微笑をした。まるで鳥居の鬼コが汽車に乗り移ったようだった。チャは袖を口に当てると、くッく……と身を二つに折って、これまた挙身微笑となった。見送る挙身微笑と見送られる挙身微笑。それはやがて線となり、点となり、やがて夕映えた蒼空にまぎれた。

志功のサイプレス画会展評が弘前新聞に掲載されたのは、それから二三日たってからだった。おそらく志功の初めての評文だろうから、史家のために、その全文を掲げることにする。それは、「人を知らなく勿論それを見なく作品を観さしていただきました。自分の仕事がここに列ばれた物だったらと云ふ最も正しい心からそれを観ました」という至極公正な前文で始っている。

＊

○○○○様

規則立てられた仕事の順序に上つた最初の見得を想います。行く道は遠く仲々それに並んでの歩調の正しさを見ます。つまづかないもののふの強さ可愛さを見ます。それを援けて生かし、熱心、力、腹にこもつた芸、いはゆる腹芸をほしくあります。

○○○○○様

持つた刃に手応えを知つてかかる人、刃三寸身をかわし敵手を望む発心も見える人、心の物を大丈夫に丹田に込める必要を判るが損も見える人、威張りを捨て親切さを加い、答を心に出させる訳を知る時を、この人に得る真実を覚えさせたい。それを知る人だけになほそうしたいあせりを観る。棟方が想う天晴れ韋駄天走る仕事が後を創る事を想う。

○○○○様

心に触れる静かな物を見ている得意が判る。仕事の仕事はそれ丈では得られない事も判つていることでしょう。一歩一歩又一歩進む足取りに勇気を付けるも一寸上の謀事があることでしょう。そこにある畏が見えてゐる人だけに伸びた心、技共に知りたくなる此処が人情とも言われる人のよいと

撫牛子の鬼っコ　（弘前市郊外）

でしよう。

○○○様

気持を出しています。景色の気持が判る此の人の眼が仕事をしています。空気が見えて透いた空気の密度が判ります。自分の術を親切に扱つています。色に言はしている言葉が判つています。が一番大切な仕事の正しさを隠している損を未だ知らないらしく横を向いてる可愛いい様が判つて善く、そうしてそれが悪く残念です。人が損に見てゆきます。正直な真正面から向つて来る強さ優しさを受けたく思われます。如何ですかさうと思います。

○○○○様

用意を忘れているような仕事です。見る事もなさねばならない。今までより前になす事がある筈です。さとしい心に自らを入れた新しい心持を勇敢とします。それにつく前仕事する先にきわどい事を仕出かし用意をいたし肝心を覚えませう。立派な仕事に対する新らしい見得の生々しさを勇敢として見ます。男らしい落着きは術の世界に出来ない絶対の物です。

＊

この評文を読んだだけでは、批評の対象がどんな種類のタブローであるのか、恐らく想当できる読者はあるまい。が、凡そ十八・九の少年たちが描く、素人絵を頭に想い浮かべてもらえば、当らずとも遠からず、といったところである。厚かましく告白を許していただけば、二郎のタブローは、二番目の「持つた刃に手応へを知ってかかる人」云々の、それである。志功が瞬間ではあるが微笑を凍らせた、あの松井のストライキ風景は、「用意を忘れているような仕事」云々が、それである。田舎新聞の誤植と、それに志功独特の呂律と妖しい「てにをは」とが手伝つて、いささが通じがたい文脈もないことはないが、縹渺とした持味は、すでに尋常なものではない。挙身微笑で真実を感応する霊感が、随所に光芒を放つている。この霊感は、陸奥の土俗が伝える霊界通信者ゴミソ（盲の巫女イタコに対応し、必ずしも盲でなく、男も混えた、祈禱ト占師。語原は御夢想だという）の素質に通じるものがある。

ともあれ、素人少年画家たちに、親切に様付けをした志功のこの評文は、たちまちラヴレター批評として評判になったが、同紙のゴシップ欄は、彼が或る医院の看護婦某に、次のような真実のラヴレターを送った由も伝えていた。

「私は貴女に惚れ申し候、

詩集 **山の奥**

小山正孝

典雅で豪華を極めた詩集。詩と銅版画とが奏でる音楽は、貴方をかつてあった自然へ誘うに相違ない。

★目　次★

山の奥／夜の歌／井田川／中空のもの／内面のもの／浮ぶもの／迷路／目で／心は／手に／別々帳／山中饒舌

銅版画「風景」「森」

駒井哲郎

¥18,000

東京都新宿区市谷砂土原町三ノ一五

思潮社

ころご同意なくばあきらめ候。」

十、開花と結実

1　結婚と開運と

いったん挙身微笑を感応し合った同志が、再た相会うこともなく離れ離れになるなんて、とうてい堪えられなかった。志功は例の出品作を携えて上京する途次、再び弘前を訪問した。いつもは浅虫回りの東北本線によるのだが、今度は弘前回りの奥羽本線を選んだのである。チヤが描いてくれた案内図で、小野医院近くの彼女の借間はすぐ分った。仕舞屋の二階だった。窓から五重の塔を覗かせた最勝院の黒い杜が近景として見え、その向うにくっきりと岩木山が、遠景として空を限っていた。女の部屋から見るためか、頂の三つのこぼれも、城から眺めた峨々としたそれではなく、妙にやさしく、意味ありげに、見えるから不思議だ。午時なので、チヤは矢絣の上にすぐ割烹着をつけると、出窓に器用に置いた七輪を煽いだ。炭がいぶる臭いも甘かった。甘栗のにおいがした。抜けるように白いチヤの横顔の、首から顎につらなる消え入るような曲線を、志功は心の内のスケッチ・ブックに、幾つもデッサンにしていた。こんな香気のようにあえかな曲線は、肉体のどんな部位にもありはすまい。まるで泡雪の味覚だ。熱い視線を横顔に感じたチヤは、今度は志功に背を向けて鰈を焼きだした。海の焦げるにおいが、にわかにあたりに漂った。志功は油然と食慾を刺戟された。銀杏返の襟脚から、コンテはスラスラと透視の線を引いた。漆黒の闇で、夜毎、訓練に訓練を重ねたデッサンである。見えずとも幻想の線は自在に引ける。その線は滑っこい肩からなだれ、胸の旺んな隆起を向う側に隠した背をむっちり象り、容量のある臀の甕をどっしり造形してか

ドルショックなんてない

宮城賢

一ドル＝三六〇円
このいわれは
円は三六〇度だから
という落語の落ちみたいなことを
ある新聞は得意そうにかいていた
二十年まえ学校を出たばかりのわたしは
貿易会社に職をえて
そこの職場では
〈古き良き昔〉を生きた老人たちが
一ドル＝二円
の時代をわたしら戦後青年にかこったもの
だ〈進歩的〉な政党は
円の切上げにも文句をつけているけど
ほんとうは
一ドル＝一円
でなければならないのだ
これはぜんぜん天文学的数字ではないが
じつは天文学的年数を要するかもしれない
のだ
一円＝一ドル
になったあかつきには
日本語もこの比率にしたがうだろうか
しかしそのときも幾何学的〈円〉は
かわらず三六〇度を維持するだろう
そしてにんげんは
三六〇度の画角をもつ超々広角レンズの開
発に
血道をあげているかもしれない
（いまはせいぜい一二〇度程度なのだ）
だれかいないか
〈円〉とはついに零度である
と断言する科学者は？

林とことり

吉本青司

ある日　ことりはひとつの枝を離れる
青い杜にまぎれこみ　青い木の実をついば
　む
それは　木の実だか樹林だかわからない
空気だかもわからない　ただ
ついばむだけである

あるあさ　ことりは初めての声でうたう
青い羽で　青い声で　ただ
青いだけ　それだけしかわからない　こと
　りは

たべた木の実のことは忘れてしまう
青い樹林の　青い木の実がいっぱいの
杜のなかをあるく　枝から枝へ

青いふんをまきちらしながら
やがてひとつの枝をえらび　そしてうたう
青い杜は　青い空気にみたされ
青いうたがひろがる

祝婚歌

古調

ミモザの花にやはらかく
早春の日のさすころぞ
きみよろこびを告げたまふ

ひととひととが会ふことは
このよのほかのさだめぞと
しるこそ愛のはじめなり

さちあれきみとそのひとと
ミモザの花のそのやうに
春のひかりをめでたまへ

太陽と雲

早春のベンチにいるひとを　大きな
影がよぎることがある　ふと
空を仰ぐ目に
薄墨の雲がひろがり
太陽の不在を知る　そんなとき
ひとふきの冷たい風が
足もとをよぎる　そして

ら、さて、ギリシャ神殿を支える円柱のような脹らみを持った魅惑的な二本の脚を描いた。その脚を受けとめる、眼に見える踝（くるぶし）と踵（ひすい）は、脂にのった薔薇色で、がっぷり噛みつきたくなる未知の果物のようであった。艶々として弾力を内蔵した充実そのものだった。この踵なら、どんな障碍でも跳び越せるに相違ない。かつて永遠逃亡をした忠太郎師匠のそれとは、大変な相違である。あの踵はカサカサに乾燥し、ヒビ割れ、腐脂のような異臭を放っていた。この差は一体なになのか？　それは男女、老若の相違からではあるまい。まさに生得の運命である、美の違い、そのものではないだろうか？　志功は漠然とそんな美とエロスの想念を低回していた。

「志功さん。冷めねェうちに食べへ……」と、ほどよく火の透った鰈は、すでに折畳み式チャブ台で待っていた。二人前はある大きな鰈だった。志功はどうしたことか、箸でそれを裏返えした。セピアの表と違って裏はジンク・ホワイトだ。チャさんだバ、これより冴えたシルバー・ホワイトだ。

「ワだバ、こつらを食うハで、チャさんは黒い表サ食べへじゃ……」

と、脂がほんのりと滲んだ白い肉を、志功は箸で大きくむしり取って小皿へ移した。

まもなく太陽は帰ってくる　暖かい光が
ふたたびベンチのひとを照らす　そんな
くりかえしの中で　早春のほんのわずかな
時間がすぎていく　いたずらな
すずめたちが意味ありげに
何ごとかをしゃべりながら　姿も
見せずに飛びちっていく

屋上で

屋上にいると海鳴りのような音が絶え間な
　くきこえ
海上に浮游する船のようである　そして
想いはやはり教育に及ぶ　人を
教えるということは大変なことだ
船の指針が決まっていないとき　教育はな
　い
だから　いまは教育はない

DEMOCRACYはCUPであって果汁では
　ない
教育の中立なんて嘘っぱちだ
空には流氷のような雲がちらばり
太陽が雲間から光を投げている

HELIOLOGY　太陽の死と復活　ふと
そんなことばがこころにのぼり　それをま
　た
海鳴りの音がのみこんでしまう

「何ッてェ？」

「チャさんだと想ってェ……」

と、彼は白い肉片を口に放りこんだので、チャのシルバー・ホワイトの首から頬にかけて、揚（とき）色が潮のように射した。志功は再た鰈を返えしてセピヤを表にした。チャの番である。

「わイはァ、めぐせェ（恥しい）じゃ……」

と、彼女は箸を唇に当てて、しばらくためらっていたが、思い切ってセピアの皮ごと白い肉片を、大きくむしっていた。

「うめェ……」

と、志功は舌の付け根に融け込む、淡雪のような潮の味を含味した。嚥み下した後も、そのコクは舌の上ににおった。龍飛（たつび）の潮の香気（かざ）コだ。一人前の画家として出発を決意した、あの朝明けの味覚だ。

「うめェ……」と、彼は繰返えすと、彼女も、よそいきの東京弁コを使って

「おいしイ……」

と同調をした。二人の眼は同時にニッ！　と笑み合った。まさに挙身歓喜だった。

2　版画への道—先を行く人じゃまです

例の鯉のタブローが帝展に落選したことは、今までのようにあまり苦にならなかった。志功の威勢のいい鯉に代って、佐竹某の凡庸な群鯉遊泳図が特選にまでなったことは、志功に落選の酔に似た自恃を抱かせこそすれ、引け目には感じさせなかった。それほどチャとの挙身歓喜は、志功に士気を盛り立てる効用を発揮した。それに、貉の会の面々がこの秋クツワを並べて公募展に初入選の栄に輝やいたその余映が、会の創立者だった彼に、確信と余裕を与えていたからだった。古藤貉は日本美術院展に木彫「かわうそ」が入選した。日本美術学校生徒の鷹山貉も、二科に二点油彩が入選をした。それに日本歯科医専の生徒だった若貉・七尾善之助が、志功の身代りでもしたあんばいに、東大構内に取材した水彩「緑蔭」が帝展に入選したのである。

（一八五号で大正十四年入選…としたのは誤謬）。アーチストではなく、デンチストを本願とする素人画家としては、まさに出来すぎた栄誉だった。古貉の松木、棟方はすでに昨年、国画会展と帝展にそれぞれ油彩が入選ずみだったから、大正十一年秋に青光画社の旗揚げをしてから苦業七年、アーチストたらんとした所期の目的はここに達成されたわけである。頭領貉の志功が、まるで自分が今秋も入選したかのように、友貉らの成功を祝福したのはもちろんである。

それにしても、志功がいよいよ精進を必要とする芸業の第二のスタートに際会し、挙身歓善の伴侶にチャを恵まれたことは、なんとしても時宜を得た好運だった。〈私は貴女に惚れ申し候、ご同意なくばあきらめ候〉に始まった歓喜のリズムは、それ以来いつも志功の胸中でオルゴールのように鳴りつづけた。それは澄生の〈かぜとなりたや〉が口癖になったと同じ原理だった。感情がいったん胸中に湧くと、それをそのまま胸中に仕舞ってはおけずに、出口を求めて口腔の舌をゆさぶり、舌が奏でる韻律は、耳殻を通して胸中に吸収され、再び感情を煽り立てて情緒を醸成する。このオルゴールのような繰り返えしで、情緒はいつか陶酔となって志功に定着するのだ。

ところで、志功の陶酔は尋常のそれではない。ゴミソの陶酔なのだ。女ミコ・イタコに対応する男ミコ・ゴミソのそれなのだ。祭神は太陽神・ゴッホ――「白樺」の口絵だった原色版の「ひまわり」だ。ご神体のオシラサマは、誰あろう色白のチャだ。それも盲目のイタコたちの、コケシもどきのノッペラ坊のオシラサマではない。透視と幻想で描き馴れた、むっちりとした胸に、甕のようにどっしりしたイシキを持った、起伏豊かなオシラサマなのだ。祭壇は八十号の鯉の落選作を初め、売れ残りの手製の額縁、木炭紙四つ切を綴じた幾綴もあるスケッチ・ブック、それに新たに仕入れた大小雑多な版木の山だ。祭具は太鼓、錫杖、幣、法螺貝に代えて、ノミ、槌、砥石、墨硯、水洗、バレン、泥絵具や絵筆だった。そこで志功は水洗を逆さに伏せ、その上に蠟燭をともした。電燈料を滞納してるので電線が切られてるからだ。この妖しく敬虔な雰囲気の裡に、ゴミソ・志功の祈禱がおっ始まる。

「ゴッホのこの大馬鹿者メ！」

この飛び切り陽性の呪文がまっ先に飛んで出る。

「ワだば、絵がきでない。ゴッホになるって東京サ出てきたのだぞ！」

と、胴間声で叫ぶと、志功は掌を合せて前屈み、何事かをゴソゴソと祈りだした。この明白すぎる呪誓は、盲のイタコの陰湿な仏おろし――「あたらむしゃやなァ　いじい　まなごで　上見れば　真くらやみ　下みれば針の山　何んぼくどいでも　しゃべても　今さらもどるわげァねェどもナ」（関野準一郎「恐山寶の河原」）に比較して生気に溢れている。それもそのはず、ゴミソは亡者を降ろさず、必ず生者を呼ぶからだ。志功はいわずと知れたチャを呼んだ。生きのいいチャ。姿勢が兵隊のように堂々としているチャ。色がローマの臥女神より白いチャ……。鰈を焼いてる彼女を、背後から剝身にして透視したまばゆいほど豊艶の肉体を、志功はいつかローマの臥女神のように屈託なく横たえていた。すると、忘れもしない五年前に上京した日、ゆくりなく中村邸で出会った臥女神に、母さだの面影を幻覚したことを思い出した。あれは倒錯したけしからん想念なんかでなかった。あまり当てがわれたことのなかった乳房の欲求不満が、つい爆発した幻覚だったのだ。あのものうげに横たわっていた臥女神と、屈託なく横臥したチャとが、志功の祈りの中で一つのものとなった。女神はいつかチャになっていた。チャはいつか女神に化身していた。かつて感じた乳

房の欲求不満が、志功の肉体の芯にむらむらと燃え上った。彼は掌を八手のように開くと、むっちりとした隆起を、むんずと摑もうとした。ここで志功はハッ！　と陶酔から覚めて。来年の春まではいけない。正式に結婚するまではいけない。尊敬する梅原龍三郎を頭領とする国画会展に版画が入選するまではいけない。彼はあわてて彼女の放恣な裸身に寛衣を着せかけた。よそいきにするためにボンネットをかぶせた。それに秋晴れの日差がきびしいので、パラソルをさせた。さいわい裳裾をまくる澄生流の助平な風は吹いていなかった。彼女は胸を張り眼らんだスカートをゆすりながら、しゃなりしゃなりと歩きだした。ここで志功はほッとした。

「このゴッホの大馬鹿者ッが！」

と、志功は再度自分に喝を入れると、ゴミソから完全にアーチストに戻って絵筆を執った。すかさず、歩いていくチャの姿を写し取るためである。チャの方も志功に気が付いた。彼女はパラソルを閉じると、合図のようにそれを振って挙身微笑になった。志功もニッ……とその微笑に応えた。が、どうしたことか、彼女はパラソルをポィ！　と空へ放り投げた。パラソルなどさしてはおれぬ急務を思い出したからだ。腰を曲げて小刻みに歩を速めだした。彼女は花の真っ盛りの芳紀二十一だ。ゆたり、ゆたりと、のどかに漫歩を打ってなぞおれぬ道理だ。ワもすぐ二十八になる。ゆたり、ゆたりと暢気をきめこもうものなら、すぐさま後進に追い抜かれてしまうのは、目に見えている。現に、古藤も、鷹山も、松木も、それに素人の七尾だって、ワと同列に並んでいる。その後にも、Fや、Sや、Iや、Tや、Oなどもワンサと続くだろう。先進といえば、下山はまだ射程距離にある。が、連続五回帝展入選の

貴女行路　　棟方志功

橋本花子なぞは、遙かに遠い霧の彼方だ。急がねばならぬ。まっしぐらに一本道を進まねばならぬ。この道をおいてワに他の道はないのだ。チャと一緒にその道をいくためには、彼女を捕えておかねばならぬ。可哀そうだが枷をはめよう。しかし、花コで飾った可憐な な頼縁のようなそれだ。志功はその枷の周囲に、自分に言い聞かせるために、韻律に乗った、次の呪文を力強く書き込んだ。

又あとからあとからと
つづく人かづ
むなかた　は　一とすじみち　を行く人
先を行く人　じゃまです

この呪文には、いかなる先進も、先輩も、ワだバやがて追い越すぞ、見ておれ …というゴミソ・志功の不退転の決意が、祈り籠められているのだ。

ちなみに、この下絵は四色刷りの版画となり、「貴女行路」と題され、「裳を引く貴女」「ベツレヘムに聖星を観る」「群蝶」と合せて四点、国画会第五回展に出品展示された。東京上野でこの芸業の第二のスタートが花々しく切られた頃おい、四月九日善知鳥神社の神前で妹背の契を結んだ志功とチヤは、それこそ文字どおり挙身陶酔のただ中にあった。

応召日記 (四)

蓮田善明

十月二十九日

雨。数回命令変更の後、学課。ウソやら典範の理解不十分——否それよりも教育的態度の反感からもあって質問連発。遂に散々の態たらくである。一昨日までの教官を皆恋ひしがる。新教官への通弊は典範を軽視し、又われ〳〵の愛国の真情を察せず、徒らに我々を「心配」するといふ如き、又「ダキマン〳〵」などと軽々に評する如き、又教官を佐官が我々の面前で兎や角やる如き、副官の出しやばりと不遜の如き不統制にある。補充兵を教育するもの（我々）を教育法をこめて教育するものとして大失敗である。

午後遂に雨の中に訓練。濃霧のために状況が計画とちがひたるためこれを応用することのできぬのみならず、不自然な実施と、いざやりかゝるとウソの多い指導で、しかもこちらの労力をはからず、只走らせるを太旨とするのでないかと思はれる。遂に時間やたらに超過して予定の後半不可能になる。指導官に対して我々の目前で、しかも実施中の防備に関し小口が多いので、指導官は熱意を失ひ、後に所見を述べよといわれた時「所見ありません」と答へてゐた。帰舎すると行季はついてゐた。小銃は来らず。これ又皮肉なり。

十月三十日

夜来猛雨。朝の霽間に十三のもの、上の台地に出て体操をする。

午前学課。午後休養。三四の手紙を書く。豪雨頻り。

今田哲夫先生よりの葉書ほか、生徒S、U等の手紙、心にしみるものあり。

今田氏の歌

○運動会正に酣なる中に君応召す歓声あがる

○故郷のつくしの国のつはものら頻りに出動き君召されけり

○不知火つくし野秋の色濃きを思ひ急ぎけむいくさに召されて

○つはものに召されゆきにし君もへば軍馬嘶く築紫野が見ゆ

○久方のみ空はてなく阿蘇が嶺の烟上るに胸をどらさむ

山椿

中野僖子

少女は
山椿の咲き乱れる
繁みのおくで
伸びはやる
自分の内部に
はじめて
ふしぎな
とまどいを覚えた

成長とは
そして　その営みとは
何だったろう

清楚な山椿の花弁に
ひそかにたたみ込まれた
青い季節のくずれに
いつしか
少女は
おのれの内部をゆだねていた

いっとき
立ちすくむ少女の囲りで
風は冷め
花冠は
みずみずしいいのちを含んで
樹を離れてゆく

そのまま
母なる大地に
たおやかに息ずいて
すでに
ひとつの方向の中で

散敷いて
花の生への旅立ちは
今　ようやく
始められようとしているのだった

驚ろいて
今朝の少女は
そっと拾い上げる
両手を隠した

文学社より「国語教室」の原稿依頼昨日来る。へんな気がし、をかしくなり、くすくすひとりで笑ひ、しかも書きたくなつかしく、鉛筆で書いた。芥川の「トロッコ」について書いた。

十月三十一日

雨やみ、午前午後夜間の演習あり。午前には千米以上はなれて接敵、実際はそれだけ一字不明はず、一たん帰舎して昼食早く出来ず遂に昼食をなさずして午後の「攻撃」にかゝり、その講評に「国軍の軍紀の破壊者」の暴言ありたるため、遂に教官の釈明をいふところまで来た。いづれにせよ愉快なことでない。午後三時近く帰舎して昼食、四時より夜間演習「小哨」、副官の指導又無茶で甚だ不謹慎で、開いた口がふさがらず。もう笑ふよりほかない。

今夜は冷えるであらう。空冴えて星明らかなり。

清水より回答来る。みんな必死だ。

栗山の句

君征けり崑崙山南月斜め
月いく夜大唐のはていく山河
秋風と征けりまするをのこは顧みじ

十一月一日

夜、会食。（G少尉は遂に帰隊す。）会食後、上の芝地でT中尉をかこんでのむ。NやOやU、十時すぎまで大飲し、皆やゝうるさがる。Nは一度ねてから起きて吐く。起きて介抱してやる。

伊東先生の想い出

尾城美子

「詩人伊東静雄」を読んで、二十年以上前が昨日の事の様に甦って参りました。それは懐しいと言うよりもっと、生々しい様な想いでした。

昭和二十三年、学制改革で私の通っていた阿倍野女学校が、住吉中学校と合併され、高等学校になるに当って、私達女学生は、少なからず、ショックを受けた事でした。ピカピカに磨きあげた校舎の廊下を、男の子の土足に踏み荒らされるのかと、それは乙女心を充分に傷つける一大事なのでした。そして恐る〳〵迎えた中学生と共に、先生方の交流も沢山ありました。その中でも、伊東先生程、数多い伝説に包まれて、私達女生徒の前へ現はれた先生はありませんでした。アダ名が「乞食」であることはまたたく間に広がりました。その失礼なニックネームが、言葉の響きから受ける感じと違って、敬愛の心をこめた伝統あるものであることは、やがて分りました。先生の締めているネクタイが、只の紐であると云う噂は、その後の観察で、よれ〳〵になって紐の様に見える本物のネクタイである事が判明しました。けれどズボンのベルト代りに腰紐を巻いていらして、その紐が奥様のハナ子さん（奥様の名前がハナ子さんであると云うことも、中学生にとっては、絶好のニュースなのでした）の物であると云う伝説は誰も真偽を正した者がありませんでした。そして先生が幾度も賞を受けられた、優れた詩人であることを知る生徒は、割合に少いのでした。

廊下ですれ違ってお辞儀をしても、心こゝにない風に、気付かず行ってしまわれたり、びっくりする位、にこやかに挨拶を返して下さったり、何となく気まぐれそうに見える先生に、授業を受けるのは、初めおっかなびっくりだったのですが、やがて私はすっかり先生の授業の魅力のトリコになってしまったのでした。先生は、詩についての講義など、ただの一時間もなさらなかったのですが、一つ一つの日本の文字、言葉の持つ奥深さに、目

剣と美—私の岡倉天心

浅野晃

詩人の魂が とらえた感動の書

「アジアは一つ」と言った天心は、近代西洋文明の俗悪に厳しく対峙しながら、東洋の理想を世界に向って叫んだ明治の巨人である。

かつてインドに渡った天心は、タゴールやヴェカーナンダと親しく交ってアジア思想の清冽な渕源をみた。アジアは天心にとって思想の源であり、直観の泉であった。

天心のアジアへの限りない愛と熱情は、永遠に北斗をさす、純潔で、明澄で、不動なる〝剣の精神〟を発見する。天にきらめく剣の鋭利と日本伝統の幽玄の美は、三島由紀夫の〝武と文〟の真にも相通ずるものである。

¥680

東京都港区赤坂九—六—四四

日本教文社

土用二郎

高梨一男

樹々の根元に
朝毎撒く雀の餌を
雉鳩は来て啄む
そして
わがもの顔に庭を散歩する
ひとりなにか頷きつつ
グールルーポーポー　と鳴く
——その青みある褐色の淡彩
午下り
箕面の農婦がかいわり菜を売りに来る

を開いて下さったのでした。たった一行の文章の解説に、一時間を費やしてしまう程、熱を入れたお話があったかと思うと、次の時間にはほんの型通りでそそくさと教室を出てしまわれて、わく〳〵して待っていた私は肩すかしを味わった事もありました。先生がいつも、何か、あらぬ方を見つめていらっしゃる様なもどかしさを感じていたのは、私だけだったのでしょうか。そしてそれは、阿倍野高への転勤が先生のお心をかげらせていたせいだと、本を読んで思い当るのです。男の子の一寸した私語にも、神経を立てられて、チョークをピシッと投げて教室を出て行かれた事もありました。そんな時には、級委員が謝りに行っても決して教室に戻って来ては下さいませんでした。それは、荒々しく降りて行った教壇へ、すぐ何でもない顔をして立つのがお恥かしかったのではなかったかと、自分が大人になって見て分かるのです。

先生が文芸部の顧問になられた時、部員は一歩でも先生に近づけた様でとても嬉しかったのです。休みには遊びに来なさいと云って頂き、お友達と二人長い時間電車に乗って、黒山村のお宅を訪問した事がございます。丁度御在宅だった噂の「ハナ子さん」がごく普通の奥様なのが、何だか不思議に思われたりしたものです。先生は私服をお召しになり、やせた膝を抱いて坐っていられました。私達に、むいた桃をすすめて下さいましたが、遠慮してなか〳〵手を出さないと、早く喰べないといつまでも蠅を追っていなければならないと、怖いお顔をなさいました。長男の夏樹ちゃんがとても御自慢で、夏樹ちゃんの事を話される時、先生の目からあの鋭い光が消えていました。とても絵が好きで上手だと繰返しお話しになりましたが、それがそのまま、美しい詩になっているのを後になって見付けた時は、とても感動致しました。こんなに色が白いんですよ、ほら、と夏樹ちゃんのシャツをめくりあげて、お腹を出して見せて下さるのがとてもおかしかったのです。

翌日、友達と相談してクレヨンと画用紙を買って先生に差し上げました。帰る時先生はそれを私達に高くかかげて見せて、脇にかかえて坂道を下りて行かれました。

先生の御病気が悪くなって入院されてしまった時、私は先生の授業を受けられなくなったのが取り返しのつかない損害の様に感じました。今、大毎におられる中西先生に連れられて、国立病院にお見舞いに伺いましたが、汚れたカーテンで仕切られただけの病室で横になられた先生は、とてもやせておられまし

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

た。病気がうつるのを気になされて、やせた手をひら〳〵として、何度も私達をベッドから遠ざけられました。

病院の帰り、暗くなってから先生のお宅に寄ったのですが、どう云う訳か電燈もついていない真暗な台所で、二人のお子様がうずくまっておられ、奥様はお留守でした。私は、卵焼きを造って夕食の仕度をしてあげたのを覚えています。

今、先生の詩を読む度に、先生に接し得た月日の余りに短かかったことが悔まれてなりません。

近頃、ジャングルの中から二十八年ぶりに現れて、話題になっている元日本兵の写真を見て、何か心にひっかかるものがあったのですが、それが、あの方と先生の面差しがどこか以ているせいだと気がつきました。何かにひたすら耐えている人のまなざしが同じ光を放っている、と考えるのは、独りよがりに過ぎるでしょうか？

編集後記

二月二日。グアムの穴倉から三十一年ぶりに横井庄一伍長か、英霊たちの言葉を伝えに帰ってきた。おめおめと生き残って、存分に生を謳歌している者の立場から、例のように倒錯した批判が賑った。それは三島事件の時も同じだった。今にして分るが、三島氏は昭和年代まで生き残っていた最後の古武士だったし、横井氏はまた、恩給で余生を楽しんでいる将軍たちと違った、生存する唯一人の帝国軍人だった。

十一日。小山正孝氏より詩集「山の奥」を頂戴した。エッチングを入れた、詩集というより画集というにふさわしいほど清潔で豪華な詩集で、久しぶりに眼と心を存分に楽しませてもらった。

十三日。「画仙・棟方志功」の資料の照会に、越後七不思議の一つ、三度栗の名刹孝順寺に書信を送ったところ、住職の渡辺真氏は「詩人伊東静雄」の読者であったのでびっくりさせられた。

十四日。浅野晃氏から「創と美—私の岡倉天心」を頂戴した四十年の歳月、氏の胸に暖められてかえったハヤブサのように、鋭く要を得た紹介書である。特にインドの閑秀詩人プリヤンバダ・デーヴィ・パネルジーとの恋について触れているくだりは面白かった。

本号に伊東静雄の思い出を書いた尾城美子さんは旧姓脇田氏、現在いわき市平に住んでおられる主婦だが、「詩人伊東静雄」が契機となって、寄せられた文章である。

（O）

果樹園 第一九四号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年四月一日発行
編集兼発行者 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 六〇円 送料 三〇円

果樹園 一九四号 昭和四十七年四月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円 送料三〇円

果樹園 一九五号 昭和四十七年五月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円 送料三〇円

果樹園

第195号

画仙・棟方志功(去) 小高根二郎
詩経私鈔(四) 森亮
反射鏡の虚像 宮城賢
風呂屋 福地邦樹
小蛇 高梨一男
花鳥 吉本青司
応召日記(五) 蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(去)

小高根二郎

3 月賦で手に入れた寛次郎

結婚はしたものの、松木のアトリエの二階を間借りしてる志功は、松木や古藤を階下において、自分だけ花嫁チャを引きとるわけにはいかなかった。「そのうちきっとなんとかするはデ、しばらく我慢してケロ」。そう、彼女に言い含めて、沖館の義父勘七にあずかってもらった。が、その昭和五年の秋も、二年前一度手に入れたあの帝展入選の栄光を取り戻すことができなかった。最愛の者と別れ別れであるということで、前にも増した悲痛な時が過ぎた。それに、新婚の喜びを倍加してくれた版画「貴女行路」の評価も、燦やかしい明日を約束してくれるまでには至らなかった。僅かにアルチザン仲間に、新進版画家としての志功の名を、弘報するにとどまった。口さがない彼等の中には、「あれは川上澄生の模倣にすぎん。一体、新進らしい新生命が何処にあるんかね？」なぞと、陰口をたたく者があった。しかし、当の澄生はさすがに大人、「いや、彼には私と一寸似た病気があるんだね……」というべきところを、逆に「棟方さんはあの頃まではまだ貴婦人や貴女等や花や蝶々の病気を持っていたのだろう。私も少しは似かよった病気を持つて居るらしい。」（「版芸術」「星座の花嫁」）と、志功に似ているのは、むしろ自分の方だといわんばかりの弁明をしてくれた。これは明らかに先進としての雅量だった。志功は、いつか呪文のように口についてしまっている「はつなつのかぜ」に対する感謝と共に、川上澄生の謙虚清浄な人柄に格別の好意を抱いたのだった。

たしかに澄生の文明開化趣味は、自ら病気と呼ぶにふさわしい生理に相違ない。志功も「はつなつのかぜ」以来この風邪にかかったが、自分にとってはそれは生理ではなく、病気だったということに、やがて気が付いた。文明開化のハイカラ趣味といえば、澄生の先輩として明治の小林清親がある。（そういえば下山木鉢郎は清親のモチーフを利用して帝展に入選していたっけ……）。清親の代表作「両国の花火祭」「猫と提灯」等は、「欧風絵画の我が国への移拡の最初の光彩であり、動意であり、影と日向であり、立体把握を此処に出発したる貴重なる日本絵画の新潮」（「小林清親」）だった。この清親が文明開化の明治版であるのに対し、澄生はさしずめ大正版といったところだ。いや、まだまだ明治・大正版といった方が適切かもしれん。ワだバ明治・大正版であっていい道理はない。断然、昭和版であらねばなるまい。いや、いや、昭和版よりも新しく、歌麿・写楽・広重・北斎の徳川版よりも古くありたい。いや、いや、いや、新しくも古くもならない、日本版画史そのものでありたい。そして世界版画史に肩を並べるものでありたい。例によって、昂揚

しすぎるだけ昂揚した志功の熱っぽい頭脳に、この時、東洲斎写楽の大首物の化物がニヤリと笑った。サカヤキが伸びた鰕蔵の「五代目団十郎」の雲母摺(きらずり)である。

「写楽の、大首物が、ニヤリと笑い、「ヒイー」と仰天する。わなわなする蜘蛛の様に騒ぎ戦く両手、「化体」な迫りが、のけぞる様に、人達を掴む。抜き差しならない所に連れて行く。仕事の「たゝずまい」を判然させずに、闇から闇へと連れて行く。」

（東洲斎写楽）

この写楽の薄気味わるい手が志功を無体に掴んで、やがて連れていった闇は歌舞伎座の暗い立見席であった。財布の底を叩いてなけなしの五十銭玉を、奴のために奮発させられたのだ。そこで大時代の馬鹿げた処作事や、間延びした台詞を見聞させられた。そして羽左衛門や、佐団次や、菊五郎等の似顔を、スケッチ・ブックに捕えようと懸命になったのだった。かつて徳川の浮世絵師たちが、評判の茶屋女や、オイランや、役者の似顔・似姿をブロマイドにして売りひさいだ故事からの発想だった。これもみんな、メフィスト・写楽の誘惑のせいだ。遠く恋しいチャさんのためだ。一日も早く東京サ呼びたい。呼ぶ場所と時とを設営したい。写楽のようにワナワナとおののく手で、心いくまで抱きしめたい、又抱きしめられたい。志功は写し取った似顔を、売店のブロマイドに突き合わせてその相似性を検分すると、それを葉書大に彫り、四色判に刷って、交渉をして売店から売り出した。折から「勧進帳」が公演されていた。中車の「弁慶」、雁次郎の「義経」、吉衛門の「富樫」が一枚五銭の売値が付けられてブロマイドと一緒に売店で飾られた。志功の最も古い後援者の一人である小堀保三郎（元関西輸送機社長）はその一組を購ったが、あまりはかばかしく捌けなかったらしく、志功は帰りの電車賃にこと缺くこともあった。大きな地声を生かしたあの活弁志願のように、この写楽志願も、なるほど苦肉の策ではあったが、徒労にひとしい虚妄の努力を出でなかった。又、その頃エドモンド・ロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」を、「白野弁十郎」ともじって、歌舞伎役者による新劇も公演された。志功は「勧進帳」ブロマイドに続いて、今度は目新しいその舞台姿を、四色刷り数枚一組の版画に仕立てた。「貴女行路」と全く同じ装飾的な手法だった。

一見、全く徒労に見えたこの歌舞伎座通いも、どこか見えない時空で、開運とかかわりを持つ契機になった。たまたま歌舞伎座帰りに立ち寄った日本橋の高島屋においてだった。その美術部で、ちょうど陶匠河井寛次郎の第七回個展が開催されていた。志功は、この島根県は安来生れの陶匠については、なにら識るところがなかったので、ただ会場を漠然と一巡しただけだった。鉄砂、辰砂、呉須、黒釉、柿釉(うわぐすり)の茶碗や、湯呑や、扁壺が、適当な間幅をおいて典雅に配列されていた。その一つ一つの物象は、それこそ取るにも足らぬほど小っぽけなものであるのに、狭からぬ会場を鎮めている静謐が、空間を領していることに気が付いた。志功はおや？ と思った。これはなにのかなと反省した。公募展の会場で、気に入ったタブローの前にたたずんだ感動とも違う、何かだった。それは、聞こえるはずもない地下水の流れを、じっ……と聞かされているような沈静な想いだった。先ほどらい、暗く不安定な立見席で、役者の仕種や動きを追求しているようで、実は逆に追っかけられどおしであったあわただしさに引きくらべて、この百貨店のザワザワとした雰囲気にかかわらず、妙に静謐が感応されたのかもしれなかった。そうではなかった。数ある茶碗と湯呑の中の一つが、でン！ と高台を志功の心の底に据えたからだった。彼はその一点の前に歩を戻した。「鉄砂花文湯呑」と

題され、売価は十二円とある。あの無名ことの大雅の小軸よりはきわめて安く、印材の琅玕よりはかなり高い。一枚五銭で役者の似顔版画を売ってる環境では、相当な値段である。彼は湯呑を左掌に載せていた。軽からず重からず、ほどよい重量感が、掌のやわい皮膚を透して血脈に流れ、やがて彼の心を宥めるようにくるみこんだ。なんという安堵感であろう。丸かと思った外形は意外にも鈍い六角で、その稜角にシンネリ志功の指がからみついた。これまたなんという摑みやすさだろう。右掌の腹を湯呑の胴に添えて、現実に茶を啜るようにあおってみた。無であるから、かえって無限の充溢感があふれた。描くともなく蘭花を浮かせた黒味勝ちの褐色の釉は、粗野に流れぬ勇渾さで外側を刷いていた。その勇渾さと裏腹なまどろむような乳色で、内部はうるみ夢みていた。乳色よりやや堅いジンク・ホワイトだ。志功はその浄白に、イエロー・グリーンの液体を注いでいた。瞬間、素晴らしい調和が匂い立った。その幻想の液体を一っ気にあおった。後は一層艶やかな浄白——ジンク・ホワイトに戻った。あゝあの鰈の色ではないか……。弘前のチャの部屋で、愛の告白の手伝いをした、あの浄白……。当然チャの抜けるように白い豊艶な顔が浮かび上った。しかし、その顔は、泣きも笑いもしなかった。眉根一つ動かさぬ真剣な表情だった。そしてまじろぎもせぬ眼で、彼女は問いを投げかけてきた。「志功さん。あなたは待ってケロ、待ってケロとばかりいうけど、もう私は悪阻もすんだのョ」といった。すでに手紙で知らせてきた通りだった。看護婦の彼女の自己診断は誤りっこない。志功は狼狽した。あわてて湯呑を覆して糸切を鑑賞した。母胎である土から、子であるこの作品を切り離した糸切は、いわば臍だ。志功は指先で糸切を撫でつつ呟いていた。「堪忍してケレ。今しばらく待ってケレ。志功、命をかけても責任だバ持つ。きっと引き取る。引き取ってみせる」。湯呑を掌にしたまま問答を繰り返えしている志功をいぶかったのか、係員が巡回してきた。

「あのう……、この湯呑コ譲ってください。」

と、志功は係員に切りだしていた。瞬間、係員は稲妻のような早さで、志功の上から下までを検分した。洗いざらしの久留米絣。疲れた小倉袴。煎餅のようにちびた日和下駄。

「毎度有難うございます。お値段は十二円でございますが……」

と、言葉はいんぎんを極めていた。

詩経私鈔 (四)

森　亮

野つばらの豆

ここは誰の縄張りでもない。
己(おれ)は勝手に生えて来たのだ。
道ゆく人よ、村人よ、
好きなだけ摘(つ)んでけ。

一九六番（小雅、小宛）・四言の三十六句（一章が六句の六章より成る）のうちの二句、中原有菽・庶民采之を自由訳した。この詩全体は周の幽王（一説には厲王）をこれに仕へた大夫がそしつた言葉とする解釈が古くからある。ここで扱つた二句もその方向で比喩として「中原に自生する豆は誰の物でもない。取ることのできる人が取ればよい。王位も或る一家系の独占物でなく、それに値する徳有る者に与へられる」と解釈されてきた。

「そこで一つ相談ですが、その十二円を、二円ずつ六ヵ月、月賦というわけにはいきませんか？」

志功としてはキリキリの線を出していた。毎月二円としても容易なことではない。しかし、幸いなことに、中島重太郎の青果社で摺師に刷らした「星座の花嫁」を一円二十銭で売り出す企画が進んでいる。あれが毎月十余部でも確実に売れれば、まんざら不可能な線でもない。なんとかなる。いや、なんとかせずばなるまい。この湯呑は只物ではない。チャと、それから生まれてくる子が、因縁されているのだ。なにがなんでも我物にせねばならない。

月賦購入という意外な申し出に、係員はしばらく唖然とさせられた。例のない難題だからだ。そこを志功は

「どうです？　なんとか考えてくださいよ。」

と、喰い下った。ここで係員は我に返ったように、

「せっかくでございますが、当店は月賦販売はあつかっておりません。」

と、拒絶を表明すると、それを償うような丁重な一礼をして、くるりと踵を返した。

「そこをなんとか……」

と、執念の鬼になって志功は後を追った。逸速く事務室に逃げ込んだ係員は、責任者に耳打ちしたのだろう、少し年配の男が、年配相応の品格と威厳とで現れた。彼はわざととぼけ顔で、志功の用向きと希望を改めて聞き直すと、うン、うンと、いかにも熟慮するあんばいにうなずいて見せたが、結局

「月賦という制度は、遺憾ながら当店のしきたりにはございませんので……」

と、先と同じ拒絶となった。

志功はもう完全な鬼になっていた。顔は紅潮し額から汗が流れていた。この「鉄砂花文湯呑」はワの小宇宙だ。親子三人を収容する家なのだ。この器がなくては雨露を凌ぐことはできない。もしこの器がワの所有に帰さねば、器はまたその空虚さに堪えずに、たちまち自ら砕け飛び散るだろう。なんとしても手に入れねばならない。

「あの湯呑は私のところに来たがっているのですよ。私はまた来てもらいたいと思ってるのです。つまり、相思相愛の仲なんですよ。どうぞ一緒にさせてください。心中させないでください。月賦で譲ってください。頼みます。これこのとおり……」

と、志功は年配男に掌を合せた。その眼には炎々と妄執の焔が燃えていた。この焔を見てとった男は、こ奴は気狂だ、陶器狂だ……と直覚して、トウが立ったみすぼらしいこの画学生から逃れようと焦った。が、適当な言訳が見当らなかった。

「まことに申訳ございません。当店のしきたりにない、月賦の取扱いはいたしかねます。」

と、同じ当店のしきたりを繰返えして拒絶した。もはや志功は不動のように全身焔にして叫んでいた。

「当店のしきたり、しきたりも結構だが、展覧会が開かれてるからには、河井という作者も来ておられましょう。ひとつその方に、月賦のしきたりが通るか、通らないか聞いてもらいましょう。」

開き直った志功の追求に、男ははた……と当惑した。が、美術部長である古狸の彼は、とっさに

「先生は唯今お出かけでございます。」

と、かわした。そのかわしたところに、事務室から先ほどの係の者が跳んできて、何かを耳打ちした。

「しばらく……」

と、男は志功に言い残して、係と一緒に事務室にとって戻した。

事務室では河井寛次郎が牛のような目をし

ばたたいて、目頭から溢れでる泪を掌で拭っていた。拭いそこねた泪はポタポタ床に滴った。口を歪めて、吹き出ようとする嗚咽を押えた彼は、

「赤目さん。あの画学生の、言分を、聞いてやって、ください。」

とだけ、やっといった。寛次郎は志功の胴間声に驚ろいて、何事が起ったのかとカーテンの陰から覗いて、一部始終を見聞きしてしまったのである。鐘渓窯（京都五条坂の河井の窯）がそれほど惚れられたらそれこそ土師部冥利につきる。感激屋で泣上戸の彼は、うれしさで、つい、泣いてしまったのだ。事務室の外で成否を不安に待っていた志功は、赤目美術部長から前例のない月賦のとりなしを聞いて、小踊りしながら引揚げたことはもちろんである。

反射鏡の虚像

宮城　賢

たんに鏡といえばすむものを
このんで技術屋さんたちは
わざわざ反射鏡という
そのほうが科学的なのだろうか？
なに反射鏡はトートロジイの悪例だ
（光を反射しない鏡なんてない）
たぶん顕微鏡や望遠鏡や眼鏡や手鏡
などと区別するためらしい
ところでその鏡だが
あれはじつに恐ろしい魔物なのだ
わたしの知っている病人は
毎日々々二時間も三時間も
よくあれの前に端座して視入っていた
なにを視ているのです？　と問うと
わたくしの眼を視ているのです、という
その人はじぶんの心をそこに探していた！
〈鏡〉といえば
映ったじぶんの外部のむこうにどうしても
わたしたちはじぶんの内部も視てしまう
〈反射鏡〉といえば
外部も内部もいっしょくたに
どこかへ光と共に運ばれてしまう
から安心なのだ
だから技術屋さんたちは
〈鏡〉よりも〈反射鏡〉を愛用するのだろう
技術にとって内部は禁物なのだ
わたしたちのテクノロジイは
専門用語としても
鏡を復権させねばならぬ！

十二、予期せぬ収穫

1　郷土からの脱皮

昭和六年は春のしょっぱなの白日会展で白日賞を受け、幸先のよいスタートを切った。六十号の「猫と少女」だった。青森の魚問屋高甚の三女美代子が、セイラー服で横向きに坐り、膝に虎猫を抱いてるポーズを、思い出によって描いたものだった。今までのモデルだった野間しげ子は、もう思い出の中で背丈が伸びなかったからだ。

四月には、既述したように、神田鈴蘭通の文房堂ギャラリーで、志功は晴れの第一回個人展を開催した。島成夫所蔵の帝展入選作「雑園」を中心に、大小とりまぜて賑やかに油彩が陳列された。大学生になったばかりの筆者はお祝いに会場を訪れた。志功は青森時代と全く同じ久留米絣・小倉袴姿で、入口の小机に寄ってニコニコの上機嫌で迎えてくれた。机上には摺師のすった「星座の花嫁」と「白野辨十郎」が数部ずつ積んであった。筆者は志功の版画を年賀状以来初めて見た。（年賀状は竹に雉の木版だった）。黄と赤と青の

原色で刷られていた。売値はいずれも一円ないしで、両方を検分して、動きのある「白野辨十郎」の方を一部購った。版画は壁面に陳列されていぬとこから推して、もっぱら米塩の資を得る方便のように見受けられた。或いは、志功が敢て版画を壁面に掲げなかったのも、油彩と比較した場合、タブローとして比重がまだ軽きに失すると、自覚したせいかもしれなかった。

事実、志功の版画がアルチザン達に認められたのは、翌五月の国画会展からであった。志功は版画「禽虫二題」「十和田奥入瀬」を出品した。後者の「十和田奥入瀬」に、版画部の頭領・平塚運一は、次のように目覚ましい進境を認めている。

「私は棟方君の昭和六年の国展に奥入瀬を出されたあれからの作を特に好むし、又、あの時が棟方君の一大転期であつたと思う。棟方君は一時も同じ処にじつとしていないで、ぐん〳〵突き進む性質だから、今後どう進むか楽しみであるが、最初、好んで星座などを作つた一面の棟方君は、恰かもあのモーニング姿の棟方君であり、次期の、即ち近時の作品は紺ガスリ姿の棟方君であると思う。どちらも本統の棟方君であるには違いないが、私は紺ガスリの方を好む。」

（「版芸術」『棟方君』）

又、平塚と共に版画界の元老の一人である恩地孝四郎も、志功が創りだした新しい息吹と美を、次のように率直に認めている。

「わが棟方君は、その瞬乱たる美花のなかにやはり燦然と光る明かな存在である。それをまえには星を遠望し、それを身辺浪漫に賞して悠遊するの境であつた。そこには、過ぎた日のコブラン模様があつた。いまは、それは此作者にとつて既に脱ぎすてた古靴である。…中略…生気の溢れてる作者は、その固い古靴をとうに捨てた。そして示したのが、新らしい魂を以て見据えた物象である。海を見、渓流を見、空を見、そこに充満しているのは輝やかしい電波である。それはバルブを通ずることになつて甚だ微妙な詩を綴る。これは従来画の世界に余り見られなかつた技法である。又それは版技法によつて甚だ有功に現われる。君は、一つのすばらしい版の機能を創見摘出してくれた一人である。あのぼきぼきした味のない線の集成が持つ、味い深い世界、それが語る自然の玄妙について、私は常に作者志功棟方君に感謝するものである。」

（同前、「志功、棟方氏の界」）

十和田・奥入瀬　　棟方志功

風呂屋

福地邦樹

洗面器をさげて風呂屋にゆく
石鹸箱には秋風が吹き
裸になると　ひとは
いくらか優しいけものになる
子供はひろい洗い場で
走りまわり逃げまわり
お湯につかっていると
私はひとを許すことができる
お湯から出ると
私はいつも酒が飲みたくなる

版画で、このように新生面を拓きだした志功は、油彩でも新展開を期したからであろう。帝展出品作の制作のためには、決って帰青していた例年の慣習を破って、八月に初めて他国—房総半島に、半月にわたって写生旅行を敢行したのだった。犬吠崎に遊びにいっていた二人の詩人からの、ぜひ制作に来い……という、誘惑に乗ったのだ。ところが、六月には、チャは沖館の実家で長女けようを分娩していた。尋常なれば、その友からの誘惑を退け、例年のように制作を兼ねて帰青し、独りけなげに分娩の大役を果したチャをねぎらい、併せて生れでたけようにに祝福を贈るべきだった。よほど二人の誘惑の言葉が甘かったか、さもなくば、だいそれた父という分限を思って、帰郷が恐くなったのだ。或いは、そのどちらの動機も混交した、複雑な心緒だったかもしれない。とにかく志功は犬吠崎に来てしまったのだ。君が浜の豪壮な水繁吹（しぶき）を二人の友と浴びながら、昔そこで溺死した若い詩人・三富朽葉と今井白楊を思い出していた。郷党の先輩・福士幸次郎が、「為めに非常なる打撃を感ず」と、その若死を哀惜した言葉を覚えていたからだ。

「君たちが朽葉と白楊の二の舞をやるといかんと思って、僕はやってきたんだぞ。」

そう、志功は水繁吹を浴びて嘯いていた。宮城出身のこの詩人たちに語りかけたようなふりをして、実は故郷に背反し、チャとけようにに不義理をしてしまった自分の弁解をしていたのだ。

「どうだい、棟方君。クールベの海よりも豪放な海だろう。一発、傑作を出せよ。」

と、一人の友がいった。

「見給え。あの灯台の可憐さを……。まるで男の胸に抱かれた白鳩みたいじゃないか？」

と、も一人の友が呟いた。まこと、白繁吹をあげる十余丁の砂浜の磯松越えに眺めやられる、明治二十七年竣工の灯台は、まさに漁夫の腕のような岬に抱かれた白鳩だった。さすが詩人らしい適確な表現だと、志功は感心したが、これではあんまり絵でありすぎると思った。それにしても何という豪勢な景観だろう。

「岩があってもそこ等の物と違っている。波があってもそこ等の物と違っている。実に海の典型だ。」

（「眺鏡余韻」）

と、志功はいつか曽遊の龍飛崎と比較していた。龍飛がブルッシャン・ブルーなら、犬吠はウルトラマリンだ。前者が悲壮深遠な藍なら、後者は豪壮悠遠な群青だ。そういえば、

龍飛と同じく義経伝説があることも面白かった。

「怒かれば何物も寄せ近づけない荒海にも、優しい女で話が出発する伝説がある。よく飛び、よく歩るき廻った例の源義経が主人公の、数多くの物語だ。

私の郷里、青森の津軽半島の突端龍飛崎に残されている此の武人の伝説と同じい物だが、此の崎では強い弁慶のかわりに、女の話を中心にしているのも、港町を附近に持つ此処では無理もない事とうなづかれる。

此の新開地、それに太平洋の突鼻に義経と女を繁いだ此の村は、矢張り食には困らない、昔から自分の田畑で食っている村だ。

体が百もあった様子の義経が架空に走って、それからそれへと、八艘飛びは愚か八百艘も飛ぶ。」　（同前）

この犬吠崎で大持ての義経と違い、龍飛崎の彼は、北海道へ亡命寸前の尾羽打ち枯らした敗残の将だった。彼は龍飛近くの三厩（みんまや）まで落ち延びてくると、龍馬山観音に必死の祈りを籠めた。すると忽然と白髪の老爺が現れ三匹の龍馬を賜ったというのだ。義経と家来はそれに跨り、無事に蝦夷の国へ亡命したという、判官ビイキの伝説なのだ。ところで面白いのは、この伝説に信憑性を与えるため、円空が一役買っている事実だ。彼は寛文年間に遊行してくると、来迎観音を鉞で彫つて、夢想で授った白銀の観音像をその胎内におさめた。それが今の義経（ぎけい）寺の起源だった。

三年前の龍飛行は屯（かねなか）の堅チャの掛取りに随行した旅だった。あれは義経が鎧を捨てた鎧岩。向うは龍馬の腹帯を締め直した帯島…。そう、堅チャは自転車を漕ぎながら、親切な解説を忘れなかった。思へばあの旅は、帝展に初入選をして一人前の画家になった志功への、伯母よねの餞けだった。又、志功からすれば、もう伯母にも、次兄の賢三にも、これ以上は援助を乞うてはならぬと、一本立の門出を自分に言い聞かす、覚悟の旅であったのだ。そういえば、帰青の慣行を破って敢行した今度の房総の旅も、長女けようを授った父としての覚悟を、改めて思い知るための旅なのではあるまいか？　なにがなんでも、扶養してくれてる義父勘七、それにチャ、けようにに対する不義理を償って余りある傑作を、でかさねばなるまい。志功が立ち向っている岩礁に身を投げる波濤……。丈余に上る繁吹に、けようを抱いてるチャの面影が浮んでは、消えた。堪忍してケレ。絵馬鹿のお父（と）サを許してケレ。破砕した波濤は億万の飛沫になって飛び散りながら、千畳の岩場を蔽い、稜角

日本近代文学大系 18

土井晩翠　薄田泣菫　蒲原有明集

解説・野田宇太郎　栗津則雄
注釈・久保忠夫　松村緑　石丸久

かつて文学に志すと否とを問わず、あらゆる青年たちのこころを魅了し、ひたむきなその愛誦に任されたのは、土井晩翠の「星落秋風五丈原」であり、薄田泣菫の「ああ大和にしあらましかば」であり、蒲原有明の「智慧の相者は我を見て」でありました。

詩歌にとって幸福な時代であった興隆期日本の若い琴線をゆさぶりつづけてきた三詩人の絶唱は、現代のわたくしたちの精神構造のなかに決して断絶してしまったものとは思えません。若くして熱狂的に世に迎えられ、やがて数年ののち、いちように主な詩作の筆を折り、残年のなかに入ってしまった「詩人」の宿命と引きかえに、これら詩篇の永生が果たされたのでありましょう。（R）

¥1,600

角川書店

小蛇

高梨一男

犬を連れて戻ったするら
するするすると
ストケシャの花かげへ
逃げた

そいつはあどけない貌をしていた

春愁

ミルクにたっぷり浸した
苺のつぶつぶ
そのひとつひとつを
スプーンでつぶし
——食べて居た　昔の妻
——食べて居る　今の妻

と傾斜に従って流れ、条溝に沿って崖からたぎり落ちた。その時、まぎれもなく志功は嘶く声を聞いた。

「志功さん。あなたが青森サ帰ってこなぐとも、けようだバ、スクスク元気に育っていすヂャ。愛（め）ごいけようのため、今度は帝展サ、ケッパッてください。」

志功は岩礁に叫喚あげて挑む裂帛の波濤をカンバスに移した。クルーベのうねる波濤の向うを張ったのだ。億万年をもってしても破砕できぬ傲然とした岩場もものした。又、牡蠣のように岩場続きの丘陵に取り付いた部落も幾枚か描いた。三十号の「犬吠崎の伏屋」以下十数枚のタブローが仕上った。特に「犬吠崎の伏屋」は自信作だった。

「もうそろそろ十用波が向ってくる頃だ。それを描いてゆかッせい。」

と、宿の主人がしきりに引き留めるのを、振り切るようにして志功は東京へ引揚げた。たまたま夕食の膳に添えられた塩焼きの鰈を食った、その夜の夢に、泣き濡れた銀杏返しのチャが現れたからだ。

「あれほどケッパッても、またまた落選しったか？　チャもきようも、もう一年、泣ぐ泣ぐ青森で辛棒せねばマイネベか？」

東京に帰った志功は、念のためにも、う一枚出品作をものした。三十号の「荘園」である。画面の中心に好きな龍舌蘭を据え、背景に円柱のドームを佇ませた図柄だった。赤、黄、焦茶を主調とした空想画だった。ところが、帝展に「犬吠崎の伏屋」「荘園」の二点を搬入したところ、後者の方が三年振りに入選したのだった。今度も写生より空想の方が勝ったのである。そういえば例の橋本花子なぞは、連続七回入選の栄誉を誇っていた。しかし、志功にとっては、「荘園」の入選より重要だったことは、入選作が初めて郷土青森の臍の緒を切ったことである。つまり、例年の帰郷の慣行を破って敢行した他国の旅が象徴するように、志功は故里を離れて、より広遠な境涯へ発足する。契機と足掛りを摑んだのだった。

2　恩人島丈夫の父みつかる

今度も志功は、入選作「荘園」を島家に買上げてもらう心づもりでいた。ところが島家に突発的な出来事が起って、それどころでなくなった。と、いうのは、丈夫が悲願として探していた父六郎の行方が知れたからである。彼はすでに明治三十五年の晩秋、新潟県北蒲原郡保田村の一向宗・孝順寺に、行倒人として葬られていたのだった。その情報は母方の

樋山の親戚の婆さんから聞き込んだ事実としてもたらされた。保田村といえば、故里の西蒲原郡味方村から、信濃川、阿賀野川を越えた僅か東方二十キロの地点である。報道機関が発達してなかった明治の昔とはいえ、三十年間も判明しなかった方が不思議である。

ともあれ、丈夫にしたら永年の悲願成就で、すぐにも孝順寺に馳せつけたかった。ところが商用の段取りで、一二日遅れざるをえなかった。とりあえずヤイを先行させることになった。が、ことがことだけに、樋山への連絡や、法事など、予想される雑事を考えると、女身一つでは心細かった。こんな緊急の時、いつも応援に頼むのは志功だった。電報一つで、万難を排して馳せつけてくれた。電車賃のない時には歩いてきた。益荒男派出夫のように甲斐甲斐しかった。

二三年前までは、息子の勉をネンネコにくるむと、子守役まで引受けてくれた。奴さんのように着膨れた志功は、風に煽られた凧のように肩をゆさぶりながら、「証城寺の狸ばやし」を勇ましく唱った。＜証　証　証城寺＞＜証城寺の庭は＞＜つ　つ　月夜だ＞＜みんな出て　こいこいこい＞。浮かれたこの拍子で、志功はヒョイ！　と、勉の口から棒付飴を抜き取った。ヤイが家を空けしなに含ませていった飴である。甘酸い馬糞のにおいがした善知鳥神社のカラミ飴……。その思い出で、志功は抜き取った飴を口に含むと、ぷるぷるぷるンと両掌で棒をしごいた。口腔の内に拡散する甘い郷愁……。勉が音を上げそうになると、素早く小さな口へ返却した。が、＜負けるな負けるな＞＜和尚さんに負けるな＞で、再び勉の口から取り戻すと、郷愁の甘さに眼を細めた。こんな繰り返えしで、＜ポンポコポンのポン＞の狸ばやしを四五回唱った頃には、結構、飴は棒だけになっているのだった。（勉は志功とツバキを分ち合った因縁からか、後年父丈夫と同じ薬剤師となったが、いつか版画の技術も習得し、現在志功が主宰する日本板画院の会員である）。閑話休題。

「キユウヨウ　オイデコウ　シマ」

という電報が舞い込んで、志功は本郷四丁目に駆けつけた。「荘園」売込みに再たとないチャンスと思った。が、来てみると、ヤイと勉について、すぐ新潟に発ってほしい……という丈夫の要請だった。宿願かなった彼の満面から、笑みがこぼれていた。五つで父は蒸発、それを追うように母は病死、その後十六歳まで、西蒲原郡で村長をしていた母の実家樋山平七方で育った。十七歳で上京、橋本内科の書生に入り、やがて薬剤師の免許をとり、薬局を勧めあげて売薬商として自立した事情は、志功は耳にタコが出るほど聞いていた。

「島さん。よがったネス……」

と、いきなり彼の掌を鷲掴みにすると、三十年ぶりに墓となってる父に対面する丈夫の喜びと感激に想当して、志功は思わず握り合った拳の上に泪をこぼした。二年前、帝展入選で四年ぶりに帰青、墓になった幸吉に対面した感激を生々しく想起したからだ。

「棟方さん。ありがとう。」

島も握り合った拳の上から泪を重ねて、はからずも、泪と泪で堅めた契りとなった。志功は、ともかく丈夫とは孝順寺で落ち合う手筈を決めて、着のみ着のままではあったが、その場から島母子に随行した。八月の房総半島の旅に次いで、二度目の他国――越後の旅を体験することになったのである。

孝順寺といえば越後七不思議の一つ、三度栗の伝説で知られた親鸞ゆかりの名刹である。信鸞は実朝の将軍時代に専修念仏を禁じられて越後に流された。たまたま彼が保田の郷に杖をとめて布教に努めていた時のことである。その地には、二十数年前の宇治の戦で討死をした、源三位頼政の家臣渡辺競（きおう）の妻と

花鳥

吉本青司

サクラ

精霊に目がひょいとひかされて
山頂の桜樹に気づく

早ざきのヤマザクラが淡紅色の葉なみに伴
　奏されて
ひかりの交響をかなでている

陽が西に傾いてるせいか　樹下にたつと
花びらが白く透いてみえる

＜サクラの時はもう過ぎたと思っていたの
　でこれはたしかにおどろきだ＞

狂気のように風のなかを歩き　林をくぐって
桜樹の群生にこころうばわれる

ついに大小六本の桜樹を発見し
こころはいよいよ有頂天になる

と　七本めはくずれた墓の上に
去年の嵐に吹きたおされたまま　それが
けんめいに花を咲かせている

ホケジロ

けさ　ホケジロをきいた
母たちはウグイスのことを　ホケジロ
と呼んでいた
ウグイスの鳴き声を
＜ホー　ホケジロ＞ときいたからだ

インドには
＜ピ　カハン　ピ　カハン＞と鳴く鳥がいる
　という
＜わたしの愛するひとはどこにいる＞
という意味だそうだ

きっと　ホケジロも
愛するものの名を呼んでいるのにちがいない
＜ホー　ホケジロ＞
＜ホー　ホケジロ＞

トサミズキ

淡黄色の
まぶしい日曜日の午前
円行寺あたりに自生しているというので
ほしがっていた

トサミズキ
日曜市にもめったに出たことのない
幻想の花

加賀野井の土に植えたら
まっさきに日ざしが歓迎してくれた
それから　山頂から
ヤマザクラが
淡い花たちのことばでかたりかけ
典雅に　つりがね形の花々が
それにこたえた

トサミズキ憂愁を花の咲く木とし

一子が世を忙びて住んでいた。渡辺の老妻は、夫の忌日に当って、信鶯を招いて後生を弔ってもらった。貧しいので布施を包むことができない。やむなく焼栗を奉ったところ、親鶯はそれをこころよく受納して、上野ガ原の新山に埋めた。「もしわが唱導する専修念仏にして後日栄えるものなら、焼栗よ、年に三度花を開いて実をつけてみよ」と祈った。すると不思議なことに、焼栗は根を張り、芽を吹いて、やがて越後七不思議の一つ三度栗として繁茂した。そこで渡辺の遺子は親鶯に弟子入りして専念坊と名付けられ、孝順寺という寺号もいただいた。このゆかりは御詠歌に「一年に三度御法を通わせて心保田に残る焼栗」と唱われた。

この三度栗の伝説は、上野から新潟に向う車中で、志功はヤイに聞かされた。ヤイの里の加茂は、保田から二十キロ西南に距っているだけで、保田近くの小島の八つ房梅や、珠数掛桜などの伝説と共に、故里の自慢話の一つとして知ってたからだ。高崎・水上・長岡・新津を過ぎて水原で下車、八キロの道のりをバスで保田へ向った。月余には雪をいただく五頭連峰を背後に、荒涼とした刈り田の、タモの稲架木が、並木のようにならんで、遠来をねぎらってくれた。孝順寺はすぐ分った。名刹に似合わぬ荒れ寺だった。ヤイの声が小さいので、志功が代って胴間声で来訪を告げると、その声にも負けぬ大音声で「おおう！」と応えると庫裡から中年の大男が現れた。起き抜けらしく、綻びたつんつるてんの寝巻を着た彼は、坊主というより柔道の選手のように見えた。

「おらとこ住職だが、何んだばり？」

といった。専念坊の後裔の住職渡辺孝秀だった。まだ梵妻もなく、評判の寝坊助だった。ヤイが来訪の理由を細々と告げると、住職は腕組みをして、「うむ」「うむ」と唸るように、大きくうなずいてみせた。彼は三十年間父を探し求めた島丈夫とは対蹠的に、四十年以上にわたって父秀丸から実子として認知されずに、孝順寺の外を彷徨させられたからだ。と、いうのは、母は妊娠中に離縁となり、その後に孝秀を生んだからである。母はその後孝秀を里子に出すと、東本願寺の学僧・新潟市念仏寺の斎藤唯信博士に嫁いだ。そして孝秀を実子と認知する訴訟を起したが、先夫秀丸は頑として受けつけなかった。裁判官も孝秀の首実検をして、「まるで胡桃を二つに割ったようだ」と秀丸を説得したが、一度拙僧の口から出た言葉は訂正できぬと、頑と言い張って譲らなかった。結局、孝秀は在家の里子や、知り合いの寺にあずけられたりして大学を卒業、その後は浜口雄幸の書生をしたり、院外団の壮士の群に身を投じたりしたが、四年前に秀丸が死んで、やっと孝順寺に迎えられただかりだった。（彼は頑固一徹だった父に剛直院釈秀丸という法名を贈った）。

ヤイの話を聞き終った住職は、自分の悲痛な体験を回顧して「うーむ」と感動した。

「それはそれはご殊勝なこと……。ではしばらくお待ちください。仏へ案内してしんぜましょう。」

と、言葉も改まった。彼は内に入ると着換えをし、袈裟がけの正装で現れ、鍬を志功に託すと先導した。寺の裏はすぐ墓地だった。

「墳墓」とだけ銘した戒名のない古い墓標もあった。その向う用水が流れ、傍に大きな榛の木があった。その下は、推し詰められた不定形な場所だった。そこが無縁墓地らしかった。立枯れた雑草のむくろが起伏してるだけで、墓石らしい石一つなかった。一ヵ所かすかな盛土が認められた。住職はねんごろに念仏を供えてから、志功が携えた鍬をとって、用心深くその盛土を起こした。土壌と貝殻まじりの砂礫の中から、やがて素焼の骨壺が肩を出した。住職は壺を破砕せぬよう念入りに掘り起こし、それからは志功が壺を抜き取ったが、湿気を含んだそれはヒビ破れ、内には骨片らしいものはなく、ただ土壌が充填してるだけだった。三十年の雨露ですでに土に帰っていたのだ。

翌日駆けつけた島は土に帰っている父六郎と悲願の対面をした。そして故里味方村の広念寺の先祖の墓地に無事改葬をしたのだった。

この思いがけなかった越後の旅は、志功に全く予期もしなかった収穫をもたらした。ヤイの父親の田下三作から、

「せっかくおいでなった越後だすケ、その景色をしっかり描いていきなせャ……」

と、逗留をすすめられたからだ。田下家は棉糸や砂糖を商っていた。志功はその庭をデッサンで描いた。さらに三作の案内で、彼の妻の実家、亀田で味噌醤油の醸造業を営んでいる長谷川家に赴いた。その庭の美しいことは、落選作「合浦池畔」の買上げ以来、志功が郷土自慢に合浦の話を出せば、折返し返礼のように、島夫婦から聞かされたものだった。信濃・阿賀野の両川に包囲された、のびやかで豊饒な下越の自然を、そのまま邸内に取り込んだ野趣があった。小川は野を流れていたままの姿で屈曲し、松や喬木の根方を潤していた。野性の流れの跳染を鎮めるために、要所要所に岩が間配られ、それとなく燈籠が配置されていた。流れが淀んで池をなしている畔の石組には、主座をなす燈篭が坐っていたが、その傍にそっ……と河童でも佇ませたくなるような鄙びた風韻があった。志功はその内園と裏庭ともデッサンで写した。そのデッサンをもとに「亀田、長谷川邸の内園」「亀田、長谷川邸の裏庭」「越後加茂にての庭」「青森・合浦公園」四点を翌昭和七年春の国画会に出品し、「長谷川邸の裏庭」によって国画会奨励賞を獲得した。志功は故郷を離れたモチーフによって、ようやく新進気鋭の版画家としての地歩を占めたのである。その喜びは絵ハガキ（日本美術院第十六回展出品「故郷の人達」溝上遊亀）で、次のように長谷川家の主人松郎に伝えられている。

*

昭和七年五月九日

〔東京市外野方町上沼袋二六三より、新潟県亀田町長谷川松郎宛〕

その后失礼していました。亀田あたりの景色きれいになっている事でしょう。お子さんも元気であられる事でしょう。

今、上野公園の府美術館で開催の第七回国展（日本五大展の一つ）に昨年おじゃまいたした時にあなたのお庭を描いたものを版画にしたのが二点、加茂で描いたものが一点、その他一点、陳列されています。題は左の様です。近日目録をお送附して、お目にかけます。評判がよくあつています。

・「亀田、長谷川邸の庭」
・「亀田、長谷川邸の内園」
・「越後、加茂にての庭」
・「合浦、青森の公園」

の四点。

愛のくさり

庄野英二

「星の牧場」の作者がユーモアと愛のまなざしをもって語る身辺の事々。ほのぼのとした暖かさと凛とした気品漂う不思議な魅力のうちに人間らしい生き方を考えさせるユニークな書

¥680

人文書院

その他先日、アメリカ、ロスアンゼルスに開催の世界美術競技会にも日本を代表しての（十三点の内）二点入選いたしました。又

＊

この手紙の末尾に見える世界美術競技会とはロスアンジェルスで開催された第十回オリンピアードに慮接して開催された芸術競技展である。その入選作二点はどんな作品か判明しない。四年後のベルリンのオリンピアードには「ラジオ体操」「ウォーミングアップ」を出品しているところから推して、同種類の運動に取材した作品であったろう。ともあれ、この芸術競技展が懸橋となったのであろう。国展で受賞した「長谷川邸の裏庭」はボストン美術館に、「合浦、青森の公園」はパリーのルクサンブール美術館に買上げられた。

尚、余談になるが、島家に買上げられる機会を逸した「荘園」は、友人Aが売先を世話するからと持ち去ったまま、またと志功のもとに戻らなかった。

＊　＊　＊

応召日記（五）

蓮田善明

十一月二日

朝、寒くて眠れず。夢に、白い飯をくひ、フトンにねた夢をみた。空は痛いほど晴れてゐる。今日は師団長の視察あり。遭遇戦（午前）、陣内戦（午後）

肉迫攻撃班は自ら爆弾を抱いて戦車に轢かれる仕事といつてよいとT中尉の説明をきゝ、涙を禁じ得なかつた。それを小隊長が命ずるのである。僕自らが死に行くと自分に申出る。しかし小隊長自らその死に行けない。やはり兵に命じるのだ。これは大変なことだ。

師団長の講評は真に実感的であり、それ故にこそ行的に自由の境をめざし、又痛烈な攻撃戦意にみちてゐる。今日は第二期中はじめてうれしい日であつた。

紫外線で焼けヒリ〳〵するやうである。帰つてセンタクをした。兵が横から手伝つてくれた。

午前の演習の開始前、山道の上から小一時間、下の畑の稲こきをする四人家族をみてゐた。この山間の狭い田地に無念に稲こく父母、姉弟。この人たちのために戦つていいと思つた。

今夜は冷える。外套、チョッキを出した。

Iを師として愛国行進曲の踊りを稽古する、昨夜より。今夜大毎氏のコッケイな踊りぶりに抱腹絶倒す。今夜はみな早くねむる。

十一月三日

明治節、演習前に遙拝。やゝ曇り。演習

私家版 森林公園
中河与一

私が高千穂に登つて感じたことは、日本の神話の中にある天皇は祖先神であつて、神であつて同時に人間であるという考え方に立つているということであつた。
その点三島が天皇をキリスト教風に絶対神として考えた小説「英霊の声」を書いたことにはすでに間違いがあつたのではないかという気がした。

¥950
雪華社

の頃より快晴

夜間演習の初まる頃、夕焼美し。又夕靄の平坦地、海の如し。すゝきの美しさを讃へ合ふ。夜に入り星ぬれたるが如くランマンたり。

天ざかる阿蘇の曠野は秋の日の照り澄みたれば草みな光る

十一月四日

教官交替。午後休養。春のやうな日和である。便所に入つたとき、ふと雲雀の声をきいたやうな気がしたが、頬白の囀声であつた。恒松、高木氏と灰床に行き子供たちと遊び老夫婦の家で雞を買ひ、恒松氏が料理し、家で白飯を焚いてもらつて満腹した。夜は月である。明暗の谷川をのぼり山を越えて帰舎。老爺は自分たちを拝むといひ、谷の上まで送つてくれた。僕らの後から又将校が召集され、二三日中に此処に来、八日には又大矢野原へ移転とのこと。野戦への出征が迫つて来たといふ感じがして、皆の話題になり、まだハツキリ覚悟の出来てゐない連中などゴソ〳〵と爐の側で話し、又次から次と帰舎する連中が之に加はり、うつら〳〵と夜を明かす。

夜明け方、小便に起き、草の上に放つ。屋根からは雨後のやうに滴が落ち、而も空は研き上げたやうに晴れ、星が一粒々々かゞやいてゐる。

十一月五日

Nも彼の躊躇なしの猪突と俗論理で一部感心もさせてゐるが、彼も今朝又「オレはどこにでも行くよ。（この間までは既占領地の上海などに行つて国際関係などに働きたいといふのが彼の宣言であつた。第一線に行きたいとはいはなかつた）決死隊でも、将校斥候でも行くよ。オレには決してタマは当らないからナ。……当らないと信じてゐたら当らないサ」

高木氏は僕と同じく平々淡々としてゐる。これは刺戟が麻痺したのではなく、覚悟だ。

覚悟だから、やはり家族のことや仕事のことを忘れえない。昨夜帰舎の途中、凱旋の日のことを想像したりした。凱旋の時は泣くだらうと思つた。しかし、東京への汽車を再び乗るか乗らないか、この二つの一つだけが自分の前に与へられてゐると思ふと余りに厳粛な事実に対して、何か今のことが夢のやうな気がした。

昨夜帰舎したら、敏子、晶一から手紙とハガキが来てゐた。敏子からは出征前に、も一度会ひたい、その用意をしてゐると言つてきてゐた。晶一からは、ギッツリ腰を心配したり、ピストルをもつて帰つてくれといふのである。敏子の手紙によると、晶一が朝「父ちやん」と叫んで起きたので、きくと自分の凱旋をした夢をみたのださうだ。晶一とこの夏二人で旅行したことはうれしい思ひ出である。

兵隊が山から紅葉の枝を折つてきた。青いのも黄のも、紅いのも小枝に群つてゐて美しい。

十一月六日

午後休養。洗濯をし、酒保に行き、風呂に入り、手紙を書き、飯をくひ、散歩をして落日を見、焚火をし、雑談に耳を傾く。

午前のNの小隊長は傑作であつた。午後十中隊の——大朝大毎氏今日も出かけた。大毎氏髭にマッチの燃えかすの炭をぬつて行く。

S氏夕食前よりよき程にキコシメシて、O氏とうれしげにのみ語つてゐたが、焚火のそばで、「オレは気分で行く、オレは皆が小隊長が出来るなら分隊長位出来る。オレはいざとなつたらきつといい智慧が出

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

る。オレは段々愉快になつてくる。昨夜もオレはちつともおどろかなかつたよ。」といふ調子。そして代用教員時代に純真にして深刻なる思ひ出があるから、M町に行くといふのである。彼の初恋の人は肺病であつたといふ。それをO氏はもう死んだといふ。S氏は「いや死なない。僕の恋は永遠だから、死ぬ筈はない」といふのである。「オレは、酒をすきとなんとかでのむのではない。気分だ〳〵」彼は済々賞出である。柔道の選手であつたし、商船学校を出て、郵船社員である。リオデジャネイロ、ブエノスアイレス……に想ひ出があるらしいとT氏の噂。

今S氏サンマンとして歩み来り、隣のU氏の所から煙草を探すとて上つ来たが、刀を落したりして手許定まらず。「あ、下駄をはいてる」と誰かゞ言つたので、みんなの視線がS氏の足許にあつまる。ドツと上る笑声と悲鳴。その中を悠々と彼は下駄ばきのまゝ毛布の上も莚の上も踏んで行く。下りてやがて炉ばたに腰を下す。

天さかる阿蘇の曠野のはたすゝき（六字抹消、日和つゞけば）綿となりたり

編集後記

三月七日。会津八一研究家の料治熊太氏から、志功伝に関して激賞の手紙を頂戴した。氏は元「太陽」編集長、又「白と黒社」を主宰し最も早く版画界の地位の向上に努められた方である。一昨年の肌寒い春の日、西落合にお尋ねした時のことを色々思い出した。

九日。宮城賢、土屋郁子、川上澄生諸氏から、志功伝を愛読して下さつてる由のたよりをいただいた。特に土屋さんには、東京の資料の探索に力を借していただいている。炊事の片手間に立ち読みして下さつてる由で、この伝記はそんなアト・ホームな暖いものに仕上げたい。

十三日。弘前在住の詩人船水清氏より、テレビの志功伝「おかしな夫婦」との比較論を書いて送つてくれた。そういえば「おかしな夫婦」は三月で終りになつたようだ。

十五日。蓮田品一さんから「応召日記」を、父上の書いたものの中で一番親しみを感じている由のたよりをいただいた。まことこの「応召日記」は、善明に対する誤解や誤伝を解く重要な役目を果すことになろう。

二十五日。伊東静雄の文学的な出発の伴侶だつた青木敬麿の息子敬介君から、詩集「播磨灘」を頂戴した。さすがに血は争えない。伊東静雄に興味を持つているほどの人は、一度読んでみると面白いと思う。発行所は東京の西神田の南窓社定価七五〇円である。

永年島根大学で英文学を担当していた森亮氏は、四月からお茶の水女子大学に転勤された。住所は後報。（O）

果樹園 第一九五号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年五月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 六〇円 送料 三〇円

果樹園 一九五号 昭和四十七年五月一日発行 （毎月一回一日一回発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円 送料三〇円

果樹園 一九六号 昭和四十七年六月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価八〇円 送料三〇円

果樹園

第196号

画仙・棟方志功(六) 小高根二郎
遺言(一) 田中克己
峠の美風 宮城賢
ドゥメン吉本青司
応召日記(六) 蓮田善明
倉敷高梨一男
編集後記

画仙・棟方志功(六)

—その画魂の形成—

小高根二郎

3 雪隠観音、いつか倭絵となる

国画会で奨励賞を貰った喜びは、すぐ青森のチャに知らされた。女手一つで、けようを今日まで育ててくれた、労苦に報いるためであった。ところが、その知らせを受けたチャは、待ってました……とばかり単独で上京してきた。いつ母子を引き取ってくれるか？という談判のためである。けようの誕生までは、なんとか父母の勘七・はつに言訳も立った。しかし、誕生もすぎ、しかも地方新聞に晴れの受賞が景気よく報じられては、もはや別居を正当づける言分も成り立たなかった。それに昨夏、志功は帝展制作にも帰青せず、千葉や新潟などの他国を、呑気そうに旅してることも心配になった。手がかゝらなくなったけようを母はつに託し、まさかの場合は看護婦になる手もあると、上京をしてきたのだった。

手紙で予告されてはいたものの、現実に銀杏返しのチャがアトリエに現れた時には、志功は狼狽した。結婚をしたということは、松木にも、古藤にも、まだ告げていなかったからだ。「ワ一人でさえ満足にママも食えねェくせして妻子でもない」という、先立つ理屈と、羞恥とが、言わさなかったのだ。「けようがこんなに大きくなりした」と、チャが写真を送ってくれた時も、父になったという現実感が湧かずに困った。赤ん坊のくせに、もう小学時代の自分にそっくりな顔をしているのに、驚ろいたり、感心したり、あきれかえったりした。まだ志功にとって、妻も子も、彼が情熱を籠めて刻む点や線以上の実存ではなかった。丁度、彼は「白と黒社」の料治熊太に依頼されて、「版芸術」七月号のために「点・一線」と題したエッセーを綴っているところだった。

「点・一線、それこそ私の版画を創くるにしても版画を観るにしても心持を届どかせる、又、行き渡らせる私の心境と極心である。」

「集った点、竝べられた線が、その配置と併合、集散に依って結果の善、悪を成すとすれば、その及ぼす点や線のどの様にか至難の組立てであり、その組立の不思議な配置がうつくしさを創くり版面全体にうずく、空気、版画としてこその幽韻な面が此処かしこと漂う、それこそ版画が醸もす崇い、美くしい香気であろう。」

「押した一点、置いた一点、大小を考察しそのちりばめに白地を持たして意味深長。

引いた一線、走る一線、長短を考察しその配置に白地を持たして意味深長。」

「私の出来す木版画は点と線を以上、以上に存在ならしめ紙を生かし、墨と紙の地の連絡、所謂、版画上にうずく美くしさの存在を吸収さするを以つてしている。

何処までも拡ろがる宗教的信念に置かれた木版画の生命は、版自体の生命ではない、一点一線に築かれた謎であろう。」

志功は顔を伏せて字を書いていた。草稿を正書しているのだ。傍に控えている銀杏返しのチャが、聳えるように高く感じられた。八甲田でなく、まさに岩木山だ。彼女は書きあがるのを、黙って待っていた。場所を探し探し尋ねてきた渇きを癒すために、鉄砂花文湯呑に薬罐から水をつぎ、ぐっ！ と一っ気に呑み干した。いつも志功はあおりつつ、内側の乳白にチャを思い浮かべて、勘弁してケレ……と、謝っている湯呑だ。志功は原稿の末尾を、（七年五月、眺望画室に於て）で締めくくった。そこを見届けてチャが口火を切った。

「志功さん。「チャ」と「けよう」の「線」と「点」の方は、どうしてくれるノ？」

といった。東京弁コであったので、志功は尻に火が付けられたようにあわてた。

「どうしるって？」

と、志功はうつむいた。

「どうしるって、夫婦なら一つ家に生活しるのが筋道よ。あなたが線と点で版画コ作るように、チャとけようとで世帯コ作るのが当然の義務でねェですか？」

と、理詰めで詰め寄られた。その資金と準備は、昨秋帝展に入選した「荘園」で充分まかなえるはずだし、今度の受賞作「長谷川邸の裏庭」で明日の用意もできるだろうという、彼女の見透しだった。志功はうつむいたままだった。その大事な「荘園は」、うっかりAに渡したばっかりに、半年たっても金にもならなかったし、作品も戻ってこなかったからだ。面目なくて、横領されたなどと、おくびにも出せなかった。

「どないすべな？」

「どないすべも、こないすべも、ないだべサ。すぐに家コ探すベシ。」

と、チャは決然と動議した。志功はこの動議に引きずられるように腰を上げた。一人は昂然と、一人はしょんぼりとアトリエを出ていく姿を見送った松木と古藤とは、化かされたように顔を見合わすと

「いつの間に二人は仲々しくしてたんだべ？」

と、松木はぽつりと呟いた。大正十三年の上京の時と同じ、再びおいてきぼりを喰ったからである。

案ずるよりは生むはやすし……で、家は案外簡単に近くで見付かった。松木のアトリエや蓮華寺より一丁半ばかり距った、いきつけの銭湯のすぐ隣、玄関脇に大きな桜樹がある二軒長屋だった。隣りはHという大屋で、上野の美術学校出身で明治製菓の広告部に勤務して包装図案を描いていた。画家同志というわけで話は簡単に決った。当時このあたりは沼袋南三丁目と呼ばれていたが、やがて大和町と改弥された。つまり、大和町一八〇番地だった。ところが面白いことに、ついこの三月に発行された「コギト」の発行所は、目睫の二五二番地の肥下恒夫方だった。大阪高等学校出身の東大生が中心の同人雑誌で、保田与重郎が主宰し、筆者の兄太郎も三浦常夫のペン・ネームで参加していた。筆者も後年「コギト」に参加するが、青森で結ばれた因縁の糸とは、また別種の連環の糸で、画仙に結びつけられる運命が、ここにしつらえられたのだった。

ともあれ、志功は一介の部屋住みの身から、借家であれ、ここに一城の主となったのだ。八畳のど真ん中に、大の字に踏んぞり返って寝そべろうと、誰からも文句をつけられぬ自由さが、初めて我物になったのだ。寝ながら深呼吸をしてみた。胸廓と腹部とを交互に起伏さすと、まるで五尺の矮軀で宇宙を操作しているような、愉快な錯覚があった。玄関と茶の間を仕切る四枚の襖は、入居に際し

て、大家が今度新たに張り替えてくれたものだった。無地の表に、窓外の桜樹の深緑がゆらゆらと映えた。まるで深海の底に、鰈のように寝そべっている安穏さで、志功は思はずトロトロとした。チャはけようを背中に縛り付けると、台所で包丁をカタコトいわせていた。そのカタコトで、志功はさらに深い深い海底に沈んでいくようにも感じた。午後の水底は意外に明るかった。停泊している連絡船の腹部が斜陽に反射して、その拡散する光芒が、潮のうねりにつれてユラユラ揺れる縞模様を、歌劇の照明のように展開していた。黒や、緋や、飛白や、金や、銀の鯉が、群をなして通過した。群の意志による一糸乱れぬ行進だった。それはあまりに早かったので、鯉か、それとも鯛らの群であったか、判らぬまに、あッという間にかき消えた。次で大鮟が髭で豊かな体軀の均衡をとりながら、ゆらり……と現れた。志功ほどの大きさだった。その大きさから判定して、どうやら沼貝夫婦の茶呑友達の、善知鳥沼の主の一人らしかった。彼は志功にならんで大様に寝そべった。

「久しぶりだネス。」

と、彼女は志功に挨拶した。すると、鮟かと思った臥像は、カリエスで寝たッきりの、「ボッコ」と愛称する姉のちよだった。

「なんだア。誰がと思ったらボッコだか？」

と、志功も挨拶した。いつも志功は帰省すると、まっ先に二階に駈け上った。そしてボッコにならんで仰向けに寝転ぶのだった。彼女は兄弟姉妹の誰よりも、志功が偉い画家になることを念じてくれていたからだ。彼女の祈りは兄賢三の祈りより純粋だった。それというのも、寝たっきりの彼女にとって、志功は唯一の外部世界の提供者だったからだ。まだテラテラに光って、乾いていない描きたてのタブローから、彼女は花の香気をかいだり、青葉の下を潜ってきた微風に触れたり、海や川の乱暴な対話に耳をそばだてたり、山の沈黙の独白に聞き入った。つまり、志功は彼女にとって、外部世界の総てだったのだ。志功が例になくタブローを持参しないで、天井板の節目を数えたり、木目の模様に何かの象徴を探しているようなとき、彼女は童女のように細く白い手を寝床の下に潜り込ませた。そして、母さだの衣裳で作った小袋から、ピカリと光る銀貨をつまみだした。

「イロコ買いへ……」

と、志功に絵具代を恵んでくれるのが常だった。志功は彼女の細い手が、寝床の下に潜るのを、今か今かと待っていた。しかし、今日は知らん顔をしていた。おかしいなと思っていると、彼女の手は細りに細って、骨だけになり、さらに先端が髭のように細っているのであった。その細い髭で、彼女は懸命に床の下の袋を引っぽり出そうとしてるのだった。彼は姉に助力しようと思った。袋の摘出をよくするために、蒲団と畳の狭間に両手の指をかけた。この時、ガチャン！ と錠をおろしたように、間隙が狭窄され、指を抜くにも差すにも動きがとれなくなった。足を踏ん張って、必死に抜こうと努めたが駄目だった。床と見えたのは、実は一間もある沼貝だったのだ。夫婦ぐるみの芝居にうまうま掛って、虜になってしまったのだ。後は一寸刻みに、志功の五体は、ずるずると胎内に引きずり込まれる段取となる。

「誰か来て助けてケロジャア！」

と、志功は助けを叫んだ。「お父サ！」。「お母サ！」。「兄んサ！」。「堅チャ！」。しかし音響を断絶した水中からは、なにの反響も返ってこなかった。すでに両脚は呑み込まれてしまった。万事休す。観念の眼を閉じようとする時、ゆらゆらとする照明の彼方に、揺曳する何かが見えた。それはスケートをするように、ジグザグに水を蹴りながら、次第に近付いてくる。後から後からくる。援兵に

相違ない。もう腰まで呑み込まれた彼は、必死に両手を振って合図をした。援兵か、敵兵か、しかとはしないが、彼等は魚形水雷の形をしていた。頭は坊主のように丸く、光っていた。水を噴く噴射筒が見えた。屈伸して水をあおる数多い足が確認された。蛸だ！ もう腹部まで嚥下された志功は、水を引っ掻き回してもがいた。蛸の八本の足のどの一本かにからんでもらって、まず死の吸引力に抵抗することが緊急事だからだ。だが、援兵は揺蕩するうねりに乗って、彼の手をぬらりと脱けた。胸板も半ば呑み込まれてしまった。乳の線を越えたら、すっぽり全身沼貝の殻に収容されてしまう。この時、一匹の蛸の足に触れた。志功は必死にその足に搦みついた。蛸の八本の足の吸盤も志功に吸い付いて、あわやの危急から救われた。と、思ったら夢から覚めた。うなされてチャから揺り起されたのだ。

「なにか悪い夢コでも見ていしたか？」

と、チャは問うた。志功は背伸びをすると、

「あゝ蛸コだ。」

と、謎のようなことを呟いた。

「蛸コ？ 何(なに)していしたべ？」

「助けてけたじゃ……」

と、彼は跳ね起きた。

「ハンカクセェ（阿呆かいな）。」

と、チャはいうと、きようを背負ったまま手鍋を持って、豆腐を買いに外へ出ていった。その隙に、志功は画室に当ててある二階の六畳へ駆け上った。そして硯と筆とを持って戻ると、筆に墨汁を滲ませて、襖に向って突っ立っていた。桜の葉群は、さっきのように、襖に影を落すと盛んに揺蕩していた。志功はその揺蕩を鎮めるように睨めつけた。そしてそろそろと近付く……と、見る間に、筆が走っていた。円筒が描かれた。それに足が生えた。さらにぎろりとした目が現れ、噴射孔の口が突き出た。命の恩人の蛸だ。危急を知って駆けつけてくる勇姿だ。援兵は次から次に現れた。四枚の襖を、所狭しとばかり、縦横に遊弋した。五匹。十匹。十数匹。描き終るに十分と要しなかった。志功は畳の上に坐ると、この謝恩の揮毫に安堵した。夢に見た幻影を、このように正確に捕えたデッサンに自足した。永年、闇で特訓した手練の業(わざ)だった。

それにしても、蛸の生態は何処で見たのだろうか？ それは浅虫の東北帝大臨海実験所に附属した水族館のような気がした。或いは龍飛崎への旅の途中のどこかの渕のような気もした。又は犬吠崎の丈余の飛沫の底に見た幻影にすぎなかったような気もした。しかし今までモチーフに選んだ鯉をはじめ、鯨、鮟、蟹等の魚族に対する志功の特別の親近性はなにから由来したのか？ それはそもそも鱈釣を打った鍛冶のなりわいに端を発した。童子の頃からの遊び場の一部であった善知鳥沼。それにつらなる瓢箪池。小使時代に糸を垂れて鮟や鮒を釣った裁判所裏の溜池。そこらでの体験や見聞が、志功の思い出の広場で、まっ先にいい場所を占めたからだ。そういえば郷党の大先輩、涼袋(りょうたい)・建部綾足も絵筆を執ると魚類をよく描いた。彼は淡水魚から塩水魚に着目した先達だった。彼のクリィエイティヴな「海錯図」は、カマス・縞鰈・赤蝦・鱚・撞木鮫等三十種もの海魚を紹介した画期的な図譜だった。汗みずくになって豆腐を買って戻ったチャは、壘の上に胡坐して陶然と悦に入っている志功を発見した。

「なしてニャニャして……」

といったが、蛸跳梁の大障壁画をみつけて、思はず豆腐を取り落しそうになった。

「なしてェ、こいだ童子(わらし)だけタ、ハンカクサイ（馬鹿らしい）ことしてェ！」叫ぶと、急に声を落して、「大屋の奥様にみつかったら、どする気だバ？」と、まだ満悦の冷めやらぬ夫を叱りつけた。

「……」

「すぐ出でげって追(ぼ)んださるベシ」

「描いてしまたもの、消そうたテ、消えねェベ、サア……。青森だバ、蛸コは火除けの守り本尊だとユベシ」

と、志功がいったので、チャは持っていきどのない憤慨と情けなさで、手鍋の中の抵抗力ない豆腐を、キリキリ鷲掴みにしていた。（この日以来、鷲掴み豆腐を具にした味噌汁が皮肉にも志功の好物中の好物となった）。

チャの心配が現実となったのは、それから間なしであった。勝手口に隣組の回覧板を持ってきた大屋の妻君は、頭隠して尻隠さず……の障壁画をみつけてしまったのだ。彼女は回覧板を台所の敷板の上におっぽりだすと、

「なんということです！ 大事な人の家の襖に、ヘッぽこ画家が絵を描いて！」

と、ヒステリックな抗議の涙煙(ろろし)をあげた。

「あんた方のような店子は、今まで見たことも聞いたこともありません。いずれ、この襖は張り代えてもらいます！」

と、面目なさで頭を垂れたっきりのチャに、白い憤怒の一瞥を投げつけると帰っていった。彼女の夫の商業画家も、会社から退けてくると、のそりと玄関口に現れた。

「ご免！」

というドスのきいただみ声で、食事中の志功は、隠れようもなく顔を覗かすと、

「大した傑作を描いてくれたそうじゃないか！ 描くなら、国宝か、家宝にでもなるような壁画を描いてくれ！ 蛸たァ、なんだ！ ふざけやがって……。かっちり弁償してもらうからな！」

と、立て続けにまくしたてると、ぷい……と踵を回らして帰っていった。「青森だバ、蛸コが火除けの守本尊」という秀逸な台詞(せりふ)を、志功が返せなかったこと勿論である。

遺言 (一)

田中克己

主の御計画は測り知れぬが、「コギト」同人がみな短命で、先月も長尾良がわたしより若くて死んだので遺言を書く。わたしの長女依子よ。おまへは父にして怒りっぽく、父にして細いので一等可哀さうである。おまへは昭和一四年九月二五日、父のいま住んでゐる杉並区に生れ、父がシンガポールへ行く時はまだ二歳半だった。スマトラへ兄がハガキをよこし「ヨリコハオトウチャン、オトウチャントイヒマス」と書いて来た。おまへの弟の梓はまだ生きてゐて三人のため幸せにもわたしは帰って来た。そのあと梓が死に、弓子が生れ、わたしは敗戦確実な故国からシナへ兵隊に行った。再び帰って来て——神さまのおかげで——父はおまへを小学校の入学式につれて行った。おまへは細いまま育ち大人になって嫁に行った。わたしはそのあと少し気が変になった。ひとは嗤ふがいい、気が変になった。おまへはその細い体で二度、産をして、二度とも難産だったが、可愛いい孫を生んだ。二度目の難産はとてもひどく、わたしは講義中に音(ね)をあげた。「むすめを失ふから、きみたちを娘と思ふ」と。おまへが死ななかったので、わたしは多くの娘をもった。わたしが招かれたあと、皆で讃美歌をうたふが、おまへも高らかに主を讃美しろ。おまへを失ったと思った時も父は主を讃美したのだから。おまへの子たちには学問をさせよ。本当の学問を、金にならない学問を。コネで入学、入社するな。自分で学びとれ。断じて赤軍派にしてはならないよ。これがわたしの遺言だ。長女への遺言だ。

大家の妻君はチャと顔を合わすと、いつ、どこででも、「いつ張りかえますか？」、「もう張りかえたことでしょうネ！」と嫌味を浴せた。「いずれ、そのうち…」「申訳ありません」チャは際限なく繰り返えすより手がなかった。そのうち志功はまたまた傑作をしでかしてしまった。所もあろうに、今度は厠の壁に雪隠観音を描いてしまったのである。どうしてそんなことになったか。志功自身にも解明がつかなかった。あの蛸屏風で味をしめた無上の放楽感、放下感……。どうやら、それをもう一度、自分の物にしたいという、衝動からしかった。このところ志功は、五尺の矮軀に、推し籠めた欝詰と、盛り切れぬ野心とを、あしらいかねていた。なんでもいい、体当りをする障壁がないと、自らの精気で自爆しそうだった。とりわけ、厠にしゃがむ時はやりきれなかった。女用一つしかなかったので、小の時にも女の姿勢をとらねばならなかった。その卑屈感に加えて、狭くて高い、臭気にくすんだ味気ない漆喰壁……。まるで絞首台の空間のようにおぞましく不吉に見えた。家の中で一番疎外された息の詰まるこの空間を、無限大の宇宙空間に変革しなければならぬ。その茫漠とした空間に、大の字に身を投げだし、思いきりのびのびと排泄がしてみたい。この願望が胸に浮ぶと、もう矢も楯もたまらなかった。大家なんぞ糞くらえ。いや、こんな臭い所まで、いかに詮索好きでも、探りに来ッこあるまい。志功は硯と筆とを持ってくると、一っ気に大好きな観音を描きとばした。観音といっても、聖・千手・十一面・不空羂索・馬頭・准胝の正観音ではない。観音変化身三十三番の中の蛤観音や女身体の馬郎婦観音の親類ともいうべき、番外の棟方観音だ。彼女は豊満な胸乳を投げ出すように大様に諸手をもたげ、嬋やかな脚を開けっぴろげに組んで坐っている。ただ額の真中につけた神性をあかす円い星―白毫が、淫らな観賞に注意をうながすだけである。志功は自ら描いた、このありがたい観音を仰ぎつつ、初めてのびのびとして放下を楽んだ。次で、神聖な場所に変革されているとはつゆ知らず入ったチャは、やがて二つ折れになって転げ出て来た。

「いや、いや、いや……わいハ動天(吃驚)したジャ。用をたそうとしたら観音さまが睨らんでいますべ。もったいなくてェ、どしても出来ねェはで、掌を合わせて謝ってから、済ましたジャ。」

というと、ヒッヒ……と脇腹を押えて転げ回った。このありがたい雪隠観音には、蛸屏風の時と違って、彼女はもはや文句をつけようがなかった。

この蛸屏風と雪隠観音は、やがて「版芸術」の発行者、料治熊太の発見するところとなった。志功の「点・一線」掲載の七月号を持参した彼は、折から外出中の志功を待つべく茶の間に通された。そこに彼は群らがる蛸を発見したのだ。版画で馴染みの「群らがる蝶々」「群らがる蟹」「群らがる鯨」とは別種の、肉筆の魅力に酔わされた。それは版画のダイナミックの点と線のリズムだけではなかった。奔放暢達な筆致の中に、リズム以上に躍動した生命が写しとられているのを感じた。彼は首をかしげると「うーむ」と唸った。次いでハバカリを借りた彼は、そこで予期せぬ観音菩薩に巡り会って、蛸以上の感銘で釘付けにされた。彼はその臭い空間に、小ではなく、大に相当する時間を消費させた。そして呟いた。

「これはものになる。」

彼は志功が戻ってくるやいなや、おきまりの版画の話は抜きにして、いきなり落書きの墨絵を、まっとうな画箋紙に描かせた。「鯉」「河童」。「鯰」。「神鷹」……。志功の脳裡に克明に刻み込まれているモチーフは、たちどころにタブローになった。料治はその幾枚かを持ち帰ると、彼の先生に当る早大で美術史を講義してる会津八一教授のところに持っていった。会津は一枚一枚を丹念に鑑賞したが、「燃えつくような情熱と、大地の底から生え抜いたような自信」(「棟方志功のこと」)と批評をして、一枚につき大枚五円で買い上げてくれた。恐らく志功の倭絵が商品となった最初であろう。料治はこの礼に、志功が欲しがっていた船箪笥を持っていった。

ともあれ、蛸屏風と雪隠観音は日を経、月を経、年を経るにしたがって、友人知己間で有名になった。その事実を、料治は次のように書いている。

「さる日、浜田庄司さんの厳父が、飄然と、雑華堂(棟方家の雅号)を訪ねて来られたことがある。私も同坐してゐる時であった。『私はね、お宅の便所へ行くのが好きでね』お父さんは、今年七十三歳であるが、壮者を凌ぐ調子の高い人で、その白髪の老翁が、何が故に、志功画仙の雪隠が好きであるか、――便所へはいった人のみぞ知るところである。

『水中石像雨濡不恐』という額入りの文字があることだけは、ここに公表してもいいかもしれない。」(昭和十七年「板散華」序)

料治が妙に遠慮した筆使いをしているのは、描いてから十年も経っているのに、まだ大家の耳に入るのをはばかっての配慮に相違ない。が、この料治の心づかいは実は無用だったのである。と、いうのは、料治の文章より一年早く、筆者は「コギト」に雪隠観音の存在を、明々白々と公表していたからだ。

「あの菩薩を白く塗りつぶして了うことは棟方にしては淋しい事であろうし、後世家主のためにもそれこそ勿体ないような損になる。どうすればよいかと云うに、棟方はあの壁面に次の画賛をしただけでよい。

大小便時　当願衆生
鐲除煩悩　滅除罪法

其処であの便所を拝借するものは、口のなかで三べん――おん　くろだなう　うんじやく――と誦すればよい。そうすれば罰があたるどころではない、総ゆる煩悩は除かれ、諸々の罪法など霧のように消えて失くなるだろう。それに棟方の天を飛ぶような話でも聞いていたら、それこそ極楽往生だけは出来よう、と云うものである。これは少し話が尾籠になったが、小高根二郎の書くものはどうも眉唾物である、と思う人があるなら、その人のために此の囲厠偈の出所を明かにしておくから大いに信用していただきたい。その偈は高野山の蓮華三昧

夏目漱石論
桶谷秀昭

■わたしのモチーフは、一言でいえば、存在恐怖者漱石と日本の近代の文明の変質過程との交叉する場所に、漱石を描くことであった。数年前、北村透谷論を書いたあと、視界が暗くなった時期があった。眼がみえない、先の見通しが立たないときに、手さぐりの状態で漱石論を書きはじめた。「道草」「明暗」から書きはじめ、次第に作品を遡行するというぐあいにすすめていった。…網羅的であるよりは求心的に、というのが自分のモチーフの命ずるところであった。

(著者)

¥880

河出書房新社

院の厠に、日常座臥ひたすらに修道せよと掲げられている。（昭和十六年『鉄斎以上先生』）

「板極道」の伝えるところによれば、志功は筆者が書き送ったこの圖則偈を、「観音菩薩さまの真上に、べったり貼って大家氏の「叱声封じ」にしたということである。

十二　詩と版画の交配

1　佐藤一英の「大和し美し」

志功は弁護士控所の給仕時代、同人雑誌『夢』を発行し、自らガリ版を切ったほどの文学少年だったことは、読者の記憶の片隅にまだ残っているに相違ない。海のものとも、山のものとも、まだ判定のつかなかったあの少年時代、彼は画家になりたいと願う情熱とほぼ同量の熱量で、歌人・詩人・小説家になりたいと願ったのだった。彼は葛西善蔵の「おせい」物でハラハラし、福士幸次郎の「鍛冶屋のボカンさん」の韻律に酔って、向う鎚を振った体験から胸を熱くしたもんだった。そんな文学好きだった志功が、たまたまひもどいた『新詩論』第二輯（昭和九年二月アトリエ社刊）で佐藤一英の譚詩「大和し美し」に巡り会って、魂の底から感動にゆすぶられたとしても、別に不思議ではない。同輯の巻頭に福士幸次郎はエッセー「日本語の文学語としての進化」を発表している。このエッセーの冒頭に、

故慶大講師斉藤吉彦君に献じる。君は吾が同郷の秀才、地方主義の同志、少壮の言語学者で詩人……

という献辞が添えられている。おもうに幸次郎は、若死をした斉藤に替わるべき秀才として志功に白羽の矢を立て、激励の意図で『新詩論』を贈呈したのである。と、いうのは、この『新詩論』と時を同じくして、料治の『版芸術』三月号が「棟方志功版画特集」として刊行され、「青森・合浦公園」「亀田長谷川邸の内園・裏庭」の代表作以下「蔵書票」の類まで収録され、版画会の重鎮、平塚運一・川上澄生・前川千帆・恩地孝四郎の推薦文がにぎやかに添えられていたからだ。福士ほどの者はかつて青森の街角で「よく描げしたネシ」と励ましたことのある志功が、美術界の一角にようやく嘱目すべき俊秀として頭をもたげている事実を見逃すはずはない。詩界のエスプリ・ヌーボーとして評判の高い『新詩論』を贈って、再び激励をしたわけである。同輯には福士のエッセーの他に、北原白秋「龍膽」、宮沢賢治「半蔭地選定」、その他諸家のE・A・ポー研究など多彩な内容を誇示しているが、志功はとりわけ佐藤一英の譚詩「大和し美し」に魅了されてしまった。遠征に次ぐ遠征の果て、異国である伊勢の能煩野で、まさに息絶えようとする日本武尊が、回想と思慕と詠嘆で呼んだ三人の女性――美夜受姫、弟橘姫、倭姫の妖冶、殉情、清艶に魂をゆすぶられたのだ。

一英は冒頭、尊の絶唱〈大和は国のまほろばたたなづく青垣山隠れる大和し美し〉を掲げ、いまわの胸に浮ぶ故里のなつかしい風色から起筆している。

あゝ陽はいまや大和なる山の紅葉を耀かし
昔わが遊びし野辺や河岸に子供らの影
ゆらめかす思ひあり……
かしこには一人の男の子　他の子らを制して草叢を分け　鵠の巣にぞ近づきたる
その手にはおのが上衣を脱ぎてかゝぐ
またかしこには竹の弓もて柿の実を狙へる子あり　百舌鳥射損んじての戯れか
額汗ばむ
程遠からぬ杉の木の根元に母は幼児に乳房やりつゝこのさまを頬笑みて看る
子供らよ　さきく育てよ　母の背の杉にまさりて

峠の美風

宮城　賢

伊豆は下田と堂ケ島の間をバスで山越えし
　たことがある
時間にして片道二時間ほどな道は
すでにあらかた舗装されていたが
山峡を縫う道の例にもれず
峠の胸つき八丁場は車がすれちがって走れ
　る幅でなかった
山道を往復するバスの運転手さんは
この世でもっとも信頼できる人である
多くの生命を預った無言の緊張を背中のあ
　たりに示しながら
腕は道の曲折と角度に柔軟に楽らく順応し
親子ほどにもちがう小さな車を前方にみと
　めると
断崖が乗客の眼をそむけさせる道のへりに
バスの巨体をまるで自分の体のような巧み
　さでよけさせ
小さな対向車の通過をゆっくり待つ
（さあ坊や通りなさいと）
小さな車のハンドルの操縦者のほうでも
さすがにこゝでは坊やのように素直になっ
　て
片手を軽く挙げて会釈して走り去る
峠のこちらがわからむこうがわへの
急坂と彎曲が難解な幾何学的線をなすその
　道を
バスはいくども会釈し会釈されつゝ
昨日も今日も明日もかようのであろう
運転席のまうしろに陣どったわたしは
神をまのあたりにする想いで
この峠で日々くりかえされるであろうこの
　美風に心奪われ
まわりの自然の景観へはつい眼が向かなん
　だ
そしてバスが平地にさしかゝると
わたしの眼はいまはようやく外に向いたが
そこらはすでに自然は人工に蔽われて
わたしはわたしのみた峠の景観を反芻して
　いた……

されどいましら猟にいでん齢となりて
猪の牙を折るとも兄弟の頭を拉ぐことなかれ

一人は小鳥を窺い、一人は木の実を狙っている。母は乳飲み子に乳房をふくませながら、二人の少年をたのもしげに見守っている。かつてこのような平和な秋の日もあった、と尊は回想する。兄大碓命と、自分小碓命と、それに母イナビノオオノイラツメは弟に乳をやりつつこんな明るい光の中にたたずんだものだった。その平和な秋の日が、なぜ雹の走る峻烈な冬の日に暗転したのか？　ふとしたきっかけで、兄大碓命を殺害したのが原因だった。〈猪の牙を折るとも兄弟の頭を拉ぐことなかれ〉。そう、一人異国で死んでいかねばならぬ尊は、千年の悔いで返らぬ昔を回想する。

この悔いの回想は、別れてきたばっかりの尾張の美夜受姫の思い出につながる。東征の往き復りに彼女に出会っていながら、ついに全い思いで愛を遂げえなかったからだ。

あゝ美夜受、汝が参らせし酒の香ぞこの
　汗にこもれる心持す
しかれども薬を毒と変ずるは汝が柔かき

かひなにあらず
なれはかの夜　無知なる百合花の咎もな
く揺ぎて匂ひ悩ませり
腹太き蜂そのうちに飽くなき情慾を横へ
眠りき
汝の髪に顔を埋め、われ父を殺しまつら
む夢にふけりぬ
いづれか罪の深からむ　母となる人を盗
みしわが兄と
われ自らの夢にふるへをののきし
さるにわれいましが甘き息のもと　再び
酔に落ちしこそわが過なれ
汝はいまもわれを待つらむ　あゝ美夜受
われ待ちがてに襲の襴にまたも月のた
ゝむとき
契りて置きしわが劔かひなにまかむ
かくてなれわが肉身を得ざるにぞ　まこ
との愛を学ぶべし……

大碓命殺害の直後に命ぜられた懲罰の西征の時と違って、輝やく凱旋後に命じられた今次の東征の旅は悲しかった。父の景行天皇が軍兵を下賜されなかったので、早く死ね……という賜死の御心が分ったからだ。その悲しさを伊勢大神宮に奉仕する小母倭姫に泣く泣く訴えた。が、父天皇の命はいかんともなしがたく、守り刀として草薙劔と、非常の用意として火打ちを入れた御嚢をいただいて運命の征旅に旅だった。尊はその悲しみを抱いたまま美夜受姫の家に泊った。妖治とした彼女のもてなしに、遊び心が動かないでもなかった。が、后の弟橘姫を伴っていた。それに胸に結ぼれた悲しみは、酒ぐらいでは解けなかった。悪酔いをした彼は、美夜受姫の髪に顔を埋めて、正体なく酔寝してしまった。その夜の夢で賜死の東征を強いた父天皇を暗殺しようと画策していた。けしからんことにはちがいない。しかし、父の女たるべかりし兄姫、弟姫を横取りした兄と、どちらが罪深いというのだろうか？　いや、いや兄を殺害することになったのも、元をただせば父天皇に責任がある。第一、兄があの姫たちを横取りしたのは、父が評判の美人姉妹を手に入れようとして、兄に下見にいかしたのが発端だ。好色な兄は、下見だけでなく下取りもしてしまって、なに喰わぬ顔で別の女を献上した。ジャの道はヘビ。父天皇も替え玉と知って、その女を近付けなかった。そのうち兄は二人の姫に溺れて朝夕の食事にも顔を見せなくなった。父天皇は不機嫌で、尊に命じて「食事時には顔を見せるもんだ」と兄に告げさせた。が、兄は五日たっても現れなかった。「まさかお前はまだ諭していないのではあるまいな？」と、父は尊にいよいよ不機嫌な顔をした。「仰せのように諭しました」と尊は決然として答えた。「どんなふうに諭したのかね？」と追求するので、「厠へ入ったところを引っ捕え、摑みひしいで手をもいで、コモに包んで捨てました」と答えた。父天皇は恐怖で青ざめると、その場から尊を退け、やがて西

四季
12・13・合併号
詩
・丸山薫、竹中郁、井上靖、大木実、吉野弘、高森文夫、小山正孝、福地邦樹、神保光太郎、他
散文
・杉山平一、野田宇太郎、小高根二郎、山岸外史、堀内幸枝、他
東京都千代田区内幸町一―二―二　大阪ビル
四季社
¥700

国の熊曽建征伐を命じたのだった。つまり、兄殺害に尊を追い込んだのは、つづめていえば父天皇だったのだ。

とまれ、復讐の悪夢から覚めた尊は東征にいでたった。遂げなかった愛は、再会の日に必ず……という、互いの約束だった。ところが再訪した日に、またまた不覚にも尊は、美夜受姫のもてなす酒にしたたか酔ってしまった。それに姫の被衣の裾に月の障がついていた。愛のタブーだ。尊はたじろいだ。しかし、姫は、「約束を待ちかねてお月さまが出たまでですワ」と、妖治として挑んだ。深酔いをしていた尊はついタブーを犯してしまった。余勢を駆った彼は、最後に残っている伊吹山の敵なんぞ素手で討ってみせると豪語して、草薙劔を姫にあずけて丸腰で征地に向った。それが運命となった。が片身となって姫に抱かれている劔には、悔いはあるまいと尊は思った。

いや、この美夜受姫より先に思い出さねばならない人があった。それは后の弟橘姫だ。

ああ橘　思ひぞいづる　かの日空は暗澹
として霙落ちこむ景色なり
渕さながらの空を割りて涯もなく葦は穂
を並む
われら道もなきそのなかをひたすら進み
き
なれの頬そこここに血を滲ますに
われ気づかへば　なれ何事か不吉なるも
のを感ぜしごとく
——道速振神の住むてふ大沼はいづれに
あらむ　その気もあらず　怪しあやし
かく言ひも終らぬうちに鷺群をなし葦原
を飛び立ち去りぬ
時もあらせず一条の煙昇れり
——かしこにもなれの指さす方既に一団
の焔はあがるそはわれらを謀りて焼き
殺さむとする賊の仕業なりけり
げに愛するものは明知こそ得るなれ
わがをばより賜りし袋を開けむことをす
ゝめしもなれなりき
げに愛するものは勇気こそ得るなれ
わが劔もて葦を薙ぎゆくうしろよりそを
掻き集めかの袋にありし火打ちもて火
を放ちしもなれなりき
賊向ひ火にあふられて逃げ散りしのちわ
れ焼跡の灰にまみれし櫛を見いでてな
れに示せば、なれ茫爾として乱れたる
髪を束ねぬ
図らざりきその笑顔いまもなほ見るがご
ときに、その櫛のみこたびは浜の白砂
に半埋るを見いでむとは
われは湿りてやゝ黒ずみしその櫛を手に
受けしまゝ茫然たりき
かくもわれとは縁深く　なれの肌身の一
部かと思はれしその櫛に　あはれなれ
の髪の香さへかぐを得で藻草の香のみ
薇はむとは
……中略……
なれ失ひし悲しみも渡　神の贄となり浪
にのまれし束の間ぞ
風　海の底より起り　波　空を行く折し
もあれ　忽然と波間に消えしなれの顔
その白き幻も墻におりし塲にはあらで
明日また浮びはいでじ
「吾嬬、弟橘！」。尊は慟哭と共に彼女の凛々しい姿を思い出す。彼女こそ、つねに危機を共にした女性、命を分ち合った仲だったからだ。相模の国に着いた時だった。国造の訴えで、さっそく野の奥にある大沼に棲むという兇暴な荒神を探索した。行けども、行けども、それらしい大沼はなかった。姫の柔らかな頬は、生い茂る葦の葉に傷いて、そこここから血を滲ませていた。尊が「血が出ているぞ！」と注意すると、彼女は何かただならぬ気配を予感したらしく、「おかしいワ。大

沼なんてありはしないじゃありませんか……」といった。葦原から鷺が一斉に飛びたった。と、見ると、煙が立ち昇った。「ほら、そこにも」「あそこにも」という彼女の注意で、尊はあたりを見回すと、燃えさかる野火が包囲圏を縮めてくるところだった。「謀ったな！」と、彼は倭姫から賜った佩力を抜くと、周囲の草を刈り払った。すかさず彼女はその草を掻き集めると、同じく倭姫から頂戴した火打ちで、火を放った。燃え立った火焔と煙は、追い風にあおられて軍勢のように賊等を追いたてた。彼等が散り散りに退散した後で、尊は焼跡から灰にまみれた黄揚の小櫛を拾いあげた。奮戦中に姫がとり落したものだった。彼女はニッコリ笑って、それを受け取ると、乱れていた髪を束ねたのだった。

その記念すべき小櫛を、尊が再び拾い上げる運命が待ちうけていた。上総に渡るべく走水の海に舟をやっていた時である。海神は逆巻く波を沸き立てて舟を進めなかった。姫はわが身を牲にして海神の怒りをなだめるため入水した。お蔭で舟は進み無事に目的地に着くことができた。その七日後のことである。尊は亡き姫が忘られずに渚をさまよった。

＜さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも＞と、彼女が決別にのぞんで詠んだ歌は、そのまま彼が彼女を偲ぶ歌にもなっていることに驚ろいた。＜さねさし相模の小野に燃ゆる火の……＞と口ずさみかけて、こみあげてくる嗚咽のために絶句した。「吾嬬、弟橘！」、ぼうだとして溢れでる泪が渚に落ちた。その泪を洗うように、波は寄せ、波は引いた。その時、砂に半ば埋もれている小櫛を発見した。手に取ってみると、まさしく姫が肉体の一部のように、片時も肌身を離さなかった小櫛だった。しかし、すでにかぐわしい髪の香は失せ、磯くさい藻のにおいがするばかりだった。尊はその小櫛を胸に抱くと、潮騒に負けぬほどの大声を張り上げて、果しなく号泣した。

それにしても、西征東征の二度の遠征にかかわりのあった小母倭姫も忘れることができない。西征に際しては御衣御裳を賜った。東征にのぞんでは叡と火打ちを頂戴した。

あゝ父の愛喪ひてなほ愛を信じゐたりし
　幼き頃ぞなつかしき
望みも果てし暗き筑地のわが胸にふとも
　香る梅の花　そはわがをば倭の御衣裳
　に移りし肌の香ぞ
あゝ倭われかつてお身の胸に抱かるる思
　ひに酔ひて御身の御衣裳に鎧せり
わが身裏に溢れし力はわれのものならで
　母のごとく温かきお身の愛にてありし
　なり
さるにわれわが力に優る熊曽建を討ちて
　より　御身の御衣裳をわが妹の肌を楽
　しむ夫の心に感じ始めぬ
呪ひやいかで免れむ　神に仕ふる処女子
　の血をも穢さむ夢みしものに
われふるさとを幾山河雪雲深きとつくに
　に死せむといふもことはりなれ
あゝ倭　お身の名を再び呼べばわが目に
　はふるさとの空晴れ渡り　山々には肌
　も露はに現はるる
そはわが子いかに見苦しからむも　そを
　はぐゝまむこゝろには人目もあらず胸
　をはだける母をさながら光浴びたり

父天皇が一向に可愛いがってくれなくなってからも、ひょっとした機会に、再た愛が蘇ることもあろうかと、尊は子供心に愛というものを信じていた。その仄かな希望を抱かせたのは、梅の花のように毎年変らぬ、小母倭姫のほのぼのとした愛だった。西征の時にいただいた御衣御裳はじかに肌につけ、その上から鎧を着た。梅のような移り香が、じかに

肌身に透け込んで、母に抱かれてるような懐しい感触だった。その感触は甘えと同時に勇気を喚起した。名だたる梟雄・熊曽建兄弟が討てたのも、母のような姫の愛の後楯を感応したからだった。しかし、額に結つていた髪を少女のように垂らし、鎧の上から御衣御裳を着て女装したことから、いつか姫と一心同体になったような倒錯に悩んだ。この倒錯した感情を、一っ気に矯正しようとあせったあまり、今度は姫をいつか女として感応しだしていた。肌触りのいい御衣裳をまさぐりながら、いつか妻に対する夫の情愛に似た欲情をまざまざと醸起していた。なんという冒瀆だ。生涯不犯の掟で大神に仕えている小母君をさえ犯そうとしている。尊は罪深い自らの宿業を想起して眼を閉じた。幾山河を距て、雲雪の深い異国で一人死んでいかねばならぬ運命は当然だ。それにしても瞼に浮んでくる故里の恋しさはどうだろう。小母君の名と同じ呼び名の倭！　晴れ渡った大空の下に、肌もあらわにおおらかに横たう山々……。この醜悪な尊にさえ、ひたぶるに乳をふくませようとまばゆい胸を拡げる倭よ。

ドウメン

吉本青司

しきりと丘の名を知りたかった
ある日
そのひとを訪ねていくと
＜ドウメン＞　とおしえてくれた
＜堂面＞　と書くのだともいった
＜ドウメン＞
このことばには　ふしぎなひびきがあった
そして
丘上の岩場を想った
猿石と名づけて愛しているあの石群だ
＜ドルメン＞
ふいにこのことばが
二重のイメージとなり　しばらく
舌端を離れなかった

春　秋

春には墓前にスミレが咲き
秋には墓標にアシナガが巣をつくった
どちらも
母にふさわしいものだった
幼子のぼくに
母の目はスミレの花だった　ときには
アシナガの針でもあった

冷　雨

ドウメンの杜のツツジも寒かろう
ことりの歌もきこえてこない
そういえば
きのう出会った山鳩のおやこは　どこで
冷雨をさけているのか

春寒ののちに

ドウメンの丘の林で
松蝉をきいた　それは
＜精霊＞
にちがいなかった
青く鮮明な空のどこかで
何かが　きっと
蘇生したのだ

応召日記 (六)

蓮田善明

焚火と雑談をはなれてひとり舎外に出る。月光満ち、下界もおぼろに見ゆる。自分は一人になりたくて、さて自分一人になつて自分といふものをとらへえない。自分の影が枯芝の上に落ちてゐる。影をみてゐると、自分を意識に映し得る。影は形のみにして生命なし、しかも影をみる時最も自分の現実を感覚する。しかし影はまことに月の光にほかならぬ。影をみる時、月光をみるのである。自分は自分を見んとして月光の中に佇立する。浸み透つてくる光の中に自分をここに投影する。しみじみ立るかな。影は言葉である。それが自分の影である時、詩である。詩は月光をわたしがその中に佇立する時、わたしがこのわたしによつて遮る時に投ずる言葉だ。しかし私がふり返つて月光に真面する時、もはや無だ。光とは無辺である。秋は私を見ず、私は死ぬ。私は瞑目する。虫声がきこえる。私はそれを軽蔑せずに、こころをそれにまかせる。何たる満ち足りた愉快だろう。こんなに現実感を味つたことは近年にない。(少年がよみがへりくる。)今、この虫声にきゝいり、この山上の静けさに融れたる己こそ最も現実だ。虫は生きてゐる。山も。

虫の声と月の光と静かな山上の空気とにひたりきる心。

よい文学をよみたい心

人を思ふ心

精神の王国を思ふ心。

十一月七日

「後二日」といふ声がきかれる。次のものを待つ心がいろ〳〵。

十一月八日

午前五時ごろ夢みて醒む。涙頬をつたひ流る。起きて前庭に出で月を見る。満月なり。近くの小雲を捨て、うごきつゝ傾ける。星も亦走るが如し。床にかへりて闇き中に紙をのべて走り書ける詩

今一度

わが出で征たん日に会ひ送らむと　妻は

はる〳〵東京より言ひおこしぬ

一度　二度　そのことのみ——。

わが征たむ日も近からむ

淡々(あは)と妻子らと我は別れ来りぬ　みことのまゝに

匆々と出で立ち来り

男子われ　何を　妻子に惜まん

われは黙し　淡々と別れ告げ来ぬ

幾十の部下をひきゐて　征かむ日のため

今吾は日夜に鍛へみがき

秋風颯々たる高原に土にまみれたり

野菊を折りて胸にさす風流も　自ら断たんとす

ここに二旬

吾が道は一つなり　生きてか死してか

詩集 京都叙情

臼井喜之介

詩とカメラで、日本人の心の古里「京都」をうたう風物詩！

¥800

京都市左京区北白川京大北門前

白川書院

倉敷

高梨一男

昔ながらの米倉は眩しく白に映え
薄藍地の甍　そして腰壁
おっとりと水は流れ
反った石橋の袂に去年の犬蹲まる
岸辺に柳葉しだれ
その青樹のように町ぜんたいしっとりして
「エル・グレコ」の珈琲の香
生い繁る蔦にからまり
美術館へと匂うてゆく
大原さん
「夏の日の最後のバラ」を繙きつ
あなたの夭折を悼む私もその一人です
古雅で奥床しいこの町を愛する私もその一人です

野菊よ
汝を吾が最期(いまは)の日のために今は残さむ
ひと一夜　明け方なり　われ夢にたゞ父なり
子らに何やらん　喜ばしき　土産を提げ
淡々と外より家に帰りき　見るに
子らの靴らならべり
入り行けば　子ら母の傍らにあり　身近き人々と共に
幼き子は吾を見て　いぶかしげなる目に
われに対へり
父よと母の教へ　われ土産を差し出せば　かけ来る
わが丈夫心(ますらを)はその部屋を避けて次の間に入る
子らかけ寄り　吾れ抱きぬ　三才の童子
あたゝかくやはらかき童子のからだ
小男さびたる九才の男子のからだ　いだきしめて
脈々と伝ひ寄りくるもの
われ堪へず
あゝ生きて今一度を会ひ得たらと
嗚咽す　われ声を堰きえず
あゝ今一度　未だ生きて会ひえたり
泣かざらんや　泣かざらんや
夢なりき　さめて涙しづかに　頬をぬらし
枕に落つる音をきく
友らみな暁を熟睡(うまい)せり
われひとり起きいでて舎前の草原に出で立てり
宵に雲にかくれたりし十五夜月
今円々と晴れたる空にあり、星雲の間を走れり
冷気に立ち、草に光る露を踏みて
妻子ら　汝をわれは想へり
妻よ、われは汝の想ひに立ち耐へざり
いま一度——汝は会ひ別れんと言ひ、
われは今一度生きて会ひし日を夢む
われは暗き床にかへりて
手さぐりつ、これを書き　妻よ
汝にのこす。

十一月九日

大矢野原へ再移転。夜、廠舎主管坂本退蔵先生(済々黌旧師)宅をT、N、氏と三人で訪問。

十一月十日

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

予定を一日早めて熊本へ帰ることになり、午後一時半出発。途中の秋色やゝ深し。帰営したら、明日からの聯合演習の軍装検査があつてゐた。五時前に命令が出て第二小隊長となることゝなり、T氏は下士官候補班の小隊長。とにかく大急きで用意をととのへ、垣松少尉とかも川で夕食をとつて城戸氏宅へ帰る。例の如く歓待をうけ、銭湯に行き、按摩をよび、用意をして十一時頃ねる。やはらかに、あたゝかいフトンと、夕食の白いめし、ここでの柿の味忘れられぬ。よく食ふやうになつた。

敏子から二通手紙が来てゐる。終りまで読み終へずにねる。

十一月十一日

四時半に目がさめる。歩兵操典、作戦要務令をよむ。

出動したら、やはり他の連中と一緒に明日トラックで山鹿に行き、それからの第一次の小隊長とつくと、急に疲れが出る。しかし十時から藤崎宮遷座祭に参拝の小隊長をすることになり、宿にかへつて軍帽をとり、又靴を買つて帰隊。

参拝の時も疲れと眠さ。帰宅後フラ〳〵するくらい。やつとこらへてゐる。夜は割合頭もすんできた。

夕刻、敏子へ手紙をかく、十時就寝。風が出て雨も時々ふる。寒くなる。

編集後記

四月八日。新潮社の片岡久氏より「画仙・棟方志功」(十四)にのびのびとした楽しさを感じて下さつた由のたよりをいただいた。完結したら、恐らくフォーレのレクイエムのようなスタイルになるのではないかとも言つて下さつた。今まで書き添えるのを忘れていたが、実は主題の他に、「その画魂の形成一」という副題が入るのである。即ち、昭和十三年に「善知鳥一」で、木版画として初めて帝展で特選をとつて、画魂形成が成る所で、一応筆を擱くことにしたからである。と、いうのは、三月に画仙はチヤ夫人、草野心平氏、柳井道弘君と共に印度を回遊、さらに四月には四国巡礼をされ、人生の内実がいよいよ膨脹するので、さらに六百枚が、画仙伝として必要なことが確実になつたからだ。

十六日。川端康成氏がガス自殺された。三島氏の割腹自決以来のショックだつた。と、いうのは、拙誌の会員・辻本暢子さんが、絶筆となつた岡本かの子全集推薦文の依頼者だつたからだ。冬樹社の新前記者だつた彼女が、熱心に鎌倉詣でをする話を、会うつど私は聞かされていた。ところが某新聞の伝えるところによると、岡本太郎氏が頼んだことになつている。一体幾度頼んだというのだろうか？頼んだのは俺だ……といつた調子に川端氏の死をよそに自慢気に放談している無神経さに開いた口がなさがらなかつた。辻本さんが、依頼した文章が、絶筆となつたことに心痛しているのと、なんという対照だろう。(O)

※ 森亮氏転居　東京都東久留米市大門町二-四-四-二〇五

果樹園 第一九六号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年六月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
池田市石橋二丁目六ノ五
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

果樹園　一九六号　昭和四十七年六月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

果樹園　一九七号　昭和四十七年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

果樹園

第197号

画仙・棟方志功(七)　小高根二郎
単語的存在　宮城賢
星の子　中野信子
深海魚　高梨一男
聴鳥歌　吉本青司
詩経私鈔(五)　森亮
遺言(二)　田中克己
応召日記(七)　蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(七)

— その画魂の形成 —

小高根二郎

筆者は一英の詩に冒瀆にひとしいほど鋏を加えた。今日の目からすれば、あまりに長篇にすぎ、古事記を読んでいねば雑解にすぎる点が少からずあるからだ。反面、冗長と感じられるほど解説を加えたのは、生のまま歌い込まれた古事記の諸事実を解明して、詩の理解を助けるためであった。それにしても、必ずしも鑑賞が容易とはいえぬこの「大和し美し」に、よくぞ志功は、製作に取り組もうとするほど感動したものである。恐らく、詩句の周到な味到からくる感動でなく、彼の原始の本能による、日本武尊の生命感との照応だったのだ。そういえば、郷党の大先輩建部綾足も、日本武尊に心酔して片歌論を唱導し、望郷の絶句八はしけやし吾家の方ゆ雲井立ち来も〉を能煩野の陵前に建碑したほどであった。既述した魚を好んでモチーフとした相似性といい、又生来弱視という同じ眼疾を持っていた点といい、両者の間には、なにか目に見えぬ脈絡があるように、筆者には思えてならない。

ともあれ志功は「大和し美し」をなんとしても版画にしたくてならなかった。川上澄生の「はつなつのかぜになりたや」のように、詩と絵の渾然としたシンフォニーを創造したいと熱願したのである。四月になってから彼は『新詩論』を贈られた礼に、深川亀住町に福士幸次郎を尋ねて敬意を表した。その折に、談たまたま「大和し美し」に及び、将来なんとかして版画にしたいという希望を述べたのだった。佐藤一英は福士の弟子である。かつて佐藤が書いた『詩の話』を、福士幸次郎の名を借りて出版したこともあるほどの間柄だ。特に「大和し美し」は、福士と一緒に仕事をした新井薬師の野方兜陽館に籠って完成した作品だった。佐藤春夫の絶唱「秋刀魚の歌」に匹敵する絶唱を……と、一英が悲願して成つた労作の事情も、福士はよく知っていた。

「思い立った日が吉日だ。志功さん。これがら佐藤一英サ案内すべ……」

と、すぐさま豊島区長崎の佐藤の家へ志功を連れていった。と、いうのも、福士は「原日本考」の取材で、よく旅行をしだしていたので留守になりがちだったからだ。佐藤の家は詩人らしく六畳一間の簡素な方丈だった。最小限度の世帯道具、机、山積した書籍の余地に佐藤と福士が対座すると、志功は上框にチンマリ控えるより場所がなかった。

「こちらは青森出身の画家の棟方志功君。君の『大和し美し』を版画にしたいそうだから、ひとつ許してやってくれ給え。」

そう、福士は、志功の紹介と用向きとを手っ取り早く伝えた。佐藤は目礼を交すと、改めて志功を見直した。三十五の彼より三つ四つ年下の年輩だが、父っちゃん小僧のように稚

純に見えた。と、いうのは、紺絣を着て隅っこに縮まっているチンチクリンの志功は、まるで熊の仔のように見えたからだ。この熊の仔に美術ができるのだろうか？　いや、美術より遙かに複雑な文学が、はたしてわかるのだろうか？　まして、文学を美術へ転生させるなぞという離れ業が、できるつもりだろうか？　と怪しんだ。写生で陽に焼けた黒い顔の道具立てで、唇だけがやけに赤かった。まさに青森産の月の輪熊だ。この月の輪熊に、三富朽葉の古雅。ステファーヌ・マラルメの幽艶。アルベール・サマンの巧緻。フランス・ジャムの素朴……。それらの要素を織りまぜたと定評のある俺の詩の真髄が、味到できるつもりだろうか？　その上、古事記に典拠した三姫の物語の糸も、物語以上にこんぐらがっている。その綾を解いて、版木に刻み込めるだけの才能を、この熊の仔に期待できるだろうか？　そう、正直なところ佐藤は危惧した。その危惧を察したかのように、福士はふところから「版芸術」を取り出した。

「これを見てくれ給え。棟方君の特集号だが、写実あり、象徴あり、寓話あり、抽象あり……といった多彩さだ。まさに君の詩風にうってつけの才能さ。」

と、福士はすかさず金時役を買って出た。佐藤は頁を繰った。川上澄生風な西洋婦人の「蔵書票」から始まり、「青森・合浦公園」「里芋ばたけ」「唐黍ばたけ」、例の代表作「亀田、長谷川邸の裏庭」、「夏泊岬の海辺」「龍飛・渦巻く」、「群らがる蝶」「群らがる鯨」、それから福士から郷土自慢として幾度も聞かされたことのある「八甲田、秋の山」「十和田、冬の山」「十和田、奥入瀬」、E・T・Cだった。

佐藤は、この点と線との離散や、集合や、交錯で造型する版画も、頭韻（アリタレーション）や、脚韻（ライム）や、五・七の音数律で構成する詩や歌も、結局、同じものかもしれないな……と、ふと思った。ここでちんまり控えていた熊の仔は初めて口をきいた。

「私は国展に版画を出品していますが、まだ自分勝手なものを出品することはできません。ですが、そのうち絵巻物を手懸けたいです。その後にぜひ、佐藤さんの『大和し美し』をやらせてください。これ、この通り……」

と、志功は佐藤に向けて合掌した。佐藤は絵巻物と聞いただけで分ったような気がした。巻物の幅と長さで、結構、空間的な表現形式である絵画と、時間的な表現形式である文学とを、一巻に収束できるからだ。それはわざわざ『源氏物語絵巻』や『信貴山縁起絵巻』『伴大納言絵巻』等の事例で借論するまでもない。美夜受、弟橘、倭の三姫の手の混んだ筋も、綾も、遺漏なく表現することができるだろう。

「それは面白いでしょう。もともと私が彫琢する『韻』も、貴方が彫刻する『板』にも共通性がありそうだ。『韻』は私共の日常の話言葉の中にだってふんだんにあるし、貴方の彫る『板』だって、私共の住居や、家具や、日常茶飲の器具の、何にでも使われている。つまり、国民生活に密着して離れられないとこが、そっくりではないですか。なにか、こう、広大無辺で……」

といったので、なるほどと、志功は佐藤の筋目の立った論理に感銘させられた。

「どうぞ『大和し美し』は気ままに使ってください。」

そう、佐藤は付言したので、つい志功は畳に両掌をつくと

「ありがとうございます。」「ありがとうございます。」

と、謝辞を二度も繰り返えしてしまった。福士は愛弟子の佐藤と、故里の後輩の志功とを紹介してよかった、と思った。互いに共鳴したらしいこの出会いに、「よかった。よかった。」と満悦した。折から、節目だらけの板

単語的存在

宮城　賢

十五年ものあいだ
会社づとめをしたことがあるのに
労働組合の経験がまるきりない
どの職場にも組合がなかったのだ
わたしは組合をべつだん否定しないが
下駄をあずけるようにじぶんの値段を
そしてじぶんの心を
組合にあずけるのはいやなだけだ
じぶんの値段を低すぎも高すぎもせずに見
　定めること
それは生きることの意味をおしえてくれる
　はずだった
そしてわたくしはボーナスがいやだった
あれは制度的に欺瞞で
（出すほうにも貰うほうにも）
わたしたちの値段を景気の関数にしてしま
　う
組合にもボーナスにもいっさい無縁で
いまは一語いくらで食べている
冠詞のaも
名詞のelectrophotographyも
おなじ値段で計算される
それ！値段は長さや位置できまるのでない
一語のもつ意味や機能できまるのでもない
たゞそれが一語であることによってのみき
　まるのである
そしてそれらが相集まって
文すなわち思想を
無数のパーツが一個の完全な機械を形成す
　るように
形成したときはじめて
わたしの一語々々は支払われるのだ
欠陥商品を買いたくないなら
欠陥労働を売ってはならない
むろん一語々々はその支払いの保証を
景気の変動に左右されなくもないが
値段じたいはけっして左右されない
また左右させもしない
わたしは成員一名の組合員
それはちょうどわたしが日々書く文のなか
　の
単語の存在とまったくおなじにすぎない
そして語はいつかかならず値段を超える！

塀の向う、他家の満開の桜が眺めやられた。

「佐藤、棟方の両君！　感激とは万朶の火華。」

と、莞爾として呟いた。

2　柳宗悦との出会い

志功が「大和し美し」を出品したのは、福士に伴われて佐藤を訪問してから丁度三年目の、昭和十一年春の国画展だった。その開会前日、作品の陳列でごったがえしている版画部の会場で、工芸部の審査員である陶匠・浜田庄司は、志功が現れるのを心待ちに待っていた。と、いうのは、昨年も会いたいと思いながら、つい会いそびれたからだった。

昨年の志功の出品作は「万朶譜」だった。〈感激とは万朶の火華〉と、佐藤との出会いを祝福してくれた福士の句を、そのまま四季の花——「桜」「松」「竹」「梅」「菖蒲」「藤」「菊」に当てはめたような作品だった。浜田は、七枚からなる火華のようなこの「万朶譜」に、どこかしら宗達や光琳のパターンを感じた。いや、宗達や光琳より少し騒々しいけれど、それだけにダイナミックな迫力があると思った。もし、このまま自分の大鉢や角皿に写せたら……という、一種羨望とも、嘱望ともつかぬ思いで、「万朶譜」の前に釘

付けにされたのだった。そして、この作品で会友に推された棟方志功という奴は、一体どんな人間だろう？　という興味を抱いたのだった。つまり、丸々一年がかりの関心で、今年の出品作「大和し美し」の前で作者を待ち受けているわけなのだ。

「万朶譜」は七枚一組だが、「大和し美し」は二十枚一組である。従って、昨年は一つの額縁に納ったが、今年は二つの額縁にやっと納められ、重ねて壁にもたせかけてあった。そこに、紺絣にハナダ色の兵児帯をした小男が、右往左往していた。分厚い眼鏡をかけた顔は汗みどろだった。

「なんとかならんか？　なんとかならんだろか？」

と、ぶつぶつ呟いていた。彼は壁に立て掛けてある雑多な額縁の中から、目印の付いた特殊なものを選びだし、それを運んでは戻ってきた。

「なんとかならんだべか？　なんとか……」

と、戻ってきては呟いた。椅子に掛けて「大和し美し」の作者を待ち受けている浜田は、ウロチョロするこの小男に小うるささを感じた。

「おい！　君！君。いったい君は何をしてるのかね？」

と、訊ねていた。小男は、意外な所に監督者を発見したように、吃驚して停止すると、

「私は落選係であります。」

といった。落選作を搬出口に運ぶ役で、それはもっぱら会友達の担任だった。彼はここで急に泣きべそをかくと、二つに重ねた「大和し美し」を指さし、

「このうち、一つの額縁は持って帰えれというのです。」

と、訴えた。彼は二つの額縁を横にならべて見せると、この作品は一つの詩から構成されているので、どちらの額縁を除いても、シンフォニーは成り立たぬゆえんを説明した。美夜受、弟橘、倭のどの姫が欠けても、「大和し美し」にはならぬと嘆いた。浜田は、「こ奴が棟方志功だったか……」と、少女のようなハナダ色の帯をしめた、意外な父っちゃん小僧に、微苦笑を禁じえなかった。それにしても、なんという化物のような作品だろう。まるで経文のようなだらだら書きの詩句の中で、尊は剱をふるって舞い、姫たちは悶え、或いは身を投げ、又は心ならずも誘っている。これは調和のとれたシンフォニーどころではない。まさに詩と絵との野合だ。それとも文字と版画の姦通だ。そう、浜田は身震いのするような感動を覚えた。なんとしてもこの化物を、盟友、柳宗悦に会わせたいと思った。

「先生！　なんとかなりませんか？　なんとかしてください！」

と、志功は、浜田を、他の部の審査員の一人だと直覚して喰い下った。寛次郎の湯呑を、高島屋で月賦にさせた、あの執念である。

「先生になんとかしてくださる力があるはずです！　助けてください。なんとかしてください！」

と、志功は叫んでいた。

「誰が、持って帰えれなぞと、怪しからんことをいうのだ？」

「事務局の方です。」

「よし……」

と、浜田が椅子から立ち上ったところに、「ヤァ……」と、長身、着流しの五十がらみの男が現れた。鼻下に蓄えた髭が整った目鼻立によく似合った。元『白樺』同人、民芸運動の盟主・柳宗悦だった。

「ちょうどいいところで出会った。」

と、柳と浜田とは異句同音にいった。柳は、目黒西駒場の自分の邸前に建築中の日本民芸館が、十一月下旬には竣工するだろうという見込みを、浜田に知らせる義務があった。と、いうのは、棟梁の磯部文吉は、栃木県益子在

の浜田の紹介だったからだ。それに半年後に開館する民芸館に展示する民芸作品は、まだまだ数が足らなかった。その蒐集の相談もあった。大きく鋭敏な柳の眼は、浜田の注意喚起をまつまでもなく、眼前の「大和し美し」に眼をつけた。彼は「うーむ」と唸った。二つの額の中に収められた二十枚の版画。そのどの一枚からも、経文のような文字が、まるで煙のように立ち昇っていた。いや、陽炎のように生暖い焔になってゆらめいていた。そのゆらめきの中に、顔を覗かせている尊や、姫達や、鷺や、鴎や、梅などが、あたかもタンポポや、スミレや、レンゲや、ツクシや、イヌノフグリのように咲き乱れていた。どこやらしらから土の匂が漂ってくるような気がした。まだ荒削りであることは否めないが、紛れもなく日本の風土が生んだという、土着の感覚が感じられた。日頃、念願とする Folk Craft、そう呼ぶにふさわしい息吹きのようなものを、柳は「大和し美し」に感応した。

「ふーむ。まるで化物だナ……」

と、柳も浜田と全く同じ述懐をした。その同じ述懐に、満足したように浜田は微笑むと、

「この二つの中の一つを撤収しろと、事務局はいうらしいぞ。」

と、いった。

「なぜだ？」

「例の嫉妬さ。低調な連中の……。壁面が足りなくなるという理由だろう。よくある手さ。」

星の子

中野僖子

夜がやってくるのは
くろいビロードのふろしきが
空を　すっぽり
包むからなのだと
次郎は　ずうーっと信じてきた
犇めく星らは
そのふろしきの穴なのだ

だから　今夜も
次郎は眠れないで
星のむこうの穴を覗く

たどたどしい
いいわけなど
のどちんこにぶらさげて
次郎は　こっそり
ビロードの夜をぬけだす
ひかりのトンネルを

くぐりおわると
そこからは　大人の知らない
淋しい宇宙が
しんしんと息ずいていた

だんまり　次郎は
たちまち
億年の光野に迷い込み
泣きじゃくりながら
そのしなやかな
ぎんいろの涙の軌跡で
みえない星屑のいのちを
つなぎはじめる

どこかふかい空の窪みで
見知らぬ小さな星が生まれ

あけがた
ためらいがちにめざめ急ぐ
幼い次郎のなかを
清冽な
〈星の子〉への憧憬がはしった

「壁面が足りぬなら、上下二段に並べたらいい。」

その柳の提案で、二人は言い合わせでもしたかのように、掛合いに、事務局に出向いていった。この想いがけない拾う神の出現に、志功は喜んだ。しかも、神は一人でなく、二人である。まさに鬼に金棒といっていい。爆発しそうになる感激を拳に握って、掛合いの結果を待っていた。高島屋で月賦の裁定を待った、あの期待と危惧のこんぐらがった心緒だった。落選係の任務も忘れてつっ立っていた。やがて、拾う神二人が帰ってきた。先ほど声をかけてくれた、土塊の権化のような渋い神がいった。

「安心したまえ。二点とも陳別していいことになった。」

志功は「ありがとうございます」と三拝すると、その場に踊り上って喜んだ。その興奮が鎮まるのを待って、今度は、羽織に着流しの、どことなく品がある方の神が話しかけた。

「棟方君。壁面が狭くて上下二段になるが、まア我慢し給え。国展がすんだら、今度は手足を充分伸ばして展覧される場所を提供したいと思うが、どうだろう？」

と謎めいたことをいった。その言葉を引き取つて、先の土の神が解説した。この親切な提案者は、誰あろう柳宗悦氏。かくいう自分は工芸部の浜田。秋に竣工する予定の駒場の日本民芸館で、この「大和し美し」を買上げたいと思うが、いくらで譲ってくれるか？ という商談になった。柳と浜田は掛合いにいってる間に買上げの話もまとめていたのだ。

志功は茫然とした。二段掛けであれ、「大和し美し」が完璧な姿で陳列されるだけでも感激だったのに、夢想もしなかった買上げの感激が追加されたからだ。しかも、柳宗悦といえば、ゴッホの「ひまわり」以来馴染みである「白樺」の、畏敬すべき先達の一人である。公卿さんや爵位のある方々と一緒に、まさに雲上の人である。その雲上からの声掛りである。志功の感激を握りしめた両の拳はじっとり汗ばんでいた。日本民芸館とは、日本では初めての民衆の工芸を中心にした真・善・美の殿堂で、古い物では清盛が神戸港を作った時の「月島絵巻」から、新らしい物としては志功の「大和し美し」までを、展示したいという、ありがたすぎて夢のような話だった。

「ところで、会場値はいくらに付けているかね？」

と、浜田が商談を現実的に切り出してきたので、志功はやっと我に返った。

「会場値？」

宮城賢詩集 ¥1300
解説・吉本隆明
国文社

詩集インド ¥1300
平光善久
不動工房

王朝女流文学史 ¥650
清水文雄
古川書房

新版 日本の芸術論 ¥600
安田章生
東京創元社

苛烈な夢 —伊東静雄の詩の世界と生涯— ¥240
林富士馬・富士正晴
社会思想社

深海魚

高梨一男

おまえはいざなう
妖しい微光をまとい
ひらひら尾鰭をそよがせて

——水面下三百メートル　五百メートル
千メートル

暗く暗く己は沈む
もう全く陽光の射さぬ深海成層へと
そうしておまえの肢体は
いよよ軟らぎ弾むのだ

「そうだ。正札はいくらで、いくら割引きをするかということだよ。」

と、先輩の解説は具体的であった。

「七百円です。どうせ売れぬと思ったので思い切り奮発しました。」

初心らしく志功の返答は正直だった。瞬間、柳は心もち顔を赤くすると、

「君。すまないが、二百円しか準備できないんだがね……」

といった。その尻馬に乗って、浜田は

「二百円也だ。それに、作品の他に、版木もおまけに付け給え。」

そう商談を抜け目なくしめくくった。

志功の脳裡に、昨秋生まれたちよゑを背に縛りつけ、六つになる長女けようと三つの巴里爾を連れたチャの姿が、忽然と浮かび上った。着換えのないカモフラージに、割烹着ながいの看護服をエプロンのように寝巻の上に付けていた。手にしているのは洗いざらしの不断着だ。いきつけの質屋にいくところだ。折悪く向うから大家の内儀が戻ってきた。チヤは恥かしさと恐れで身をすくめた。「襖はもう張り替えてもらったでしょうね！」。棘のある言葉が飛んでくること必定だからだ。そうだ。可愛そうなチャのためにアトリエを建てよう。坪三十円で、幾坪でもいい、誰からも文句のつけられぬ、自分の家を作ろう。万歳！ と、志功は今まで拳に握りしめていた感激の渦を解放すると、跳び上った。勢あまって志功は柳に跳びつき、その長身に抱きつくと、跳び上って髭でもペロリ…とやりかねぬ気勢だった。

「先生！ ありがとう。今に、今に、もっと立派な仕業を、きっと、きっと、やってご覧にいれますよ！ きっと！」

と、叫んだ。柳は抱きつかれたまま、微苦笑して辟易した。犬のような臭いがしたからだ。

「いいよ。いいよ。そんなにせずとも……」

と、なだめるより、他に言葉がなかった。志功は次で土の権化のような浜田に跳びかかった。抱きついた上に、彼の短軀を地震のように揺さぶった。

「このめごい親父メ！ めごい狸コ！」

浜田は揺さぶられながら、鉄砂茶碗のような大口を開けて、アハアハ……と笑った。それでも爆発した志功の感激を止めることはできなかった。彼は歓喜の奔流となって、作品の取り付け作業の始まった会場内を

「万歳！」「万歳!!」

と叫びながら跳び回った。ギャロップ風なケンケン走りだった。

聴鳥歌

吉本青司

ドウメンの丘をこえると
寒山と拾得がいた
麦わら帽子のひさしに右手をかけて
挨拶を送ると
二人とも立ちあがって挨拶をかえした
あごひげを生やした拾得がいった
＜散歩ですか＞
やせて背の高い寒山がいった
＜ここの空気は澄んでいます＞
拾得がいった
＜あそこに柿の木があります＞
寒山がいった
＜桜の木もあります　木陰が涼しいです＞
それから　三人は
柿わかばと桜わかばのみごとな木陰の
青草をしいて話をした
＜苺をたべたらおいしかった＞
と寒山がいった
＜あの丘のはじっこに苺の木がいっぱいある＞
と拾得がいった
＜あなたも苺をたべなさい＞
と寒山がいった
＜苺をたべないひとはつまりません＞
と拾得がいった
寒山が先にたって草の小径を歩いた
林をぬけると
丘のはじっこだった
なるほど　山苺の木がいちめんに生え
紅い星座のように実が点々とうれていた
三人はまるで幼年のように
はしゃぎながら
苺をちぎってはたべた
やがて　寒山と拾得は
＜どれ＞
と　眼下にひろがる山野を見下ろしながら
草を枕に横になると
＜ああ　いい気持ちだ＞
と　声をそろえていった
鴻のとりの形をした山が美しいので
スケッチブックをだして
写生していると　ついうとうとと
居睡りをしてしまった
ふと　目をさますと
寒山も拾得もいなかった
そこは
もとの柿わかばと桜わかばの木陰だった
それぞれの木の下に
こけむした石群がなかよく並び
コジュケイが
しきりにさえずっていた
なぜこんなに太陽は明るく
ほろびのあとを加餐するのか
青く風さえまた
見はるかす家並とはまったく無縁に
いや　はたして無縁なのか
対峙するものの去ったあと
ふたたび　対峙するものはあらわれる
絶対の恃依
はたして　ありやなしや
風ははげしく草の城をゆすぶり
大地を波うたせる
なみ
なみ
なみ
そこにうちふるえる小鳥たち
憂愁と　哀感と
失意と　翹望と　そして
花はさき
花はちる
久万城址で
過ぎさった日への哀惜が
そこにあそぶ
かやとよもぎと　えんどう草の
久万城址
山果の黄が　しめをつくる
ひかり
ひかり
ひかり

3　ハヤクコイコイクマノコサン

京都は五条坂に住む陶匠・河井寛次郎が、「バケモノガデタ　スグコイ」という電報を柳から受け取ったのは、それから間なしであった。どうせ日本橋の高島屋で開催される「陶硯百種類展」で上京せねばならぬところだったので、予定を多少早めて上京した。西駒場までくると、五百坪ばかりの土地に組み上った日本民芸館の太い木組みの中から、盛んに槌・金鎚・ノミ・鉋の音響が、まるで交響楽のように湧き立っていた。この工事場の真向い、道路を距てて柳邸が控えていた。日光街道の農家の長屋門を移築した建物だ。屋根はどっしりとした石屋根、大谷石の腰張りを回らし、門扉の両脇に、両眼のように格子の武者窓が突き出ている。仕上げはがっちりとした漆喰で、門というよりは土蔵といった造作である。華奢な京住まいに馴れている河井の眼には、まるで城廓の櫓かなんぞのような物々しさに見えた。

玄関に立っておとなうと、「おう！」と応答があって、玄関右手の事務室から書生が跳んで出た。洗いざらしの久留米絣に、疲れた小倉袴。書生にしてはトウが立ちすぎた三十三、四の小男である。

「唯今、先生はお留守ですが、どなたですか？」

と、年輩ではあるが、書生らしい尋常さだった。

「それは残念。京都の河井ですが……」

と、いうと、どうしたわけか、書生は上框まで跳んでくると、いきなり河井の両手を引っ捕えると、「ようこそ！」「どうぞ……」と無理無体に引っ張り上げてしまった。あまり唐突な動作だったので、雪駄のまま板敷に上ってしまった河井は、改めて雪駄を脱ぎ直さねばならなかった。そこに

「やあ、しばらく……」

と、浜田が事務室から顔を覗かせた。東京高等工業学校の窯業科、京都陶磁器試験所以来の古い馴染みである。それにしても、士そのものような浜田と、風変りなこの書生との組合わせに、妙なチグハグを感じて河井は椅子に寛いだ。すると書生は、いよいよこぼれるほどの微笑を満面に湛えると、河井に笑みかけてきた。けったいな奴だ。いや、どうやらただの書生ではない。と、思った瞬間、確かに何処かで出会っていることを思い出した。それは、いつ？　何処で？　何のためだったか？と、河井は牛のような眼をしばたたくと五年前の高島屋の個展の会場が思い浮んだ。

鉄砂花文湯呑に魅されて、月賦にしてくれと、赤目部長に火となって喰い下ったあの画学生だ。土師部冥利につきて泣かされたことも思い出した。約束が果たせぬ月末には、きっと長い詫状がきた。旅先から電報で詫びてきたこともあった。約束の月数よりかなり延滞はしたが、とにかく約束の金額を完済した棟方志功という男だ。間違いない。あの度のきつい眼鏡。同じ洗いざらしの久留米絣、同じ疲れた小倉袴……。そう、河井が気付いた時、浜田が

一紹介するが、こちらは国画会々友の棟方志功君だ。」

といった。すかさず志功は椅子から起立すると、

「いつぞやは、いろいろとご無理をかけました……」

と、頭を垂れた。

「なあんだ。先刻承知か……。これでは化物の正体がばれたようなもんだ。」

と、浜田は声立てて笑うと、柳と共謀して河井を呼び出したわけを説明した。つまり、志功の「大和し美し」を日本民芸館で買上げることを柳と相談して内々決定したが、大正十五年に高野山に籠って「日本民芸美術館趣旨書」を一緒に起草した河井同志の諒承が、ぜひとも必要だったからだ。柳は出先から直接府美術館へ回るので、これから一緒に美術館に出向いて、真に買上げるに足る化物性があるかどうか、判定してくれろというのであった。

国展の版画部の真ん中に据えてあった長椅子で柳はすでに待っていた。河井の姿を見掛けるやいなや立ち上ってきて、

「どうだい。見渡したところ、作品と呼べるのは、あれだけじゃなかろうかね？」

と、ステッキの先で、二段掛けになっている「大和し美し」を差して先手を打った。

「いや、河井は棟方の化物性は先刻承知だった。」

と、浜田は電車の中で聞いた、月賦ですでに五年前に結縁していた志功と寛次郎の仲を披露した。

河井は「大和し美し」に直進した。二つの額縁に収められている二十枚の版画をまず大観してから、詩の好きな彼は丹念に佐藤一英の詩を読み、そして挿絵のように挿入されている志功の図柄を鑑賞した。そして十八、九枚目、「身裏（みうち）」「幾山河」の柵に至って、ぴしゃり！ と上腿を叩いてしまった。志功の化物性を発見したからだ。即ち、小母倭姫に尊が感応する〈お身の御衣裳にわが妹の肌をたのしむ夫の心を感じ始めぬ〉〈呪ひやいかで免れむ〉の条は、六つの円の中に、まさに克明に、生々しく、しかも経過的な正確さで、描かれているからだ。第一円では、尊は情欲の振起に自ら驚ろいている。第二円で、姫はおうらかに豊かな胸乳をあらわにして自ら覚らずしてそそっている。第三円に、姫はただならぬ予感に驚ろいている。第四円で、姫はついに尊に組み敷かれている。第五円では、意馬心猿の尊の表情が大写しになっている。第六円は、夫のようにまさぐる手を、卍にして回転させている。この無法と法外さは、まさに紙芝居にした原始的な春画だ。これはなんという気高い無礼だ。なんと芳（かぐ）わしいインチキだ。なんという猥藉で不逞な表現だろう。修羅と天人とがどうしてこうも交われるのだ？ そう、河井はあきれかえったり、感嘆したりした。

いつか柳が傍に立っていた。

「どうだい。民芸館の宝になりそうな化物だろう？」

と、いう彼の言葉に、

「そう、まさに化物だ。神や仏さえ化かしそうな化物だ。」

と、河井は「大和し美し」の買上げに全面的な賛意を表していた。

3　松絵大鉢の教え

「大和し美し」が日本民芸館に買上げられた事実は、その半分の持ち帰りを命じた権威主義的なアルチザンのボス連中に、一種の衝撃を与えたことは否めなかった。それでも、展覧の会期がすみ、いよいよ柳邸に届ける段になって、平塚運一だけは師匠気取りで、志功に色々と注意を与えることを忘れなかった。というのは、彼自身、志功の不遜な言葉に度胆を抜かれたり、大事な用紙にツバキを飛ばされた経験があったからだ。

「いいかね。柳さんは上流階級の出だから、言葉ずかいも失礼にならぬよう、気をつけるんだよ。マイネなんぞといったらマイネぞ。それから日本手拭を忘れぬように懐中に用意し給え。なにかを拝見する時には、息やツバキがかからぬように、鼻と口とをそれで押えるのだ。それから足の配りにも気をつけるんだぜ。なにしろ国宝級の品物がゴロゴロしてるんだからね……」

「大和し美し」「身裏」の一部

と、細微にわたった。志功は珍らしく殊勝に先輩の注意に、一つ、一つ、うん、うん、とうなずいて見せた。すでに過日売約が決った瞬間、当の柳の胸ぐらに犬のように跳びついていたからだ。それに柳邸の玄関では、河井を下駄ばきのまま引っ張り上げてしまっていた。今度は、有名なアルト歌手である兼子夫人にもお目にかかることになろうから、ゆめそこつにわたることがあってはなるまい。そう志功は自戒した。そして、硝子の部分を腹合せに一つに束ねた額を風呂敷にくるみ、それを得意のスタイルで笈のように背負った。西駒場の柳邸の城門のような玄関まで来た時には、すでに全身汗みずくであった。笈を降ろすと、胸毛の覗いた胸板の汗を拭い、ずり下った袴を直して、心を落着けるために、三回深呼吸をした。向いでは、「大和し美し」が陳列される民芸館は、槐、鉋の盛んな交響楽裡に建ち上っていた。志功はニンマリ頬笑んだ。人生最良の時を感じたからだ。ゆとりを持って呼鈴を押した。女中が顔を覗かし、入れ替りに現れたのは兼子夫人だった。女優髷でそれと知れた。志功は不忍池の弁財天を

直感した。あの不折邸のローマの臥女神にもし首があったら、こんな面輪であったかもしれない。麝香のような香気が霧雨のように降ってくるようで、志功は再たと顔が上らなかった。

「あいにく柳は不在でございます。ですけど貴方様がおいでになったら、お渡しするようにと、お金は預っております。どうぞお改めください。」

と、紙包を差し出した。志功はそれを戴いて一礼、そのまま懐中に収めようとすると、

「どうぞお改めくださいまし……」と、彼女は念を押した。志功は紙包を開くと、一枚、一枚、枚数を数えねばならなかった。大雅の代金を数えた松田の器用な手付きを思い出した。彼は親指と人差指をねぶると、紙幣の束を斜にしごき、繰るように内側に捻った。捻り終ったところで札束の姿勢を正し、そこで景気を付けるように、背にポン！ と爪弾(はじ)きを与えた。あの松田は何処にいったか？

「前身相馬方九皐」もどこを彷徨しているか？ と、思っているうちに、十円紙幣でかっちり二十枚あることを確認した。こんな大金を手にしたことは生れて初めてだった。急に恐ろしくなって、ワナワナと身が震えてきた。「まさしく……」と、志功がいおうとしたところで、背後から声が掛った。

「やァ、やァ、よかったよ、よかった。間にあってよかったよ。さァあがり給え。」

と、散髪屋から戻ってきた柳に、座敷に推し上げられてしまった。ワナワナは止まらなかった。それに脳天から湯気を立てて汗が吹き出した。それは顔面を流れるように伝うので、志功は掌で拭い、しきりに袴になすりつけた。ワだば、とんでもない所に、ヌケヌケとまかり出ているのではあるまいか？ 身も、心も、居るべきところにおらないのではなかろうか？ というインフェリオリティ・コンプレックスのせいらしかった。しかし、携行した「大和し美し」の包みは、現実に壁にもたせかけてあった。懐中には分厚い金包が現存していることは、着物の上から手を当てても分った。化かされても、化かしてもいなかった。すべてが、在るべき姿で、在るべき状態で、在るまでなんだ。そう落着きを取り戻した志功は、この時部屋の直ん中に、逆さにすればネブタの跳人の花笠にでも出来るほど大きな鉢が、でン！ と腰を据えていることに気が付いた。書道博物館のローマの臥女神に引き寄せられた時と同じだった。魅されたように志功は大鉢の方へにじり寄った。そして例によって、なめでもするあんばいに眼を近付けそうになって、「息をかけてもいけない」といった、平塚の忠告を想い出した。すかさず、ふところから日本手拭を取り出すと、口と鼻にフタをした。経二尺五寸はあろう見事な大鉢だった。谷でも覗く風情で眺め入った。クリーム色の荒い地肌に、くの字形に太い松が放埒不敵に生えている。屈託なく大様に伸びた樹幹が、鉢の円周と衝突したところで、こだわりなく枝を左右に分岐させ、そこから針様の葉群をそこここに浮かせている。鉄色の暢達した線描に、樹幹の部分にはイエロー・オーカーを刷き葉群にはサップ・グリーンの彩色を飛ばしている。野趣に溢れた清楚……。どうやらこの国のものでない、舶来の風韻が感じられた。それにしても、鉢の谷底から吹き上げてくる颯々とした山風の涼しさはどうだろう。志功は思はず襟を開いて、胸毛を山風にそよがせたくなった。こんな山風はどこかで感じたことがあった。そうだ。八甲田の仙人岱だった。あそこでは山風は吹くともなく吹いていた。それは宇宙の呼吸のように自然であった。どこか、谷底の岩間から、神鷹が羽撃いて舞い上ってくるような気がした。この時志功は、頬にふと熱気を感じた。いつのまにやら柳も、志功と同じように鉢の谷底を覗いていたのであった。

詩経私鈔(五)

森　亮

閑居

山峽(やまかひ)ののどかなくらし、
よき人は心豊けし。
独り寝(い)ね、覚めて物言ふ、
おのれに誓ひてこを忘れじと。
丘のうへののどかなくらし、
よき人は心静けし。
独り寝ね、覚めては歌ふ、
おのれに誓ひて早や惑はじと。
野にかくれのどかなくらし、
よき人はうごかざるなり。
独り寝ね、覚めていねぶり、
おのれに誓ひて人には告げず。

五六番（衛風、考槃）。隠者の閑居するさまを歌ったもの。衛の荘公が賢者を野に遺した徳の無さをそしった民間の声といふやうに古来説まれてきた。

た。

「先生。この大鉢はイギリス製でしょうか？」

と、志功が聞いた。バーナード・リーチあたりの作品ではないかと想ったからである。

「いや、違う。日本製だよ、肥前の二川(ふたかわ)の窯(かま)で、昔うどん粉をこねる鉢だったのサ」

と、柳から意外な返事が返ってきた。

「うどん粉をこねる鉢？」

「そうだよ、美術品なんぞでなく、日常の生活の具だったわけだよ。この大鉢を作った者も、別にアーチストであったわけでなかった。ただのアルチザンだったわけだ」

と、柳の言葉も、あたりまえのことを、ごくあたりまえに語る、穏やかさだった。その穏やかさの中に、志功にはまだ汲みきれぬほどの深渕な意味が、含蓄されているように思われた。柳は言葉を続けた。

「君は青森の鍛冶屋の息子だつて浜田から聞いたっけが、君のお父さんが刃物を作るのと全く同じなんだな。この松絵の大鉢は、別に君にも、僕にも、感心してもらおうと作られた物ではない。ところが、今日、君も僕も、こうして感心させられてしまっている。これはどうしたことだろうね？」

と、柳の言葉は、いよいよ謎を掛けてくるように思われた。志功はこの世界的な民芸研究の大家が、さいはての青森では富士幸と名を売ったものの、やり場のない詰屈と窮乏に鞭打たれて、恵まれぬ五十六歳の生涯を果てた父幸吉を知ってくれていると思うと、つい目頭に泪が滲み出るほど感激した。今まで百姓鍛冶にすぎなかった父を、誰がこんなに認めてくれたことがあったろうか？ 志功は、いつか眼の前に出されていた茶をいただいた。分厚い茶托に、がっしりとした茶碗だった。菓子皿も、そんじょそこらの物と違っていた。ふと眼を上げると壁間に油彩の額がかかっていた。画面のいただきに烏帽子形の山が聳え、大半は裾野に拡がる高原の杜や、部落や、樹が、立体派と見えるほど荒いタッチで刷かれていた。見覚えのある風景だ。

「ありゃア……。こいだばセザンヌでねェだか？」

と呟いた。つい感動のあまり、禁断であったはずの、地の津軽弁コが一発出てしまったのだ。柳は髭の下の唇を微笑で綻ばすと

「そうだよ。サント・ヴィクトワール山だ。」

と、こともなげにいった。そして、「美校の入学には落第。サロンには落選。田舎画家にすぎなかつたセザンヌは、結局、気がきいた

アルチザンにはなれなかったが、野暮で立派なアーチストになったわけサ。」と、言おうとして、先の言葉と錯乱することを慮って、柳は胸に納めた。志功は、ここに在るものは、人も、心も、物も、それに空気でも、今まで自分が交渉し当面したそれとは、全く別格のものであることに気が付いた。それは何であるか？　はっきり言明できなかったが、「本物」が自ら体顕している品位、或いは「真事（まこと）」が自然に放っている光耀というものだろうと思った。なにやら四囲に広濶な展望がひらけてくる思いだった。

志功はこの訪問で、「本物」と「真事」の教えを得ただけではなかった。彼の版画に独特な風韻を後年加えることになる裏彩色のヒントを、柳から与えられたのだった。

「『大和し美はし』の時、着色の分を持つてきてくれましたが、又その着色法が小生の気に入りません。濃い不透明な顔料を版画の上から塗つてあるので版の線が埋れて見えません。それで私は絵具を裏から差すやうにした方が、更によいとの考へを述べました。棟方は又素直に之を受入れ、後年之を『裏彩色』と云つて凡てに用ひました。之は大変成功したと思ひます。」

（「棟方の仕事」）

おもうに、志功は黒白の出品作「大和し美し」の他に、表彩色を試みた分も持参したのだ。前者は日本民芸館の所蔵となるわけだから、別に柳家所蔵の分をサーヴィスしたわけだろう。一見、山だしの粗野奔放に見えるが、内面には心にくいばかりの繊細な気組を秘めている、彼の人柄がそこに如実に語られている。

応召日記 (七)

蓮田善明

十一月十二日

午前五時前又目がさめる。敏子と寝てゐた夢をみた。もう起きて朝の支度をしてゐられる、敏子へ書きかけの手紙を書き、九日からの日記をかく。便所に起きると、風があり、雨がふり、相当今日のトラックは寒いにちがひない。

冷風をついて山鹿につき、昼食後鍋田に至る。古墳を見る。本隊仲々来らず。そのうちN、O、M君に野戦命令来って、鍋田橋上に相別る。

山鹿附近の戦斗後十一時まで大休止。姉の家に御馳走になる、十一時近く、大橋畔にて待つ所へ、姉夫妻自動車にて来り、母の急をつぐ。同車して植木に帰り五分余、突然様子変りて息をひきとる。苦悩――長き〳〵苦悩の母の顔に死の安らかさが瞬時にして至り、もはやいかなる声もきこえず瞑せり。死によつて漸くこの苦悩を忘れえし母をみて慟哭を禁ずる能はず。時に十一時三十五分すぎ。

一時半ころ家を出てみれば、本隊は既に植木に着き休止中。合して野々島に至る。霜は銀の如く靴は土に凍りつく。立つてもゐても居れず将校斥候について出る。黎明まで村落田野を歩き廻りて寒さを凌ぐ。

演習後帰宅。敏子より帰郷するとの電報来れりと。敏子の心がひたと迫る。夜入棺、洗つてやると母くすぐつたさうなり、最終バスにて熊本にかへる。

十一月十五日

帰植。妻子供をみる。妻涙ぐめり。晶一「ピストルは？」ときく。太二はとんでよろこび「父ちゃン〳〵」と呼び廻る。一緒に風呂に入る。晶一やゝ痩せてゐる。何とかして強くならぬかと思ふ。いたましい気がする。太二は肥えて元気である。よろこんで走り廻り火鉢のふちで額をうち泣く。

二丁目に泊る。

斯う逢つてしまふと、生命の不安など一片の空想なりしがごとし。しかもこの応召後の余りの激変する生活と疲労とに眠たし。

十一月十六日

植木に帰らず。

十一月十七日

朝、起されても目がさめず。夕方帰宅すると敏子たちが来た。夕食後、出て千徳屋で妻の食事、子供らの遊び、玩具。帰つて太二玩具によろこんで仲々眠らず。

十一月十八日

敏子らついに又一泊。

十一月十九日

植木にかへる。長兄又もつまらぬことを言ひ出したとのこと。次姉は戸畑に行くことゝなる。次兄の健康も気づかはれる。二丁目に泊る。

新潮選書
詩人伊東静雄
小高根二郎
¥550
新潮社

十一月二十日

植木にかへる。次姉の話をきめ、二丁目にとまる。つかれきつて敏子と話もできず、可哀想である。ぼんやりして眠つてしまふが、或はこれが最後の一夜かもしれぬ。遂に眠つてしまふ。敏子はもつと心残りがあつたらしい。朝目がさめてから、遂に敏子泣く。「生きて帰つた時僕は泣く」と自分はいふ。自分は最後に、敏子にもう一人子供を生んでもらひたいといふ希望をつげる。敏子も承知する。敏子よ、お前に苦労を追加するやうだが、私とお前とをここで又しつかり結び、二人の結合したいのちを創り出しておきたいのだ。私はお前が妊娠することを切願する。

バスの窓に、後に消えてゆくお前の白い顔をわたしは目尻に求めつゝ別れた。後で

遺言 (二)

田中克己

おまへが生れたのは昭和十八年九月二十二日で、産褥にゐる母に代ってわたしが抱いて寝た兄の梓は疲労で、三日目の二十五日に死んだ。おまへの名はそのまへにつけて弓子とした。兄貴殺しと笑談でいった由だが、わたしは茫然と日々を暮し、空襲も召集も戦死もこはくなかったが、おまへへの愛情は薄かったと思ふ。中国から帰還しておまへが可愛くなってゐるのに気がついた。お姫様のやうな顔だといはれたが、今の流行ではないやうだ。おまへはおとどし一月に地下鉄の技師と結婚し、十二月に長男を生み、今年の四月また男の子を生んだ。長男は大きな眼をしてまだ歩けないが、二、三日前に訪ねると二足歩いてみせた。ちぢに似て運動神経が鈍いのかもしれないが、心配はない。父と同じく工学をやらせてもよいが、頭はどうかな。兄弟仲好くして平和に暮せるやう、おまへたち夫婦にも望むのだ。米ソ協定がけふ発表されたが平和はつづくか。わたしはおまへたちのためにも祈る。

又淋しくてたまらなくなるだらう。

今日は午後再びお前は立ち別れゆく。

応召――演習――母の死――生きて再び妻子と逢ふ――家の紛糾――下宿への引き移り……すつかり疲れた。何の意志も起らぬ。まだ出さぬ挨拶状に気にかゝるのみ。

下宿の第一夜安眠せず。朝目ざめがち。風邪少し。

十一月二十二日

今日は午前午後中隊の兵器検査で寒い部屋にブラ〳〵して苦痛だつた。四時半漸く帰宅、夕食後内?坪井にゆき、又ババサンの家に行く。帰つてねる。ねる前に――この日記を十二日から書く。

「大化改新の文字」への意欲やゝ復活す。明日は数嘗祭で休み。ゆつくり眠よう。

十一月二十三日

長兄と沼山津の兄嫁の家に行く。長兄くど〳〵次兄や姉を詰るが如きことを語る。いづれにせよ穏かにしてゆくことがよいと答へる。とにかくこの一点で行くよりほかない。

沼山津で横井小楠の墓に詣づ。

食欲がなくなつてしまつて昼食をやつと一杯くつた。此頃の大食（といつても三杯だが）に対してやゝ気持わるし。酒も水の多いやつでのめたものではない。何一つ愉快なことなし。険と愚とのみ。三時すぎ辞し、帰熊し、矢野少尉を陸軍病院に見舞ひ帰途、T館で「鶯」と「三文オペラ」をみる。「鶯」佳。「三文オペラ」全く汚く下等なり。十時すぎ帰宅。遂に夕食をくはず。飯よりも心の淋しさ。敏子も今頃こんな淋しさにないか。いのちが恋しい。いのち、いのち。

十年前のねんざ又起つたやうだ。

十一月二十四日

今夜よりT少尉と交代して週番士官。T少尉らは阿蘇方面現地戦術で出張である。自分は教育掛のため行けず。

十一月二十五日（金）

河内に行軍。秋色酣なり。七時半出発、六時前に帰隊、幸ひ落伍一名もなし。一中隊の一名のみ帰隊後に倒れた。行程十一里に及ぶべし。愉快なる行軍であつた。

しかるに帰隊夕食の冷きを喫したる所へ、H上等兵の窃盗未遂捕へられて来り、それより取調べ、その他で十一時近く。

編集後記

五月一日。夜行で新潟の新津に着くと、降つていた雨は止んでいて、駅頭に孝順寺の住職渡辺真氏の出迎えをうけていた。彼の運転する自動車で、水原を経て保田まで二十数キロ、四十年前に横方画仙が通つたと同じ道を、わざわざ旧街道を選んで案内してくださつた。孝順寺は四千坪の邸で、もと越後第一の地主だつた斎藤氏の大邸宅である。先代の梵妻さんもそこで一緒になり、部落のはずれにある元孝順寺跡と墓地とを案内してくださつた。その風景は一九五号の拙論「恩人島丈夫の父みつかる」に描写したとうりだが、改めてお二人に感謝を申し上げる。

十四日。京都五条坂の河井家をお尋ねし寛次郎未亡人つねさんから、三十数年前に横方画仙が滞留した頃のお話をうかがつた。とりわけ拙文中でつねさんが使われる京言葉について、叱正をいただいた。出先から博次夫人も戻られて、お二人の相談で、私が勝手に綴つた京言葉を、まつとうなそれに校定していただいた。その後拝眉の機を失しているので、ここから深甚な感謝を申し上げる。

十五日。小島吉雄博士から、一九五号の河井寛次郎師匠の鉄砂花文湯呑を月賦にした件に感銘をしたの旨のたよりをいただいた。同じように寛次郎師匠の人情味にホロリとした由、殿岡辰雄、川上澄生、高藤武馬諸氏からもたよりを頂戴していた。

二十五日。蓮田敏子さんから、大阪府庁に勤める三男新夫さんの所にきている旨の電話をいただいた。お元気を祝福する。（O）

果樹園 第一九七号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年七月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 八〇円 送料 三〇円

果樹園 一九八号 昭和四十七年八月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価八〇円 送料三〇円

果樹園

第198号

画仙・棟方志功(大) 小高根二郎
遺言(三) 田中克己
む ら 吉本青司
ゴルフとパチンコ 宮城賢
夏の音 中野信子
晴雨計 高梨一男
詩集を編むの記 森亮
応召日記(八) 蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(大)

―その画魂の形成―

小高根二郎

5 熊の子京へ上る

陶祝展がすんで京都へ帰る河井が、志功を連れていくことになつて、「クマノコトユク」という電報を打つたという逸話は有名である。物好きな寛次郎先生のことだ。ほんとに熊の子を連れて戻るに相違ない……というわけで、甥の河井武一が近所の陶工二人を伴つて京都駅頭に出迎えた。ところが熊の子は、久留米絣を着、小倉袴をはいていたというので大笑になつたという話である。この話は、志功自ら生彩ある筆致で「板極道」に活写しているが、河井未亡人つねの語るところによると、それはフィクションか、それとも誤伝が志功を乗取つたのだろうということである。その理由は後述するが、西下する車中で、志功は妻子に対して自分の身勝手を「ご免してケレ」と詫びたことだけは事実だつた。

そもそも志功が河井に随行することになつたのは、柳、浜田、河井が連れ立つて、「大和し美し」以前の作品を見せてくれと、大和町の志功宅を訪問したことがきつかけだつた。志功にしては身に余る光栄で、家をよそいきに化粧した。例の雪隠観音には上から画仙紙を鋲留めにした。蛸襖は取りはずして片付けた。チャにけようとちよるゑを連れさせて、近所に住む青森出身の詩人桜庭芳露の家へ待避させた。つまり、三人の来客の関心を、もっぱら作品へ集中させる作戦だつた。作戦は図に当つた。彼等は百二十号以下の作品群に気を取られた。志功が油彩で二度も帝展に入選してる前歴も初めて知つた。帰りしなに柳が、「棟方君。君はいま一番なにが欲しい?」と尋ねた。

「無性に仏像が見たいです。」

と、志功は答えた。

「仏なら奈良だな……」

と、河井が誘つた。

「いや、私は京都が見たいです。」

と、志功がいつた。

「なに京都? 京都ならただみたいなもんだ。河井は明日帰るそうだから、ついていけよ。」

そう、浜田がその会話をしめくくつた。

そのしめくくり通り、「では…」と、いうことになつたのだつた。ところが、話があまり急だつたので、志功は残る家族に、なにの段取りも取つてやれなかつた。「後はまかしておいてケサイ」とチャはけなげに胸を張つたので、志功は車窓の人になつたのだつた。西下する窓外に蓮華が美しかつた。河井は静岡で蜜柑を買うと、「青森じゃア、南国の果物のほんとの食べ方を知らんだろ。」と、食べ方を教えてくれた。「袋の薄い真中をちょいとつまんでなァ。こういうぐあいに、ヒョ

ィと口に含んで、しごくように唇で絞って、実と汁とを食道へ落とすんサ」。そう、小学生にでも教えるように懇切だった。志功はその言葉どおり、分解的手法で果汁を呑み込んだが、誤って気管にも吸い込んでしまった。当然のことむせかえった。いや、むせかえるのが当然だった。心は空で、志功は家のことばかり心配してたからだ。ワの留守中、チャと子供達はどして暮してゆぐべか？　それにつけても三先生の来訪時、体のいい独身を装って、妻子を桜庭へ追いやったのが、そもそも誤りの始まりだった。罰当りだった。

「未だ、わたくしはチャコと夫婦になっていること、子供があることも知らせていなかったのでした。仕事も何も出来ないくせに、子供があるなどということを、この先生方に思われたくなかったのでした。力の足りない自分を、力の足りないままに見ていただきたかったのでした。自分本位ばかりの、わるい考えばかりで、チャコにも、子供たちにも、本当の感心出来ない、嘘つき者のわたくしだったのでした。――家のみんな、ごめんしてくれ――ごめんしてください――今ごろ、食べるものもなく、焚くものもなく、灯もないところに、子供を抱いてチャコがどうして何日間を暮して行くだろうかと想いつずけるのでした。」

（「板極道」）

浜名湖を海だと間違えて河井に笑われた。日本武尊ゆかりの伊吹山には、なしテこした愛ごい山コに、あたら英雄が死ななくてはならなかったのだべ？　と、反射的にお国自慢の岩木の峨々とした山容を想い浮かべているうち、京都に着いてしまった。

河井の鐘渓窯は市電を東山は馬町で降りるとすぐだった。登窯を背に、三軒長屋二階建が一括、河井宅だった。当てられたのは、二階の格子づくりの古めかしい書院風な部屋で、陽が射さぬそこには、どことなく黴のにおいが籠っていた。バーナード・リーチが永らく住んでいた由緒ある部屋の由で、彼が考案した英国農家具風な椅子が四脚、白のようにわだかまっていた。「暇な時には、これでも読んでみたら、どうかな……」と、案内した河井は、古びた「碧巌録講話」上下巻を、机の上に置いていった。錆びたサップグリーンの表紙に、鳳凰と仏桑華の模様が金で帯状に押印されてあった。

明ければ快晴だった。案内役はつね夫人の担当だった。彼女はもともと、祇園さん、春日さん、二条城、出雲大社などの門を造営した宮大工、三上直吉の娘だったので、打って付けの役だったわけだ。恩賜博物館は隣組。三十三間堂、知積院は指呼の間だった。しかし参観時間にはまだ間があった。いや、彼女の足は自然、清水寺の舞台へ向いていた。と、いうのは、昔彼女はそこで、陶磁器試験所をやめて一本立ちしたばかりの寛次郎と、見合いをしたゆかりがあったからだ。これから一本立ちになろうという熊の子・志功にとっては京第一番の札所であらねばなるまい。そう、判断した。舞台はすぐだった。家の近くを流れる牢の谷のせせらぎを千メートルも遡れば、すぐ舞台下に辿り着ける。土産物屋が並んだ五条坂より、近道な上に、勾配もよほどなだらかだ。仕舞屋の通りを抜け、一カ所だけ石段を上って緑陰を縫っていけば、いきなり舞台下だ。案の定、「ありゃァ！」と志功は舞台を見上げて息を呑んだ。長大な十九本の主柱に、百三十九本の丸太が、十字と斜十字で見事に組み上げた天の舞台。左右に翼廊を従えた本堂の桧皮葺・宝珠形の大屋根は、背景の翠巒・音羽山の柔和なカーブに調和してみやびを極めていた。水あさぎに明けゆく空。これこそほんとの晴の舞台だ。「ワだバ、あの貫コを一つ、一つ、攀じて、きっとあの高みまで登ってみせる！」。そうした感動を、志功の眉字に読みとった夫人は、ま

ず一番に舞台下に案内してよかった……と頬笑んだ。音羽滝から奥の院前を過ぎて、丁度、観光の逆コースで舞台に上った。本堂の前で掌を合せてから彼女は、

「この清水さんをお作りやしたのは、坂上田村麻呂将軍やそうどすエ。」

と初めて解説した。つまり、田村麻呂の居宅を移して仏殿にし、桓武天皇から賜った長岡京の旧紫宸殿で伽藍を造営したのだと、父直吉から聞いた話の請売だった。

「ありゃァ！」

と、ここで再び志功は仰天した。その田村麻呂は、故里のネブタの生みの親だったことを思い出したからだ。

「内陣へ上らしてもろテ絵馬をお見ャス。田村麻呂はんが奮戦しておいやすエ。」

と、夫人は先導して雪駄を脱いで内陣の板敷に上った。上梁には巨大な絵馬と扁額がずらりと並んでいた。どれもネブタのように巨大だ。浮彫りの神馬。法眼春卜筆の大森彦七鬼女を負う図。末吉・角倉両家が奉納した賑やかな商船渡海図。白隠禅師筆の「慈眼視衆生、福聚海無量」。問題の、海北友雪が描いた、二三千号はあろう雄大な征夷将軍奮戦の図は、逆光の内梁に掲げてあるので、弱視の志功にはもうろうとしかうかがえなかった。それがよほど残念だったかして、田村麻呂が蝦夷を威嚇するため、お化け万燈のネブタを発明した由来や、名人だった忠太郎オンチャのことや、その制作の助手をしたことなどを、志功は熱に浮かされたように語りかけた。

「そいやッたら、清水さんも青森さんも、いや、棟方さんも、もともと親類どしたんャおへんのどすやろか……。」

と、妙に夫人の方も感じ入ってしまって、仁王門を出たところにある忠僕茶屋へ志功を案内した。（事実、藩祖津軽為信は死で京都に結縁していた。老来病を得た彼は、治療のため江戸でなく京に上った。そして仏師に肖像を彫らしてから山科の刀鍛治の家で没した。彼はさいはての藩主としてのコンプレックスから、強く熱い京都憧憬を抱いていた証拠だ。この為信の血筋は、やがて津軽・近衛両家を姻戚で結んだ。）そこで緋毛氈の床几に大阪に移って大きくなり、兄姉のなかで二人めの幼稚園通ひをした。何もいはず仲間はづれだったやうだね。小学校はわたしの恩師（中学の数学の先生）の園長をしてゐる四条畷学園に入れたが、徳庵駅の渡り橋の蔭にかくれてゐたね。おまへはもう成人して電話をかけるのが旨く、字も兄姉より上手だね。末っ子のおまへには恋愛を許すから相手を見つけろよ、とこの間いひわたしたの本気だ。学校など気にしないで、男らしい男を見つけろよ。最後までゐたのでこの家はおまへにやるが、その分だけ遺産分配からさしひかれるよ。ソロバンもちと練習した方がよいね。父母に似ないやうにとの注文の一つがそれだ。

遺言 (三)

田中克己

おまへは九ヶ月で生まれ、育たないのではないかと思った。一月早かったので父は盥を買ひに走り（産婆はそれより前に来た。お巡りが来るとまだ名がなかったので、京とつけた。おまへは子がないのが不平のやうだね。亡くなったおまへの祖父が「克己よ、これでもう止めておけよ」といったので、おまへは末っ子で育った。おまへのおしめはわたしは五人の子のうち始めて洗った。湯ではだめだといふので京都上賀茂の冷い水で洗った。おまへは京都から

腰かけた二人は、もろもろの因縁を反芻するように、熱い甘酒をすすった。

「まだ醒めきらぬ町の静かな空気を吸って、静かに立ちこめるというのか、はれて行く霧の美しさを眺めるのは、なんともいいようのない想いでありました。囲いの中には甘酒が沸々と煮えたって、白い湯気を出して甘酢っぱい匂いがこぼれていました。

静かな朝でした。美しい朝の空気でした。甘酒をすすっていると、観世音の幻想が湯気のなかにあらわれてくるような気分にひたるのでありました。」　（「板極道」）

志功が甘酒の湯気に幻想した観世音に出会ったのは、翌日、夫人が案内してくれた御寺、泉涌寺でだった。清水寺より半道ばかり南、月輪山の静かな山懐だ。御寺と呼ばれているのは、明治維新の神仏分離で、今まで皇室で祀つていた歴代天皇の位牌や仏像を、代って供養申し上げてるからだ、と彼女は解説した。それに寺領内に、四條天皇以下十幾人かの天皇と、それに后たちの御陵もある、ということで、畏った志功の歩幅が急に狭まった。その緊張を解きほぐしでもするように、

「ところが面白おすやろ、御寺の門番さんは飛び切りの美人どすエ。」

と、彼女はいって、大門を入るとすぐ左へ、志功を誘った。ささやかな繁みの奥に御堂がある。観音堂だ。開けッ拡げた正面に、なるほど艶麗な美人が宝相華を手に鎮座している。緋と黄金色の華奢な光炎を背にした、昔は肌色だったに相違ないパープルに化粧した幽艶きわまりない観世音菩薩だ。

「楊貴妃観音とおいゝヤスのどすエ。」

そう、彼女に紹介されたが、志功は掌を合わすのも忘れて、妖麗な容姿に見呆けた。有名な浄瑠璃寺の吉祥天女よりもぽってりと肉感的で、中尊寺の人肌の大日よりも貴族的でエキゾチックだ。あの天女、大日ともに切れ長の双眸を久遠の明知で見開いているが、この楊貴妃観音はものうげに重く目蓋を伏せて、返らぬ昔を永遠に沈思しているかのように見受けられる。その沈思のあでやかさを象徴するように、観音の冠の上に重ねた宝冠は、宝相華の浮彫で、金、臙脂、エメラルド、紫、白に彩色されて、さながら頽唐の春の花束だ。志功は彼女に見呆けたあまり、侍立している羅漢たちを、うっかり見落すところだった。

寺伝によると、この楊貴妃観音像は、安禄山の乱で触発された親衛隊クーデターで、心ならずも妃に死を賜わねばならなかった玄宗皇帝が、冥福を祈って面影の坐像を彫らせたものだという。鎌倉時代に僧湛海が寺宝の仏牙舎利と共に宋から将来したものだった。志功は、中国の妃と日本皇室の御寺の結びつきに、なにやら人為的なチグハグを感じた。折から桧の多い山で、カラカラカラ……と春蟬がせかすように鳴き立てた。まばゆい砂利を踏んで、志功は夫人について、仏殿から舎利殿、歴代天皇の位牌を祀る霊明殿の絵皮葺の屋根越しに月輪陵の杜を拝んだ。が、この時、先ほど感じたチクハグ感が、いつか霧散していることに気付いた。いや、やっぱし大門を番していただくのは傾国の美の祭神、楊貴妃に限る。それは知識でなく、ほとんど本能的な覚知だった。「善地に生を享けよ」。そう、妃の最後に餞けた皇帝の祈りと願いのまま、今彼女はここに生を享けているのだからだ。

むら

吉本青司

ドオメンのむらは
夏と秋とが同居している
かえるが鳴き
ほたるが飛ぶ六月だというのに
もう
むしが鳴いている
木訥な　あまり冴えない音いろだが
庭のくさむらで
RIRI　と
かえるのコーラスをぬすむように
鳴いている
かえるたちは
その声に　一瞬　耳をかたむける
と　むしもまた
鳴き声をとめる
静けさが
ドオメンのむらをつつむ

ほう——

猿石の下に
焼き瓦の祠を発見したときの
おどろき
ドオメンの丘には　もう
夏が始まっていた　そして
猿石はKAMIだったのだ
古代を奪還しようと　しばしば
丘の径をのぼったが
今日　ようやく
ドルメンを発見したのだ

木の葉たちは沈黙のうちに
物語をはじめようとして
風を待っていた
祠は　空洞のなかに宇宙をはらみ
前に立つものを
〈ほう〉と呼んだ

日　記

こんや　くいなはなかずにいる

くいな

くいなは敲く
鎖された夜のとびらを
今夜も星が　ドオメンの
丘をこえる

ことば

教室をボールが飛んだ
精霊のようなボール
ボールの中にはいのちがいっぱい
目から目へ
あじさいの花のように飛んだ
ぬれたガラス窓に
空が青くそまっていた

敬　礼

初年兵
ということばがあった
ぼくは　いつまでたっても
初年兵だ

三十歳で兵隊に召集されたときも
初年兵だった
輜重兵の襟章をつけて
いつも敬礼ばかりしていた

教育召集だったので
一箇月の訓練で帰されてしまったが
戦争が終ったとたんまた初年兵になった
それからもずっと初年兵だ

プシケでも
果樹園でも
いつも初年兵だった

「玄宗大息して『朕まさに処置すべし』といひ駅内に入つたが、佇んで室に入らない。それを見て韋見素の子韋諤が進み出て帝に決意を勧める。帝はやむなく駅中に入りながら妃の背を撫でるのみで物を云はぬ。そこで高力士が妃を伴うて傍へつれてゆき、くわしく形勢を述べる。貴妃は歔欷流涕して曰く

「願くは陛下おたつしやで。妾は誠に御恩を受くること厚く、死するも恨なし。たゞ乞ふ死に臨んで仏に礼することを許せ」と。

帝もまた高力士をしていはしめた。

「妃子、善地に生を享けよ」

と。こゝに於て力士は羅巾を以つて妃を仏前の前の李樹の下で縊る。」

（田中克己『楊貴妃とクレオパトラ』）

この御寺と異国の妃の因縁が、その日の夕食後、河井宗匠の禅と娘の因縁話につながったのだから、よくよく妙な一日だった。と、いうのは、志功を迎えたのをきっかけに、河井は碧巌録講話を開講したのだ。受講者は志功、甥の武一、鐘渓窯を利用している近隣の陶工、それに家人だった。もともと酒好きな寛次郎は、晩酌を傾けながら、酔いのまにまにシートンの「動物記」、ファーブルの「昆虫記」、「華厳経」の話などを、自分の考えも混ぜてするのを日頃楽しみにしていた。その酔余の座談を、講話にまで格上げしたまでだった。志功の部屋の机に「碧巌集講話」をわざわざ置いていったのも、この前触だったわけである。昨夜は第一則「武帝達磨問答」だった。寺造り坊主作りで鼻高々だった武帝が、どんな功徳があろうか？　と達磨に聞いたところ、功徳なんぞはありゃアせん！　と一喝された。さらば仏法の最高の道理はなんであろうぞ？　と問いかけると、仏なぞというものはありはせん！　と、またまた一喝された。むっとした武帝は、朕の前にいるのは何者ぞ？　と尋ねた。達磨は誰やら一向に知らんぞと答えると、武帝に真の仏法を悟る力のないのを見てとって、さっさと揚子江を渡って他国へいってしまったという、あの有名な説話である。

今日の第二則に出てきた説話は、「枯山寒巌に倚り、三冬暖気なし」だった。この説話は志功の胸に、生涯忘れがたい感動を宿したのだった。

「むかしシナで、ある若い修行僧を預っているお婆さんがあって、一人の娘さんをもっていました。僧は、毎日ご飯をたべ、寝泊りして寺へ参禅にゆく。そのうち大ぶん境界（きょうがい）もすすんだので、日本でいえば本山格の僧規のきびしい寺へ修行にゆくことになった。そのころシナでは、僧侶の結婚は自由であったと見え、その僧が出発に際して、お婆さんが傍らに、別れを惜しんで袖で涙を押えている娘をかえりみながら、

「このあわれな様子をみてやってください。ながいあいだ娘の素ぶりをみていたが、かわいそうなくらいあなたを愛している。せめて手でも握って別れてはくれまいか」

驚いたことをいう婆さんです。修行僧は、

「それどころではありません、からだをたとえれば、寒中の凍った岩に倚りかかる枯木のようなものです。今の修業真っ最中のわたくしには、そんな恋だの愛だのという生ぐ（なま）さい、温かな感情を支えるものなんか針先のところも持ち合わせません。どこにもなんにも持ち合わせない。〈枯山寒巌により、三冬暖気なし〉でございます」

これを聞くと婆さんが憤（いきどお）りました。矢庭に、

「なんたる人でなしだ。なんたる温味のない修行僧だ。わたくしは年々、いまに至るまで朝夕わたくしの気の届く限り心を尽して供養し、仏世界の微妙のところを、少しは生活の中に入れて貴僧に示して来たと思うが、なんという冷血な人だ。あんたのよ

ゴルフとパチンコ

宮城　賢

むかしスコットランドの山間の貴族たちが
たぶん山の生活の単調さから
それでひまをつぶすためにくふうした遊び
そいつがスコッチウィスキイとならんで
世界中のある種の人びとを征服して久しい
クラブでクラブを振る人たちよ
クラブでクラブを賞め合う人たちよ
良い空気と良い健康のほかに
きみらが欲しているものは何なのだろう？
政談やら商談やら放談やらか？
広大な緑の芝生のなかの小さな穴を
白い飛球でさがしまわる人びとよりも
方形の小さな盤面の多数の穴を
悪い空気にひたりきって
鉛くさい玉で攻めたてる人びとのほうが
わたしにはよほどしっくりする
一台のパチンコはときに人生と相わたるが
クラブはせいぜい人体のスタイルとしか相
　わたらない
スタイルやらステイタスやら……

最後の百円玉で穴をねらう者と
最後の一万円札で穴をねらう者と
しょせんおなじときみは言うか
スコットランドのものはスコットランドに
　かえせ
そうして盛り場の悪い空気のなかで
最後の百円玉をにぎりしめて
To do, or not to do?
と千々の想いに乱れてみたまえ
きみはよほど健康になるはずだ
（もしきみの欲するものが健康であるなら）
十五年まえ
一台のパチンコがわたしにそう教えた！
良い空気と
良い健康は
クラブの目的でない
ナイト・クラブと
カントリー・クラブと
そこで振られるクラブはみんな
ひとつの言葉だ
ひとつ言おうか
きみらは
良い空気と良い健康をさえ
ひとり占めにしたいだけなのだ！

うに、身もこころも冷酷な坊主を作ろうとわたくしは、家に泊めたおぼえはない。わたくしの恥かしいあやまりだった。期待に反した。そんな教え方をした覚えはない。仏道は気ばった気持をもっていては本ものではない。愛を土台にせねば真の仏に会えぬ。そんな仏知らず、人間知らずの人間を作ったかと思えば、このわたくしが、恥かしい。早くそっちから出ていってもらいましょう」

若い僧は、お婆さんの憎まれ口をあとにして、飄然と旅に出ました。それから何十年経ちました。お婆さんも娘も、坊さんの俤（おもかげ）を忘れてはおりませんまま過ごして来ましたが、ある日一人の和尚がたずねてきました。見るからに、頑丈で、これが先年この家から修行に出た僧でありました。よろこんで請じいれて、あつくもてなしました。さて、またお婆さんが、何十年か前にいったと同じように、娘の真情をくりかえしていいました。すると坊さんは、今度はにっこり笑って、誦むのでした。

「枯木倚寒巌　三冬無暖気」

けれども、前に語った言葉と、今語った言葉と、字は同じですけれども、内容はまるで違っていました。仏性を識り、それを忘

れ、また人間の喜怒哀楽を超え、性別を越えたことばであったのです。理窟でなく境界をゆく和尚の悟りが、その言葉のなかに湧き出ていました。お婆さんも娘さんも、言下に安心掌拝したのでした。（「板極道」）

こう、語り終った河井は、例の牛のような柔和な眼に微笑を浮かべて、自製の鉢に盛った故里の枇杷をデザートにすすめた。その果汁をすすりながら、宗匠らしく、結ぶともなく講話の心を結んでいた。若い時にはあせって、やみくもに自我を人に推しつけようとするので失敗する。それが円熟してくると、人を受け入れることを先にするので、事がうまく運ぶんだ。禅も仕事も変ることはない。それというのも、仏は一切の衆生も、万物も、細大洩らさず包んでおいでになるからだ。この鉢にも、枇杷にも仏はいらっしやる。だから鉢の内に枇杷があり、枇杷の内にも鉢がある道理だ。不肖河井の内に棟方君がおり、棟方君の内にも河井がいる。この重々無尽の縁起を知っていれば、なにも世の中にこだわるものがなくなる。宗匠得意の華厳経だった。志功は朝出会った楊貴妃と、今出会った坊主に振られた娘とが、心の中で妙にこんぐらがって感じられた。これも重々無尽の縁起だろうか？　そう、思った。

三日目の見学は、通天閣、豊公神社、将軍塚へ足を延ばした。禅話は「倶胝一指歌」だった。以後も大体同じパターンの毎日が一週間すぎた。朝になるときまつて鍵屋から注文取りがきた。「鍵」という字を白抜きにした紫の風呂敷の中から、古雅な蒔絵の重箱が取り出される。蓋を取ると、見た目にも美しい生菓子の展覧会だ。（さすが古藤が自転車で届けた餡パンと雲泥の相違だ）。河井はこの作品を審査して「これ」といって注文する。やがて届けられたその菓子で沫茶をすする。それが宗匠のお決りの朝食だった。初めは珍らしいと妙に感心した。慣れてくると、それは宗匠の一種のパターンであることに気がついた。変っているようで、実は河井にとってはステロタイプだ。版で押したような生活なのだ。そういえば毎夜の碧巌録も鼻についてきた。あれは縹渺としているようで、実は身心を緊縛するイズムなのではあるまいか？

そういえば、『碧巌集講話』の表紙に押印されてる鳳凰と宝相華の帯が、志功の五体を雁字搦めにからんできた。これはまさに蛇だ。この帯で第一則の武帝は縛られたので、むざむざ達磨大師に逃げられてしまったのだ。あの娘に惚れられた坊主だって、この帯につながれてるので、しょうことなしに戻ってきたのであるまいか？　いや、あの話はできすぎていて、それでどこやらチグハグで、どうやら寛次郎先生の作り話の臭気が強い。そう、懐疑しだすと、帯の蛇はいよいよ志功の全身を締めつけてきた。眼は充血した。息も苦しくなった。手足も痺れてきた。この時、忽然として胸に浮んだのは、あの楊貴妃観音の妖冶とした姿だった。「うちが御寺はんのお世話になってますのンは、唐土では無体な目に会うたからどすエ」といった。貴妃を縊ったのは羅巾だった。志功は躍り上って、全身を緊縛してる帯を断ち切った。蛇に締めるだけ全身を締めさせておいて、一と羽搏きで蛇を切断する、あの雉の気合だった。志功は机上の『碧巌集講話』を古畳の上に投げ出した。そして上巻の上に右足裏、下巻に左足裏を乗っけた。そこで志功は躍り上って、その典籍を三度踏みつけた。

「この糞垂らし！　糞垂らし！　この糞垂らし！」

紋首刑ではなく、踏圧刑だった。志功は何喰わぬ顔をして本を拾い上げて小脇にすると、下階の河井の居間に持参をした。丁度、河井は沫茶で朝食をすましたところだった。

「えらい地震がよったと思うたら……」

そう、河井はオハヨウ代りの挨拶をした。志功は手にした『碧巌集講話』を宗匠の前に差し出すと、次のようにオハヨウ代りの挨拶を返した。

「先生。『碧巌録』はどこもかしこも同じです。則題はちがいますが、第一則も第百則も、結局、無だっていうことではないのでしょうか？　昨晩一と晩、寝ながら考えたのですが、全部見ても骨が折れるばかりですので、一応お返ししてもよろしいでしょうか？　この本があると、なんだか胸や肩が張るような気がして、頭や身体が重くなるので困ります。いっそお返しして、頭や身をスッキリさせたいのです。無にしたいのです。それが私の『碧巌録』だと思います。お許しください」

と、すかさず一礼をした。宗匠は返された本の頁を、しばらく、繰るともなく、繰っていた。当て違いであったとも、又明らかに失望したともとれる当惑を、牛の眼に浮かべていた。が、やがて、その睫毛にたかる蠅でも追っ払うように瞬くと、沈静な声で託宣した。

「今日、そうなったか。あと五、六日かかると思っていたよ。或は十日ぐらい後かなとも思っていたよ。昔ね、丹霞という和尚があってね。慧林寺という寺で、親友の伏牛和尚に出会った。寒い日であったが焚くものがない。丹霞は本堂へ入っていって、木仏を引っ担いでくると、それを焚いて馳走したそうな。丹霞焼仏といって、これも公案の一つだ。碧巌録も、仏像も、焼却了

夏の音

中野僖子

夏のはじまりは
でこぼこむくれたプラタナスの
樹の幹を流れ出す
麦わらぼうしの子供が
そのさわやかな
夏の音に気ずいていた

ふりそそぐ陽のひかりを
小さな身体に受けとめかねて
子供は　掌をひらひらさせながら
夏の中に入っていった

めくるめく季節の罠
そのながい昼下がり
天空の太陽は
おのれをオレンジいろに滅び切らせて
やがて　訪れるであろう
あえかな終焉の時を

むじゃきに夢見つづけていた

それは　もえたぎる生の内側を
さらに哀しく甦らせて
幽き宇宙の原点を
遡ることでもあった

なぜか　夏は
烈しくかなたに
ふりむかせる季節なのである

気のはやい九月の風が
すばやく夏を　奪って過ぎると
陽の匂いのぶんぶんする
麦わらぼうしを置き忘れたままの
子供は風の襞にとらえられて
いつまでも　戻ってはこなかった

こぶこぶのプラタナスの樹の中で
にわかに　夏の音は
美しい逆流をはじめていた

だ。わしの話も、今日で終りということにしよう。棟方よ。版画を作るのでなく、版画が生れてくるようになれよ。」

と、語を結んだ。ありがとうございます。そう、志功が頭を下げたところを、宗匠は手を警策にして、

「しっかりしろ!!」

と、パァーンと、肩へ打ち下した。そしてその日の講座では、「棟方が、話を百聞いても同じだというから、わしは百則の話をしたつもり、皆も聞いたつもりで、今日で終りとしよう。これからは、おいしく茶を呑むだけを楽しみに、やって来たらヨロシ」と、終講を宣したのだった。志功入洛八日目のことだった。

ところで、碧巌録を踏み付けにした仏罰はたちどころに下った。その日、志功は夫人の案内で、最寄りの六波羅密寺を見学した。そこで志功は、開山・空也上人像の前までくると、電撃に打たれたように釘付けにされてしまった。草鞋ばき行脚姿の上人は、左手に鹿の角を穿った杖を突き、T字形の撞木を持った右手は、胸から下げた蔽鉦を打つべく構えている。顎は心もちもたげられ、半開の口は専心念仏を唱えている。驚異はまさにその口にあった。口腔から阿弥陀仏が六体、蝶のように飛び出してくる刹那を造型している。針金の仕掛けだ。この造型はまさに、南・無・阿・弥・陀・仏の六字七音を、ミニアチュアの六尊像で表象して見せたのだ。作者は運慶の第四子康勝。ロダンなどより遙かに高次元のリアリズムが、わが国では、すでに鎌倉時代に確立していた驚きに、わッ！ と声あげて慟哭したいような感動で、志功は身を揺られた。ワが泣いたとこを、もし天才康勝が彫ったとしたら、けだし、口から烏コでも飛びたつところを造型するべ……。そう思って、やっと慟哭の感動に耐えたほどだった。

夫人は午から所用があるというので、いったん昼食のために五条坂へ引揚げた。すると、志功は、武一から電報を手渡された。

「チヨヱビヨウキオモシスグカエレ」

志功は、第二の電撃に打たれて足を釘付けにされた。西下する車中で、「家のみんな、ご免してケレ」と身勝手を託びた不安が、今、現実になったのだ。どうしたらよがべ？ 河井が柳、浜田と一緒に大和町に来訪した時、チャに子供たちを連れさせて、桜庭へ逃避させていた。それに、今さら子供があって、その子の一人が危篤だなぞと、河井に訴えられる義理でなかった。仏罰だケンタ。河井は長火鉢の傍で煙管を吹かしていた。志功は消え入るような声で、

「先生。急に家へ帰りたくなりました。」

と呟いた。すると、河井は煙管の吸いさしを灰に落すと、抽出しから財布を取りだして、志功のところに立ってきた。

「ああ、よくわかったよ。よくわかっているよ。これは少しだが、みんな、誰も彼も、幸せになるようにナ……」

と、志功の掌に紙幣を握らせた。河井は大和町を訪れた折、隠れていたチャも、子供も、華厳経の光仏・毘盧遮那仏（ビルシャナブツ）のように、すでに見透かしていたのだった。

急遽東京へ帰ると、ちよゑはすでに危機を脱していた。赤痢だったのだ。松木、鷹山や詩人の山本なんぞと一緒に、志功がいつも世話のなりッ放しであった馴染みの内科医、上条海二郎に、今度も厄介をかけていた。彼のはからいで、彼の伯父が経営する高円寺の河野病院に入院（はいか）していた。二十分おきの注射は、昔とった杵柄（きねづか）でチャが担当した。注射針が古くて、ちよゑが痛がつたからだ。その夜っぴいた看護の上に、けよう、巴里爾の面倒もみねばならなかった。睡眠不足と過労で、彼女は幾度も意識を失った。その苦労談を志功は聞かされたが、世事には童子（わらし）のように稚鈍な彼は、ただオロオロするばかりであった。そ

うした日が三四日過ぎた頃、

「ハヤクコイコイクマノコサン」

という電報が、京都から舞い込んだのだ。既述したように打電者はつね夫人だった。清水寺の舞台。楊貴妃観音。空也上人像…。これらの感動につらなる見果てぬ京都の夢で、志功の胸は疼いた。志功は電報をふところに腕を組んで、西空を望みながら、両肩を奴凧のように揺振った。そんな志功を見るのが切なくて、「まだ勉強コすんでないんだべ。後はなんとかするハデ、京都サ戻りなさい」

そう、チャはけなげに胸を張った。志功はその胸に頭を下げて、「みんな、みんな、ご免してケレ」と、まだ全快していぬちよゑを託して再び京都へ舞い戻ったのだった。

その志功を魅了したのは龍安寺だった。一度夫人に案内された後は、一人で幾日と数えられぬほど通った。或る日俄雨があった。馴染みになった坊主が、走りだそうとする志功を呼びとめて、差していけ……と寺号入りの番傘を貸してくれたほどだったと、筆者は河井宗匠から話を聞いた覚えがある。

それほど龍安寺が志功を魅了したのは、いわば逆縁だった。と、いうのは、遠祖、胸形出雲守義昌を、浪人として九州宗像へ走らせた主人公が、この寺の造営主だったからだ。

つまり、義昌の主人だった山名家を撃ち破った細川勝元、その人だったからだ。

勝元は方丈の廊下を往き来しながら、石庭の五ヵ所に伏せている石組み——隠見する十五個の石影に、ひそかに軍の配置を構想したかもしれない。（勝元は和泉・河内・摂津・山陽を根城とした）。いや、彼は廊下から石庭へ下る階段に腰を降ろしながら、南を限る低い築地越しに眺めやられる、石清水八幡宮の監視哨があげるノロシを待ったに相違ない。つまり、彼は風雅を楽しみながら、同時に武も練っていたのだ。三島由紀夫流の文武両道だ。

志功は逆縁で、石庭を望む階段に、毎日腰を降ろしていた。（そういえば、安来生れの河井とは、出雲守の子孫である志功は、順縁だったわけだ）。晴の日も、曇の日も、雨の日も、志功は石と掃き目の立った白砂とに対していた。この石庭を囲む油土塀は、まるで、窯変した陶物のように、黄土、クリーム、錆朱、白、黒、灰……と、天候によって微妙に壁相を変えた。彼はただ魅され、見呆けるばかりだった。が、何に魅されているのか、禅問答のように、自分でも明答が得られなかった。そのうち、五ケ所、計十五個の大小の石影に、五十三次（つぎ）を連想しているのだと、気が

晴雨計

高梨一男

雉の尾が垂れている
——曇後雨

天神祭

鱧の皮を裁ち鋏で刻んで居る

付いた。五十三次といっても東海道のそれではない。華厳経の求道のそれだ。つまり、その最後の章「入法界品（にゅうほうかいぼん）」で、善財童子が五十三人の善知識に教えを求め、次ぎから次ぎへと跳び回る、その道順だ。それは文殊菩薩に始まり、海山の比丘や比丘尼や、異端の婆羅門の徒や、さては王や、薬師や、大工や、春をひさぐ女や、少年少女にまで教えを受けて回った。どんなに名もなく、取るに足らぬような者であっても、この世に存在するかぎり、その存在に相応する、何らかの意味と価値と教えとを持っているもんだ。そう、河井は食後の茶呑話で、碧巌録に代えて華厳経の善財童子を紹介したことがある。その紹介は、講話としてではなく、たまたま東寺の弘法さんで入手した船箪笥の、二段底の隠し抽出しを考案した民衆の知恵の話から、なんとなく飛躍して語られた法話だった。志功は、その法話に、妙に感じ入ってしまったのだ。ワだば、善財童子の至純至烈な求道精神に負けぬ求美精神に徹せねばマイネ。俗に「虎の子渡し」と名のある石群の間を、白砂は折り目正しい波を立てて石から石へ伝い、その周囲に渦巻いてから、さらに他の石群に打ち寄せている。その全貌をうつらうつら眺めているうちに、一つの石群は、髪を靡かせて、急遽、善知識から善知識のもとへ駆けつける善財童子の姿に見えてくるのだった。これだ！と、志功は膝を叩いた。あゝ、この石庭のまばゆい黒と白の照応は、このまま版画の世界といっていいではないか……。それに、泉涌寺の楊貴妃観音の絢爛さは、華厳経のヒイロー毘

泉涌寺・楊貴妃観音

盧遮那仏の光耀にたぐえられないだろうか？眉間の白毫と歯の間から無数の光明を放たれると、蓮華蔵荘厳世界海で菩薩衆が輝やき、その十方にある世界海では如来が光り輝やいて、あまねく三千大千世界を遍照し給うという光耀仏……。その仏はワの色身をも領有してるのだから、ワもまた仏と共に燦爛と輝やく道理にある。

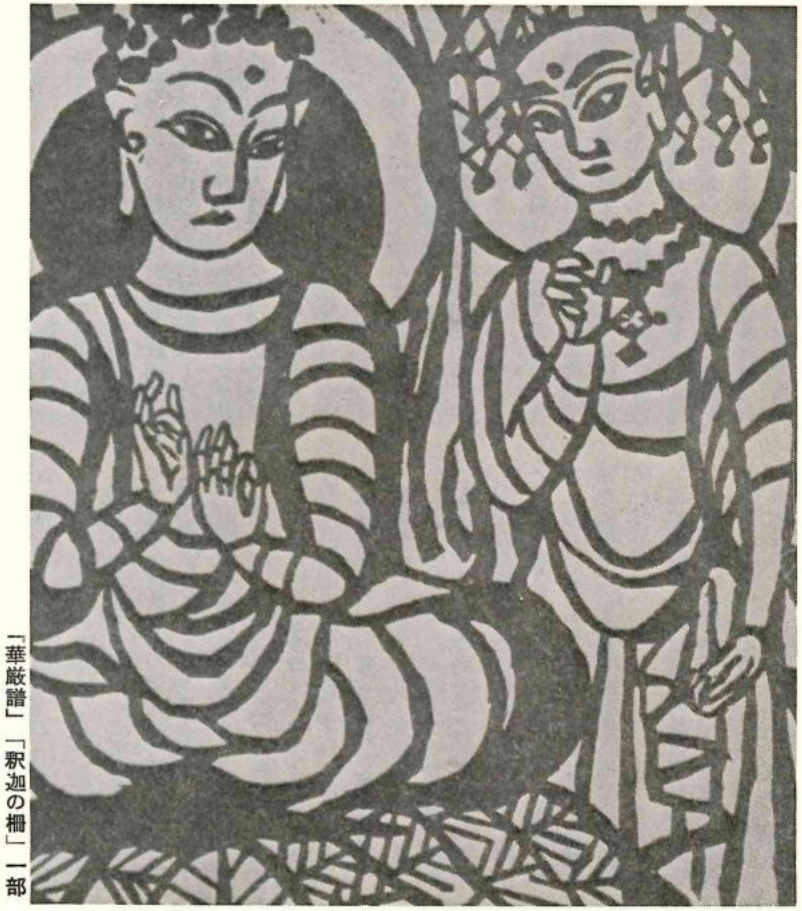
「よし、華厳経を作ろう。太陽のように輝やく毘盧遮那仏。善知識を求めて疾風のようにすッ飛ぶ善財童子。火の照明三昧を教えた婆羅門。文殊・弥勒・普賢菩薩も彫ろう。」

四十日の京都留学を終えて東京に帰ると、志功はこの感激の冷めやらぬうちに、すかさず「華厳譜」二十三枚の大作を仕上げた。「釈迦の柵」の右に侍立する菩薩の顔と両手のしぐさには、ありありと泉涌寺の楊貴妃観音の面影が現れている。又、「風神の柵」には、龍安寺石庭の石組と白砂の風韻が脈打っている。この留学土産を手にした柳は、

「見るなり私は驚き、益々本当の版画家だといふ考へを強くしました。中で太陽や不動や風神の如きは、特に優れた出来栄えでした。」

と、驚歎をした。

（「棟方と私」）



「華厳譜」「釈迦の柵」一部

詩集を編むの記

森　亮

明治四十四年生まれの私は昨年還暦に達した。それを記念する意味で詩集を公刊するこ

とを決めたのは昨年の春にもまだならない早い頃だつた。公刊と言つても当然費用は自前で、半分は私が半分は病院勤めの医者である長男が持つことで話が決まつた。その長男は今度の詩集の初めの部分に幼い姿で数回登場するのだから、それぐらゐのお金を出すのは当然の義務かもしれない。しかし彼は父が詩人の部類に属する人間なことを、そして少くとも以前は幾許かの詩を書いたことがあるらしいことは知つてはゐるが、自分がその中で歌はれてゐることは知らないやうである。そんな詩を私が彼に読んで聞かせたこともなければ、彼からさういふ質問を受けたこともないから。今度詩集が出来たとき手にとつて見て驚くことであらう。

「はしがき」にも書いたことであるが、実際に編集を始めたのは昨年の夏休みに入つてからで、暑さも忘れて事に当つた。元来作品の数は少ないのだが、雑誌等に発表したものでも二、三取らなかつたものもある。一方さう多くもない未発表のものの中からも数篇を選んで入れた。「自画像」や母の死を歌つた「終曲」は二十字を越える行が多い詩であつたから、二十字で改行を迫られる「果樹園」には不向きと考へ原稿を送らずじまひになつてゐたものである。作品は大体制作順に並べたが、大別すれば「旧詩帳」と「晩国集」になる作品群の準連作としてのまとまりを考慮してわざと順序を変へたところもある。

詩集の本文は六十頁ぐらゐで終りさうなので、幾らか頁数をふやす目的で訳詩を少し加へた。私のものが初めて「コギト」に載つた、その記念すべき「クブラ・カアン」（コールリッヂ）と、戦後『詩風土』に寄稿した「さだめの小車」と題するオーマー・カイヤムからの自由訳四行詩十二首、それにハウスマンの『最終詩集』の一篇、それら三種類である。

還暦記念の出版であり、詩集はこれ一冊でいいやうな気持でゐるので、「自注」を巻末に添へた。二十数年間にわたる詩を集めたから、備忘の意味で制作年代と発表誌とを記したほか、他人には分からない制作の由来・機縁に触れたところもある。語釈は多いと嫌味になるので、どうしても必要と思つた数ケ所にとどめた。

この詩集に収めた自作の詩は昭和三十六年の「夜の歌」で終つてゐる。『果樹園』の同年四月号に載つてゐるものである。「はしがき」からこのことに触れた数行を次に引用しよう。

「晩国集」の最後に置かれた「夜の歌」が出来たのが昭和三十六年の二月某日で、自分で言ふのも変な話であるが、自作の詩はもうこの辺でやめにしてもよいと思つた。そんな気のゆるみのせゐか、その後は祝婚等の挨拶の詩のほか殆ど詩はない。

実は昨年の夏この部分を書きながら暫くためらつたのを覚えてゐる。「お前は詩をさういふものと心得てゐるのか。お前が本当の詩人であるなら、ぼつぼつ間を置いてでも死ぬまで詩を作るのが本当ではないか」と、お叱りを蒙りさうだからである。しかし私は今さういふ非難を甘んじて受ける積りになつてゐる。私の詩は何等かの外的状況に触発された心の動きを記録したものが大部分を占めてゐる。さういふ被写体の私はこれぐらゐ出しておけば読者には充分なやうに思ふし、又使ひ古した歯磨チューブぢゃないが幾ら押へてもこれ以上いくらも出ないだらうといふ半ば諦めた投げ遣り気分でもある。

とは言へ私は「はしがき」のあの段落に言訳のやうに次のひと言を付け加へておいた。「それでも幸ひ私には訳詩といふ避難所があるので、言葉を責めたり、リズムを組み立てたりする興味はその方で満足させてゐる」と、かうである。本当言ふと、訳詩の原典の選択や意訳・自由訳の作業には私の個性が強くかかはつてゐるのだから、詩を翻訳することは技術的興味に浸れる機会であるばかりでなく、私の場合は創作とそれほど隔たりの無い原体験だと言へる。あせつて詩を書かうとしないのはそのためで、敢へて詭弁を弄すれば、訳詩で詩が書ける我が身の幸せが私を詩作から遠ざけてゐるのである。

詩集の題名は色々考へたすゑ「庭と夜のうた」といふおとなしいものにした。この詩集の性格をずばり言ひ当てたと思はれる或る題名をかねて暖めてゐたが、少しあくの強いものだつたのでやめた。題で中身が左右される訳でもあるまいが、読者に何等かの先入見を与へるよりも寧ろ虚心に私の詩境に入つて貰つた方がこれらの作品のためにもよろしからうと思ひ直したからである。

出来上がつた原稿は夏の終りに東京の篠田一士君の所に送り、扱つて呉れる本屋さんを捜すやうに頼んだ。幸ひ彼と関係浅からぬ筑摩書房が引受けてくれることになり、年末にちよつと上京した際に編集部の淡谷淳一氏と印刷・製本の細部に互つて打ち合せをした。百頁にならないほどの薄い本であるが、A5判にしたので外見の貧弱さは少しは緩和されるかと思つてゐる。発行部数は五百部に限定することにした。

原稿が印刷所に送られるのがだいぶ遅れてゐたが、先日初校を見た。三校まで見ることになつてゐるが、もう先は見えてゐる。製本が完了するのも八月より遅いことはないはずである。申し遅れたが、四月から東京に転勤して東久留米にある団地に住んでゐるので、この覚え書もそこの狭い一室でしたためた。

（四七・六・二九）

応召日記（八）

蓮田善明

十一月二十六日（土）

夜一時より巡察、四時迄かゝつた。霜のつよい夜。帰つて報告を五時半迄書き、一すうとゝして起床。

午後一寸目まひ。入院中のT上等兵遂に死去。通夜、衛兵を出す。

十一月二十七日（日）

外出止め。盗みの事件のため謹慎である。明日とゝいて二日に亘る休暇に外泊を待つてゐたものも少くなく、昨日より他の隊は続々と出て行くのに、ここは今朝から体操場で精神訓話である。中隊長の話、格言名句をよく引用するが熱なくひゝき少し。役人の訓辞めく。S少尉そのあとで一席、つゝいて余も一席。この中隊はいい中隊だから悲観するなといつておいた。又H上等兵がもし戦地でいい働きをしたといつたら、Hのおかげで中隊の名誉になりお互に鼻も高くなるのだ。ともいつた。出たくとも辛棒せ――といつた。何しろ昨日来、自分のところに何とかならぬか――をこえてくどくいつてくる連中もあつた。

とにかく午前は兵器の手入。午後はT上等兵の中隊葬に中隊幹部全部出席。帰りを点呼に後れぬやうに言つておく。午睡二三時間。しかしこのことでいろいろ下士や見習医官などにも接して馴れる。明日の外出は出来るだけの便宜をはかつてやつた。今日始めて入浴。

十一月二十八日（月）

今日は早くからみんな外出。八時半までに万日火葬場にM一等兵をつれてT上等兵の骨拾ひに行く。骨を本願寺に預け、それから城戸さんと下宿に廻り帰隊。東京方面への礼状を書く。十一時。

十一月二十九日（火曜）

曇、小雨。午前舎後で照準鑑査をやり、午後練兵場で、射撃姿勢、据銃、照準、撃

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

発をやる。生温い。夕刻より将校集会所で「十三会」。一寸酒うまかった。夜、将校室で、十二月二日に帰還の戦死者の位牌を書きに兵隊集まる。中隊長室にねる。

十一月三十日（水）

南京虫に頸筋を刺されて目さむ。五時頃。起きて新聞紙を枕に蔽ひてうつら〳〵して六時には起き出した。

夕方、演習から帰ると植木のI氏K氏来り居り。それから四中隊のT幹部候補生、三中隊のY氏、七中隊のI氏らを歴訪する。今夜は冷えるやうである。

夜十一時より一時間半巡察、今夜もずゐ分冷える。霜も白い。

十二月一日（木）

敏子より来信。晶一も父ちやんが帰れといふなら帰るといふ所まで妥協した、帰りたい、といふ。呼びたい。しかし後一月のうちに出征か否かも決する。長期になるなら考へなければならぬ。自分はもつと子供を生みたい。他に残すものがない。又子供から新しいものを生み出させたい。

十二月二日（金）

「文芸文化」一月号に随想を書く。師団合同葬。

編集後記

六月八日。天野忠氏より詩集「酸素そのほか」を頂戴した。例によつて楽しい詩画集になつている。今回の絵は佐野猛夫氏、ユーモラスでシニカルな天野氏の詩法に打つてつけの飄逸な墨絵で、目を通すのが楽しい詩集となつている。先に市販された「宮城賢詩集」と共に近頃出色の一冊である。頒価は三五〇円。発行所は文童社（京都市東山区山科川田山田一五）である。まだ詩になにがしかの期待を持つている向きは一読されるといいと思う。

六月二十四日。蓮田敏子さんが二男新夫君の宅に見えているのでお伺いした。二度目のオメデタで熊本から手伝いに来阪されたのである。ところで、筑摩書房から一昨年末刊行された「現代日本文学大系」第六一巻（林房雄・亀井勝一郎・保田与重郎・蓮田善明集）が増刷された旨、書房から連絡をもらつた。仄聞するに、この巻は他の巻よりだいぶ多目に刊行されたのだが、さらに増刷とはうれしいニュースである。保田与重郎は全集が出たので近頃資料には事欠かなくなつたが、蓮田に関しては依然として資料が缺乏しているので、当然需用が起るのである。拙著「蓮田善明とその死」は、先の全集より数ヵ月前に刊行されたものだが、近頃の古本屋の目録によると、定価三六〇〇円のものが五五〇〇円になつている。これも資料として需用があるからだろう。

六月二十八日。ご依頼していたアメノウヅメノミコトの絵が棟方画仙から届いた。訪印後の神韻がひようびようとしているのに驚歎した。（O）

果樹園 第一九八号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年八月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 八〇円 送料 三〇円

果樹園 一九八号 昭和四十七年八月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価八〇円 送料三〇円

果樹園 一九九号 昭和四十七年九月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価八〇円 送料三〇円

果樹園

第199号

画仙・棟方志功(九) 小高根二郎
散歩道の苦悶 宮城賢
遺言(五) 田中克己
音楽 吉本青司
仔犬 高梨一男
応召日記(九) 蓮田善明
そこはかと 森亮
編集後記

画仙・棟方志功(九)

— その画魂の形成 —

小高根二郎

十三、浪曼派との通交

1 続く一英の季節

「華厳譜」で初めて宗教的なモチーフをこなした志功は、昭和十二年の国画会出品作として、佐藤一英の詩「空海頌（そらみのたたえ）」とまた取り組むことになった。空海の作歌と伝える「いろは歌」の四十七字を頭韻とする聯詩である。佐藤はノートに書いた漢字混りの原詩を、平仮名に書き改めて志功に手渡した。それはまだどこの雑誌にも発表されたことのない作品だったので、志功は感激した。

佐藤はこの聯詩に「空海頌」と銘打ったは、別に僧空海を意識して書いたわけでなかったが、前掲の冒頭の詩から、どことなく宗教的な情感がみなぎっているから不思議だ。特に「る」を頭韻とする次の詩は、「華厳譜」の発想の源となった毘盧遮那仏そのものに取材されていたので、「華厳譜」の次には、どうしてもこの「空海抄」を手掛けねばならぬ因縁があったのだと、志功は「恩に着ます」と原稿を一拝した。

いきしにのさだめはしらず（生き死にの定めは知らず）
いしぶみはこけむしくづる（碑文は苔むし崩る）
いらへなくそらはるかなり（応へなく空はるかなり）
いとなみはときじくにあり（営みは非時にあり）

各聯の初めはいの頭韻で揃えている。この調子で、〈いろはにほへと ちりぬるを わがよたれそ つねならむ うゐのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす〉の、四十七文字の各々を頭韻とした詩が作られていた。

るじんにもめぐみはみてり（流人にも恵みは満てり）
るしやなぶつひかりあまねし（盧遮那仏ひかり遍し）
るるとしてひぢのよをぬふ（縷々として泥の世を縫う）
るりはりのかがやくみたま（瑠璃玻璃の輝く御霊）

志功は四十七篇のこの詩の風韻に応じて、「桜」「流れ」「水禽」「蝶」「菊」「蛙」「イタチ」「草叢」「連山」「鷹」「オシドリ」「雨」「松」「竹」「柳」「蝙蝠」「鵜」「軍鶏」「鯉」「鬼火」などの挿画を彫りつけた。しかし、詩は「大和し美し」の時と違って、仮名文字ばかりという変化のなさを考

慮して、左字には彫らず、まともに彫って、拓本摺りという新工夫を加えた。題字、著作者名を加えて五十四枚。それを六曲半双の屏風に仕立てて国画会に発表したのだった。質量ともに、細工物のような小手先だけで作られた矮小な作品群を圧倒して、大変な評判を取った。つまり、志功は、絵巻物「大和し美し」によって長さを、今度の「空海頌」で広さを、生みだすことに成功したのだった。百号、二百号、いや千号の油彩にも堂々と対抗できる版画の創造！　版画から板画への飛躍！　その夢の基礎は、ここに築かれたのだ。

気をよくした志功は、またまた長崎に佐藤を訪れた。次のモチーフを貰いに……である。ところが、そこでバタリと福士幸次郎に回り合った。彼は「原日本考」の取材の旅から久しぶりに東京へ戻って、しばらく落着いたところだった。蘆溝橋で日中戦争が始まったばかりだった。戦火は明日にも上海に飛火しそうな気配にあった。臨戦風景は、東京でもそこここに、展開しだしていた。出征した夫や、子や、肉親や、知己の武運長久を祈る千人針の列が、どこの駅でも待ち受けていた。福士は、その風景を、中学時代に体験した日露戦争の時とちっとも変らぬと、感動的に佐藤にしゃべっていた。「まるで映画の女優みたいな派手なあの娘たちがねェ……」と、奉仕する列に並んで、真剣に一針縫っているモダン・ガールを賛美した。それかと思うと、急に紋付羽織・袴姿になった国粋気取りの男たちが、支那原産の詩を声高らかに朗吟して、肩で風を切って街頭をいく流行を、ニヤリと苦笑した。そこで彼は、来訪した志功に初めて気付いたかのように、

「あゝ、志功さん！　久しぶり……。『大和し美し』『も』『空海頌』も、よく描げしたネシ。」

と、志功の精進をねぎらった。志功が佐藤に届けていた出品作の別摺りで、すでに生長ぶりを検分していたのだ。

「アリガンドゴス。今度は、長さと幅とを兼備した大作を、きっとご覧に入れます。」

と、いって、志功は挙身微笑になった。ワだバ先輩の嘱望に確かに応えた。いや、これからも必ず応えてみせる。という喜びと自信からだ。

ズーズー弁同志が出会うと、話は自然、故里青森のことになった。志功は自慢の八甲田を担ぎだした。そこには鹿内辰五郎という仙人がまだ現存し、神鷹を舞わせてみせる御伽噺を披露した。いや、山仙の登場をまつまでもあるまい。恐山や、久渡寺や、川倉で有名な巫女イタコたちは、もつと普遍的で原始の御伽噺かもしれないよ、と福士は付言した、

「そうだ。シャーマンの話で思い出したが、棟方君にいいものを上げよう。」

そういって、佐藤は二年前に出した「新韻律詩抄」を取り出して志功に見せた。それに収録されている「鬼門」は、福士から聞いた陸奥の饑饉の話を、イタコのロヨセの形式を借りて書いた詩だったからだ。

「この詩が三角に組んであるのは、つまり飢饉で死んでいった人たちの墓標というわけ……」

そう、さらに佐藤は志功のために解説を加えた。

鬼　門

―ある巫女の呪文―

踊れ
枯葉折葉
綴れ小雪吹雪
襤褸まとふ骨は長し

紙の家に
氷張りて籠り
神は人にきびしてふか
髪は火村穂立ち立てよ舞へよ

穂枯れ稲城嘶く
嘶き馳れ狂ふ焔
来る日来る日食ふは草根胡桃
罪と咎と廻る車苦し暗し

幕し苦く甍破れ降るは雹
あはれ明日は坐る瞳求めよ
かなたに寄する狡き敵
撃てよ天を雲を

雲は氷る天を撃ちて鳴らせ
永く鐘の鳴るを聞かず
鳴かず流す汝が子
護れつぼけ

襤褸まとふ乳房古し
厳いだく護り
貫ひ焚せ
つぼけ

注　「つぼけ」とは津軽方言にて「馬鹿」「こくつぶし」の意の罵言、昔饑饉のとき赤子を河に流したり、その死骸を「小仏」と言ひしより起れるものならむと。

一読した志功は、「そンだ。これだ！　これだ！」と叫んでいた。詩形が鎮魂碑の形になってるとこが気に入った。「空海頌」の、いろは四十七文字の頭韻で抒情した形より、造型的なところが気に入った。

志功の脳裡に故里の冬景色が想い浮んだ。凍てた地面に落葉が舞い狂った。そこを飛礫のように霰と雹が叩いて過ぎた。ドロの樹（ポプラ）は箒のように灰色の空を掃いて叫喚した。いや、あれは口ベラシのため堕胎して、こっそり夜の暗い川へ流した赤ん坊たちの泣声だ。「助けてケロジャ」の号泣だ、合唱だ。吠えろ。吠えろ。嵐よ、雪コをウット連れてこい。粉雪、綿雪、ドン！　と積もれ。いや、あの川の底に沈められた、まだ眼が明かぬ赤ん坊たちは、伝説によると、みんなみんなメドチ（河童）になるというこッだ。粉雪が水面に消え、やがて掻き氷のようなシャブシャブ氷となり、次で一枚板に氷結する。その冷く暗い底流を、メドチたちは無限に流れ泳いでいかねばならぬのだ。まさに茶の間の襖に描いた蛸コたちと同じ運命だ。これら、公然と陽の光の中に佇めぬ、故里の何万、何十万、いや何百万の間引き子たち！　ついに浮かばれぬ鬼門の孤児たち！　飢えのために捨てられた、東北の「真黒童子」「真黒童女」たち！　ワだバ彼等のために、明るく広い極楽サ造型してケル。そう決意した志功は改めて『新韻律詩抄』を再拝した。

志功はこのモチーフに、実に百二十枚というおびただしい板木を使用して、版画史上、未曽有の大壁画『東北鬼門譜』を完成したのだ。いわば今様の地獄極楽の構想だ。

その中心は、前述した因縁の「真黒童子」「真黒童女」で、各縦横四尺弱の板木に、黒いタイツを着た童子四人、童女四人を対照的に配置している。上層に、向い合って横臥している二人ずつの童子、童女は、不本意な激流に呑まれて流されていく姿の表現だ。下層で、腰を降し、或いは片膝ついた不安定な姿勢の二人ずつの童子童女は、藻の茂った水底に沈んで、驚ろきと、悲しみと、怒りとで、今まさに悶絶しようとする死の表現なのだ。この非業の死を死んだ童子童女たちは、やがて阿弥陀如来の慈悲によって極楽浄土へ招待される。藻の葉を階段にして、一人、一人冷たい水底から暖い浄土に浮上すると、やがて仏となって如来の両脇に侍立する……という、めでたい図柄なのだ。

志功はこの「東北鬼門譜」の大作を、十月下旬に銀座鳩居堂で開かれた、日本民芸館主催の第一回新作展に出品した。展示作品は二百余点の多数に及んだが、志功の「東北鬼門譜」は、一点と数えるにはあまりに厖大な大

作だった。「こりゃア、版画の化物だ」。日頃から版画という狭い境涯に美を限っていたアルチザンたちは、板画が秘めていた無限の可能性を見せつけられて、度肝を抜かれた。版画会の元老・恩地孝四郎も、「制圧された躍動による充実……鬼門譜の如きはその最上の状態を示している」（「棟方志功の感想」）と賞揚せざるをえなかった。

招待日に志功は久しぶりに河井寛次郎と武一に回り会った。又、島丈夫にも出会った。志功は、「真黒童子」の親方のような島を、河井に紹介した。昨年のちょゑの入院の時はもとより、十余年にわたって受けた数々の恩愛の話を、かねて志功から聞いていた河井は、手を差し出して島の掌を握った。

「よくもまア、今日まで、棟方を助けてやってくださいました。」

そういって、島の掌を、両掌で暖めるように包んで振った。

「よくぞ、守り続けてくださいました」と、志功に代って謝辞を繰り返えした彼は、牛の眼に溢れるほど泪をたたえていた。

その直後、志功は懐かしい「山羊のお爺さん」と再会した。昨年の高島屋の「陶硯展」で、河井に紹介されたお茶の水女高師教授の菅原敬造だった。昨年は制服を着た生徒二十人ばかり連れていた。彼は展覧会場を、よく教室にするからだった。七階の別室で、志功は河井と一緒に話をさせられた。講話などをするのは、それこそ初めてだったので、汗と涙でしどろもどろになりながら、ともかく製作に当っての祈りのことをしゃべった。後で考えると、何を話したのか、自分ながらチンプンカンプンだったが、制服の処女たちはみんな感動の泪を浮かべていた。今日は女生徒でなく、夫人を同伴していた。菅原は志功の肩を抱くと、「熊の子よ。大きくなったナ。大きくなったナ。」と、背中を愛撫してくれた。顎のシルバー・ホワイトの山羊ヒゲが、志功の頬をくすぐってこそばゆかった。「まア、貴方……」と、夫人は人目をはばかって小声で注意したので、やっと菅原は熊の子を手離した。

「山羊のお爺さん！」

と、この時、志功は声をかけたが、危く後の言葉を呑み込んだ。「その山羊のヒゲコ、ぐッ！ と引っ張らしてケロ」というところだったからだ。志功は掌を揉みながら、夫人の手前、その衝動にやっと堪えた。幸い傍らに河井武一が突っ立っていた。志功は彼にせがんで、すでに鑑賞のためぶらりぶらり会場を回りだした菅原に、ヒゲコを引っ張らしてケロと言付けてもらった。

次の日、菅原は午時に一人で会場に現れた。志功のたっての願いをとげさせるために、午休を利用してわざわざやってきてくれたのだった。志功の願いがとげられたか、とげられなかったか、その場面の描写は、当事者の菅原の筆に、これを委ねたい。

「熊の子は河井の武ちゃんを通して、私の山羊ひげを引張らせて下さいといって来ました。その翌日会場で会った時、『引張りたかったら、いつでも勝手に引張ったらいゝ、遠慮するない』といいますと、『実は昨日は奥さんがお出でだったんで、遠慮して、引張られなかったんです』といいますから、『ヨーシ、それでは今日引張らしてやろう、さア、引張れ』と頤をのばすと、熊の子は、ソーッと私のひげに触って、逃げて行きました。」（「熊の子」）

志功は悪い事をした童（わらし）のように一っ気に階段を駈け下ると、表の銀座通から裏通を一と回りして、息せき切って会場に戻ってきた。菅原の影はすでになかった。志功は武一に跳びかかると、悪戯に成功した悪童たちのように、相好を崩してケタケタと笑い合った。そこに中食をすませた柳・浜田・河井が帰ってきた。

散歩道の苦悶

宮城　賢

それが天気の良い日の散歩道である
浄水場の長い土手づたい
小さな石橋のたもとの馬頭観世音のかたえに
褐色の縫いぐるみそっくりな仔犬が二匹
わたしたち父子の姿をみとめると
初冬の寒さに身をすり合わせてふるえている
それは人の子の捨て子とそっくり
わが四歳の男児さえ
父の手を握りしめて
いまにもふるえそうなのだ
行ってなでておやり！
子どもは瞬時ためらい——そして
こわごわ近づいてさすってみる
するうちやがてなれ
声をかけながら
その小さなてのひらでソフトにたゝいている
子どもは立去りかねている
わたしも立去りかねている
子は伴れてかえりたいとねがい
父はうまい別れ方をかんがえあぐみ
（まるで女と別れるときのように）
平和を奪われた小さな仔犬のきょうだいよ
きみらがつきつける二者択一が
わたしたち父子の散歩道を真っ暗にする
わたしの愛はまだきみらにまで及ばない
こゝは人通りはまれだが
車はときどき通る
車の人たちは目撃しても
かれらは甲鉄とガラスで蔽われているから
心に風景は届かないだろう
きみらが奪われた小さな平和よ
それはより大きな平和のために捨てさせられたのか？
それはどんな平和なのだろう？
大きな平和を得ることは
小さな平和を捨てることなのか？
小さな平和を得ることは
大きな平和を捨てることなのか？
おゝ縫いぐるみそっくりな仔犬たちよ
きみらはわたしにきりなく自問をつきつけるしゃもじを振るおばさんたち
ぜったいにあなたがたは仔犬を捨てないか？
子を捨てる母親たち
それが仔犬だったらぜったいに捨てないか？
おゝ幼い仔犬のきょうだいよ
わたしは途方にくれる
きみらをわたしが引取るだけで
わたしの自問はすべて解決するのに！
わたしはそれができない
わたしは責められねばならない
きみらを捨てた人とおなじく——
小さな四つの無垢の瞳は
わたしたち父子の四つの瞳を
無心にしかし鋭くつき刺し
わたしたちを立去らせない
おゝ進退こゝにきわまる……
……数分後ついに見捨てることによって
わたしもまたかれらを捨てた！
じらいわたしはおもうのである
神は無神論のわたしを試すために
二匹の仔犬に化身したのであろうと
たしかにこれは神のみの知る問題であろうと

「なんだ！　なんだ！　なんだ！　まるで寒山拾得のような面をして……」

と、浜田は二人のケタケタをいぶかった。この寒山は三十五歳、拾得は三十歳だった。

2　伸二郎と与重郎

志功の開花をうながす春の役目をした一英の季節は、一応、「東北鬼門譜」で終を告げた。志功と浪曼派との通交は、むしろ、それから本格化するわけであるが、福士幸次郎にしろ、佐藤一英にしろ、もともと浪曼派の一党といってよかった。福士は詩から、やがてプロレタリヤ文学に挑戦して地方主義を宣揚し、又五・七の日本音数律の研究に没頭、最後は文化の原点としての鉄文化の探索に憑かれて生涯を終った。佐藤も福士に倣ねたものか、韻律の研究から、やがて押韻による聯詩に没頭し、今は北緯三十五度の樫を文化の原点とする、樫の木文化論に心酔している。共に浪曼派の一党であることは間違いない。

ところが、志功は、この佐藤を知る以前から、杉並は松ノ木町に住んでいた浪曼派の詩人・蔵原伸二郎との通交は始まっていたのである。九州の豪族・阿蘇氏の後裔である彼は、古陶、骨董、小鳥を愛玩し、又、詩や小説も書くといった薫然とした風流人だった。志功より四つ年長で、ちょっと外人のような風貌をしていた。琅玕や寛次郎の湯呑を月賦で入手した事例のように、一種、熱狂的な蒐集欲のある志功は、いつとは知らず蔵原に魅されていったのだ。彼の誘いと勧めで、志功はコノハヅクやオオルリを飼った。もともと彼の勧誘に応ずる数奇が、志功の心底にあったからだ。（そういえば父幸吉も、すぐ殺すくせに小禽が好きだった）。

「「棟方君、君には、もって来いの鳥があるから、どうかナ。コノハヅクだヨ。それが、しっかり餌についているから、大したもンだヨ。金五円也だと言っているが、どうかな」。わたくしは、その鳥を見ない内に、どうしても欲しくなっていました。ナンだか、フトコロに入れて置けば生きつづけるかの様に思って仕舞ったのでした。飛んで、家にかへって、チャコに駄々をこねた様でした。五円と言っても、十銭か、二十銭でも大金の頃のわたくしの家でしたから、チャコも困っただろうと思いました。ナンでも、カンでも、その鳥を欲しくなって、質屋にでもチャコを行かせたのでしょう。チャコの着物か、その他ナニかが、五円に変って来た筈です。

「蔵原様、あの鳥を、どうか」。そう叫んでわたくしは、鷲づかみにした五円の金を振り廻したのでした。「サア、行こう」。蔵原様は、自分の仕事か、何かあったのでしょうが、直ぐ鳥屋に一緒してくれました。

とても、とても可愛い鳥でした。コノハヅクはほんとうに小さい型でした。ウヅラを一寸、大きくした位の大きさでした。可愛いゝ、可愛いゝ。

「ここまで餌付けたのは、一寸大変でした。蔵原様に、それを讃めて頂いて本望です。素人の方に渡されるのが惜しいですよ。蔵原様へと思って渡しますよ。籠は金編みですが、仮ですよ」。その無口な鳥屋主人が、一ペン流しにこう言って、蔵原様に、そのコノハヅクを渡しました。買手の、わたくしには手渡ししてくれませんでした。

その時の、蔵原様の、よろこび様は、浮き立っていました。

「棟方君、いいだろう。いいだろう」。赤ん坊でも渡す様に道路に出てから、わたくしに、その鳥籠を渡してくれました。」

（「蔵原伸二郎様」）

この日以来、志功はコノハヅクを、ペットとして、或いは守護神のように、画室に鎮座させていた。そして、絶えず彼女に話しか

遺　言（五）

田中克己

おまへは田中家のただ一人の後嗣ぎで、わたしに似ず酒を飲むが、飲みすぎないやうに。おまへの子供はいま二人だが、何人になるか。嫁はわたしの教へ子の中で、一番丈夫な、一番よく笑ふ子だった。どうぞいつまでも丈夫で笑ってゐてくれるやうに。おまへやおまへの子の名乗る田中姓は淡路島の出で、今は南淡町といふが、田中家の代々の墓はそこにある。しかしわたしは新宅なので、東京に墓地を買ふつもりだ。わたしの葬式はキリスト教でやってもらひ、骨はそこにおまへの弟の梓の骨とともに埋めるが、わたしの魂は天に召され、そこから澄んだ眼――いまは濁り老いてゐるが――でおまへたちのことを眺めてゐるよ。父のやうに戦争に手を貸さないやうに。それが田中家の家憲になればいいが――。

け、又は囁きかけた。丁度、その頃志功を尋ねたことのある青森出身の後輩版画家・関野準一郎は、次のようにしるしている。

「私達より梟が気になるらしく、梟の傍へ行って、話しかけ、近眼鏡をくつつけてにらみ、色紙の前に帰るとあッという間に絵が出来る。

『棟方が絵を描えているうちは、まだ小さい。何かこう、棟方の臍（ヒチョコと津軽弁で言って）の後にある何かが描かせているので、神……神とも言えない、仏でもない、ウウ……まア神でも仏でも何んでもいい、ヒチョコの後に居る鬼、そんなものがじっとしていれなくて描かせる……ウウウ……この五本の指でなく鬼のような三つの爪でやるような仕事をやるんだ――』」（「先を行く人、邪魔です」）

そう、関野らに語り、コノハヅクにも囁いて絵を描いていたのだ。

志功は人を訪問するにも必ず彼女を同伴した。

「嘗て彼が一匹の木葉づくを飼ってゐたのを知ってゐるが、年中持って歩いてゐた。彼の激しい愛情から一時も手離せないのだ。歩きながら木葉づくと汗をかいて大声で話してゐた。」

（「棟方志功論断片」）

そう、彼女を世話した風流人蔵原でさえ、志功の風狂ぶりには舌を巻いた。が、あまりに溺愛がすぎたかして、彼女は志功の激越な愛情を受け入れようもなく、あっけなく死んでしまった。コノハヅクだけでなく、オオルリの場合も同じ運命だった。折角、とっときの着物を質入れして夫の風狂に献身したチャは

「ナンボ、欲しがっても、パパには生きものは駄目ネ。たゞ好きがるばかりだもの。」

と、半泣きで嘆いたのだった。

蔵原は「コギト」に詩「東洋の満月」を連載して、ようやく詩人としての地歩を確立しつつある頃だった。推挽者は萩原朔太郎と保田与重郎だった。既述したが、「コギト」発行所だった肥下恒夫宅は大和町の志功の家のすぐ近くだった。「コギト」の主宰者だった保田はしょっちゅう編集事務で肥下宅を訪れたので、保田と志功は自然近付く運命にあったのである。いや、保田はときたま道で志功に出会い、すでに「大和し美し」の板画家を見知っていたのだ。与重郎はいう

「例の風呂屋の、東京では銭湯といふのだが、その角を廻ると、棟方氏の家の辺が見えて、その家に近づくと、活気が家の外まであふれてゐる。同じ並びの家だのに、全

く不思議といふものだつた。しかしそれは当然なのかもしれない。さういふくらしの中で、いつも居候がゐましてね、と後年画伯夫妻が笑つて話したことがある。

そのころはすでに、「大和し美し」も発表され、少なからぬ人々の間では、この不世出の天才に驚嘆し、感動し、この国の歴史に残る同じ時代の芸術家の出現を歓喜してゐた。私はその先頭みたいなものだつた。私は最高の敬意をこの天才の出現に感じてゐた。高円寺の町の通りを足早に歩いてゐる、極度の近視の人に、遠くから畏敬の感をもつてみてゐた。そのころの棟方志功の姿は、今でも私にとつて一番大切なものである。

蔵原氏が棟方氏をひき合せるといつた時に、よく道で出会つて、顔も見合せてゐるといふと、彼は道ですれちがつた位では見えないのだといつた。そのころでも棟方氏は画家と交るより文士と交るのが多かつた。文士といつても、まだ文壇的でないやうな若い人々である。そのころ文壇的な新人作家にくらべて、文壇的でない新人作家には、個性のゆたかなただならぬ人物が多かつた……中略……

そのころ肥下氏の家が大和町で、これが高円寺の西北端で、次に少し東へ出ると棟方氏の家があり、そこから私の仮寓までは何町もない。私のところから南へゆくと、古木鉄太郎氏がゐた。小説をかくと云つて、ただ端座してゐるだけで、めつたに書かなかつた。その様子が美事だつた。そこから省線電車の中央線の線路を越すと、駅の近くの裏の木立の中に木山捷平氏がゐる。さらに南へゆくと堀の内に中谷孝雄がゐて、そのさきの東田町に淀野隆三氏、その近所に外村繁氏、そして松ノ木に蔵原氏が住んでゐた。」

（「棟方志功書伯」）

志功は、やがて保田や蔵原を介して、これら文壇的でない『日本浪曼派』の新人作家と通交するようになるが、蔵原に伴われて「コギト」発行所からの帰りに志功を訪れるようになった保田は、ゴミソ棟方の正体を見ることとなったのである。

「かつて戦争中に画伯は、支那事変の初期既に千枚以上の虎の図を木綿布に描いてゐた。虎は日に千里をゆき千里をかへると云ふ、始め何心なく描いた画伯の虎図は、人から人に噂をつたへ、これあれば征旅悉なしと喧伝されて、この虎を乞ふものひきもきらぬ有様であつた。すでに名声高かつた画伯のその盛名を知らぬ類の老母が、虎をかく先生の門をたづねて、持参の白布をさし出す。彼はこれを最大限の満足の表情を以て迎へた。画は勿論奉仕であつた。

私は一度その揮毫を見た。例の如く何か大声でわめくやうに話しもちつゝ、正に一気呵成猛虎が布の上に現はれる。彼はすでに呼吸はあら〳〵しくなり、淋漓と汗を流して、出来上つた虎図をひきさらふやうに立つて、隣室の神棚の前にこれを垂れ祈願を始めた。肩をはつて全身を硬化させ、身をふるはせる。実に異様な祈願の姿であつたが、やがて指を大きくそりひらいて、立ちつゞけに拍手をうつ。それはうちつゞけに叩くのである。小刀を振ふ時、絵筆を採るときと、この祈願の時の気合とが全然同一であつた。そこに全身をこめて一毫の隙もない。しかし私が完全に驚いたのは、このいきの激しい祈願が終つた後の動作であつた。

彼はつつと頭を上げると、神棚に奉斎した河井寛次郎翁製作の徳利を、全く驚づかみといふ形でとりあげた、同時に左手が神前の猛虎図をつかみ上げると、仰向いて徳利飲みに一口、がぶりと大口に神酒をふくんだ。それから神前に向つたまゝ、左手の猛虎図をかゝげ、その大口にふくんだ神酒

音楽

吉本青司

小山を崩す作業がはじまってから
やかましい
耳をおおいたくなるほどならまだいい
神経衰弱になりそうだ

そこで　その音を聴き直してみよう
と決心する
きのう聴いたI氏指揮のオーケストラ
ピアノ協奏曲　のせいかもしれない

書斎のカーテンを透かしてみる
白い砂岩の小山には
キリンまだらのショベルカーが
騒音をまきちらしている
〈この不逞なリアリティーを　猟奇のロマティークに変えるのだ〉

ふしぎなほど　爽涼とした感懐
奇怪な器楽の発想
破壊　あるいは創造の不協和音

アレグロ　ノン　トラッポ
アンダンティーノ　センプリーチェ
〈神経衰弱は空を翔んだ〉

代赭色の土砂の崩壊する音
白い礫岩の触れあう音

この恐怖のオーケストラの
指揮者は誰だ
無限軌道の上をつっぱしる　不敵な楽器の
演奏者は誰だ

機関砲めく鑿岩機の発する
連鎖状圧穿音
仕掛けられる火薬の爆砕音

ルービンシュタインよ
この狂熱の譜面をどう指弾する
おそるべき異端の楽音
その一回性　虚空生滅の音律

たえまなく往来するダンプトラック
その排気音　振動音
行きかうもの　世界を
移動するものの憂愁

小休止ののちふたたび開始される
アレグロ　コン　フォーコ
と　小山の崖したに
兄妹らしい幼な子がふたり
離れたり　近づいたり　たわむれあそぶ姿
強烈な不協和音にかき消される　その
無言の音楽

鵜

レモン果汁をのんでいると
岬の燈台が
くっきりと浮かんでくる
ごぞんじであろうか
岬産のレモンをくだすったかた
あさの太陽をうつすグラスに
たずねよる歌のいのち
なみの泡沫に似たためいき
はなびらに
青い木の実をうずめながら
凝視と憂愁に耐える海
おき忘れられたこころのように
ぬれている鵜の羽の色

を、勢ずさまじく大音荒く、自作の虎図に向つていぶき吹きはなつたのである。酒気濛々とする中で、私はこの異状な祈禱に感銘久しくしたことである。

このすさまじい祈願の式は、人の普通に云ふ意味の考案によつて出来たものでなく、まして人を驚かすことを意識したものでない。おのづからの衝動の発明が、この法式となつたに違ひない。起筆から息吹き(イブキ)に神酒(ミキ)をふき放つまで、その間何分も費さなかつたのは、即ち平素の棟方風である。私は、霊異といはれるものをあり〳〵と感じた。怖ろしい神の如き人間を、私はわが眼でまさしく見た。これこそ私の見てきた画伯の、その人となりと芸業に最もふさはしい振舞の甚しいものであつた。(「志功蕭伯の芸業」)

この描いた虎を神前に供え、それに神酒を息吹きかけて、「日に千里をいき、千里をかえる」虎の習性にあやかり、征旅安全の護符を制作した志功の行為は、ゴミソの性格が天賦されているといわねばなるまい。このゴミソ的な志功の性格が、東大を出てまだ数年にもならぬ白面の青年ながら、すでに「日本浪曼派」の教祖であった与重郎との、肝胆照らす通交の基盤となったことは否めまい。

3　筆者兄弟との再会

志功から虎の版画の年賀状を貰ったのは、昭和十三年の正月だった。一見、双頭の虎のように見えるが、虎斑(とらふ)から判定すると、一匹の大虎に、一匹の小虎が戯れかかっている図柄である。大虎の方の顔には六つの眼がギラギラと輝やいている。尾ッぽにも毛虫のような毛が生えている。小虎の方は四つ眼で、尾ッぽの方もスベスベしている。おもうに母子虎だ。保田が揮毫するところを見たという護符の虎も、恐らくこのような多眼の虎だったに相違ない。筆者は、この虎の年賀状に関連して、次のような思い出を克明に思い浮べることができる。と、いうのは、年の瀬も推し詰ったクリスマスあたりに、次のように切迫したハガキが、志功先生から舞い込んだからである。

＊

昭和十二年十二月二十二日

(東京市中野区大和町一八〇より、大阪市住吉区鷹合町三二〇薫風寮　小高根二郎宛)

久々のおたよりうれしゆう存じます。上京のお訪ねを待っています。華厳譜(二十三枚組一枚五円)公けの値は百円になっていますが七十円にして月割にしてもかまいませぬ。月五円ぐらいの割にしてもかまいませぬ。ほんとうに上京お出でをおまちしています。

＊

当時筆者は、大阪のさる化粧品会社の広告部で、コッピイ・ライターをやったり、レイアウトなどをしながら詩を書いていた。大学を出てから三年……、やっと親の扶養を離れどうやら自力で生活をしていた。が、まだ独身だったので、正月になると生家が恋しくなり、東京へ舞い戻って雑煮を祝うのを習わしにしていた。昭和十二年の暮にも、「久しぶりに帰京しますので、『コギト』発行所に立寄った帰りに、先生をお尋ねする予定です」と、ハガキを出したところ、前掲のハガキが返事として来たのだった。先生の名は「大和し美し」以来、ようやく高くなりつつあったが、まだ年の瀬を越すのに難儀をされてるのかもしれない。そう、筆者は心配した。それにしても、自分にはまだ先生を支援できるほどの甲斐性はなかった。が、弘高時代の親友の一人に、絵が好きな金持がいた。キッコーマン醤油の社長茂木七左衛門の長男潤一郎だった。彼はサイプレス画会展の最も熱心な鑑賞者であったし、弘前新聞に画展評を書いた立身出世画家・棟方志功の名と存在とを覚えてくれていた。その小使画家が、「大和し美

仔犬

高梨一男

生傷の絶えない四才のわんぱく坊主が
産まれたばかしの捨犬を拾ってきた
抱いて離さず
すでにわがもの顔である
「抱き心地はどうかね」
と云ったら
「あったかいよ　とっても」
頬ずりしながら答える

秋茄子

婆が秋茄子を漬けて居る
生甲斐のある表情で

し」「万朶譜」「空海頌」を発表以来、今や推しも推されもせぬ版画会の泰斗になっているが、最近作の「華厳譜」が格安の七十円で分けてくれるがどうだろう？　と、勧誘状を速達したのだった。折よく、千葉県は野田の茂木から、ぜひ世話を願うという返事が、賀状となって東京の生家へ届いた。その吉報を伝えに、正月二日の書き初めの日であつたか、筆者は兄太郎と「コギト」発行所を訪れ、発行者の肥下恒夫を伴って、目睫の間の志功画房を訪れた。案内された二階の床の間にはシメ縄が張られ、板木の山が祀られていた。まさにゴミソ棟方の神殿なのだ。陽に焦げた畳の上には、午前中に描いた書き初めの倭絵が十数枚飛び散っていた。志功は英国の野良着を裁ち直した錆朱のチャンチャンコを羽織り、紬のモンペをはき、昔鳥打帽に描いた唐草模様入りの風変りなベッコーの眼鏡を掛けていた。モンペの上から、豚の尾ッぽのようにヨレヨレの鶯色の兵児帯が裂けて垂れ下っていた。野間歯科医の餞別の帯だ。太郎とは合浦以来七年ぶりの再会だった。かつてボッティチェルリの「春」の話を出されて、「いゝなァ」「いゝなァ」と、両膝を揺さぶった大阪高校生は、、東大大学院を出ると上野の美術研究所の所員になっていた。すでに冨岡鉄斎の研究を始めていて、日本画の骨法を体得するために墨絵を稽古していた。いずれ日本美術史上の巨匠たちの作品を粉本としたものに過ぎなかったが、知友間に一寸した評判になっていた。志功はその話を保田から聞いていたのだろう、画箋紙を拡げると、何か描いてみせろと太郎に迫った。では……ということで、兄は臆面もなく画筆を執った。志功の書き初め中に混っている多眼の虎の向うを張って、唐獅子を描いた。なんのことはない、宗達が養源院の杉戸に描いた二頭の中の右の一頭だった。が、志功は「うーむ」「うむー」と、兄の運筆のたびに唸ってみせた。ペイターの「ルネッサンス」を読んでいた高校生が、いつのまにやら似非宗達に早変りしていたからだ。そういえば、面家として「天晴れ韋駄天走る」はずであった二郎は、これまた詩人に転身していた。志功は、やがて出来上った唐獅子を「うーむ」と見直してから、昔なら「いいおやなァ」と額を軽く叩くところを、「兄様はやっぱシ兄様ですネ」と、赤い口でニヤリと兄弟に笑ってみせた。

志功はその後も太郎に絵を描かせたことがあったらしく、次のような文章がある。

「随分、永い間の知人で、今宇治にいる方(筆者注・二郎は二年後宇治に転居した)の兄さんの絵が知人間で

評判なので観に行った。一寸観ると宋時代の趣を具えた、真正当な技法、筆運びで、その真摯な態度には驚いた。「上手を隠している所に、この絵のよさがあるよ」と話して、早速私も依頼して、快よく大作の「蓬萊山之図」を重厚な岩絵具で（その画人は岩物といっていた）敷き詰めた大鳥の子全紙に精進尽して仕上げてくれた。わたくしを驚かしたこの稀有な名人に等しい域を望む作品を、表具師に届けその表装のなるのを心待ちしている」（「床懸」）

ともあれ、この年賀で、筆者は初めてチャ夫人に出会った。まぎれもなく雪肌の津軽女だった。彼女が弘前時代に住んでいた富田町は、筆者の通学路の途中だったから、どこかの通か、小路で、一度ぐらい出会っていたに相違ない。次女ちよゑをネンネコでくるんで背負つていた。長女けよう、長男巴里爾は青洟を二本垂れて、蛸の襖絵にあきれかえったような賛嘆の声をあげている来客――筆者兄弟と肥下を物珍らしげに凝視めていた。

「これッ！　あっちサ行つてれ」

と、志功は子等を手で追う真似をしながら、微笑を含んだ唇は、青洟でもなめたい……というほどの、身一杯の愛情を現していた。次で筆者は雪隠観音を拝見した。

「もったいなくてネス。女のお客様だバ、どうしても、謝ってからでないとマイネですト……」

と、背中の子が眼を覚ますほどチャは陽気に笑った。貧しくとも家の内は春が一杯だった。三ガ日までの滞京で帰阪した筆者のもとに、やがて、首尾よく「華厳譜」の代金が届いた由の志功先生のハガキが着いた。

＊

昭和十三年一月七日

（中野区大和町より大阪市住吉区鷹合町小高根二郎宛）

茂木氏のこと色々と忝けなくくだされました友情深かく礼いたします。金子即日拝受送品の上、工芸七十一号も届け置きました。貴といあ里がたさを謝しつゞけ〼。

＊

ちなみに、このハガキの末尾に見える「工芸」（昭和十一年十二月号）には、柳宗悦は「棟方のこと」、河井寛次郎は「棟方志功君とその仕事」を執筆、志功を弘報するための特集号であった。

カラー版中国詩集3

王維詩集

原田憲雄訳

ワナをしかけてはしつこいウサギ見守り
釣り針たれて泳ぎまわる魚をねらう
こんなことをするのは食うためで
ヒッピーあこがれてのことではない
ぼくはひっそり住むのが好きだ
菜っぱを食っては情熱をさましてるのさ
ところが今のきみはふんぞりかえり
ブルジョワ官僚になりたいらしい
ぼくは南山のふもとに住んで
自分の存在さえ忘れっちまった暮らし
鳥の群れにはいってもかれらはびっくりせぬし
けだもの見てもみんな仲好しさ
雲が女房で
空が女中さ
いったいどういうことじゃろね　先生のおかげで
ぼくは　この谷の自由のなかにやって来たのに

¥690

角川書店

応召日記 (九)

蓮田善明

十二月三日（土）

右推稿。今日で週番終る。十日間亘つてゐたので、何だか兵営の方が板について、帰るのに妙にまごつく気もちさへした。高木氏に誘はれて、高木氏宅に夕餐の馳走にあづかる。帰つて原稿の推敲。敏子の手紙をよむ。敏子は帰りたくなつたらしい。晶一が田舎つぺえの学校はいやだといふさうである。自分も決しかねる。しかし敏子としてはこれきり自分が逢ふことなく死んでゆくことはさびしいだらう。

十二月四日（日）

城戸さん宅へ行き、映画を見る。兄らしい顔をみつけた。植木にかへることをやめる。K伍長をみつけ一緒に夕飯をくつて帰る。掃除もしてない。お茶一杯もつても来ない。風呂に行つてね。

十日に又五六人将校が出る。

十二月五日（月）

雨が降つてゐたのである。しかしありがたいことにもう降つてゐない。段々晴れて日さへ照つてきた。午前は班長に命じて密集教練をやらして、検閲を見学するつもりであつたが、午前は軍装検査だけであつたので、隊に帰つてブラ〳〵してゐた。

午後も隊にゐて、普及教育について全将校が計画を出すことになつてゐるので、皆でその準備をする。仲々沢山で大変である。S、M、O氏は演習。T、T氏と三人になつて研究する。

T氏が、中隊長室でMさんと高木さんはよその中隊に行くといつてゐると云ふ。耳をすましたが分らぬ。冗談だといふがTは間違ないといふ。R本部に呼ばれ、副官から単独滞在は不可と却下された。陸軍省の要求とすればやむをえぬからあつさり承知して帰る。帰つたら果して高木氏は五中隊、M氏は十中隊附になつてゐた。Tは土木工事の監督の時、一日中じつと坐りこんで耳をすましてゐるといふ。何か人の話をきゝとらうといふのかといふと、然らず、土くづれなどのかすかな音もきゝもらすまいとしてゐる、それで隣室の話もききとれたといふ。びつくりした。

夜、食後城戸さんへ行き、例によりよもやまの団欒である。何やかや出されるものを沢山たべて九時に帰る。S氏から三越から送られた羊羹を分けてもつて行つた――。

敏子へ、手紙を書き、帰るべきこと、子供にそれを納得させ方、赴任旅費請求のための寄留証明書大至急――のため速達を出し、昨日城戸さんにお願ひして為替にくんでおいた百円を同封してヤノスケさんに出しに行つてもらつた。七時半まで間に合ふとのことだつた。敏子はよろこぶだらう。晶一のためにも田舎は必ずしもわるくはない。又どうせ戦死したら、成城は退学して他の中学に受験するとなると、そのためにはこちらへ帰つておくのも必要だ。

しかし陸軍省が、精神を考へないで、物質的な方策のみ連発するのはどうか。留守隊の俸給（加俸）値下げ等も然り。大局を高処より見る人が少いのか。留守隊なども気合を殺ぐことばかり、却つて召集将校でそれを憂へるばかり。

宿題を書き十二時。S少尉が検閲後一杯やつて帰つて飯をくひながら賑合つてゐる。一寸顔を出してからねる。「土と兵隊」をよみつゞけ、ねる。

十二月六日（火）

五時に便所に起き、フトンの中で「土と

兵隊」を読了、記録と感想文である。詩にまで高めねばならない。詩の構想が必要である。このことを書きたくて起きてこのペンをとる。

「麦と兵隊」以来、文壇は、この身を以てした体験の生々しい記録に圧倒されてゐる。そして、作者は小説ではないと断つてゐるのに、小説だ、文学だとほめる。詩魂ありとほめる。又一方では上田広の小説化したものが白々しいと思ふ。しかしこの小説化したものも「黄塵」で評判が出た。

けれど、何れも芭蕉の「奥の細道」その他の如くでない。まづ「構想」を信ずる心が欠けてゐる。神（？）の構想を仰ぎ見たものでなければ、単なる壮烈な現実も、又小説的な仕組みも第二義である。まだ思はくがこびりついてゐる。第一義は神の構想であり、詩精神の構想でなければならない。何れもそれに近づいてはゐる。「麦と兵隊」「土と兵隊」は、戦の最も単純な一つの行為を通してそれに近づいてゐる。しかし火野はそれを詩とせずに現実を惜しみ、感想に堕（おと）してゐる。——全くといふわけではないが。

私は、このノートとともに岩波文庫の「奥の細道」を棚から下ろして枕元においてゐる。この数日枕頭にもち来りつゝまだ開かなかつた。今朝は詩を惜しんでひしひしとよみたい。このよみたい慾望が自分にうれしいくらい。

開けて、鹿島紀行の最後、

塒せよわら干す宿の友すゞめ　松江
秋をこめたるくねのさし杉　桃青
月見んと汐ひきのぼる舟とめて　曽良

やはり芭蕉には、すごいばかりに詩魂が作品の髄を通うてゐる。この短かさ、この単純、——火野葦平も「書き止めておく」より何を書かずにおくか、何を書かざるべきかを思はねばならぬ。

芳野紀行序をよむ、——枕によこたはり——やがて七時。もう明るんでゐる。薄明のごとく。

十二月七日（水）

成道寺へ行軍。紅葉すべて散り、池水の底に沈めり。帰路六粁行軍。汗かく。練兵場で小隊密集教練。解散。

敏子より来信。二人が期せずして未練を起して来た。五日の速達を見たら敏子はとび立つてよろこぶだらう。晶一も成長してから、この母の心をゆるしてくれるだらう。

帰つたら、敏子が伊セ丹から送らせた大きな小包がついてゐた。アメ玉、栗きんとん、ラスク、のり、など。

この頃毎夜手紙ばかり書く。快心の手紙がかけない時は苦しい。しかも皆走りがきばかりになる。もう返事の借金もなくなつた。

十二月八日（木）

今朝は霜特につよし。

午前帯（？）山で歩哨をやる。むづかしくもあり、研究も不足でおもしろくなく、又何だか体の力が抜けたやうで、風邪でもひいたのかと思つた。午後は防禦をやつたが、作戦要務令の防禦の総則にピツタリ合つてゐたのに自ら驚いた。

後三日である。

五時からT伍長の送別会を下士集会所でやり、すき腹に酒がうまく、よい加減にメイテイし、それから新市街に高木氏と出かけ、将校の送別会に加はる。終つて二人で一二軒寄つて、しやべつて帰る。高木氏は真に決意ある人である。銀行員にして実に驚くべき人である。

軍部の事務官たちこそ決意といふ点で大きな誤謬をなしてゐる。

出征するTも今夜も一寸激励してみた

が、哀れな奴だ。東洋の美をみてこいといつたのに、この美学者——きいてあきれる——を今夜は最も軽蔑したくなつた。こいつがディルタイを飜訳したり、ルネサンスを書くといふからあきれる。ひつぱたいてやりたかつた。

コーヒーのみに森氷に寄つたが、すつぱくてのめなかつた。レコードのいいのをきかせてくれといつても、かけないし、野蕃人！

そこはかと

——自注で言い残したこと——

森　亮

詩集「庭と夜のうた」の初めに私の古い短歌を一首序歌として載せておいた。

真夏日の日差しがなかにそこはかと庭しづみゆく昼はかそけし

これがその一首であるが、「コギト」昭和十五年四月号にその頃の短歌五十首近くを発表したとき冒頭に置いたのもこの歌だった。昭和十年の夏、郷里の家で卒業論文を書くためのメモなど作りながら休暇を過ごしたときに出来たものである。第三句「そこはかと」は無理を承知で使つてみた。通例ならこの句は「そこはかとなく」と否定形にして使う。でなければ、たとえ間を置いてでも後に打消の言葉が来る。その頃一番よく使つたはずの「言海」には「そこはかと見えぬ山路に」とか「そこはかとだに思ほえぬ哉」とかの用例が出ている。

私があの場所で求めていたのは「どこということもなく」というぐらいの意味の言葉であつたから「そこはかとなく」が最も適当な句であつたが、二音の字余りで使えない。他の五音句「なにとなく」や「ここかしこ」で置き換えてみたが落着かない。結局多少の不満を残しながらも「そこはかと」に決めた。声に出して読んだ時の調べがそれこそ何処ということもなくよかつたからである。

その後、気になつていたから色々と分かつたが、新古今集の巻八哀傷歌に「そこはかと思ひ続けてきてみれば今年のけふも袖はぬれけり」という否定語を伴わない用例がある。今度詩集の自注を書くため数種の辞書に当つてみたが、その中では講談社発行の「古語辞典」だけが「そこはかと」が単独で「そこはかとなく」と同義に使われることを記し、実例として挙げているのが矢張り上記新古今の慈円の歌である。

私が知っている近代の用例は上田敏の「海潮音」の訳詩「真昼」に見えるものである。便宜上面倒な漢字はわざとルビの平仮名を本文に使って引くが「また、わくらばに吐息なす心の熱の穂に出でて／つぶやき声のそこはかと、ひげながかひの胸のうへ／覚めたる波のゆさぶりや、うねりもあてにおほどかに／起きてまた伏す行末に沙たち迷ふ雲のはて」という第四連の二行目にある「そこはかと」がそれで、以下最後まで否定語は見当たらない。ルコント・ド・リールの原詩に当たってみると不思議なことに（実は敏の訳詩では珍らしいことではないが）これに対応する言葉が無い。従って敏がこの句をここでどういう意味に使ったかを立証する極め手はない。

私の知っているもう一つの例は「不器男句集」の

鵙（もず）来鳴く榛（はん）にそこはか雕（ゑ）りにけり

で、これは「そこはか」とあるだけで「と」がくっ付いていないが明らかに類句である。小刀か釘か知らないが、そういう先の尖った金属で「そこはかとなく」文字か図形かを刻んだというのであろう。ついでながら芝不器男のこの句集は私の古くからの愛読書。また「真昼」の入っている「上田敏詩抄」（岩波文庫）は昭和六、七年頃から読んでいたが、

果樹園　二〇〇号　昭和四十七年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

果樹園

第200号

画仙・棟方志功(㊦)　小高根二郎
風呂屋(二)　福地邦樹
吾輩は蜘蛛である　宮城賢
トンボ　中野信子
応召日記(十)　蓮田善明
鳩と涅槃　吉本青司
古刹にて　高梨一男
編集後記

画仙・棟方志功(㊦)

―その画魂の形成―

小高根二郎

十四、画魂ついに成る

1　水谷課長が舞ってみせた「善知鳥」

金に心配なく、ひたむきに志功に精進させたい。そう、柳が痛感したのは、たまたま駒場の邸に遊びにきた志功が、帰りの電車賃さえもちあわせていぬことを知ったからだ。

「多分昭和十二年頃でしたか、棟方は貧乏の極で、私の所に来ても帰りの電車賃に事欠く程でした。丁度その頃引越をせねばならぬ事情がありました。私は一案を立てて、幾許かの棟方の板画を懐に入れ、京橋の日本麦酒会社に急ぎました。当時専務の山本為三郎氏に刺を通じました。「山本さん、今日はお希ひ事があつて来ました。有無を云はないで、之を二百円で買つて下さい。之が何んなものか、そんな事を聞くのは後廻しにして下さい。どうぞ無条件で二百円下さい。」その時山本さんは心よく「よろしい、あなたがいふなら、貰ひませう」さう云つて、すぐポケットから百円札を二枚出して渡して下さいました。私は同氏にどんなに感謝したでせう。今の人は「たつた二百円か」と思はれるかも知れませんが、当時の二百円は今の十万円にも当るでせう。私はそれを懐にして、棟方の家へ急ぎました。その頃の棟方は多分中野近くの馬橋に住んでゐたと思ひます。奥さんが玄関に出て来られたので、その金子を手渡しました。後で聞いたのですが、棟方と共に涙にくれ、先づ神棚に札を供へて、手を合せたさうです。」

（「棟方と私」）

この柳の文章には、いささか誤謬と時間的な錯誤がある。馬橋は大和町の思い違いであり、大和町から代々木山谷へ引越すのは、後述するが、ずっと後年だからだ。が、志功は、時に電車賃にもこと缺くほど、経済的に苦闘していたことだけは間違いない。と、いって、彼はなすこともなく貧乏に甘んじていたわけではない。四人の扶養家族を抱えて、懸命に局面の打開を図っていたのだ。そのためには、内職として挿絵を描くこともはばからなかった。八重洲の春陽堂から、岸哲男の編集で「少年文庫」が刊行されていた。それに志功は少年少女向きの挿絵を描いた。山村暮鳥の「鉄の靴」、ルイス・キャロル作・楠山正雄訳の「不思議の国のアリス」等に、懸命の画筆を揮った。内職だからといって、投げやりな甘えや妥協は、微塵もなかった。いや、志功は藤屋の幼少年時代に戻って、お伽噺の夢幻の世界を彷徨したのだ。

スコーはアリスと一緒に、善知鳥沼の畔に坐りながら、退屈していた。「なして遊ぶべナ？」と、二人は思案したが、なかなかいい思い付きが、思い浮ばなかった。水際には、

果樹園　一九九号　昭和四十七年九月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁　六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

新潮選書
詩人伊東静雄
小高根二郎
新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。
井上靖
¥550
新潮社

あの短歌を作った際にはこの用例は少しも意識しなかったはずである。

最後にあの歌の語釈をもう一つ。「庭しづみゆく」の「しづむ」は「しずまる、落ち着く」で、それに「静かになる」ことも含んでいたかもしれないが、田舎の夏の庭のこととて蟬の声は一瞬も止むことはなかったはずである。しかし、そういうやさしい騒音に邪魔されない昼下がりの静かさがあったはずである。更に言えば、当時は作者としてそれほど意識していなかったが、その夏の庭がその中で私が昼間を屢々過ごした洋風四阿（あずまや）もろとも現実世界から降下沈没して行くという気持も少しは入っていたのではないかと思う。

（四七・七・三一）

＊＊
＊

＊＊
＊

＊＊
＊

編集後記

七月八日。名古屋の荒木町の観音寺と田代町の鉈楽師に円空を見にいった。前者ではあまりおびただしい作品群がホコリをかぶっていたし、後者では守る人がなく、扉さえ開けられなかった。

十日。一九七号宮城氏の「単語的存在」中野さんの「星の子」に対し、うれしい反響があった。そういえば前号の田中氏、先号の吉本氏の作品にもそれぞれ反響があった。今まで詩に対する反響があまり少なすぎたのでうれしかった。

二十七日～三十一日。珍らしく取材旅行をした。富山城端の善徳寺では折から虫干法要をしていたので、寺宝を残りなく拝観できた。丁度、日本民芸館の浅川園繪さんから柳宗悦氏の「美の法門」を拝借して勉強中だったので、一層面白かった。と、いうのは、柳氏が「美の法門」を著述したのは、この善徳寺でだった。柳氏が一月ばかり起挙した部屋から眺められる庭には、「美の法門」という記念碑が建てられていた。五箇山の行徳寺では、妙好人道宗の子孫である住職道宗静夫氏におめにかかれ、いろいろ書仙逸話をうかがえた。最後に名古屋近郊の西批杷島に西方寺を尋ね、先代の住職安藤智水氏の未亡人から、三部屋の大襖に、書仙が書筆をふるった時の模様をうかがった。

書仙伝に対し、久保忠夫、相馬貞三、清水文雄、内田克巳、守屋美知代、松田忠吉、高藤武馬、原田憲雄、その他の諸家から励ましの御言葉を頂戴した。（O）

果樹園　第一九九号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年九月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

楯のような鋭三角形の葉に守られて、ぬきんでた花莖に、三弁白色のオモダカの花が咲いていた。花弁の飛び散るのを防ぐように、花芯には黄の宝石が鎮座していた。「いいことがあるワ。スコーに王様の冠を作ってあげる」と、アリスがいった。「ワだバ王様だテか？」「そうヨ。王様だってかまャしないワ。お伽噺ですモノ……」と、おしゃまにアリスは口をとがらせた。彼女は水際に立つと、手を伸ばして水中から頭をもたげた花莖を抜き取ろうとした。「マイネ！アリス。沼貝夫婦に連れていがれるぞッ！」と、スコーは踊り上って叫んだ。「大丈夫ヨ。沼貝夫婦なんテ、どうせお伽噺でショ」。そう、アリスは笑って、片足立って水面へ手を伸ばした。細い指がやっと花莖にとどいた。「マイネといったらマイネ！　メドチに肝コ抜がれても知らネぞ」と、スコーは威した。まさに花莖を掴もうとしたアリスは、開きすぎたスカートを気にして手を離した。この時志功は、大変な道草を喰っていることに気付いた。お父サの命令で、酒屋に酒を借りにいく途中だったのだ。アリスなんて会わねばよかった。これからカンビンに半分ほど酒を入れて戻ったとしても、酔いが引いて白け切ったお父サは、カンビンを手に取るや、ワにたたきつけるに決っている。「ああ大変だ。急がねばマイネ」。スコーは逸散走りに駈けだした。駈けながら彼の両耳はスルスルと伸びた。眼は桃色に血走った。走法は、気が急いたギャロップだった。スコーはいつか野兎になっていたのだ。「待って頂戴！」とアリスが追ってきた。「オモダカの王冠はいらないノ？」と、彼女は走りながら、まだ誘っていた。と、兎の姿が急に見えなくなった。角を曲ると兎穴があった。いや、ノレン掛けで昼間も暗い酒屋だった。彼を追って彼女も跳び込んだ。眼がくらんだ。いや、そうではない。内は真暗なトンネルだったのだ。靴先で足元を、探り、探り、用心して進んだ。もう、かなりの距離を進んだ……と思った矢先、急に足元の支えを失った。つまり、彼女は井戸のような空洞を落下しだしているのだった。無間の距離だった。地球を突き抜けるのではないか？　と思われるほどの、長い長い距離と時間だった。が、やがてアリスは幸運にも、ドスン！　と芝や枯葉の山の上に尻餅をついたのだった。

この兎穴の転落から開幕する「不思議の国のアリス」のお伽噺世界から、はッ！　と志功は我に帰った。まずアリスの面輪から決めてかからねばなるまい。善知鳥沼の畔で遊んでいたアリスは、沼続きの瓢箪池に臨んで建てられていた医師三家の真中、歯科医野間家の長女しげ子でなければなるまい。弁護士控所の掃除を手伝ってくれた頃の彼女は、いつも三つ編みのお下げを振り分け、それに青マントの小学生だった。そういえば、志功が初めて入選した公募展・白日会に出品した「清水谷静景」には、点景人物として、女学校低学年時代のしげ子に登場をしてもらっていた。お下げに、セイラー服、赤いストッキングに編上靴だった。アリスはイギリス娘。しかもオックスフォード大学教授の愛娘だから、もっと上品に仕立てねばなるまい。額際の髪は花輪のように編み、首には南京玉でないロケット付きの本物のネックレースをさせよう。それに、ヒダをとったレースのカラーをした上衣。スカートは太い横縞で、派出にならぬように、その上から刺繍をほどこしたエプロンをさせよう。ストッキングはスカートに調和さすために、断然、細目の横縞。それに編上げでないカガトが低い靴……。

志功は、墨で、スベスベとしたケント紙に、洞穴から出てきたアリスが、ほっとすると同時に、お伽噺の別世界に好奇の眼をみはった瞬間を描いた。内職といった手軽さはどこにもない。みっちりと描き込んでいる。アリスの友達になりきった誠心誠意からだ。まさに「志功之ェ」という署名を「嗣治」としたら、そのまま通りそうなほど丹念な精緻さだ。

それもそのはず、その頃、志功は新らしいお伽噺の世界を持っていたからだ。それは渋谷区代々木山谷二二五番地の水谷家だった。（五年後、志功は大和町からここに引越した）。京王電車の西参道で下車、明治神宮へ向ってすぐ右手にある山内邸のところで右に折れ、川沿いに行って、さらに一度左折する、徒歩で七分ばかりの所だった。

主人の良一は志功より二つ年上で、当時、商工省特許局の課長だった。彼は典型的な秀才で、愛知一中を経て一高英法科を灘尾弘吉

不思議の国のアリス　棟方志功

についで二番で出、東大法科を卒業のときは学士院から賞をもらったほどであった。内閣統計局から商工省に移り、現職にあった。役人にしては、趣味が高尚にすぎ、教養がありすぎる……といった人柄だった。数年前から、柳、浜田、河井が編集していた「工芸」の編集補助者をしていて、比木喬というペンネームで「鑑賞の創造的性格」というエッセーなども発表していた。家庭には、ふみ夫人とアリス役の十三歳の美知代、ほか四人の弟妹があって、いつも湧き立つような賑やかさだった。いわば、志功にとって、少年時代の野間家に相当するサロンだったわけだ。よく日曜など、志功は与田準一の童謡「鶴」を唱い唱い現れた。

カゼカラ　クル　ツル　ナガレテ　クル
ムラサキ　ツユタマ　チラシテ　クル
イナダノ　オバナニ　マミレテ　クル
タンコロ　タニシヲ　タタキニ　クル

甘く唸るような、唱うような、一種独特の節回しが近付いてくるのを聞きつけて、美知代は、「それッ！　熊の仔の小父さんよッ」と、弟の烝治や、妹の素子を動員して玄関で待ち受けた。「日曜にお邪魔いたします。熊の仔より」というハガキが、あらかじめ舞い

込んでいたからである。やがて、「水谷様はいらっしゃいますか？」と、志功が現れた。それッ！とばかりに、子供たちに包囲された彼は、熊祭の牲よろしく、有無をいわさず、子供部屋に連れこまれてしまった。と、いうのは、志功の来訪の目的の一つに、風邪で寝ている敬の見舞いもあったからだ。この七歳の次男の見舞に、熊にまたがる金太郎の倭絵を、志功は懐中に秘めてきた。「敬ちゃん。早くこの金太郎のように元気になって、うんと小父さんを乗り回してくださいい」。そういって、志功は敬の枕元で、四つ折りにしていた絵を開いてみせたので、美知代も、烝治も、素子も、わッと笑ってしまった。ハガキに志功自身が書いていたように、「熊の仔」は、水谷家でも、通名になっていたからだ。当然、「私にも……」「僕にも……」ということになった。志功はオカッパとイガ栗頭に包囲された。昔、長島小学校で、習字前の休時間に、級友や学友たちに凧絵を描かされた時と、同じ格好になった。すかさず美知代は墨汁と半紙を用意した。「さあ、なんでも言ったり、言ったり……」と、志功は注文を取りながら、美知代のために「のっぽのアリス」を描いていた。彼女は父良一に以て背が高かったからだ。十二歳の烝治は、日本軍の大陸遠征にちなんで「八艘とびの義経」を注文した。十歳の素子は、姉のアリスに対抗して、「青い目をしたお人形」だった。そこに

「なんだ！ なんだ！ なんだ！ お前たち。お父様の大事な友達を分取って……」

と、いつか良一が突っ立っていた。「はイ、お次ぎ！ お父様は？」と、すかさず志功がいったので、いつか良一と並んで立っていたふみ夫人ともども、一家中がわッ！ と笑い崩れてしまった。

水谷は子供たちの手から志功を奪還すると、座敷へ連れ去った。入手したばかりの浜田の「赤絵角瓶」を見せるためである。対象は明るい肌色なのに、床間と違棚の放逸な空間を、でン……と、その一点で取り鎮めていた。錆朱とくすんだ翡翠色の雄勁な線描と点描が冴えていた。正面に一本の葦が立っていた。側面は斜線の波だった。ただそれだけの絵付にすぎなかった。これだけバまさしく、ワが目指す「点・一線」だ。思わず志功は、花台から、この角瓶を抱き取った。ずしり・……と、容積に似合わぬほどの重量が、両掌に来た。赤ん坊のように、胸に抱き直しながら、その重量を味った。この地球の端くれ、大地の赤ん坊！ そうした感慨だった。いや、端くれや赤ん坊ではない。この焼き上げられた一塊の土くれに、乾坤が、大地が、凝縮されているのだ。逆に宇宙を呑み込んでいるという感銘が適切だった。志功は、これに似た感銘を、柳邸の松絵の大鉢に感銘したことを、まざまざと思い出した。あの深鉢を覗いていたら、八甲田の千仭の谷間を思い浮かべた。その断崖の岩陰から、松籟の笛に誘われて、つと神鷹が舞い上ってきた。白い丸の紋所を打った翼は、ゆるゆると螺旋を描きながら舞い上ってきたっけ……。

志功は葦の角瓶を抱くというより、ほとんど抱擁していた。この雄勁な葦をそよがせるのは、どこの風より、陸奥の秋風でなければなるまい。とたんに、水面すれすれに、新縄に吊るされたホウズキに似た川提灯が、大波のように志功の胸に揺らいだ。その揺曳につれて、笙、ひちりき、太鼓、横笛の奏楽が湧きたった。それに、突発的に、笛付風船の悲鳴もまじった。打揚花火とカラミ飴の善知鳥神社の大祭だ。栃木県は益子の窯で焼いた一塊の土くれが、なぜ無縁な善知鳥沼を、ワに回想させずにおかないのか？ これが芸というものだろうか？ それともゆかりというものなのだろうか？ そう、志功は低回し、回想した。

「どうだい？ 棟方君……。この赤絵角瓶

はいいだろう。」

と、角瓶を抱いたまま離そうとせぬ志功に、その感銘の深さを知って、水谷は満悦した。「ネ、いいだろう」を繰返えして、白皙な顔を紅潮させて頬笑んだ。彼は志功が来訪のつど、いつも何か新しい将来物を披露した。それは柳の書であったり、河井の湯呑であったり、ゴッホやマチスの画集だったりした。そして、「ネ、いいだろう」と、志功の共感を求めて、彼の同意を得るのを、無上の楽しみにしていたのだ。

風呂屋 (二)

福地邦樹

私は風呂が好きだ
銭湯は六軒先にある
だから内風呂とあまり変らない
気分のよい時も行くし
気がくさくさした時も行く

湯はひろびろと湧きあがってくるし
高い天井には湯気がふっくらと満ち
裸の男達がのんびり体をこすっていて
話し声が谷間のようにこだまする
せからしい生活の歯車の中で
温泉に行ったような時間帯なのだ

風呂へ行かなくなるとどうも調子が悪い
風邪をひいているか
心がすさんで頽廃的になっている時だ

湯につかると心がなごむのは
小鳥の水あびのような浄化本能が
私達にも具わっているからだろうか
何億年も前に魚だった私達の皮膚の
感覚の記憶なのだろうか

「水谷様。これは良い悪いなぞという、以上なものであります。私は、この水底にがっしり根を張った葦の絵付で、昔よく遊んだ故里の善知鳥の沼を思い出したのです。この角瓶を、こう逆さにすると、内から、鮒や、ハエや、泥鰌ッコや、蟹や、小蝦や、鯰や、源五郎や、アメンボが、どッ！ と流れ出てくるような気がしましてネ。これはもう、壺とか、瓶とかいった限界以上の物です。」

と、志功は抱いた角瓶の肌を撫でさすった。

この時

「善知鳥だって？」

と、水谷は大きな耳をそばだてた。

「そうです。善を知る鳥……と書く、ウトゥです。」

と、志功は答えた。

「君は善知鳥の伝説を知っているノ？」

と、畳み掛けるように水谷は問いかけた。志功は詳しいことは知らぬが……と前置すると、善知鳥神社は天照大神の三人の姫君たちを祀っていること。なんでも昔、安方という貴人が罪を得て陸奥に流されてきたが、智・仁・勇にすぐれた人であったので、蝦夷たちをなつけ、漁耕のたつきの道を教えて外が浜一帯に、平和の理想境を確立したこと。彼の妻は「ウトゥの前」という美人であったこと。彼女は弁才天の生神として境内の瓢箪池の浮島に祀られていたので、いつか彼女の名が社名となったこと。安方とウトゥの前の間には、安日という子があったが、両親とさかれて遠く西国に配流になっていたこと。たまたま安倍比羅夫が蝦夷征伐にやってきたみぎり、ことのほか安方の治政のよいことに感銘、その由を奏上したので、やがて赦された親子は、京に迎えられて幸福な余生を送ったということ。大体、筆者が既述したオーソドックスな

伝説の解説をした。

「なるほど、棟方君の善知鳥は、めでたし、めでたしのお伽噺。いかにも楽しい伝説だね。しかし、それとは全く裏腹な、悲惨きわまりない善知鳥の別の伝説を知っているかい？」

と、水谷は少し得意げにいった。

「知りません。」

と、志功の答は卒直だった。と、いうのは、博学な水谷に、いつも志功は誤謬を正されたり、耳新しい啓示を与えられていたからだ。一昨年京都留学から帰ってすぐさま制作した「華厳譜」でも、そうだった。華厳経に典拠して制作したものであれば、「釈迦」ではなく、光仏である「毘盧遮那仏」でなければなるまい。「風神」なんていうのも、駆け回ることの好きな「善財童子」と題するのが適切だよ。と、一本取られていたからだ。

「それは世阿弥作の謡曲「善知鳥」なんだ。謡曲の中には悲劇的な番がいくつもあるが、「助けてたべや御僧と、云うかと思えば失せにけり」と、最後の最後まで救われぬのは、この「善知鳥」一番だけなんだよ。」

と、水谷は前置をすると、その筋書を志功に紹介した。

諸国を修業で回っている僧が、陸奥の外が浜へいく途中で、越中立山で行を修めた。立山といえば、今昔物語が伝えるように、地獄があるということで、昔から定評のある難所だ。僧は行を修めて立ち去ろうとすると、案の定、凄まじい風体をした老人に呼びとめられた。なんでも外が浜出身の獵師の由だが、昨年の秋旅先で死んだので、家に残してある蓑笠を、片身として弔ってくれるように、妻子に言付けてくれ、という。なにか証拠がなければ妻子も信用すまい、と僧がいうと、老人は着ている麻衣の片袖を引きちぎって僧に手渡すと、泣く泣く僧を見送りながら消えていった。外が浜では、獵師の妻が子千代童を守って寂しく暮していた。僧が立山で亡霊と出会った由と、その折に託された片袖を示すと、遺っている着物の袖口に合わせてみて、ぴたりと符合する。今は疑う余地もないと、言付けの蓑笠を仏前にそなえ、僧に弔いの読経をしてもらった。南無幽霊出離生死頓生菩提。すると、そこに忽然と、凄まじい風体、形相をした夫の亡霊が杖をついて現れた。そして

陸奥の外の浜なる呼子鳥鳴くなる聲はうとうやすかた

と、悲歌を朗詠した。妻子はなつかしさにたえず声をかけようとするが、その瞬間に掻き消えやしないかと案じて、ただ声あげて泣くばかりだ、亡霊の方も、わが子可愛いさに髪を撫でてやりたいと願うが、近付くと千代童の姿が消えるので、戸外でただ泣くばかりなのだ。思えば、この断腸の悲哀に悶えねばならないのは、獵師として殺生に明け暮れた因果応報なのだ。とりわけ、善知鳥は捕えやすい砂原に産卵する。親鳥が空で「うとう」と鳴けば、子鳥は地で「やすかた」と応える。そのありかはたちまち知れて、まんまと子鳥は獵師に捕えられる。獵師がほくそ笑めば、親鳥は空を翔け回って血の泪を降らす。この切ない親心が、子を持つ親の身でありながら、どうして分らなかったのか？　なぜ慈悲心が湧かなかったのだろうか？　ひとたび幽明界を異にした今は、攻守その所を変えた。善知鳥は鷹、我は雉。獰猛な地獄の化鳥になった善知鳥は、眼を啄もうと襲いかかる。鉄の嘴、銅の爪で襲いかかる。「助けてくれ！　坊んさん、助けておくれよ！」と叫びながら、亡霊は逃げ失せる。

そう、水谷は荒筋を紹介すると、何を思い付いたか、手を叩いて夫人を呼んだ。ふみが顔を出すと、袴・白足袋・舞扇の準備を命じ、美知代に一寸手を借してくれるように言付けた。

「棟方君。上手ではないが、その「善知鳥」のキリのところを舞うから見てくれ給え。」

と、席を立ったので、志功は、「なして水谷様は、ワの知りもしない青森の噺コや舞コを知ってるのだべ？」と、まるで化かされたような気持で待っていた。やがて仙台平の袴、白足袋に改まった水谷が、ニコニコ顔で現れた。長身がいよいよ丈高く見えた。桧木の廊下に立って、トン！　と軽く足踏みをし、「ここが舞台」、松のある庭を振返って、「舞台の背景である松羽目に見立ててくれ。」と説明した。これまたニコニコ顔で現れた美知代に、「善知鳥」のキリをやるから……といって、自分の背後に端居させた。それから水谷は手を伸ばして、欄間に掲げてあった「尉」の面をとった。本番ならば、骸骨のような「痩男」だけれども、ありあわせの面で勘弁してもらいたい、と付言した。そこに、「旦那様。こんな見苦しい物を……」と、婆やがツギの当った使い古した黒前掛を持ってきた。「そこがいいんだよ」と、彼はそれを受けとると腰にまとった。「失礼！」と片膝ついて志功に背を向けると、指を櫛にして、撫でつけていた頭髪を、ザンバラに梳いた。蓬々の黒頭の感じを出すためだ。そして「尉」の面をかけると、爪先でくるりと回転しながら立ち上った。

「棟方君。獵師の亡霊だ。」

と、水谷はいった。悲みの凝固体のような面

吾輩は蜘蛛である

宮城　賢

吾輩は蜘蛛である
武蔵野の一角の雑木林の主である
樹はどんどん伐られ
好物の昆虫たちもいなくなり
仲間たちは餓死するか逃げだしてしまった
吾輩は横井庄一さんのように　しかし
密林ならぬ疎林に孤塁を守っている
ときおり物好きな男が林のなかを散歩し
吾輩の巣の下に立ちどまり
吾輩をじいっと観察するふぜいである
きょうこの仁は吾輩に紙片を示した
吾輩はそれを小さな詩篇だと看てとった

蜘蛛よ　おまえはわたしの詩法の憧れだ
無数の同心多角形の精緻な系の中心に
宇宙の中心に座すように座した
この点のような存在
ちゃこまって蟄居しているが
眼にふれるどんな微細な異物にも気を許さず
体に似合わぬ大きな多角形の網の中心に
いつもめざめて獲物をねらっている
わたしはあの蜘蛛でなければならない
だが蜘蛛よ　わたしはいま
巣の拡張の必要も感じているよ

一読して吾輩は気をよくした
むくつけき吾輩を詩なんぞにうたいこむとはな
そろそろ腹がへってきたな
詩ではメシが食えぬそうだが
このごろは蜘蛛の世界もせちがらくて
こうして三日三晩も網を張っているのだが
腹にこたえぬ藪蚊でもかかればよいほうだ
どれ吾輩も人間さまに対抗して
ひとつ巣をもそっとひろげるとするか
最後の糸をふりしぼれ！
吾輩が死んだらあの仁は
こんどはどんな詩を書くだろう？

に塞かれた声は、心なしか陰に籠って聞こえた。志功はぞッとした。横殴りに降る霙。裏返ったように逆巻く怒濤が寄せる外が浜。その渚に悄然と佇む亡霊だ。日頃の人なつこく物柔らかな物腰や風情は、どこにもなかった。ただ己だけを凝視めて痴呆している影であった。亡霊は片膝立てて縁に坐り直すと、右掌に扇を握り、左掌は親指を包んで構えた。そしておもむろに

「〽娑婆にては、うとう、やすかた、と見えしも……」

と、沈痛な声で謡った。面に籠った声は幽玄だった。それをうけて、少し透きとうりすぎる声で、亡霊の娘が

「善知鳥、やすかた、と見えしも……」

と、謡いつぐと、その声の糸に操られたように、亡霊はゆらり……と立ち上って舞いだした。娘は澄んだ声で謡い続けた。

「……冥途にしては。怪鳥となり罪人を追ったて鉄の。喀を鳴らし。羽を敲き銅の爪を。研立てては。眼を攫んで肉を……」

と、いうところで、亡霊は差し出した左手の親指を折った四本の掌で嘴を造型し、右眼左眼に当てて、まさに眼の玉をえぐり取る象徴の処作をした。志功はぐッ！ と息を呑んだ。この地獄の様相とは裏腹の、涼しい声で娘は謡った。

「… さけばんとすれども猛火の煙にむせんで声を。揚げえぬは鴛鴦を殺しし科やらん。逃げんとすれど。起ちえぬは。羽脱鳥の報か。」

廊下から座敷へ、座敷から廊下へ、スリ足で舞台一杯に舞っていた亡霊は、ここで悲痛極まる呻吟をあげた。

「〽善知鳥は。却って鷹となり。」

この呻吟を受けて、娘の晴れやかな声は、まるで勝興のようにキリを謡いおさめた。

「〽我は雉とぞなりたりける。脱れ交野の狩場の吹雪に空も怖ろし地を走る。犬鷹に責められてあらこころ、憂とう、やすかた、安き隙なき身の苦しみを。助けてたべや。御僧たすけてたべや。御僧と云うかと思えば失せにけり。」

亡霊が扇を胸におさめて舞い終ったところで、志功は踊り上った。顔は青ざめるほど興奮していた。額から脂汗が垂れていた。水谷と共に、亡霊となって故里・外が浜の荒磯を、化鳥の襲撃から逃げ回っていたからだ。

水谷良一と娘美知代　（昭和十年頃）

トンボ

中野僖子

ある日
子供の視線は
蒼空をさやめき通る
赤トンボの群へと
いそがしく駆りたてられてゆく

敏捷にしかも気ままに
トンボたちは
ギグザグ行進をくりかえしながら
与えられた空間のなかの
かれらの座標を
たえず探しあぐねていた

ふいに　子供は
群を離れて
ほかのものからひとつの意志へ
行きつづけようとする
一匹の赤トンボに
幼い思いを溜めてしまう

まあるい涙がこぼれそうになって
くるりとふりかえると
草原をよぎってゆく
仲間の姿はどこにもない

すきとおった童心の季節の
限りあるひろがりのなかで
いま　子供のまなざしだけが
やさしく　はぐれたトンボを
位置ずけはじめる

だが　さらに的確に
鋭い一対の複眼が
子供の小宇宙を
生き生きと凝視しつづけていた

「水谷様！ これだ！ これだ！」

と、志功は、右掌を拳固にして左掌を叩くと絶叫した。「これをやります。文展に「善知鳥」をやります」。そう言い残すと、あっけにとられた水谷親子を座敷に残すと、志功は跳ぶように帰っていった。が、数秒すると志功は玄関までとって戻した。興奮のあまり雪駄をはいていくのを忘れたからだ。

応召日記 (十)

蓮田善明

十二月九日（金）今朝雨。

家族が帰ってくるといふこと。必至となり、かくまでに考へずともよいこととして思ひすてゝよいか。

妻の恋を思ふて男心は之を察して而も黙することを以て恋とする。少くも今日のわが恋は拒否のきびしさにある。これを拒否せずしてわが恋はない。拒否せねばならないことは恋である。男の恋である。

敏子を植木におく。敏子はせめて出る日まで毎日一緒にと切望——いのちかけてそれを希ふだらう。彼女はそれほどに切なる思ひに夫を思ふであらう。恋することは英

鳩と涅槃

吉本青司

抒情歌の中の少女は　愛する
死者に向かって語りかける
〈私は　死ねば一羽の白鳩か　一茎のアネモネの花になりたい〉

詩人の死を傷むとき
玄峰僧のことを想いだす
九十二歳で病んだとき　玄峰は
〈私の浮世狂言も　そろそろ幕にしなければ〉と
食事の摂取をやめたいという
だが
今度も幕が下ろせぬ
と　絶食をとりやめ
九十六歳　死の三日前から食事を断ち
〈旅に出る　きものの用意を〉
のひとことを最後に
狂言の幕を閉じたという
それに比べて　詩人の死の
なんと哀しいことであろう

夕日の中で

日輪がもえている
薔薇いろに
犬をつれて坂道を少女が下りてくる
少女は詩人におじぎをする
初めての旅から帰った　やさしい面ざし
夕空の薔薇に目を向けて
詩人は孤独な少年であった
詩集からぬけ出た豹のように
犬が少女の回りをまわる

小さい家

小さい家は知性をよみがえらせる
レオナルド・ダ・ビンチ

むらびとは　適度に親切で
適度によそよそしい
みんな　小さい家にすんで
隣人のくらしを犯さない
未知のものが寄って　むらとなった
目あてはドウメンの杜である

雄の所行である。恋して寄りくる妻と拒否する夫と、ともにそれは英雄の烈しさである。妻は、もはやすべての反対や世評とそれにまどふ私心をはなれて絶対の憧憬に燃える。彼女の眼中には火のみ。何たる今日ぞ。彼女には恋は今普通の愁情としての恋でなくなつた。彼女に於て恋は初め堪へらるべく押へられるべき私の恋であつた。そして押へ堪へた。しかし彼女はその堪へたる極りから恋が白鳥の如く純粋になつて上昇した。彼女はその恋に死なゝければならない。それが今日の日の女の貞操である。精神である。

私は彼女の恋を拒否して、恋をすてしむることを自らの恋とした。これ以上私としての尊い恋はないと信ぜられる。しかも自分の不純が彼女へ来れとの暗示を――当局の命に反することは絶対に不可能でないにかゝはらず――与へてしまつた。

自分は自分が門司を出帆する日、ひよつこり敏子が門司に来てゐるといふやうな想像をしたこともある。

しかしそれは、ちと空想めいて、余りに身勝手な希望で、やはり知らせなければそんな第六感は実際にありえないと自らの不信から、この間は、門司には来るな、と自

ドウメンの杜は
いつまで達者でいられるか
木ぐさのみどりは財宝だ
たいくつしたら
旅は雲にのってすればよい

木の実

杜に足をいれると
もう木の実がうれている
なんともいえぬ充実感
〈夏の日を無為にすごした私は
これからどこへ行こうというのか〉
この杜に
小鳥らを遊ばせているものに
敬虔な挨拶をしよう

分は宣言しておいた。兵隊の手前もある、といつた。妻はうなづいた。何と彼女は、もう俺の言葉にのりうつつて、たゞ従ふよりほかなくなつてゐる。そんなに彼女の心は憧憬に自らをうつろにしてゐるのである。

又、敏子が自ら決心して帰つてきてしまふことも想像してみたこともある。敏子は事実もう僕の一言を待つてゐた。その一言のみを待つてゐた。ひんぱんに来る手紙はその待ち焦れを思はせとして示し、自分に迫つてゐた。

自分は彼女に会ふことがゆるされるか。

十二月十日（土）

志貴皇子論を書きたし。

十二月十一日（日）

昨夜T氏と飲み回つたが、酒を余計にのんだだけで不快だつた。今朝はくたびれて、九時頃朝食後又眠る。十二時すぎ起きて散髪、風呂。それから城戸さんに行く。行つたら姉の結婚の話。一生を通じ、僕には家族（自分の家族ではない）の話ほどいやなものはない。とにかく城戸氏夫婦の誠意に対して、解決策を考へる。御馳走や例の如くの心尽しに八時半までゐて帰る。

志貴皇子論を一枚書いて眠る。

十二月十二日（月）

ラッパの音で目をさます。もうすぎたのかと思つたら今営門から出発してきたところである。だん〳〵つよくなり、靴の音がザックザックと夜陰を破る。三時すぎらしい。第三大隊の出征である。町の人々が兵隊と呼応し万歳を叫ぶ。それが長く〳〵つゞく。夜なので長く〳〵きこえる。万歳の音。ラッパの音。夢うつつとなつて又眠る。

S少尉が大きな声で階下から呼ぶ。実に眠い。こんなに眠いことも少い。やつと起きて、S、T二人とつれ立つて出る。霜がまつ白い。自動車をやつと起して熊本駅に行く。駅近くの橋の東に焚火して兵隊が休憩してゐる。植木の二人を探したがとても分らない。面会人と入りみだれてゐる。駅にいつて時をうつし、田舎の人を案内して停車場司令部の方へいつたら、そこにオイッチャンが立つてゐる。静雄に会ひにきたが分らないからここで待つてゐるといふ。そこでつれて又橋の向ふに行き探し出して会はせた。かあいさうな兄妹。オイッチャンはI病院の女中をしてゐるといふ。母の死を話したら正直に「ほんとですか」をくりかへして感動して「お世話になつて、おみまひにも行かないで」と泣いてゐるやうにさへあつた。道々この兄妹たちのさびしさを思つた。静雄は元気に「しつかりやつてきます」といふ。それから喜八郎君をさがしたら最後尾で、そこで植木から父と義兄が見えてゐた。出発しはじめたので、別れて駅に行き、途中少尉たちと挨拶する。

果樹園　二〇一号　昭和四十七年十一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

果樹園

第201号

画仙・棟方志功(三)　小高根二郎
日中国交回復の日　田中克己
ハーディ詩抄(一)　森亮
白い雲の詩　吉本青司
誤植あるいは文字の変身　宮城賢
草　原中野信子
病中有閑　高梨一男
応召日記(十)　蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(三)

―その画魂の形成―

小高根二郎

3　文展で「善知鳥」特選となる

雪駄をはきに戻った志功は、運わるく、目ざとい婆やの発見するところとなった。彼女が買物に行こうと勝手口まで出たところ、そこに、泡を食って志功が舞い戻ってきたからだ。見ると跣だった。勝手口を出るに出られず、しばらく物陰で待機していると、やがて雪駄を突掛けた志功が大急ぎで帰っていった。

この逸話は、夕食のデザートの林檎と一緒に、婆やが披露した。家中がわッ！と笑い崩れた。が、良一はすぐ真顔になると、子供たちを見回しながらいった。

「いかにも熊の仔の小父さんらしいね。しかし、履物を忘れるほど夢中になれるなんて、実に羨ましい。父様はお役所の仕事に、帽子を忘れるほども、夢中になれないんだからね。どうだい、みんなも、お勉強に小父さんほど熱中できるかね？」

と、問うた。誰からも声が出なかった。

「小父さんみたいな人を、稀有の天才というんだよ」

そう、良一は、父親らしく笑話をしめくくった。

そうはいったものの、水谷は心底……志功のアワテン坊は、いささか気になった。と、いうのは、仮初の舞台、思い付きの扮装で、一応「善知鳥」を紹介したつもりだけれど、志功は本能に等しい野性的な触角で、それをどう感応し、どんな「善知鳥」をでっちあげるか分らぬからだ。

事実、水谷は「大和し美し」以来、「空海頌」「東北経鬼門譜」を経て「華厳譜」に至る、志功の生長の歴程を知りすぎるほど知っていた。爆発という表現が適切なほど、躍動し充溢する志功の画業魂は、時に美の戒律の境界を踏みにじって、酔とさえ握手しそうになった。つまり、化物好きな彼は、すんでに悪魔の口車に乗りそうになったのだ。

例えば、「大和し美し」の、手が卍となって回転している、猥セツというより、稚気に類したベラ坊さが、それだ。一見、無難そうに見える「空海頌」だって、花鳥風月に降りかかる平仮名の長雨は、梅雨のように淫しすぎて主客顚倒している。口悪くいえば、自然と文字の乱交――いろは四十八手というところか？　「東北経鬼門譜」で評判の真黒童子・真黒童女だって、缺点が全くないわけではない。間引かれた嬰児たちが主人公であるからには、彼らの表情は、もっと怒りに燃え、困厄と、戸惑と、苦渋に満ちていねばなるまい。ところで、彼等の群像のてっぺんに相対している二人なんぞは、まるで夜這の約束を囁き交しているように楽しそうで淫だ。最近作の「華厳譜」にしても、既述したように、

果樹園　二〇〇号　昭和四十七年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

古刹にて

高梨一男

山百合の香がつよく鼻を撲つ
境内の雨後
除草の作務に従う
青僧侶たち

ひときわ陰湿の墓地より
青大将が
匐い出る

一匹　又一匹
――愚かものめら

情無用の僧たちは
見つけしだい
おまえたちを殺すのだ
習わしのように
――そして夜食の蒲焼と化す

鎌倉のここは名刹
山門を一歩入れば国宝である

N少尉とりみだして情けない。けいべつせずにはゐられぬ。夜が明け七時三十分に立つ。万歳。

九時隊に出たら、もう第二隊が出発である。U少尉に約束の支那語の本を贈り、門で見送る。

午前、明日の検閲予習。午後も二時半より予習。まあいい。

今朝中隊に行つたら、栗山より鴎外の「妻への手紙」カロッサの「ルーマニア日記」、清水よりコギト十一月号、敏子より国語教育十二月号、及び伊東さんの手紙がきてゐた。大変幸福である。みんなよみはじめる。栗山に礼状を出す。

編集後記

八月十三日。もう七年半以上も前に、四十六才の若さで世を過ぎた同人堀之内歴君のお墓に初めて参った。お墓近くに新居を構えました……と、未亡人寿恵子さんからたよりをいただいたからだ。申訳ないことだが、葬式の日以来遺族の皆さんをお尋ねもすることなく過ぎた。新居は高安山の麓、志貴山ケーブル口近くの閑雅な環境にあって、恐らく歴君が生前夢みたであろう条件を備えた好乎な住いであった。明敏な未亡人は、三人の遺児を養育しつつ、けなげに亡夫の夢を実現したのである。葬式の日にお目にかかつた高校低学年生であった長男朔詞君は、府大を出て立派な社会人となり、すでに美しい許嫁がある。小学生？であつた長女佐恵子さんは薬大生でお父さんそつくりに成長している。二男の摂之君は大きな高校生で、家業である古書籍商を継ぐとのことであった。お墓は近くの丘に西面して建てられ、遠く大阪の街を眺望する美しい所にあつたことに安堵をした。

十九日。野間光辰氏より、鞭撻のおたよりと、田中氏の「遺書」に「老境の風格芬えたるものを感じます」との感想を頂戴した。

二十五日。新潮社の青木頼久氏と鎌倉山に志功画仙をお尋ねした。ネブタから盆すぎまで青森に滞在されていたが、いつに変らぬ烈々たる闘魂に、教えられるとこが多かつた。十月下旬に開催される訪印展が楽しみである。

＊

本号で悲願にしていた二百号ついに達した。十六年八月、一月も休まず憑かれたように刊行してきたことに、いささか感慨がなくもない。私も、森氏も、田中氏も満六十一歳をすぎた。コギト以来の実に永い永いつきあいと契いである。しかし、体力も視力も老衰して、なにをいまさら同人誌を……という思いがないでもないが、思うところがあつて、いましばらく刊行し続けることを決意した。変らぬご支援を願い上げる。（O）

果樹園　第二〇〇号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年十月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

「釈迦」を毘盧遮那弘、「風神」を善財童子と名付ける方が適切だ。その奔放放埒さは、さらに華厳経の明燈きわまりない浄界に、密教の抹香の臭気ふんぷんとした不動明王まで招待していた。

しかし、志功の充溢してやまぬ磐岩のような熱情的な才能は、たちまちそれらの欠陥や瑕瑾を補塡、ないし被覆してしまうだろう。補塡や、被覆しないまでも、初めから何らの欠陥や瑕瑾がなかったかのように、人を幻覚さすかもしれない。あの人も我も推し流す奔流のような天才……。しかし幻覚はあくまでも幻覚だ。もしも志功自身が、その幻覚に酔ったり、安堵したら大変だ。「棟方君に欠けたただ一つのもの—それは自己に抗ふ厳しさ」（「棟方君の秘密」）なのだ。

水谷は志功に完璧な「善知鳥」を制作さすために、水道橋の宝生会の定期演能会に連れていった。自分がやって見せた似非ではなく、本物を見せるためだ。番組に「善知鳥」があるわけではなかったが、さいわい同じ地獄に落ちた亡霊物「求塚」があった。志功は、庭の生の立樹ではない、過・現・未の宇宙空間をがっちり摑んだように描かれた、松羽目の松を見た。則へ曲る廊下でない、本物の橋懸りを確認した。廊下の後座、畳敷きの代用の舞台でない、総檜の木の後座と本舞台を目の前にした。

「水谷様。ネ、やっぱし……」

と、志功は感銘し、感謝した。水谷が忙しい時間を割いて、わざわざ能楽堂に案内してくれた真意が分ったからだ。

「本物には、やっぱり、どうしようもない貫禄があるよ。棟方君。ヘ水谷良一、いずことしらず失せにけり……さ。」

と、軽く声たてて笑った。

なんというおうらかな水谷の愛情だろう。柳・浜田・河井の、先輩としての、それとも違っていた。まるで実弟にでも対するような肉親愛に似ていた。名古屋の西枇杷島で味噌醤油醸造業を良一に代って営んでいる弟源二郎。丁度、彼に対すると同じ、別隔（わけへだ）てのない愛情を、他人の志功に与えて吝まなかった。お蔭で志功は駘蕩とした気分で能を勉強できた。浜田にいわせると、「棟方はアミーバのように、尻であれ、心臓からであれ、どこからでも手を出して物を摑む」という。その貪婪さで、志功は本物から摂取できるだけのものを摂取したのだ。シテのモノローグ的な謡と、よく節制された舞。それを引き立てるワキ・ツレの謡と、さらに一段と盛り上げようと湧き立つ地謡の斉唱。その空隙を支え、色

果樹園叢書（私家版・限定三〇〇部・非売品）

詩集 現象詩集

浅野 晃

昭和二十七年広島で世界連邦アジア会議が開かれた。外国の代表も参加した。その中にはインドのパール判事もゐた。私も日本代表の一人であつた。会議は広島宣言を採択した。

帰京のあと書店で、「原子雲の下より」という青木文庫の一冊を見つけた。……小学生から大学生にいたる生徒学生の詩を主に、市民の作も加はつてゐる。いづれもあの惨禍を体験した人のものであつた。

この詩集は私にふかい感動を与へた。この感動をいつの日か私なりに表現したいと思つた。ちようど二十年たつた今、辛うじてまとめたのがこの「現象詩集」である。

■申込所■

東京都渋谷区本町三—三二—一—一〇〇四

浅野 晃

日中国交回復の日

田中克己

二十七年たった今
北京の秋の爽やかさを思ふ
王府井の街を歩いたのは
故宮博物館見物の帰りだったか
博物館の太和殿へゆく階段を
わたしは清朝の官人のつもりで登った
正面には玉座があり
その前には日本軍司令官の
降服調印に使った机があった——
けふでさうしたことがみな忘れられる
北京は秋晴れつづきださうだが
東京は秋雨だ
しかしわたしの心は晴れやかだ
中国と日本との国交が回復した
永く歴史に残る日なのである

ずけ、息ずける能管、小鼓、大鼓、太鼓と、イヤッ！ と活を入れる掛声。これら虚実の空間が交錯して造型する幽玄の幻想劇……。

「水谷良一先生からいろいろ教わりましたが、制作にあたっては、謡曲の善知鳥の基本と、謡曲のもっている、序破急の律を、板画の世界で見ようと思いました。この頃から、白と黒の世界というものが、大切なものと思い、この点を本当に板画でつらぬいてゆこうと思い立ったのです。能の本当に日本の風土から表現された、といってよい芸の動き、静もり、流れ、ひろがり、太鼓と鼓と笛の調子のあり方。玄妙な世界の調和、それが板画の性質と同一だ、といってよいほど、美というものの立て方が似ています。しかし、その頃、まだ能というものを見たことがありませんでした。それで、わざわざ水谷先生の家で仕舞や能というものを観、ききました。…中略…場面は、青森の舞台—外ケ浜—で東北の人を扱いました。能の場面を避け、白と黒で北国の持っている、悲しいうちに何ともいえないアワレのもえあがってくるものとして、善知鳥の物語を扱いました。」

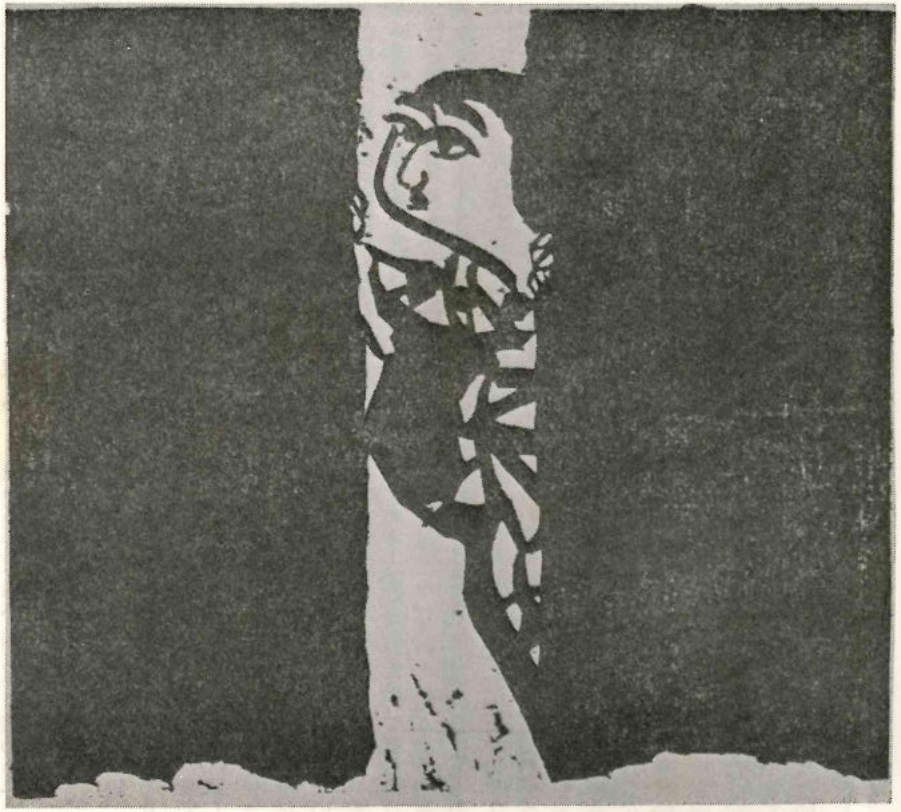
（「棟方志功芸業大観」「年譜」）

目差す白と黒の世界。それはもともと、歳晩から三月まで、雪に降り籠められる故里の風景として、すでに志功の血肉となっている。謡曲「善知鳥」にある地獄は、別に遠く越中立山に、これを探すまでもない。狢仲間である古藤の故里大湊の、つい目と鼻の恐山に、今日も立派に現存している。それに亡霊や化物を呼ぶにも手数を要しない。イタコの助力を仰ぐまでもなく、志功自らシャーマン・ゴミソの天稟に恵まれているからだ。シテの獵師も人様をわずらわすまでもない。鬼コに憑かれて、食いもしない魚を毎日殺生したお父サ（ど）——藤屋幸吉に打って付けの役柄だ。ツレは、満四十一歳の生涯、幸吉の打擲に耐えられるだけ耐え、生みついだ十五人の子の楯になりどうしで極楽サ行ったお母サ（ガ）——さだをおいて適役はあるまい。子方の千代童役だバ掃いて捨てるほどうッとある。若死をした、つせ、きせ、トミヱに、彦六郎、喜八郎、九二夫だ。その誰を当てても、充分こなせる、やすい役柄だ。ワキの忙しい坊主役は、不肖ながら志功が心得た。「ドモ又」を曲りなりにも、どうやらこうやらこなしたワだ。「南無幽霊出離生死頓証菩提」と、唱えればいいだけの役が、つとまらないはずはない。

志功は、例のように何やらわめきながら、懸命に彫った。わめきが夢を呼んだ。彫って

いると構想が湧いた。その夢と構想が、その子を生んだ。その子はさらに孫を生んだ。「禅定」「座鬼」「責苦」「呼掛」「蓑笠」「順路」「北下」「陸奥」「外ケ浜」「浪声」「砂洲」「妻子」「白蓮」「夜訪」「夫霊」「邂逅」「善知鳥」「隠蓑」「射矢」「血滴」「鉄嘴」「連枝」「出離」「妻立」「山越」「成道」等、たちまち裏表三十図の板画が出来あがった。志功はそれを携えて山谷を訪れた。この三十図の中から九図を、出品作として、まず水谷審査員に選定してもらうためだ。「自己に抗う厳しさを忘れるな」。そう、忠告する水谷の言葉に従って、氾濫する夢と構想が生んだ蛭子——迷作を除くためである。

水谷は、その一枚、一枚を、じっくりと鑑賞しながら、志功が初めて非の打ちようのない、完璧な作品を造型していることを発見した。とりわけ、志功の描いた人物が、日本人になりきっていることに感嘆した。文明開化以降の日本の画家が、はたして幾人日本人を描きえていたか？　眼のくま、鼻柱の陰、或いは身のこなしの何処かに、西欧の面輪面影が潜んでいた。開化以前は唐であった。つまり、それが当世風なダンディズムだったからだ。例外なく、画家のみならず、芸術家と呼



善知鳥板画巻・夜訪の柵　　棟方志功

ハーディ詩抄 (一)

森　亮

かはらぬ歌

鳥は全く同じ歌をうたふ。
ちょっとの狂ひもなく流れ出るその節(ふし)は
かつての昔、私たちがここで聞いたもの、
遠い歳月のかなたで。

嬉しさいっぱいの丸覚えの歌の調べが
ひと節違(たが)はず歌はれて
こんなに今日まで続いてゐようとは
愉快な驚きといふほかない。

でも、あれは全く同じ鳥ではない。
さう、その時の鳥なら死んで土になってゐる。
わたしと一緒にあの歌に聞き入った人達が
みんなさうであるやうに。

「ハーディ全詩集」（マクミラン社）五六六頁。歌はれてゐる鳥は作中には明示されてゐないがナイチンゲールである。この鳥は名前に似ず昼間もよく歌ふ。

ぶ無籍者は、そのダンディズムにへつらった。そしてそのへつらいに、作る者も、観賞者も馴合って、いつのまにか、なにの不思議も感じなくなった。日本人自らさえ満足に描けぬ日本人画家を、日本人画家と呼べるだろうか？　それは日本語が満足にしゃべれも、書けもせぬ日本人作家が、日本人作家と呼べぬのと同断だ。

「北下」の、懸命に外が浜へ向けて走る僧。「夜訪」「妻立」の、戸から顔を覗かせ、或いは、助けてたべ……と悲鳴をあげて逃げる夫を、呼び止めようとしている妻の顔は、まさしく日本人そのものだ。「善知鳥」以前はこうはいかなかった。「大和し美し」の姫たちの顔には、まだ欧風が蔭っていた。その前年に堀口大学の「ヴェニュス誕生」の別冊画譜を彫っているが、その西欧がまだ影を曳いているのだ。「東北経鬼門譜」の真黒童子・真黒童女にも、西欧と唐をこきまぜたようなにおいがした。「華厳譜」の菩薩たちには、楊貴妃観音の唐製の化粧料がプンプンすること、筆者が既述したとうりだ。

水谷は慎重に審査して九点を選び出した。「座鬼」「北上」「夜訪」「陸奥」「連枝」「蓑笠」「妻立」、その他二点だった。志功は水谷の公明正確な審美眼を信じて、その九点を一枚の額に収めて、改組第二回文展に出品した。実は、昨昭和十二年、近衛内閣の安井文相によって、情実による積年の弊風を刷新するため、帝展を廃し文展がスタートしたのだった。特に今年から在野団体——日本美術院、国画会、春陽会、一水会、新制作派協会からも審査員が選任されることになって、志功にとっては、従来より多少とも希望の持てる趨勢になった。とはいえ、例の橋本花子なぞは、六年前に「樹下」百号で特選をとり、翌年よりは無鑑査、昨年文展に改組になっても、あい変らず無鑑査の優越的な地位を保っていた。

河井寛次郎は、カラクリだけで保たれているような低俗な官展に、依然として執着している志功が、不思議でならなかった。第三者の眼から見れば、志功の稀有な才能は、官展の審査員たちの常識的な鑑識次元を、遙かに抜いたものであることは、分りすぎるほど分っていたからだ。河井は志功の落選を知ると、爾後徒労の出品をあきらめさせるために、「ラクセンオメデトウ」という電報を打った。この打電を依頼された五条の郵便局は、これは「ニユウセンオメデトウ」の間違いではないのですか？　と、わざわざ河井宅に電話で照会してきた滑稽もあったりした。

しかし、志功の心の底の、そのまた底の冷灰の内に、落選しても落選しても、いつかは拾い上げてくれる日も回ってくるかもしれない……という、小さな燠が、自分だけの夢を抱いて眠っていた。御上が催す美術展だ。その権威の名において、僥倖を待つこの小さな燠だって、このまま見殺しにすることはあるまい。そういう、いかにも田舎者らしい実直な信頼だった。どうせ死ぬなら、江戸でなく、京で……。そう、病の不治を知ったさいはての藩主津軽為信の、いかにも田舎者らしい可憐な憧憬に、どこか通うものがないだろうか？

ともあれ、入選発表の十月十二日は朝から雨だった。間断なくシトシトと降り止まぬ雨に、せっかくの希望の燠が……と、志功は顔を曇らせた。明十三日は日蓮上人のお会式だ。昨日来、近くの蓮華寺のドンツク、ドン、ドン、ツクの団扇太鼓は朝っぱらから深夜まで鳴り止まなかった。その弾けるような景気のいゝ音と、海鳴りのようなお題目の声が、威勢よくなればなるほど、志功とチャにはつらかった。二人はもう六回も、その伴奏入りで、帝展落選に泣いたからだ。通算して撒入十四回。入選二回。落選十二回。落選の方でベテランになっている志功は、もう初心の時のように、入選発表を見に、わざわざ上野まで出向くことはなかった。誰かが吉凶を知らせにきた。夕食後ワクワクしてその吉凶を待っていた。あたりが鎮まってくれれば、ドンツクと法蓮華経の音声は、いよいよ冴えて頭にきた。雨は如雨露（じょうろ）で撒くように、小止みなく、正確に、降り続いていた。いっそ雨が激しくなって、ドンツクと法蓮華経を掻き消してくれればいい……と思った。今夜は遅くなるだろうと、手回しよくチャが頼んでいた夜食の支那蕎麦が、威勢よく端折った掛声と一緒に届いた。瞬間、二人ははッ！ と顔を見合わせたが、後はいたずらにドンツクだけが興奮していた。ドンツクの他は、世の中の活動が一切停止しているのではないか？ と疑われるほど、夜の闇は深く鈍重だった。

「冷めねェうちに蕎麦コ食（か）ねェか？」

と、玄関に置いたままになっていた丼を、チャが運んできた。今年もやっぱし駄目だったのだ……と、彼女は観念したからだ。「ンだ」と返事するところを、志功は

「ン」

とだけしか、返事を返さなかった。彼も、やっぱし……と あきらめに傾いているように、身を沈めた。

「サ、冷めねェうちに……」

集詩 **庭と夜のうた**

森 亮

■旧詩帳
野菜サラダを食べたあとで／恋歌／塔つくり／夜／笛／玩具／犬／枕上口吟／アンフィアラオス

■晩国集
みなづき／加賀行き／大隅にて／墓碑銘／失眠歌／夜の歌／秋鳥賦／詩人の村／小園歌／小園好日／海辺にて／忌日／夜の歌／加賀再遊／雲雀／自画像／詩の餞／海光／終曲／夜の歌

■駅詩
クラブラ・カアン／さだめの小車／無題

¥800（〒一〇）

筑摩書房

と、チャに促され、志功は箸をとった。

「ほれ、胡椒！」

と チャは小瓶を押してよこしたが、胡椒代りに志功は、すでに水洟と泪を丼の中に落しているのであった。

「きたネ！ 洟コかみへ……」

チャは袂に紙を探って志功に手渡したが、自分でも、胡椒代りに塩からい泪を、丼に滴らしているのだった。夜食を平らげても、雨と、太鼓と、お題目の他に、訪れるもののないことは変らなかった。

「もう寝るべ。寝ていい夢コでも見ベシ。文展は来年なぐなるわげでなし……。とも子がども又さんサ選んだのと同じに、チャだばパパを選んだのだもノ。パパの絵は、今に、きっと世界一になる。きっとなる。そう、ドンツクの法華さんのように、信仰してるんだから……」

そう慰め、慰め、チャは寝所に当ててある二階のアトリエへ、志功を導いた。が、床についても、彼は闇の中で、じっと耳を澄ましているのが、彼女には手に取るようにわかった。ジャブジャブの水溜になった道を、拾い、拾い、びしょ濡れになった誰かが、吉であれ、凶であれ、審決の知らせにやってくるのを待っている様子が、見えるようであった。図星だった。まさしく志功を待っていた。水谷の言葉を信じてるからだ。「棟方君。君は日本人の顔を初めて描いてみせてくれた、唯一の現代日本画家だ」。この水谷の言葉を、凡庸な審査員たちの見識以上に信じたかった。この言葉を信じて落ちるなら、文展落選はおろか、地獄に落ちたっていい。そう、思うと、志功は悔しさで、いよいよ眼が冴えた。その興奮しすぎている志功を、なんとかして眠らせたいとチャは思った。

「さア、寝るベシ。眠るべし。あの好きな弥三郎節コ一緒に唱いながら寝るベシ。」

と、チャは提唱すると、ヘ一つァエー 木造新田の下相野……と、先導した。

白い雲の詩

吉本青司

草たちがささげる花冠を
これは何花とかぞえながら
ふたりはこどものようだった

雨についえた杉木立の道や
膝をうずめるすすきの道の
たがいのこころくばりは
過ぎてきた日々のかなしみに似ていた

精霊たちがそこの木の間から出てきて
いたずらっぽくおじぎして通りすぎていくのや
昼寝していた小蛇がたまげたように走っていくのが
ふたりの歩行に勇気をあたえた

英雄の忘れられた記念碑の前にたたずんでは
孤絶した大気の海に
みちてあるもののひかりを
畏怖のこころに問うのだった

愛するもののために
献身することのうつくしさを 無言で
教えてくれたおまえ

ゆうがきくの花を一輪
おまえのその胸のたしかな鼓動のために
献じよう
秋ぞらの白い雲の詩とともに

村の端ンずれコの　弥三郎エー
（アリャ弥三郎エー）
〈二つアエー　二人と三人と人頼んで
大開の万九郎から　嫁もらつた
（アリャ弥三郎エー）
〈三つアエー　三物揃えてもらた嫁
……

志功はチャと合唱しながら、親戚が寄った初入選の祝宴で、「横丁のお母サ」の要請で、長兄の一が、〈十アエー……まで唱ってくれたことを思い出した。あの時彼女は、母さだの早世を哀惜してくれたのだ。志功は〈四つアエーと合唱しながら、弥三郎節以上に、結局、自分は嫁いびりをしているのではないか？　と悲しかった。唱いながらチャに掌を合せていた。眼尻から泪が枕へ尾を曳いた。太鼓の音が少し鎮まったようだった。と、思ったら、志功は軽くイビキを立てていた。夢に『善知鳥』の「座鬼」の場面が現れた。坐っていた鬼がいきなり立ち上ってきた。

見れば父幸吉だった。「なしてワをモデルにした！」と眼を怒らしてなじった。はッ……として目が覚めた。誰かが戸外で叫んでいた。チャも逸速く目覚めていた。

誤植あるいは文字の変身

宮城　賢

ぼくがばくになる
僕は漠にならない
日は月に
鳥は鳥に
薬は楽に
文字は文学に昇格したがり
数学は数字に還元したがり
水は氷ったり永くなりたがる
その逆もまた真である
僕は朴になる
苦楽は苦学に
しかし
音楽は音学にならない
聴覚もなかなかおつなものだ
ハットはバットに
ペットはペットに
外来語は土着語になりたがらない
ペニスはベニスへ行ってしまう
片仮名は片仮名同士
平仮名は平仮名同士
ローマ字はローマ字同士
漢字は漢字同士
数字はよく抜ける！
文字たちはめいめい意志をもち
なかなか志操堅固で
不貞な変身はようしないようである
それはときには
書き手をもう一度熟視熟考させ
そんなとき
校正は楽しくまた深刻でもある
十年ばかりのあいだわたしは
文字たちをなだめすかす職業にいたが
夢はついに夢であった

「誰だべ？」
と、彼女は囁き、
「何だべ？」
と、彼は応えて起き抜けると、硝子窓から外を見下した。街灯の光で二人の男だということが分った。番傘をすぼめてる方は、身体つきから顔見知りの画家の土本らしかった。
「おーい！　棟方君。大変だ！」
と、掌をメガホンにして彼は叫んだ。チャは着物をひっかけると階下に下りていって、土本と話し合った。やがて彼女は階段を駆け上ってくると、部屋の入口でヘナヘナと腰が砕けて、へたりこんでしまった。
「パパ！。大変！。入選！。それも特選だって……」
と声も上擦っていた。
「何？　特選！」
入れかわりに志功は階下へ駆け下りていく

草　原

中野僖子

草原には
そのどこかに
不思議な場所があって
疲れはてた
生きとし生けるものたちのための
やさしい空隙が残されている
すでに
ウマオイムシは
遠くから彼を誘う
見えない方向にむかって
急がなければならなかったのだが
それでも　なお
ゆらぐ草の葉の上で
褪せた両脚をふるわせて
けなげな最後のバランスを保っていた
やわらかな植物の時間が
親しくめいめいにむけられて
倦むことをしらない正確さで
一匹のウマオイムシの
生への熱望を
くさいろに眩らませはじめると
はるかな空は
野菊を香くそめながら
限りなくうるんでくる
空のなみだの水溜りを宿して
まだ　ゆれやまぬ
野菊の花群のなかへと
小さないのちの行方は
ひとつずつ　順番に
しまいこまれてゆく

と、寝着のまま戸外に跳び出した。
「棟方君。おめでとう。」
「上野の山は大騒ぎだぞ。初めて版画が特選で……」
と、二人の祝福を浴びた。
「板画万歳！　日本板画万万歳！」
そう叫んで志功は二度踊り上った。折から高鳴ってきたドンツク、ドン、ドン、ツク、ツクに合せて踊りだした。左掌を円扇太鼓にし、右手指で叩く真似をした。
「踊らネか。踊らネか……」
と、誘った。
「ドンツク、ドン、ドン、ツクツクだ。サ、踊らネか。踊らネか。板画の祭だ。祝コだ。善知鳥の祭だ。」
上野のおでん屋で夜っぴいて残念会をやっていた二人も、志功の栄光にあやかるために、ドンツクを、手真似、足真似、踊りだした。しらふの志功は二人の先導をしながら、円扇太鼓を打っていた手は、いつかガガシコ（ブリキ罐）を叩くネブタの跳人の手振りになっていた。そして足は、
ラセ　ラセ　ラセラセ
イペラセ　イペラセ
という囃子に乗って、空を踏んでいるのだった。もう雨は完全に止んでいた。二階の窓か

ら、三人のけったいな踊を眺めているチャの頬に、拭っても拭っても、泪がきりなく流れて止まなかった。曇天はどこからとなく明けてくるらしかった。

（画魂の形成・終）

応召日記 (十)

蓮田善明

昨日から一寸左の胸に変な感じがある。今朝少し汗をかいてゐたし、昼食もすゝまず、夕食も二食。眠たくもあり、風呂から帰つて暫く本をよみ、床をとつて眠る。

何でもないやうだが、洗濯を出せといふからシャツ二枚出したら洗濯屋にやつてさせたのを机の上においてある。一体に下宿屋すぎて（彼女らは元々そんな商売人ではない筈）こんなところいやだ。前月だつて二三日泊つただけで八円近くちやんと値切らず出してゐる。これが一つ不快。熊本の女らしい愛のなさ。

曇つて、どんより。明日雨にならなければよいが。

十二月十三日（火）小雨。

一ヶ月間担当してゐた補助衛生兵の検閲である。聯隊長が自ら来られた。細部では勿論足りない点も少くなかつたが、兵隊の顔が註文通り生き〳〵してゐるので自分は安心してゐた。活気のある兵隊、軍人精神に燃える兵隊が自分の着眼だ。三十分ですんだ。学課もキビ〳〵してゐてよかつた。何かきかれて分らなくても皆元気よく手をあげ、きかれたら、軍人精神でありますと答へよといつておいたので、最初に「軍人の本分は何か」ときかれ、三人迄「軍人精神であります」とやつたのには冷汗ものだつたが、ほゝえましかつた。そのあとでも「軍人精神」がとび出したやうだつた。しかしそのあとでは明確に答へるものがあつて、立派だつた。

講評は今迄幾会（ママ）となくあつた補助衛生兵教育でこれが一番良かつた。殊に気勢充溢してゐる点がよかつたとほめられた。

十二月十四日（水）

補充兵の射撃について行つた。試験射撃を二銃やつた。あとでみたら、一銃は五発とも黒点の中に打ちこんでゐた。一銃は左上にやはり集結してゐた。何か軽い興奮を誘はれる思ひがした。

植木に帰ることにした。不快だが仕方ない。帰つたら果して義姉はケロリとした元気である。兄はゐない。話もできないし、二丁目に行つて一寸話して、泊る。口数少く話しても二丁目の父がいちばん分る。

十二月十五日（木）

手持不沙汰である。この日頃隊に出るとアクビばかり出る。活気を失つた隊である。こんな所にゐるより早く前線の空気を吸ひたい。活気のリード法もしらない。人物の小さいものばかりしかゐない。典範例を繕く間はやゝ活き〳〵したものを感じる。

午前練兵場に出て日向の草の土堤にねころんで帰る。ものうい。

夜、志貴皇子論を書きつぐ。

十二月十六日（金）

母の三十五日で、又帰る。墓の前に立つと、出立前に病床で言つた母の言葉を思ひ出し、心もちが統一されて近頃にない決意（二字不明）をかんじた。

義姉益々元気。

自分が今夜帰ることをしつて計画的に何

か言ひにきたらしい者もあつたが、遂に口も切り得ず。

こんなにして兄弟の心をつないで行かなければならないなんて全くつまらぬことだ。

兄仲々帰らぬし、こんな連中がゐては何も話せないし、二丁目に行く。途中で兄に会ふ。元気さうで何より。心中で軽く幸福をいのつて分れる。

二丁目で父がスキ焼を初めたりして十二時近く就寝。

敏子は二十四五日頃帰つてくるらしい。朗らかに彼女らをおく所もない。

十二月十七日（土）

雨である。午前は隊で手紙を書く。及び補充兵の軍装検査。午後内務検査。法文的官僚的の中隊長も、格だけで頭が活きてゐない。日本の理想を語るもの隊内に未だ一名もない。口にしないでも精神はあるといふかもしれぬが、それとも別である。

案の定、T君も細君を呼ぶことになつたら、出征の意気に動揺が出はじめてゐる。陸軍省の大バカモノ。

十二月十八日（日）

日曜の朝はいい。志貴皇子の原稿を書きつぐ。十時より城戸さんに行く。おせつさん風邪がわるくなつてねてゐられる。正午すぎ公会堂に行き、喜一さんに会ひ、映画に行き、夕食を共にする。自分が払つたので、又飲むといひ出し、とう〳〵余りよく

病中有閑

高梨一男

淡い流し釉に
霞んだ
朱の
釜屋の壺

大輪の黄菊白菊
のあと
家人が狭庭より摘んだ
雞頭の小ぶり

佗びしすぎる
と　ながめていたが
きのう　珍らしい花を頂いた

濃むらさきに
薄むらさき混じる

とるこ桔梗

雞頭もあしらいに
盛り

絶対安静を
仰臥の姿勢でいたら
午前三時　聚雨来

蒸し暑かったきのう
の夏を一掃し
ついでに産業道路
の騒音を掻き消し

——あゝ　なにものにも換えがたい
病室の
この孤独

午前四時二十分
雷鳴

市立池田病院にて

新潮選書
詩人伊東静雄
小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

ない店を一二めぐつて、やつと十一時に帰してやる。誰とのんでも、後がものうくなる。なぜもつとよろこびをのまないのか。

十二月十九日（月）

補充兵の検閲である。T君ら朝から又のんだりぐずぐずで、八時すぎに行つたら、もう軍装検査が始まつてゐる。まあいい工合に入りこんだ。次の各個戦闘の初まる迄、隊に帰つて水を二杯のんだ。今日は四五杯水をのんだ。

午後の突撃及陣内戦は突然たのまれて小隊長をやつた。雨が降つてきて、やゝ寒い。夕刻より薄暮攻撃、歩哨の検閲、歩哨を見学中、催涙ガスを焚かれて目が痛むほどやられた。風向きがわるくひどいめをみた。をかしくもあつて笑つた。八時頃帰営。二十日に門司に遣骨受領に行く命令が出てゐる。高木氏が相棒で幸ひである。

編集後記

九月一日。版画会の重鎮・川上澄生氏が七十七才で長逝された。氏を宇都宮にお尋ねして色々とお話をうかがったのは、もう三年前になる。その時すでに足が不自由で、膝行しながら資料を探して下さった。「画仙・棟方志功」は毎月愛読してくださり、「今回は「大和し美し」の柳さんとの出会い興味深く拝読致しました。あの作品は私も会場で拝見して居ります」などと感想を必ず寄せられた。この一月、珍らしく便りがないと思つていたら、この不幸となつたのである。深く哀悼を申し上げる。

二日。珍らしく東上、「四季」同人と会員の会」に出席した。丸山薫・田中冬二・神保光太郎・野田宇太郎・伊藤桂一・大木実・小山正孝・室生朝子の諸家に久しぶりにお会い出来た。会場は川口市の友愛センターで、この線の先に川上翁はまだ眠つておられると思いながら、時間がなくお参りできなかつた。帰りは宝塚に住む杉山平一氏と新幹線で一緒だつたが、つい眼と鼻の間に互に住んでいながら、よほど機会がないと、近頃ではなかなか出会うこともなくなつた。

二十九日。日中の国交が樹立した。私は昭和十七年秋から二十一年春まで、足掛け五年間一兵卒として彼地にあつた。そして中国の人々と自然の重厚さと、生活の隅々にまで浸透している歴史の深さに感嘆をした。三八式歩兵銃を肩に担つて歩きながら、負けているのはこつちの方だ……と、幾度も痛感させられたものだつた。田中氏がさつそく本号に祝いの詩を書いたが、曾遊の蘇州は留園の庭に、再び佇む日をもう一度持ちたい。（O）

＊　＊

森亮氏の詩集を講読の方は、定価八〇〇円に送料一一〇円を現金為替にして筑摩書房あてに直接申し込んで下さい。

果樹園 第二〇一号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年十一月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

果樹園 第202号
昭和四十七年十二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

棟方志功(三)　小高根二郎
ハーディ詩抄(二)　森亮
雑草頌　宮城賢
アルバム(一)　田中克己
森亮詩集「庭と夜のうた」読後感　福地邦樹
午後　吉本青司
応召日記(三)　蓮田善明
光悦寺　高梨一男
編集後記

棟方志功(三)

―開眼、美の法門―

小高根二郎

第一章　美の階段と褒貶

1　倭絵の画魂成る

棟方志功の「善知鳥（うとう）」が、昭和十三年の第二回文展で、版画として初めて特選に選ばれたことは、現代日本版画史上、まさに特筆すべきことだったのである。かつてヴィンセント・ヴァン・ゴッホが、熱い憧憬でフランスの空の下に北斎の風景を捜し求めたことや、どんなありふれた日本版画だってルーベンスのように素晴らしい……と渇仰した、その歴史的な栄光――つまり、日本版画の可能性を、心ある人々に想起させたからであった。

筆者は「善知鳥」の特選をもって、ついに志功の画魂成る……と、前著『棟方志功――その画魂の形成』で解説したが、詳しくは、板画魂成る……といった方が適切だった。ところで、志功はこの栄光の日から二月ばかりして、今度は、倭絵（やまとえ）の画魂が成る……好機に恵まれたのだった。

即ち、昭和十三年十二月中旬、志功は大原孫三郎の依頼で、倉敷は酒津にある別邸・無為村荘で、本邸の納戸用の襖五枚に揮毫することになったからである。中野大和町の自宅の居間に描いた蛸襖以来の大作である。

もっとも蛸襖以後にも、欝勃たる志功の倭絵の画魂は、五尺の体軀を身ぐるみぶっつけるに足る大きな障壁を捜し求めていた。出世作「長谷川邸の裏庭」以来馴染みである富山県は亀田の長谷川家を訪れるつど、十畳座敷の襖が白紙のままであるのを見かけると、主人の松郎に掛け合ったものだった。

「ワに、ひとつ、なにか描かしてけェねだか？」

すると、囲炉の前にどっかと胡坐をかいていた松郎は、くわえ煙管の首を左右に振ると、

「お前の手では、まだもったいねェ……」

と、にべもなく断るのが常だった。彼は亀田鵬斎（一七五二―一八二六、奇行があった備家で書家）や良寛の書を愛蔵していて、味噌屋にしてはなかなか眼識が高かったからだ。

この欲求不満を強いられ続けた志功が、この越後の味噌屋なんかでなく、日本民芸館の寄進者・大原美術館の建設者である玄人筋の大原孫三郎から、揮毫依頼をうけたことはまさに感激だった。しかも、京都北白川の別邸なんかでなく、倉敷本邸の襖ときている。志功が感激の固まりになって、張り切ったことは当然である。しかも、揮毫の場所は、無為村荘内にある故児島虎次郎画伯のアトリエだった。画伯が棟梁に命じて、柱といわず、梁といわず、鉈彫りをほどこさせた数奇を極めた空間に、漆黒に縁どられた新調の襖五枚は、浄白の夢をみながら静かに床に伏せっていた。揮毫者の加筆一つで、これから与えら

れる空間や、それを仕切る匂わしい任務に目覚めるかのように……。

尺余の大硯の池には、すでに墨汁がまんまんと準備されていた。白磁の筆洗にも八分どおり水が満たされ待機していた。邸の管理者である大原美術館々長の武内潔真は、小粒だがぴりり……とした神経で部屋の隅っこに鎮座していた。次の間には、彼の下命を待って、夫人多磨子がぬかりなく控えていた。志功は羽織を脱ぐとタスキがけをした。そこで、「う、う！」と獣のように唸ると、ならべられてる大中小の筆の中から、小太刀ほどもある一本を選んだ。まず穂先を口にふくんで湿りを与えてから、やおら硯池にひたして墨汁を吸い上げた。そこで「勝負！」というように威勢よく立ち上った。初めは右回りで浄白な敵手のぐるりを回った。しかし、どこからつけこむ隙もみつからなかった。次いで左回りに変った。五枚の襖の右側、或いは左側にはめこまれている引手が、妙に目障りだった。いや、それを意識すると、初めは古鏡のように見えたそれが、いつか次第に拡大されて、まるで騎士の楯のように大きく見えてきた。余白と隙は十二分にあるように見せかけながら、いざ打ち込むとなると、たちまち五面の楯が寄ってきて、チャリン！ と、筆鋒を払いのけるように思えてきた。志功は、右回り……とみせかけて、左から回り込んで、すかさず一枚目に「万里」と書きこんだ。まるで稲妻の早さだった。検分役の武内は固唾を呑んだ。再び筆に墨汁をふくますと、次の一枚に「蒼雲」と書き、勢余って三枚目に「長」と書き飛ばした。ここで武内は

「しばらく！」

と、声をかけて立ち上った。何か怪訝な印象が心を掠めたからだ。第一に、河井寛次郎の触込みでは、棟方志功は「鉄斎以上」の稀有な画家ということだった。ところが志功は絵ではなく、今、書を書いているのだ。書といえば、武内は地元出身の名家平賀元義（一八〇〇—六五、万葉調の歌人、国学者）や寂厳（一七〇二—一七七、倉敷玉泉寺住職）を愛蔵しており、一家言を持っている。志功は万里蒼雲長と五字を書いたところだが、さしずめ書風は鉄斎もどき……といったところだ。いや、怪訝さはそんなところにあるのではない。武内は美術館長をしているが、もともとはエンジニアなのだ。一高を経て東大工科を卒業、倉敷紡績に入社して原動、建設、工場長などを歴任したが、八年前に大原美術館が設立されるに及んで、感受性の繊細なところを元三郎に買われて、美術館長を仰せ付かったわけであった。彼の設計的に明敏な頭脳はたちどころに怪訝さの真因を解明していた。それは、志功が切り込む隙をみつけるためにグルグル回りをやってるうちに、上下の判断がつかなくなって、逆さに字を書き込んでしまったのである。

「しまった！」

と、武内は唇を噛んだ。取返しのつかぬことになったと困惑した。と、いうのは、筆を下してしまったのは三枚で、後の二枚は無事だったが、張り替えをしようにも、物資統制の折からして、寒冷紗の代りがなかったからである。明日は、大原家の御宗子・総一郎の帰朝歓迎の園遊会が、この無為村荘で催される。足掛け三年にわたって、アメリカ、イギリス、ドイツに遊学したのだ。地元の名士をはじめ、倉敷紡績、倉敷絹織の幹部、総一郎の六高時代の恩師、それに日本民芸館を代表して京都の河井寛次郎も招かれている。そのパーティーの見物の一つに、河井が「鉄斎以上」と売り込んだ志功の襖絵の披露も、予定されてるわけだ。とにかく明日の午前中—それも十時頃までになんとかしなくては格好がつかない。美術館長としても面目が立たぬ。一瞬、顔が青ざめた。だが、さいわい、工場長時代の豊富な体験で、どんな事故に際しても、緊急な措置がとれる沈着が涵養されている。そ

れにエンジニアの秩序ある脳細胞は、まるで電算機のように敏速に、とるべき段取りをはじきだしていた。

「多磨子！」

と、まず隣室に控えている夫人が呼ばれた。彼女が貞淑の手本のような顔をのぞかすと、武内は小声で、社内販売で買いおいた綿布が、まだあるかどうかを尋ねた。彼女がうなずくや、すぐに表具屋に来るように電話せよ……と命令した。それから彼は改めて志功に向い

「先生！ どうぞ……」

と、進行をうながした。チリチリしていた志功は、待ってました……とばかり四枚目に切り込んだ。「慈航又」と三字がたてつずけに書きこまれ、引続き五枚目に「何処」と二字をしるしてしめくくった。通して読めば「万里蒼雲長慈航又何処」となる。次で志功は、その字と字の空間に、五人の如来——五智如来が、霊妙な音曲に浮かれて踊っている姿を描く段取りである。菊皿に絵具を溶くために、新しい筆を手にとって掌を刷いてみた。そこに、武内から声がかゝった。

「棟方さん。せつかくでしたが、これは逆さでした。」

と、引手の位置で上下を指さしてみせた。

「ありゃア、ほんとだ。なして逆さに描いたんだべ！」

志功は右手にした筆で、懲らすように幾度も自分の左掌を叩いてみせた。さすが放胆無類な志功の顔からも、血の気が引いた。ここで武内は、幸い倉紡時代に買いおいた綿布が一と巻あるので、明朝までに襖を張り替えさせるから、ご面倒でももう一度改めて染筆ねがいたい……といった。

「今日のところは、志功先生の小手調べといったところで……」

そう、彼は如才なく失策の一幕を締めくくったので、志功もやっと胸を撫でおろした。

「美術館長さま。恩に着ます。」

感謝で顔を紅潮させた志功は、絵筆を両親指と両人差指の間に挟んで、表具屋の返事を聞きに主屋に取って戻す武内に向け、合掌した。

表具屋が徹夜作業で張り替えた五枚の襖に、翌朝、志功は再び揮毫の筆をふるった。今度は上と下を間違えぬ目印に、上に当る窓際に、多磨子夫人の気転で、冬薔薇を盛った古備前の壺が置かれた。練習ずみの万里蒼雲長慈航又何処の文字は、挿画を入れる余地を残して、遺漏なく五枚の襖に間配られた。書き終った志功は、昨日と同じ片隅に、チンマリ正坐している武内を、本能的にチラリ……と見た。「しばらく！」はかからなかった。後は急に楽しくなった。できるだけ楽しく仏たちを遊ばさねばマイネ。津軽の女ミコ・ゴミタコよりも楽しく……。そこが男ミコ・ゴミソの貫禄だ。志功は窓際の冬薔薇の盛花から、半開の蕾を一つ摘み取って、それを口にくわえた。かすかにいい香気コがした。いきなり踊りだしたいような軽快な気分に酔った。如来や菩薩を遊ばさねばマイネ。いや、一緒に手をとり合って踊らねばマイネ。ムズムズした鼻先は、いつかメロディーを唸っていた。なつかしのメロディー。藤原義江の「恋ハヤサシ」だ。

〈恋ハヤサシ
野辺ノ花ヨ
夏ノ日ノモト
朽チヌ花ヨ
……〉

謹厳な武内は立ち上った。放逸な現代版鉄斎は、なにをやらかすか、分ったものではない……と危惧したからだ。又、又、調子に乗りすぎて、逆さに挿画を入れねばいいが……。その老婆心からであった。昨日に同じく、隣室につつましく控えている多磨子は、懐紙

をとりだすと、あやふく吹き出しそうになる口を押えた。〈恋ハヤサシ　野辺ノ花ヨ……。メロディーに乗った志功の筆先から、次から次へと如来たちが誕生した。軽羅をまとって誕生の不思議に驚ろいている一人。同じく趺坐しながら、その不思議に共感している一人。この共感に共鳴して、出会いの感動に身を揺られている一人。うれしさに、つい立ち上って踊りだした一人。踊りながら、その踊りに陶酔して、法悦している一人。この計五人の如来たちは、字と字の広からぬ間隙にもかかわらず、いかにもアト・ホームに身を置いて、各自自在に振舞っている様子に、武内は吃驚した。真実のところ、書に一見識ある彼は、三枚目までの「万里蒼雲長」までは隷書風に納まっているが、四枚目の「慈」にいたって急にテン書に変身し、後はまた隷書風……、それも小学生の書きなぐり式に体を崩していないか？　と危ぶんだ。酒気芬々の歌人元義の奔放さはもとよりない。さりとて暢達無碍の寂厳の悟にもほど遠い。さしずめ鉄斎というところであろうが、もともと三十六才の若さを、八十九才の長寿をかけた百錬に比較する方が、無理というものである。そう、批評しながら、武内は寝ている襖を、一枚、一枚、起こして壁に立てかけた。やがて来遊する招待者に、このアトリエで中食の折詰を供する段取になっているからである。彼は、その客の一人になったつもりで、全幅を平等に眺められる、三角形の頂点の位置に正坐して大観してみた。彼は思はず膝を叩いて感銘をした。今まで、書と絵を切り離して鑑賞していた愚に、気付いたからだ。字も、如来も、すでに切り離しがたく互に包摂し、包摂され合って、そこに縹渺とした三千大千世界の光躍する一部を示顕しているではないか……。なぐり書きの掠れた線でさえ、跳ね板に仕立て、如来はなんと楽しげにジャンプに打ち興じていることであろう。このアトリエの主であった児島虎次郎が、苦心をして蒐集した美術館収蔵のグレコの「受胎告知」が覗かせている天国や、セガンチーニの羊が遊ぶ平和なアルプス高原だって、この法外の楽しさには遠く及ぶまい。武内には、依頼主の孫三郎の喜びが目に見えてくるようであった。河井触れ込みの「鉄斎以上」の画家の発見が、まるで自分の慧眼によるかのように、大きな眼を輝やかして客たちに自慢する人のいい主人の姿が見えるようであった。その武内の背後に、口にくわえていた薔薇を手にとって志功はニコニコ顔で満悦していた。蛸襖以来ひさしぶりに、腕に手答のある大作をでかしたからだ。「倭絵の画魂ついに成る」。そう、自ら放楽しているわけである。

来客は二十七、八人、夫人同伴が多かった。裏山の中段にある亭で、総一郎夫妻の無事の帰朝を祝って、まず抹茶を一服……。後は特設の窯で楽焼をたのしんだり、あたりの芝庭に散って、てんでに清談に寛いだ。西欧では、オーストリアの合併に成功したヒトラーは、防共協定案をひっさげて、しきりとムソリーニにアピールを繰返えしていた。フランスでも、すでに人民戦線が崩壊していた。極東の中国戦線では、重慶にある汪兆銘が日本との和平を謀り、ひそかに脱出の機をうかがっていた。綿製品、新聞用紙、学卒者の雇傭、石炭などが次々に統制された。こんな詰屈した風雲の中での、珍らしく恵まれたなごやかな歳晩の一日だった。招かれた人々は、久しぶりに温暖な空気を胸一杯に呼吸した。折詰弁当で昼食がすんだ頃おい、孫三郎は寛次郎宗匠と、志功と、武内とを引き連れて、「鉄斎以上」の検分にアトリエに現れた。丁度、そこで、総一郎夫妻は六高時代の恩師と食後の閑談をしているところであった。話題はドイツの近況――オーストリア合邦後、予想されるヒトラーの打つ次の手だった。他に、まだゆったりと折詰で一杯やってる連中もあった。

「ああ、これは見事な襖を仕上げていただいた。まさに寛次郎先生のご推賞どうりだ。どうもありがとう。ありがとう。」

と、孫三郎は紹介者の寛次郎と揮毫者の志功とに、等分に会釈をした。「再たびひお願いしますよ」。そう、志功へは、もう一段優渥な言葉を振舞った。

「アリガンドゴス」

面目をほどこした志功は、緊張で氷柱のようにコチコチに凍結していた。

そこに長身の総一郎が立ち上ってきた。油気もなく、櫛目の立たぬ長髪は、若い実業家というより、画家みたいに見えた。

「息子の総一郎です」

そう、孫三郎は紹介すると、「私同様、どうも道楽者で……」と、紹介の言葉のほかに、いささか解説も付け加えた。総一郎の背後に、いつか夫人も立ち添っていた。紅梅のような端麗さだった。侯爵野津鎮之助の二女真佐子である。若夫婦はそろって一礼をした。凍結した志功の心筋は、ほのぼのとほぐれてくるようであった。なにやら急に楽しくなって、襖の中の如来のように、いきなり踊りだしたくなるような衝動に揺さぶられた。しかし、ぐるりを取り囲んでいる鑑賞者たちの手前、その爆発的な衝動にやっと堪えたのだった。

この「五智如来図」がきっかけとなって、志功は毎年のように倉敷に招かれると、大原本邸の襖や屏風に次々と揮毫するようになった。初めは孫三郎からの依頼であったが、そのうち総一郎からの注文もかなり加わった。武内の伝えるところによると、孫三郎は次第に昂じてくる息子の道楽を、見て見ぬふりをしていたそうである。「五智如来図」の翌年か、翌々年に、総一郎の六曲一双の屏風に揮毫することになった。その折にも、襖を逆さに描いた先の椿事とは、又別種の珍事を志功はしでかして、武内をハラハラさせたのであった。

「棟方は邸内の林間にある『無為堂』（故児島虎次郎氏設立）で仕事をする事になりました。白の六曲屏風が部屋一パイに拡げられ、武内夫人は墨磨りや絵具とき、筆と刷毛、筆洗、文鎮その他、万端に注意深く整へられました。さうして行儀よく傍らに

ハーディ詩抄（二）

森　亮

庭のベンチ

それのもとの緑色はさめて青っぽく、
曽て大地を踏まへた脚はどれもこれも土に
　めり込む。
やがてそれは何時のまにかつぶけるだら
　う。
やがてそれは意外と早くつぶけるだらう。
真赤な花々が黒くうかぶ夜更け、
曽てあそこに掛けてた人たちが戻ってくる。
一列にずらっと並んで腰かける。
一列に勢ぞろひして腰かける。
あの人たちの重みではベンチはつぶけない。
冬の寒さもあの人たちを縮み上がらせない。
大水もあの人たちを押し流しはすまい。
何故って連中、なかぞらの空気みたいに軽
　いから。

ドーセットの州都ドーチエスターの近郊にあったハーディの屋敷で、庭のベンチが古びて木製の脚が地面に段々めり込んでゆくといふことをハーディ夫人が或る人に報じてゐる。夜間の幻の再訪者が親族なのか友人なのかは読者の想像にまかされてゐる。

座つて、棟方の仕事を待つてをられます。頃は丁度夏でした。棟方は例の如く一気に描き上げたいのです。それも真裸になつて、自由に描き度かつたのです。

処が奥さんが余り行儀よく、一言も云はれずに傍らにをられるので、それも出来ず、むずむずしてゐたのです。たうとう堪りかねて、棟方はひと先づ御不浄に立ちました。戻つてみると、有難いことに奥さんも主屋の方に一寸行かれた様子です。誰も居なくなりました。棟方はこの時とばかり、真裸になつて一気に描き上げました。ものの十分もかからぬ間の出来事です。やがて奥さんは戻つて来られ、もう出来上つて了つた屏風を目前に見て、あつと驚き、『まあ』と一語洩らされたさうです。お世話するどころか、凡ては後の祭りで、もう事はすんでゐました。

（柳宗悦「棟方と私」）

この猿又揮毫という珍事を、志功みずから右のように得々と柳宗悦に語っている。ところが、「有難いことに…・誰も居なくなりました」と判断したのは、弱視の志功の重大なミスであった。なるほど多磨子夫人は、志功が方角を間違えぬ目安に、去年のように窓際に薔薇の壺を置くと、主屋へ引揚げた。しかし、部屋の片隅には、検査役の武内は厳然と鎮座していたのである。その武内の存在なぞ全く眼に入らぬかのように、御不浄から戻ってきた志功は、いきなり帯を解きだした。武内はおや？　と思った。次で着物を脱ぐと猿又一つになった。まさか風呂場で斎戒沐浴をするつもりでもあるまい。と、怪しんでいると、志功は左掌に大硯をのせ、右手にたっぷり水を含ませた隈筆を握ると、「五智如来」の時のように、ぐるぐる回りをやりだした。今度は屏風だから引手がない。上下の判定のつかぬノッペラ坊だ。幸い多磨子がぬかりなく置いた薔薇で目安はつく。だが、憑かれたような形相をしている志功の眼に入っているかどうか？　分ったものではない。彼は硯から、いきなり墨汁を、白い紙面に飛ばして回った。いや、水撒のように、柄杓で撒いて回った……といった方が適切だ。左上。右上。それから右下。次で彼は刷毛を手にすると、まだ乾ききらぬ墨群を、撫で回したり、掃除でもするように掃いて歩いた。なんのことはない。画面は暗雲低迷した嵐の前の様相だ。こんな乱暴な描法ってあったもんではない。又、何を描く根胆なのか、武内にはかいもく見当もつかない。今度志功は、筆洗を胸に抱くと、隈筆にたっぷり水を含まして、画面の暗雲へ向けて、ポタリ、ポタリと、大粒の俄雨を降らし始めた。まさに狂気の沙汰だ。たまりかねて武内は立ち上った。「五智如来図」の時と同様、「しばらく！」と、待った……をかけようと思ったからだ。ところが、立ち上って画面を俯瞰してみて驚ろいた。狂気の沙汰がちゃんと絵になっていたからだ。いや、見事な屏風絵を形成していた。それも傑作なのだ。暗雲と見えたのは、そそりたつ岩壁だった。左右に峨々として対峙しているそれは、その中間に末広がりの空白を開放している。それは久遠の流れを象徴しているようであった。それとも億万年の氷河と見ても、一向にさしつかえなさそうであった。その流れを塞くように、大小二つの島が傲然と手前に蹲っている。墨汁を撒き、刷毛で撫で回し、水滴を降らしただけで、結構、本格的な斧劈（ふへき）皴（しゅん）を造型し、幽淡蒼古とした万古の渓谷が忽然と示顕しているのであった。わずか十分たらずの時間だった。

「おおッ！」

と、さすがの武内も思はず感嘆の声をあげて猿又画伯を振返ると、すでに着衣正座した志功は、つつしんで署名捺印をしているところだった。所用をすまして主屋から駆けつけた多磨子夫人も、

「あら！」

と、驚嘆の声をあげた。控えの間で待機するつもりが、再た茶菓をとりに、主屋へとって戻さねばならなかったからである。

ちなみに、「五智如来図」以後、倉敷大原本邸のためにものした代表的作品は、次の通りである。

昭和十六年　襖「群鯉図」。
昭和十七年　屏風六曲一双「連山々図」、襖「華厳壁図」。
昭和十八年　屏風六曲一双「群鯉図」、「群童児図」、六曲半双「風神雷神図」、二曲半双「両妃図」。

この最も多作であった昭和十八年の一月中旬に孫三郎は六十二年余の生涯を閉じているので、この大半は倉敷レイヨン社長になっていた総一郎の注文によるものであろう。

雑草頌

宮城　賢

村山貯水池から西武鉄道に沿って
一筋の水道道路が走っている
二粁ほどの間隔で水門が設けられ
地下を潜ってきた獰猛な水が溢れ揉み合い
どうどうと轟いている
この水道道路は石くれの露出した土の道で
人間と自転車・単車のたぐいのみ通行を許
　されている
二間ほどの道幅に二筋か三筋の土肌の条線
　が
多年のあいだに踏みならされ
あとはさまざまな雑草がそれらを縁（ふち）どって
　いる
この草道に足裏を弾ませて歩くのは
このへんの住人たちの特恵である
雑草がこんなにもうれしい存在なのを
この道を歩く人びとは知っている
花の季節にはおおぜいの老若男女が
かくべつ申し合わせたわけでもなさそうな
　のに
ひとつらなりの列をなして貯水池へ歩く
歩くことが疲労でなく回復であるこの道
それは都会へ生命の水を送るかたわら
そこを歩く人らに雑草の意味もおしえる
この道をセメントで固めてしまうときは
たぶんわたしたちもセメントになっている
雑草は自然の悪意でなく善意であった！
都市の舗道を文明の尺度とする人らよ
きみらは考えてみないか
舗石を剝ぎとって投石した若者たちの心に
それが単なる武器としてでなく
自然との共生への希いを蔵していたことを
その跡をセメントで塗り潰した人らよ
舗石の僅かな隙間からさえ萌え出ようとす
　る雑草の生命を
永久に葬り去った清潔好きな衛生家たちよ
きみらは考えてみないか
その衛生が生みだしている業病のすがたを
一枚の舗石と一本の雑草のあいだで
われらは深く深く懐疑せねばならぬ！

アルバム(一)

田中克己

父からわたしの貰つたものは無類の癖癪もち（このごろ起りが殆どなくなつた）と詩歌愛好（木下利玄、鴎外「水沫集」などを父の蔵書で読んだ）、痩身（このごろ三八キロ）、「飄然たる歩きぶり」（還暦祝に集めた教へ子の文章の中にさう書いてあつた）その他であるが他に形をもつて残つてゐるのは一万首の遺詠とアルバム一冊である。アルバムにはわたしの母との写真が貼つてあつて、今の母

に悪いと思つて遺児のわたしに持つて来たものと思ふが、いつ貰つたかおぼえてない。わたしも永い間もらつたままにしてゐたが、阿佐谷に来て隣に住む母のいとこ船越こせん媼に説明してもらつたので、孫になるわたしの子らのためにも説明を書きのこしたく思ふ（この性質も父から譲り受けた）。

母田中（旧姓）これんは明治十九年兵庫県三原郡賀集村（生日不明）に生れ、大正四年十月七日、わたしの五歳の時に亡くなつた。その五十年祭を今の母の首唱で、教会で行つたのがもう八年にもなる昭和三九年のことである。父田中甚四郎（甚城と改めた）母船越氏こしげである。

みちもせに野茨咲くらむ少女の日わが踏みなれしふるさとの道

といふ歌がのこつてゐて、大阪へ出てからの作であるが、アルバムの写真はのいばらを踏んでゐた少女時代から始まつてゐる。

船越こせんと二人、髷を結つて写つてゐるのがそれで、年齢はほぼ同じである。母の弟妹たちにいくらか似た部分をもつてゐるのが母自身で、「これはわたし」と船越のおばが教へたのは覚えちがひでないかと思ふほど似てゐないが、このおばも五十年祭のあと亡くなつたので、もう問ひかへす法もない。惜しいことをしたものである。

（つづく）

森亮詩集「庭と夜のうた」読後感

福地邦樹

野菜サラダを食べたあとで

サラダの味のように淡白で、しかも計算された技巧が快い味覚をもたらす作品。最後の行の「これがわたしの夕暮れの勇気です」などに都会風の粋な洗練が見られる。

塔つくり

技巧を自嘲した作品。作者は自分の技巧に危険を感じ、それをみずからに言って聞かせる。そして「わたしは何時自らをむなしうすることができるだらうか」と自らに問いかけるのだ。所詮詩人というものははかないという覚悟を言い、一方では「中食の場に急ぐときにも、わたしは俯向いて歩き、道なる小石を避けてゐた」という表現の中で、それでもなおはかない詩をうたいつづけねばならぬ宿命のような予感を述べているように思う。

犬

非常に上手な詩。旧詩帖全体にみられる、とぎ澄まされた美しい作為が、この「犬」で

詩集 庭と夜のうた

森 亮

■旧詩帳
野菜サラダを食べたあとで／恋歌／塔つくり／夜／笛／玩具／犬／枕上口吟／アンフィアラオス

■晩国集
みなづき／加賀行き／大隅にて／墓碑銘／失眠歌／夜の歌／秋鳥賦／詩人の村／小園歌／登高／小園好日／海辺にて／忌日／夜の歌／加賀再遊／雲雀／自画像／詩の餞／海光／終曲／夜の歌

■訳詩
クブラ・カアン／さだめの小車／無題

希望者は直接筑摩書房に申込んで下さい。

¥800（〒一〇）

筑摩書房

最大限に効果をあげている。「青木の葉はお前の白いお腹に楓のやうな影を投げる」という行は特に印象に残る。物を描くことによって心をとらえた古来の日本人の詩歌の精神にのっとっているのであろう。伊東静雄はそういうことを、詩は比喩だと言ったのだと思う。

午後

吉本青司

秋の日の
精霊の午後

黄の双蝶が
離れたり　寄りあったり

めくばせする
こころとこころ

小径

木の実は
赤い宇宙の夕焼けをかたってくれた

苦菜は
黄色い蝶になる日のことをおしえてくれた

ドウメンのしずかな杜に
あそんでいるかなしみたち

遠い日のことが
手にとるみたいに想われる日だ

すすきの中で

すすきの中で
ひともと
りんどうを見つけた
〈ドウメンのむらの大事件だ〉
気のはやい先客は
もう空色の
花びらふかく侵入している
ありめも宇宙が
恋しいとみえる
すすきの丘の
ひともとのりんどう

夕ばえ

ゆうがぎくたねを掌に丘くだりけり

大隅にて

終戦の直前に入隊した著者の鹿児島での句作。「国の尻大隅の野の閑古鳥」にもみられるように、これら一連の句は終戦直前とも思えぬのどかさである。軍にあっても一地方ではこんなだったのだろうか。作者の精神の風雅と逃避性が感じとれる。

小園歌（昭和二十二年及び昭和二十五年）

詩集の題「庭と夜のうた」のイメージを代表するようなナイーブな詩。作者が小さな園と自分の心をみつめることの何とつつましく優しいのであろう。「薄の穂の一すぢ一すぢ」を見つめる作者の眼の何というするどさ。子規が説いた写生の精神はこういう短詩に受け継がれている。（そういえば、子規に「小園の記」という小品があった）あとの「小園好日」の四行詩も俳画のように穏やかで美しい。

夜の歌（星が流れなくても）

夜空にむけてひらいている天窓は、作者の心の象徴なのであろう。「どんな透明な思ひが入つてくるかとわたしは受身になつて待つてゐた」という部分は告白のようにひびく。われわれ人間が常に実りを心待ちにしているとしたら、その期待のはかなさ、可憐さが見事に描かれている。

訳詩

近来訳詩は殆ど口語になってしまったが、ここにあるような古典詩は古語での訳がふさわしいように思う。ちょうど、聖書には古語がふさわしく、なつかしいように。著者のルバイヤートの名訳は伝説的でさえあるが、ここにみる数篇の訳詩にも充分に言語彫琢の力量がうかがえる。

最後のハウスマンの「無題」は、詩人のための鎮魂歌である。それはとりもなおさず、還暦にあたって編んだこの詩集の著者みずからに対する鎮魂の歌にもなっているのであろう。

応召日記 (三)

蓮田善明

十二月二十日（火）

高木氏と宰領して午前五時の汽車で門司に向ふ。十一時半に門司につき、先発者に迎へられ、宿につき、老中尉に会ふ。午前一時ころ就寝。老中尉、人は好くても、軽くていけない。日本人は人の好いといふことを余り大きく買ひすぎる。

十二月二十一日（水）

兵隊は五時前から起きてゐる。五時すぎたら、もう表に出るものもある。F曹長の挨拶は案の定わるい。とうとう六時四十分まで待つてゐた。御苦労である。後できけば体よく宿から追ひたてられてゐたのである。宿も下すでいけない。又えらびもえらんで遊廓の裏である。

七時から出発して遺骨受領。老中尉が何かといふと笑ひつゝ、又いさゝかの厳粛味もなく処置し指揮するのには腹さへ立つてきた。それと、而も市民や遺族や又帰路沿道の人々の悲愁と厳粛さに打たれるのと感情が交錯して頭がつかれた。段々老中尉のやる事がそのニコ〳〵が特進将校のずるい狡猾卑屈な習慣に見えて来、又悪党にさへ——実際事の神聖さを敢て破つてゐる彼は悪党だ——見えてきた。自分は何だか感激を失つてしまつた。余りにひどいことを、而も兵の前で彼はてん然とやつた。

沿道雨。

熊本駅に下車。駅前で慰霊祭。直ちに本願寺に安置、帰宿。腰が痛く、気分がさつぱりせぬ。風呂をあびてかへる。かへつて、婦人公論一月号の林フミコの北岸部隊をよみ、眠る。

十二月二十二日（木）

七時二十分前に本願寺に行き、遺骨を隊に運び、合同葬。十一時半頃までかかる。昼食後手持無沙汰である。三人の将校と補充兵は今朝午前三時から大矢野へ戦闘射撃に向つてゐる。何もすることなし。中隊長に一寸さそはれたが大矢野行きはやめた。二時すぎ帰宿。今日は美しく晴れた。

「北岸部隊」をよみつゞける。やはりいい。最高位の一つだ。カロッサの「ルーマニヤ日記」など遙かにおちる。床に入つてよみつゞけて、よみやめられない。頭痛はする。目をつむつたが、うつら〳〵何か夢をみるやうでゐるうち四時にはとう〳〵目をあけ、又よみつゞける。頭はよくなつた。起きてみると阿蘇の煙が南に行つてゐる。

T君が一昨夜、昨夜、女給をつれこんだりして、おくさんがぶつ〳〵。Tも彼は彼だけしかない人間だが、僕に話してもらはうとは主婦も虫がいい。自分で話しなさいだ。金ばかり貰つて、ほんとの親切がないので、Tが金さえ払へばといふやうな大きな（?）面をするのだ。

やはり毎日何回となく、敏子たちが帰るのが待たれる。敏子は今の自分の周囲では、唯一の精神的存在だ。彼女をよぶことを、自分はあたり前の家族をよぶことゝ同一視してゐたが、今日ふと、さうでないと思つた。これは自分のこちつけでない。彼女の精神はほんとうに精神的なものに高まり深まつてきてゐる。夫婦で、それを高めることにつとめてきたし、出征時の彼女の精神は一途に高まつた。自分が跪拝しいたくらいだ。彼女は孤独に耐えようとし、そして精神に縋る強さを見事に増した。そして、今、彼女と自分は、出征の間でありながら、一緒に生活しなければならなくなつたが、もはや、そのために自分たちは何ら精神の下向を起さないだらう。或は今夜、明日にも野戦命令が出るかもしれぬし、又彼女が来てからすぐ出るかもしれぬ。又今度は出ないにしたところで、この短い夫婦生活は最も豊に最も尊い、二人の生涯となるであらう。益々二人は美しい生活を営みうるだらう。

自分は、もはや、自分及び自分たちの生活を一般の風俗生活と別に考へてよいやうである。自分は、長い間、自分を凡俗におくことをよいことかのやうに思ひあやまつてきた。しかし凡俗といふことは、決して真の大衆の精神といはるべきものでなく、公共精神でない。動物的凡俗は日本の精神でもない。凡俗の中から立ち上る高貴がなければならぬ。

自分は自分の天才を今日迄塵と同じうすることに従つてきた。そのために自分は耐へた。しかしもうその忍耐が却つて悪徳でしかないこと気づいた。自分の理想精神と日本の理想精神とが一致した。自分の精神が公共に認められるべきことが今こそ明かになつた。自分は自主的に主導的にはたらいてよい。否、さうなければならぬ。それがありがたい祖国への報恩でもあることが自分に命ぜられる。自分は天才である。自分は日本の理想を等しうする。

妻もそれに近づいてきてゐる。

自分たちはそれを近くにゐてみがき合ふことに、お互に力づよさを覚える。自分たちは出征中家族をしても、決して私的にそれをなすことを片鱗も考へない。私的なものと厭ひ、却つてそれを高めることのたのしい生活をなすであらう。

光悦寺

高梨一男

門に番人は居ない
無造作き吊す竹筒に
「金十円也」を投じる

人影も疎らに
緩い勾配の庭は薫糸として
唯の野山のようだ
赤松楓鉾杉らの木隠れに

堂四阿（あずまや）碑祠点在し
かくべつの趣向てらいもなく
いはば素っ気ない

むしろ風情は
幽（かそ）けき篋（おさ）の音
——麓に絹を織る

回廊に彳めば
光悦えがく
曲線の
鷹ケ峯を
借景に

果樹園　二〇三号　昭和四十八年一月一日発行（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

果樹園

第203号

棟方志功(三)　小高根二郎
樹木への訣れ　宮城賢
ひとことと抄　吉本青司
ハーディ詩抄(三)　森亮
春の水　高梨一男
アルバム(二)　田中克己
応召日記(五)　蓮田善明
風の子　中野信子
編集後記

棟方志功(三)

―開眼、美の法門―

小高根二郎

2　須菩提が縁となった「釈迦十大弟子」

志功は倉敷の無為村荘で「五智如来」を描いたが、それは「華厳譜」の時の放らつさと違って、明確に仏典に典拠していた。つまり、五智成就の五如来――大日・阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就如来を描いたわけであった。

彼はこの「五智如来」から引続いて「観音経」三十五図を制作したが、それは『妙法蓮華経』巻八の「観世音菩薩普門品」に典拠したのである。つまり、その中で仏と無尽意菩薩の問答が伝える、観世音菩薩が相手次第で変身してする説法――「梵王の身を以て得度すべき者には、即ち梵王の身を現じて為に法を説き、帝釈の身を以て得度すべき者には、即ち帝釈の身を現じて為に法を説き……」の、あの変身自在さをモチーフにしたのである。これも心友である特許局の課長水谷良一の啓示であった。志功は、辟支仏から始めて執金剛身にいたる三十三変身に、観世音菩薩の本身を加えて三十五図に制作、これを日本民芸館に出品をした。柳宗悦から示唆をうけた裏彩色を大胆に試みてみたからである。茶と藍二様に裏彩色をほどこした三十五図を、市松模様風にはり合わせて展示したが、観世音菩薩の親しみやすい風韻が、ほのぼのと漂い出るような気がして志功はうれしかった。志功はその自足の思いを、「わたしの思いと、他力の助けてくれる思いとの融合」といっているが、その言葉の中には、前述した柳と水谷の助力も、含蓄されていると考えていい。まこと志功は、この三十五図の中から、柳が好尚し、水谷が選別した十二図――「声聞」「帝釈」「本身」「「北丘尼」「優婆塞」「宰官女」「婆羅門女」「乾闥婆」「緊那羅」等を、翌昭和十四年春の国画会展に出品をした。しかし、志功が期待したほどの反響は、なぜか起らなかった。「観音経」と題されたこの作品が、菩薩のありがたい三十三変身の一部である意味が一般に通じなかったからであるし、志功をライバルとした嫉妬ぶかいアルチザンたちの、言い合せた黙殺に出合ったからだ。

憮然とした志功は、美術館からの帰りに、ふと何か誘われるものを感じて帝国博物館に入ってみた。すると、その第一室の入口で、彼はたちまち釘付けにされてしまった。そこに僧形の美女が志功を待ちうけていたからである。彼女のはれぼったいが明澄な双眸は再会の歓びに耀いていた。朱花の花弁のようにめくれあがった唇は、すでに親愛の言葉を含んでいた。その歓びのトキメキを鎮めるように、右掌を胸の隆起のあたりにやり、左手の繊細な指は、それをカムフラージュするように蔽っていた。志功は誰かも思い出せなかっ

果樹園　二〇二号　昭和四十七年十二月一日発行（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

カラー版中国の詩集10

歴代名詩集

原田憲雄訳

〈百十匹ノ犬〉

唐寒山

ワシハ百十匹ノ犬ヲ見タ
ドイツモコイツモ毛ハモジャモジャ
臥タイヤツハ臥コロガリ
歩キタイヤツハ歩イテイル
一カタマリノ骨ヲ投ゲテミタ
ワット牙ムイテ大喧嘩ダ
ジッサイ骨ガスクナイカラナ
犬ガ多クテトテモミンナニ渡ラヌカラナ

¥690

角川書店

妻を思ふ心は、天才を思ひ、日本を思ふ心と通じる。このことを私は率直にしるしておく。

兵営でラッパを練習してゐるのが、ふと、弔のラッパを吹いてゐる。ひとり思ひふけるやうに吹いてゐる。今日の合同葬の光景が目にうかぶ。心にしみる。彼も同じではあるまいか。

今日衛門で、生徒をつれてきた長野秀君によびとめられてあつた。早くから会ひたいと思つてゐた人だ。ふと、話してゐるうち、オヤ熊本弁で話してゐたナと自分でへんで改めようとしたが、どうも改められなくなつてしまつた。長野君にはこんな熊本弁は分らないのではないか、しかし、何か自然なうれしさを感じた。

*　*　*

編集後記

十月十日。待望していた森亮氏の詩集『庭と夜のうた』が筑摩書房から送られてきた。森氏と私とは、旧制大阪府立高津中学校で、クラスは違つていたが同期生であるから、かれこれ半世紀に近い交際をしていたことになる。二人とも京阪電車沿線から通つていたから、時に路上で、或いは車中で顔を合わし、何かを語つたことはあつたが、文学や芸術に関してでなかつたことだけは確かである。それが、どうして言い合せでもしたように、一緒に「コギト」に詩を発表するようになり、「還暦をすぎてまで「果樹園」を経営するようになつたのか？　因縁というほかはあるまい。集中の三十四篇の詩と訳詩は、その永い生涯の折節の哀歓や肉体のリズムや生活の陰影の自然な結晶だ。折から原田憲雄氏から角川書店版中国の詩集「歴代名詩集」も頂戴したが、その中の無名氏を含む諸家の詩のなつかしい風韻に通うものがある。東京朝日新聞十月二十一日夕刊は森氏の飜訳に関し数段にわたり紹介していた。

二十七日。日本橋東急百貨店の棟方志功芸業展を見た。板画・倭絵・油絵・書を含む三百余点の大展覧会であつた。画仙は今春印度仏蹟を尋ねられたが、その影響はアメノウヅメサマ図にも現れていて、日本から世界への気宇がよくうかがえた。画仙にお祝を言上すると、二百号の水谷課長が善知鳥を舞う場面はそつくりそのままだったと、すかさず祝福と握手を賜つた。

二百号に、守屋美知代、小島信一、片岡久、久保忠夫、山崎健司（読売新聞）、宮城賢、棟方志功、寿岳文章、内海琢巳の諸氏からお祝の言葉を頂戴した。御礼申し上げる。

果樹園　第二〇二号（毎月一回一日発行）
昭和四十七年十二月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

た。たしかに何処かで出会っていたような気がした。

「ひさしぶりネ……」

そう、彼女は囁くような小声でいった。はて、誰だったんだべ？　志功はまだ思い出せなかった。初会はずっとずっと昔のような気がした。思いだそうとしても、それは吹雪の中の映像のように、幻みたいに灰色にぼやけて遠かった。しかし、じっとみつめられると、心がとろけてくるような慈眼と慈光……。それだけが思い出を解き明かす、手がかりのような気がした。彼女の胸に当てた両掌のしぐさに、浮かび上ってくる場面があった。ひしと右掌に抱き、さらに左掌で蔽う、そのしぐさ……。戸口でトン！　トン！　と足踏みをし、藁沓の雪を落す音が聞こえた。お母だ！　待ちこがれていた兄・姉たちは、力を合せて凍てついた戸を押し開くと、吹雪と一緒に舞いん込できたカクマキ姿のさだ……。彼女は何かをひし！　と胸に抱いていた。くるんだ片袖から新聞紙包が覗いていた。この時、彼女は

「よく蒸けだァ薯コ！」

と、張りのある声で、湯気のポッポと立っている新聞紙包を、子供たちの前に差し出した。あの薯コを抱いていた両掌なのだ。

「お母サでねェだか？」

と、志功は思いがけない再会に、相好を崩した。

「ほんと、久しぶりだネス……」

そう、頬笑んだ彼女に、志功はすがりつこうとして、ケースの冷い硝子板に阻まれた。お母サでなく、釈迦十大弟子の一人「須菩提」だったのだ。

こんな経験は十五年前にもあった。弁護士控所の給仕をやめて上京した時だった。書生に入ろうと上根岸の中村不折邸を訪れた。女中ににべもなく断られた。その悔しさに開け放されていた邸内の書庫へノコノコ入っていって、そこで思いがけずローマの臥女神に出会った。大理石のトルソーだった。やけにむっちりとした乳房だけが目立った。その乳房に、志功はお母サを感応した。兄や姉たちのおこぼれしか頂戴できず、主にオネバで育てられた彼には、乳房に対する熱烈な欲求不満があったからだ。「お母ッ！　スコーはとうとう東京サ出てきしたじゃ」。そう叫ぶと、むんず…と両乳房を鷲掴みにしていた。

しかし、今度は違っていた。一方的な感応でなく照応だったからだ。それに、トルソーでなく五体が完璧だったから、鑑照も自然だった。丈は高からず低からず一五〇センチばかりだ。乾漆の上から胡粉を粧い、紅をさし、眼青を点じた面輪は、さすが一二〇〇年の星

（須菩提　東京国立博物館出品）

興福寺

霜ではだらになっているが、そこがかえって、睫毛に雪片を積んで帰ってきた慈母の面影を髣髴させた。志功は近みから覗き、また遠くから眺め直した。幾度も同じ動作を繰り返して飽きなかった。慈悲心が楚々とした体軀から充溢して、薫香のように縹渺と漂い、あたりを支配していたからだ。さすが、興福寺に現存する国宝の釈迦弟子六像を代表して、上野に出展されている傑作中の傑作である。松本新八郎が「須菩薩」を評して、「光明皇后が母橘三千代の菩提を弔う気持ちを表現しようとしたのであろう」（「知慧の眼ざし」）といっているが、なるほどとうなずける言葉だ。

志功は釈迦十大弟子の一人、解空第一のこの須菩提を介して、他の九大弟子たちとも知合になった。論議第一の迦旃延。密行第一の羅睺羅。説法第一の富楼那。天眼第一の阿那律。頭陀第一の摩訶迦葉。神通第一の目犍連。多聞第一の阿難陀。持戒第一の優婆離。知慧第一の舎利弗……。この十人の助けを借りれば、まさに鬼に金棒、恐いもんなんかありはしない。いや、アノクタラ、サンミャク、サンボダイ——無上正等正覚、無上正真道、無上正遍知の境涯に達することも、そう難儀でもあるまい。いや、その無上至高の境涯をうかがうことが間違いなのだ。「観音経」が期待に反して反響が少かったのは、観音菩薩の三十三変身という融通無礙さが、我々愚癡無知の凡俗に、とうてい到達できぬ絵空事だからだ。無上の正等正覚にまだ達していなくともいい。無上の正真道をまだ歩いていなくともよい。無上の正遍知にまだ恵まれていなくともよい。その至上無上の境涯に達しようと、悶え、疑い、反問し、反論し、再考し、確信し、懐疑し、逡巡し、諦念し、放念し、仰望し、悪戦苦闘している仏弟子を——ありのままの人間の姿で表現してみたい。

さいわいアトリエの床間に、身の丈ほどもある大きな板木が祀ってあった。朴である。いつも用う墨付きのいい桂とは違う。しかし彫りやすい木質の朴だ。ひとつ、板木の身幅いっぱいに制作してみよう。志功は下絵なしに、いきなりぶっつけに筆を下して、遮二無二彫った。

「制作するときは、どれが須菩提で、どれが目犍連か、そういうことはひとつもわからずにつくりました。ただ、十人の釈迦の弟子の風体をした人間をつくったのです。名はあとからつければよいと思って、あらゆる顔、形、あらゆる人を十に彫ってみたいと思ったのです。たれも別に、利口者とか智慧者とかいった考えでなく、仏に近づきつつある人間の姿を描いただけで、下絵も描かず、板木にぶっつけに筆を下ろしました。」

できあがった十枚の作品を整理してみると、偶然に左向きの像が五枚、右向きが五枚だった。それに衣の黒白の対比も同率だった。これはワの思ったことが自然の理に合致していたからだ……と、志功は無上にうれしくなった。その踊り上りたくなるほどのうれしさを分つべく、＜カゼカラ　クル　ツル　ナガレテ　クル＞を唸りながら、山谷に水谷を訪れた。志功が上野で偶然、南都興福寺の須菩提を提発見した喜びを告げたことから、今度は十大弟子をやるといい……という示唆を与えてくれたのも、彼だったからだ。役所から帰ったばかりの彼はまだ背広姿のままだった。志功はさっそく、座敷の襖と障子に十大弟子を鋲留めにして張りめぐらした。絶賛を期待した志功の口端は、すでに会心の微笑を含んでいた。上着を脱いで夫人に渡しながら、水谷は「うーむ」「うーむ」と、唸ってばかりいた。これは、感銘の「うーん」とは違う、懐疑の、陰に籠った「うーむ」だった。

「棟方君。なにか物足らんね……」

と、一発きた。

「……」

「こう見回してみると、なるほど知ってる者には釈迦十大弟子に見える。しかし、知らない者には、僧兵の群議に見えるかもしれないよ。」

と、痛烈な批評をした。「僧兵の群議」の意味が分らなかった志功は、

「え？」

と、反問をしていた。

「十大弟子にも見えるが、むしろ弁慶のような僧兵に見えるということだよ。見給え。どうやら殊勝な仏弟子と見えるのは、あの合掌をしている一人だけじゃないか。あとの九人ときたら一筋縄でいかぬ愚連隊だ。眼を剝き、肩を怒らし、大袈裟に手を振って、論争をやってるすさまじさだ。もともと、君がヒントを得た須菩提の実家である興福寺は、南都の僧兵といって、僧兵の本家だからネ。これから神木の神輿をひっかつぎ、薙刀を振り立てゝ、京へ強訴か、掠り込みをかけようと、群議をやってるとこにそっくりだよ」

そう、水谷は立板に水……の批評をした。志功は「うーむ」と唸らされた。無我無中で制作した十大弟子どもを見直してみると、なるほど一人として、アノクタラ、サンミャク・サンボダイの境涯に達せそうなのはいなかった。みんな一癖も、二癖もある、不逞な面魂をしている。

「ほンだァ……」

と、志功は、いつに変らぬ水谷の炯眼に、兜を脱がざるをえなかった。もし、この愚連隊十人に「釈迦十大弟子」なぞと、もっともらしく銘打って国展に出品しようものなら、それこそケチをつけようと手ぐすね引いて待ち構えている連中の好餌となること必定だ。

「どうしたらいがべ？」と、志功は得意の絶頂から、失望の奈落に転落した。

「棟方君。国展に出品したあの『観音経』でも同じことさ。もし、あの中に観音菩薩の『本身』が混っていなかったとしてみ給え。三十三変身の迦楼羅や緊那羅や夜叉たちばかりだと、まさに百鬼夜行だろうじゃアないか……」

と、水谷は和服をひっかけた背を志功に向け、脱いだズボンをふみ夫人に手渡しながら解説した。「そんだ！」と、志功は右膝を叩いた。

「水谷先生。一日だけ猶予をください。迷惑でしようが、この十枚はこのまま張っておいてください。明日の今頃までに、この僧兵どもを、必ず釈迦の愛弟子たちにしてご覧にいれますからね」

と、志功は希望で顔を紅潮さすと帰っていった。床に、柳の六字の名号の軸を新たに用意していた水谷は、例の「ネ。いいだろう」と相鎚を打たすために、飯を食っていけ……としきりにすすめたが、志功は辞意を飜さなかった。「明日、仏弟子になりましてから、たっぷりご馳走になります」。そういって志功は帰っていった。

翌日、約束の時間に、志功は満面笑みを湛えて現れた。「釈迦」を制作してきたな……と、水谷は判断したが、違っていた。志功が十人の僧兵たちの右端と左端に張り添えたのは、徹夜のようにして制作した「菩薩」二点だった。

「右は勢至様。左は普賢様。」

そう、志功は説明した。改めて十二枚の板画を見回した水谷は、「うーん」どころではなく、「おおッ！」と賛嘆をした。喧々ごうごうの僧兵たちは、いつのまにやら真正の仏弟子になりすましていたからである。彼らが眼尻をあげ、手を振り、口角泡を飛ばして議論をしているのは、強訴や掠り込みの相談ではなく、両端に控える勢至・普賢の両菩薩にあやかって、どうしたら正等覚に到達できるかを、熱烈に討論している最中なのだ。水谷は「ふーん」と感動を反芻すると、

「棟方君。君はまさしく天才と呼ぶにふさわしい境涯に到達したよ。見給え。床の間の柳先生の南無阿弥陀仏と、なんとよく照応してるだろう。ぜひこの十二点を屏風に仕立てて、先生のご覧にいれ給えよ。」

と、いうと、掌を打って食事の準備を命じた。名古屋の弟源二郎のところからかしわがふんだんに届いていた。スキ焼だった。座敷で、一家して、大鍋をつつくことになった。美知代・烝治・素子・敬・純子の五人の子供たちも相伴することになった。ふみは焚き方に回り、婆やが運び方だった。水谷は自分では一滴も呑めぬくせに、人に酒をすすめるのが好きだった。

「棟方君、乾杯だ！　『善知鳥』に次ぐ第二の門出だ。『善知鳥』は全日本への出発だったが、この『釈迦十大弟子』でいよいよ世界への旅立だ。さァ……」

と、すすめ方も上手だった。ところが志功は

樹木への訣れ

宮城　賢

とある団地のテラスハウス
こゝにわたしは十五年住みならした
細い鞭にすぎなかった次郎柿の苗木が
いまはたくさんの弾性的な枝をひろげ
背たけもはや三メートルはあろうか
冬のあいだ外部をすっかり掃いおとし
生命をひたすら内部に営んできた裸木は
早春をいちはやく艶をました樹肌で知らせ
これまた少女の乳首のようなふくらみを
枝の節ふしにめざめさせる
〈光る緑〉のいのちの季節にはまだ間がある
けれどもその季節をいつかほとばしらせるために
自らを恃んで春一番に揺れるさまは
動物にはなく植物のみのもつ感情の相だ
松　ひいらぎ　ひまらや杉
椿　沈丁花　山椒の木
つげ　ぐみ　くちなし　つゝじ
小さな矩形の庭に
きみらは十五年のあいだ耐えてきた
きみらはそれぞれに生き
その生き方はわたしをいつも凝視めていた
おかげでわたしは人の生き方を少しずつ
より深く考えるようになったかとおもう
きみらが呼吸する空気はすなわちわたしたちの呼吸する空気だ
きみらと共に世々を生きんためにきみらに
わたしたちはしなければならないことがたくさんある
それを人間の倨傲と嗤いたもうな
わたしはまもなくこゝを去らねばならない
幸いきみらは心優しい人たちのもとへ
里子に出されることになっている
地上十二階目の鉄筋コンクリートの一室
余儀なくというより籤運で
（ああ十五年前もそうだった）
そこに住むことを選んだわたしは
樹木たちよ　きみらと訣れて生きてみよう
そこは眺望だけは良さそうだから
そこでわたしはわたしたちの共生の世界を
いまよりは少し大きな視野と深度で
そうしてきみらがわたしにおしえた生き方で
しかしきみらとちがって
決して天の方向にでなく地の方向において
考えてみたいとしきりにおもう
おゝわが樹木たちよ！
この辛い訣れにわたしはそれを約束する

画家仲間から「チョコサン」とアダ名されるほど下戸だ。「チョコサン」とは「チョコ三」、つまり猪口三杯で杯を伏せるところから、その名があった。これは、父や兄と違い、アルコールをあまり受けつけぬ志功の体質からでもあったが、又、或る意味では自戒であり、自警でもあった。と、いうのは、国画会の懇親会では、やおら酒宴たけなわになると、志功は先輩格のTや、Sや、その他から、酔いにまかせて絡まれるのが常であった。後進のくせに、我物顔に壁面を占領しすぎるという言いがかりだ。その言いがかりの第一発は、「大和し美し」を半分撤回しろといった、あの強要になっていた。又、一点一点では、何の意味やらチンプンカンプンの迷作を、やれ「空海頌」、やれ「華厳譜」「観音経」といった大仰な題名のシリーズに仕立る身のほど知らずは、まさに神聖な美の冒瀆だ！と面罵した。こんな険呑な雰囲気のなかで、志功が「チョコ三」以上に杯を重ね、アルコールの力を借りて反論でもしようものなら、たちまち袋叩きにあいそうな気配だった。従って、志功が「チョコ三」で杯を伏せる頃おい、きまってチャから急用の電話がかゝり、「では皆様……」と、早々と退場するのが習わしとなっていた。

今日は、その「チョコ三」の自戒や自警も必要なかった。盛んに御代りをする「不思議な国のアリス」たちの仲間入りをしていればいい、安穏さだった。兎になってアリスを先導する必要もなかった。又、子供部屋ではないので、熊の仔になって這い回ってみせる愛嬌もいらなかった。志功は「チョコ三」まではゆったり杯をなめた。そして脂が乗った名古屋コーチンをたんまりと賞味した。

「さア、もう一杯いき給え。僧兵から十大弟子へ昇格した、せっかくの祝じゃないかネ。」

そう、水谷は減量せぬ徳利を気にして頻りとすすめるので、志功はタブーを破って「チョコ四」の杯を受けた。が、それには儀礼的に唇を触れただけで、前に置いた。

須菩提（釈迦十大弟子の一）　棟方志功

いささか季節がスキ焼には暖かすぎた。志功の頭頂から汗が滴り流れていた。書生のように腰に下げていたタオルで、幾度も顔を拭わねばならなかった。襖と障子に張りめぐらした十二像の中で、「須菩提」がもがくように苦悶の表情を現していた。部屋に立籠めた禁断の生臭物の臭気に辟易したらしかった。そういえば、並みいる九人の仲間たちも、物議でも醸しそうな険悪な表情をしていた。その十人を、「まア……まア……」と、普賢・勢至の両菩薩がなだめすかしている様子だった。

「再た僧兵へ寝返えられでもしたら大変だ！」

そう、志功はぽつりと呟いた。その独白を小耳に挟んだ水谷は、

「なに、僧兵だって？」

と、ニヤリ……とした。

「君は僧兵たちを改悛させるのに、きっと釈迦を連れてくると思っていたよ。そこを菩薩で押えたところに、この作品の成功の秘密があるのだネ。」

と、改めて志功の勘のよさを褒め直した。もしも釈迦まで連れてきて、まだ十大弟子がこのように論争しているとしたら、それこそ釈迦の権威も形無しだからネ……と、付言した。

ひとこと抄

吉本青司

のぎくの径を
せきれいは
チチ　と呼んであるく

木々のこずえを
からすが
ハハ　と鳴いてわたる

交替

りんどうの花の　終わるころ
せんぶりの花が　にぎやかだ

ナルシズム

せきれいが水を蹴ると
せきれいのかげが消える

路傍

うんざりするほど花期のながいのは
あかばなぼろぎくだ

感情

赤い木の実を折ると
おこって　草の実が
跳びかかる

冬眠

冬になると　点々と
書斎に
草の実がこぼれる

「なんだ！　ぐッと空け給え。」

と、水谷が徳利を差したので、志功は注がれたままになっていた「チョコ四」をすかさずあおると、杯を伏せてしまった。

アルコールが志功の血管の内を、勝利と歓喜の早鐘を叩いて回った。あの善哉童子の早駈けのスピードだ。尻がムズムズしだした。なにかやらかさねばすまないように、感情も浮き浮きしてきた。アルコールで舌も滑りやすくなっていた。

「水谷様。いつぞやは善知鳥を舞っていただき、有難さ以上のものでありました。又美知代さんにも、ご苦労様以上のものでありました。今日は、そのご恩返しに、不肖棟方、なにか踊り、唱いたくあります。」

そう、大音声でいうと、志功は挙身微笑になっていた。わあッ！　と、子供たちから興と拍手があがった。「小父さん。ネブタをやってよ」と、烝治から注文がついた。「いや、跳人の方が面白いワ」と、素子が提案した。得意の「幕揚げの五郎」も、跳人も、すでに子供部屋で幾度か披露ずみだったからだ。志功は立ち上ると、どうしたことか、襖と障子にずらりと張っていた十二像の中から、両菩薩と、比較的に人相のいい「阿難陀」「羅睺羅」を取り除いた。そして一癖ありそうな八

像を襖の方に集中して、障子を開け放った。廊下を入れて広く舞台をしつらえたのである。賑やか好きの婆やが顔を覗かせたので、志功は彼女を手招きし。何事かを耳打ちした。やがて婆やは座敷箒を持ってきた。志功はそれを受けとると、それを左に桧の木の縁に正坐した。

「では皆様。これからこ奴ら……」

と、志功は襖の八像を指差すと、

「こ奴ら、僧兵どもを代表いたしまして、不肖棟方、一と舞いやってご覧にいれます」

と、口上を述べた。一家そろった拍手が湧き立った。すかさず志功は腰のタオルをとると頬冠をした。やおら、左手に箒を構えて立ち上ると、両股を開き、胸を張って虚空を睨まえた。そしてヒビ破れた胴間声で唱いだしたのは「牛若丸」だった。

〈京の五条の橋の上
大のおとこの弁慶は

と唱うと、後は子供たちの大合唱になった。志功は薙刀箒を振りかぶって、ただ踊っていればいいだけだった。小男弁慶は薙刀で空を切り、切り、牛若丸に肉迫した。ひらり……と欄干に跳び上った彼を、横に払った弁慶は、くるりと一旋してよろめいた。次いで袈裟がけに斬ったつもりが、鴨居を掃いてしまったので、頬冠の上から、さんざ目つぶしの埃を浴びた。そこをすかさず牛若丸は鉄扇をはッし！ と擲った。それをまともに額に受けて、弁慶は右手で痛手を押えるとよろめいた。が、なにを小癪な！ とばかり、前にも増して猛然と切りたてた。前や、うしろや、右左。まさに教本の定めと合唱のリズムのままだった。ここかと思へば、又あちら……。文字どうり翻弄され、きりきり舞いをさせられたミニチュア弁慶は、滴る汗を流しヘナヘナと縁にくずれおれると、縁に両掌をついてしまった。

「弁慶恐れいりしたじゃァ……」

そう、頭を下げたところで、わッ！ と哄笑と拍手喝采が湧き立った。が、拍手を最後まで続けていたのは、誰あろう、主人良一であった。

3　梅原の讃辞と恩地の反発

志功は水谷の勧めで「釈迦十大弟子」を屏風に仕立てると、日本民芸館の柳のところに持ち込んだ。柳は一瞥すると、水谷の拍手を引継いだように喝采した。

「やったぞ！ 棟方君」

と叫びをあげると、志功の肩をポン！ と叩いた。水谷が感じた「全日本から全世界への旅立」を、柳もこの作品に感じ、今までの志功の作品中、第一等の傑作であると直覚したからだ。

志功は水谷、柳の折紙の付いたこの「釈迦十大弟子」を、翌昭和十五年の国画会展に出品し、待望の佐分真賞が授けられた。国画会の総帥梅原龍三郎の強力な推挽があったからだ。

「彼の仕事は考案ではない、技巧でもない。彼の印する一線一点が彼の美的感情の素直大胆なる表現である。白と黒の版画の方法で、多く題材を仏説に借りて動作する人物を表している。顔面の表情にも肢体の運動にも俗気がなく、生気に満ちて溌剌としている。自分は彼の仕事の行程を深く知らないけれども、丹念な用意と探索から抜き取った描線ではなく、ぶっけに描いて即ち意に当る本能的才能であろうと思っている。何物にも恐れず全身心で夢中にぶつかる勢が多くの困難を征服して強くして融和ある調子と韻律を生んでいる。

考えてする仕事は間違うことがある。本能的に突進するものには迷いがない。彼の壮烈なる意欲が衰えない限り彼の仕事は前進の一途と思ふ。…中略…兎に角棟方は今日の日本の美術界の一驚異である。今後彼の仕事が益々進展すればどんなものになるかは自分の想像の及ばない処である。自分は彼の健康と勇猛心を祈る。」

（「こうげい」一〇一号、梅原竜三郎――棟方志功の芸術）

この梅原の文章は昭和十四年七月、「観音経」出展直後に書かれたものであった。即ち、「釈迦十大弟子」以前から、志功を「日本の美術界の一驚異」と認めていたわけである。梅原は、まだ評判にならぬ「観音経」を、敢然と佐分賞候補に推したのだった。その事実は、画家であり医家でもあった宮田重雄の、次の文章で明らかである。

「僕は昨年度の佐分賞候補者に、油彩ではないが、棟方君の版画屏風を、推挙しておいた。が、不幸にも、梅原先生の一票が入っただけで賞には落ちてしまった。

このことは少しも棟方君に恥にはならぬ。僕自身もF（筆者注・福島繁太郎）の宅に集められた候補作品を観て、自分の推挙の恥でないことを識った。彼に投票しなかった人たちの恥ずる日が来なければならぬ。」（「月刊民芸」―棟方志功君いろいろ）

つまり、「観音経」を佐分賞に推したのは、国画会々員中、梅原と宮田の唯二人だったわけである。

ところが、国画会々員の過半数の賛同をえて佐分賞を獲得した「釈迦十大弟子」でさえ、かなりの異論はあったのである。その異論は、油彩画家の中よりも、むしろ版画家の中にあった事実は興味がある。志功が、人間業でなく、神業を指向している危険を論じた恩地孝四郎の次の意見は、恩地が版画部の元老であるだけに、版画部内の気配を代表するものと考えてよかろう。

「今や彼の仕業は神の業に移ろうとしている。人間の業が神の業に移ろうとするときは、蓋し人間としては甚だ危険な時である。丁度……画友と一夕棟方志功を論じた

詩集　庭と夜のうた

森　亮

文詩壇やジャーナリズムを対象としてなった成算の作品ではない。生きるという疑の余裕のない事実からの余韻が、自ら心底に凝った珠玉―詩三十篇、訳詩三篇。

定価八〇〇円、送料一一〇円

申込先　筑摩書房

ハーディ詩抄（三）

森　亮

古調

みじかい古風な歌のたぐひが
けつこう僕には有難い。
遠くへ過ぎた歓びを語つたのや、
行く先の喜びを望み見たのや、
逢ふことが痛いやうに嬉しかつた友が
面影に浮かび出るものなど。
僕が欲しいのは微妙の糸に載せた
当節の主題ではない。
新らしい歌が掻き立てる
胸のときめきでもない。
僕に必要なのは極めて素朴な
心の琴糸に触れる調べ。

「ハーディ全詩集」六六六頁。（前回の「庭のベンチ」は同書五三七頁）

ことがあったが、その年若い画友は、棟方志功は画も神業にならねばだめだといって、それを感嘆して僕に話したことだった。僕はどだい雪舟の作を感心している人の心が知れない種類に属する人間である。彼は神の業を人間の手でやった。そこにスポーツはあるが、そこにタッチの跡はあるが、どこに芸術があるか分らないのである。僕に分るのは彼の驕慢があるだけだ。神の業だと思う驕慢があるのである。棟方君の作品は従来ずっと感心して来た。そして……国展作仏陀十大弟子をみて、彼も遂に神の業にのり移ったことを知ると同時に、そこに逸脱の危険を感じたものだった。まえに『工芸』棟方号に梅原龍三郎氏が「知識の仕事には誤算がある。併し本能の仕事には誤りがない」と棟方君の芸術を讃していられたが、棟方君の仕事の範疇はこの後者のものであり、この言はむしろ至言であるが、本能を充足した生力と註解する必要がある。そして本能の仕事だと思われるものに存外本能らしきものに酔惑したるもののあることを警戒しなければならない。所で棟方君の絵である。狂者の行動は常に人を打つ。そして屢々狂者の行動こそ真の人間の行動の範たりうる瞬間さえある。それは時に狂に通じ、狂又時に神に通ずる。棟方志功の行動が、一端世俗と異るものあるは彼の生真に生きることを示すものであり、その作る所生に徹して無凝なるを示すものでもあるが、同時に羽化登仙する危険が常にあるわけである。

（『月刊民芸』―棟方志功の感想、神業・人間業）

恩地はこの評文を、「年若い画友」との棟方談議から、起筆している。つまり、この画友が、棟方は人間業ではなく神業としての画業を念願としてるのに感嘆した……と語ったことに対する反発から、火蓋を切っている。この「若い画友」というのは、青森は安方町出身の版画家関野準一郎のことなのだ。彼は郷土、いや隣組の大先輩である志功に敬意を表しに、大和町を訪れたことがあった。その際、志功は飼っているコノハズクと何事やらを対談し、「神でも仏でも何でもいい、ヒチョコの後に居る鬼…そんなものがじっとしていられなくて描かせる…… ウウウ……鬼のような三つの爪でやるような仕事をやるんだ」と、制作の覚悟をひれきしたことがあった。関野はこの神がかった志功の言動をありのまま師匠恩地に語ったところ、得たり賢し……と彼は評文の枕にしたわけであった。

ところで恩地は志功より一回りも年上である。志功に版画の手ほどきをした平塚運一は八つ年長だった。平塚が『版画の技法』の巻頭に恩地の「秋」を掲載したのは、つまり年長者に対するアルチザンの礼儀であったのだ。恩地は島根生れの田舎者平塚と違って東京生れ、美校中退で詩も書いたダンディーだった。浜田庄司は恩地の三つ年下にすぎないが、東京高工の生徒時代、たまたま恩地の版画に啓示されるところがあって陶芸に志した……というほど、早熟な才子だったのだ。つまり、志功にとっては、浜田を越えた大先輩であったわけだ。その大先輩が「釈迦十大弟子」を契機に若輩の志功を捕え、驕慢、或いは羽化登仙呼ばわりをしたのは、もはや批評を越えた感情だった。いや、そうした嫉妬の感情を周囲に抱かすほど、満を持して放たれた志功の天才の鏑矢は、唸りを生じて天へ向け飛翔しだしていたからである。

アルバム（二）

田中克己

母の十代の写真はまだ三、四枚あつて、みな淡路の田舎少女の姿である。珍らしいのは母の姉じようと列んでゐる写真があり、菊川こたまとわたしの大伯母きみが菊川きよのと

春の水

高梨一男

ネコヤナギ　定石のように　流れに沿い
水は　葱や大根の葉ぎれを沈め
白い旗雲をなびかせている

――若年彷徨のころ
おもかげの見えて苦しき春の水
と　築地川に口遊んだ

「若」の字は
「苦」の字に
なぜ似てるのか

川辺を行けば
下流に　山羊を洗っている

いふ少女を囲んでゐる。これらの名だけ船越のおばは教へて死んでしまつたが、菊川こたまはわたしの祖母（船越）こしげの母が菊川イトなので、母のいとこに当るのであらう。苗字が珍しいので、先年、湊（いま西淡町）の菊川兼男さんから「淡路が生んだ世界的音響学者田中正平」といふ板刷を贈つていただいた時、「御親類にこたまといふ女性見当らずや」との問合せしたが御返事は来なかつた。田中正平は鴎外の友で、これも先年、鴎外の令息於菟博士ならびに末息類氏と同座した時、類さんに申上げると、類さんは正平夫人を美人だつたと覚えておいでであつた。そのことで「鴎外の友田中正平」と題して書き「果樹園」にのせたが一回で止めた。田中尚雄さんの「明治音楽物語」の一齣のほか伊藤完夫教授の「田中正平と純正調」などの本が出てゐるので、ごらんあればと思ふ。

じようはわたしの母の姉で、州本の伊藤家に嫁し、一女徳を生んだあと死んだ。徳は従つてわたしの従姉に当るが、徳の祖父伊藤重義は昭和一九年一〇〇歳で死に、祖母いとも二〇年九月八七歳で死んだので、長命であるが徳はこの祖父祖母にただ一人の孫として可愛がられ、死水をとることとなつて未婚のまま六〇歳を越え、伊藤家はこれで断える。わたしの母に似て丸い眼をしてゐることだけ知つてゐるがつきあひは殆どない。伊藤重義はそんなわけで州本市内に頒寿記念碑が立つた由であるが、今どうなつてゐるか。淡路へわたしが行つたのはただ二回でもう一度いつてこんなたぐひをしらべてみたいと思ふが、なかなかそんな暇も見つからない。

菊川きよのの写真はもう一枚あり、母と二人だけ並んで写つてをり、母の字で「明治三十六年四月写」とはつきり書いてある。母は十代を淡路で過したのである。（つづく）

応召日記（十二）

蓮田善明

十二月二十三日（金）

例のごとく五時ころより目さむ。電燈をつけて「北岸部隊」の最後三四頁をよむ。美しい。世界最高位の文学だ。

午前、剣道場で銃剣術の普及教育を見学。教官の着眼とその動作、美しい、非常に単純で非常に充溢してゐる。しん〳〵とせまるものを感じた。後ですこしやはり弛みを見出しはしたけれど。午後雨。大矢野

から帰る連中は大変だらう。雨はげし。

自分はほんとにこのごろ、大いなるものと、それに対する自分の出方をのみ注視してゐる。溢れて、酔ふやうである。

しかし自分はまだ人に仕へるくせを脱しきれない。

自分が人を脱しようとするのは、自分が狂人であるといふことであらうか。しかし、もう人々は自分を「戦に行きたがる男だなあ」と嗤つてゐるかもしれぬ。（それほどに「生きたい〳〵」などとは自分はめつたに口にはせぬつもりだが）自分の心が自分だけをせき立てゝゐて、自分一人でさう思つてゐるのであるかもしれぬが——。

それから、宿の主婦のT君の女給連れ込みや大酒、愚説に弱つてゐることなどに多少でもかゝづらつてTや主婦両側をおだやかに立てゝ無事にしてやらうといふなど〳〵愚だ。

風、家をゆすつて吹く。

志貴皇子論を書きつぐ。

燈を消し、又めざめて書きつぐ。ほゞ脱稿とする。

＊　＊　＊

はげしい夜の風　吹く　妻よ
子どもらを抱きしめて
汽車はこの風をついて
おまへたち　いづこへ走りきたるや
わたしはおまへのひたすらな
いちづな行為に　ひとり凛然とする
寒い夜を　一日も早くと　今宵
おまへは東京から　いそいでゐる
おまへは　よろめくやうにかけてくる
わたしも　おまへの　心のまへに倒れさうだ

二人が会ふ、二人が一緒になる
明日はおまへと子どもたちが
わたしの手に抱かれる
おまへはその思ひに今宵は眠れず
風の中を、まつくらな夜を
汽車にいそいでゐる、
妻よ、わたしも今宵は眠れない。
はげしい風、わたしは眠れない

そしてわたしたち、妻よ、
このいのちさゝげて征く夫とおまへと子供たちと
いづこへ行かんとする
凛然たる風である。
星は闇い闇の中からかゞやく、
妻よ、わたしは眠れない。
風と星とわたしを眠らせない

＊　＊　＊

十二月二十四日（土）

非常に眠れない夜だつた。

くだらぬ夾雑物どもへの訣別と、妻の烈しい心と、それをきびしい光栄へ決意する熱さと、それが燃えて、或はオソはれ、或は慾情的となり、或は戦ひ、或は思慕し、或は歌はんとし、遂に転々として安らかな眠りをえず。しかし幸ひなるかな、わが心は星の如く燃え得たり。妻の烈しい風も、星をみがき出す風なり。妻もこの精神への道をいそいでゐるのだ。夫へ、そして夫を失つても永遠に夫は失はざる道を。

今朝風なし。まだ外はくらい。夕刻、植木に電話かけてみたが、東京からまだ帰つてゐない。

暇だから、わが遺著の目次をつくる。

イ、伊勢物語の「まどひ」（文芸文化）
ロ、万葉末季の人　（〃〃〃〃）
ハ、青春の詩宗　（〃〃〃〃）
ニ、新風の位置　（〃〃〃〃）

永井荷風と柿本人磨（〃〃〃〃）

ホ、本居宣長に於ける「おほやけ」の精神〔自分ノ所持ノ本ニ訂正せり〕（国文学試論）

ヘ、大鏡　（〃　）
ト、「国文学攷」にのせた考証もの
チ、真福寺本古事記書写の研究（国文学試論第一輯）
リ、「国語と国文学」にのせた考証もの
「文学」にのせた真渕本古事記の紹介
ヌ、随筆その他
○南大和（伝統）
○阿里山（伝統）
○菊など（文芸文化）
○モールス先生「日本その日〳〵」
ル、原稿として未印刷のもの
○近江遷都について
○大化改新期文学の序
○召集を待つ日の文
追加、ヲ、「文芸文化」に書いたものすべて。
ワ、応召後の手紙の中
カ、出発前に書きのこす二三の小文
「鴎外と憶良」
ヨ、「文学」にのせた「古典と今日」

風の子

中野信子

夜半
しろい山茶花の
花叢のおくで
風が生まれ
ちいさい拳で
風の子が
＜あけてよう＞
見知らぬ戸口で
風の子は
＜さむいよう＞
すると
わたしらは
きまって
眠ったふりをする
自分のなかの
錆びた扉のことも
かたくなに
忘れたふりをする
わたしら大人の

毀れにくい
魂の周辺にしか
触れることが
できないで
気おくれがちに
叩いている
＜みんな　むかしは
　風の子だったよう＞
山茶花の
ましろいはなびら
ふりしきらせて
風の子は
＜かなしいよう＞
ひらかれてくる
夜明けを
待たないで
風の子は凍えてしまう
そのとき
わたしらの内部から
失われてゆくものに
大人は　いまも
気づかないでいる

の中、芭蕉の「芳野紀行序」の解説の部分抜萃。

夕、「日本知性の構想」（原稿）文芸文化所載、第一巻分は、合本にその採るべきを、訂正を施せり。

× ×

寒き夜なり　床にありて
あたゝまらぬ心なり
汽車よ　はげしく来る妻子を　まもれ
つかれ眠れるものを　目ざめがちなる
いとしきものらを　安らかに　疾く　はこべ

○

寒き夜なり　手弱女の妻よ　若草の子よ
ますらをわれは
いましらが夫なり　父なれど
われは　つよきますらをとして　大君に
召され
雄々しく　いで立ち来れる身なれば　ちかひて
いましらを恋しといはず
いましらを恋しと思へり

○

ますらを　と　われはちかへば　手弱女の　妻子らを　堪へて　恋しと思へり

○

人として　妻子らとつくる　くらしなれば　堪へんとちかひ　ややに堪へたり

○

ますらをと　誇れるわれぞ　ますらをの
たけき心に　思ふ　愛し妻

○

みいくさに　いでて来し　ますらをわが
黙したる心の　底の心しる妻

○

敷島の　やまとの国は神ながら　ますら
を　かたくちかひたる国

○

敷島の　やまとの国は神ながら　手弱女
かたく　ちかひたる国

○

愛しき妻子　来るといへば　ますらをの
たけき心も　寝ねがてに　燃ゆ

○

いかならん　かあゆき顔に　子どらは汽
車にいねつつ　帰り来るらん

○

うつうつと眠れる子らを　まもりつゝ汽
車にさびしく　妻は堪へあらん

○

いまははや　ひとりを堪へて　子をまも
る妻を愛しみ　待ちがてにす　われは

○

紐をまて　われは抱かん　ますらをのた
けき力に　手弱女妻を

○

汝が紐をとく時　汝は燃ゆる火を　つゝ
むがごとく　眼とぢたり

○

今ぞわれ　ますらをとして　手弱女の妻
を抱かん　たけき力に

十二月二十五日（日）

昨夜一時頃まで歌を作り、五時前に又めざめ、遂に眠らず。今日は帰り来るべし。

○

ますらをとわれは思ふ　ますらをの　妻
と　手弱女汝はちかへり

○

ますらをの　妻と　ちかひし　手弱女を
ますらをわれは　いだき迎へん

午前隊に出て内務検査。正午前に帰る。植木に電話をかけたが、まだ何ともしらせがないといふ。

「黄塵」をよみ、眠る。とても目が開かないで、因りつゝ陣中を歩いてゐる夢をみた。さめたらすこしも目がいたくないのでへんな気がした。「黄塵」をよみ終り、起きて又電話をかけに行く。まだ何とも来ない由。気にかゝるが明日を待つことゝする。今日はとても冷えるやうだ。しかも曇つてゐる。

夕、「泣虫小僧」をよむ。夕食後城戸さんへ行く。快い時間を送つて帰る。但し、おせつさんの風邪捗々しからず、気の毒なり。林芙美子の「戦線」を買つて帰る。この頃林芙美子の作品よみたくなれり。

孝徳紀をよみ返しはじむ。いよ〳〵大化改新論を書き始めよう。

○

帰り来といひし日　妻子ら帰らざる　わ
けを問ふごと　街にいでたり

○

いきどほりに　みちて悲しきとごころを
同じ思ひに　する妻あはれ

○

ますらをの　いきどほり火のごとし　手
弱女の悲しみは似る　ふかき泉に

○

Y上等兵（伍長に進級）、O伍長、O伍長――ともに先だつての補助衛生兵の助教――出征となつた。彼らの多くを言はぬ態度は、将校などに比して美しい。ほんとに心から武運長久を祈つてやりたい。

十二月二十六日（月）

今日また帰らず。漠然とながら不安を感ず。無事なれ。

「文芸文化」一月号つく。夜、志貴皇子論改稿。

十二月二十七日（火）

大隊内務検査。朝大変眠い。夜、会。大抵で切り上げ、飯をくひに鴨川に行く。敏子とここで度々飯をくつた思ひ出を。今夜は冷える。

帰つたら電報きてゐた。トシコイマツイタモロ井、植木を午後五時五十分に出てゐる。惜しいことをした。しかしいろいろ心配もしてゐたし、待つてもゐたので、うれしい。もうおそいので明日帰る。しかし敏子もきつと僕のことばかり今夜は考へてゐるだらう。

としこ。よく帰つたね。大丈夫だつた？大変だつたらうね。待つてゐた。ほんとに待つてゐた。心配してゐたよ。晶一が風邪がわるいのではないかと思つてね。おまへたちのことばかり考へてゐたよ。晶一に何を買つていつてやろうと今日も考へて街を歩いた。本、パン、模型飛行キ、太二には堅パン。おまへにも――おまへには、いろいろ考へてゐる。とにかくおまへには早くあひたい。あせらなくてもいいやうなものだけれど、とにかく明日はあへる。いそいで、ほんとにいそいで帰るよ。心はもう今帰つてゐる。おまへもそれをしつてくれる

カラー版・中国の詩集6
李賀詩集
比留間一成訳
「長安に男児有り、二十にして心已に朽すたり」とみずから唱い、二十七歳にして絶命した李賀。そのデカダンスと鬼才の名訳……。
¥690
角川書店

棟方志功

―その画魂の形成―

小高根二郎

一、系譜と土俗
二、遠祖と近祖
三、美の象徴―火と花
四、出発と離別
五、青光画社と貉の会
六、上京と帝展落選
七、拾う神と風の誘い
八、苦闘の日々
九、出会いの季節
十、開花と結実
十一、予期せぬ収穫
十二、詩と版画の交配
十三、浪曼派との通交
十四、画魂ついになる

三月刊行予定　新潮社

だらう。おまへが二十四日に帰るといふやうなことをいつてきてゐたので、待つたよ。ほんとに二十四日の土曜から今日まで、思へば僅か四日だけれど、どんなに長かつたことか――。しかしおまへも大変だつたね。今夜はゆつくりおやすみ。明日はゆつくり話さう。僕も今夜はよく寝ておきたいけれど、とても眠れさうにない。電話もこの間何んべんもかけた。しかしとうく（ママ）もうこれ以上かけるのもをかしくなつた。それで、帰る通知がきたら電話か電報でしらしてくださいとたのんでおいた。丁度昨日は桂吾さんが入営の人を送つてみえたので桂吾さんにもたのんだ。郵便局の前を通るたび、も一度電話かけてみようかといつもいつも思つた。東京に電報うつてみようかとも思つた。

やせたよ――笑つちやいけない。おまへにあつたら又肥えると思ふ。何か今夜も歌をつくつてみたくなつた。今帰つたら「電報が来てゐますよ」といはれた時のうれしさよ。分る？　としこ、としこ、分るねえ。

○

トシコイマカヘリツキシと電報の言のよろしさ短きその言

編集後記

十一月九日。原田憲雄氏から「画仙・棟方志功――その画魂の形成」完結の祝状をいただいた。中国文学者であると同時に、京都妙徳寺の住職でもある氏は、「法華の太鼓が出てくるのが私にはたいへん感銘ふかく、私の毎夕うつ太鼓が棟方画伯のような人を鼓舞することはなくとも生きなずむ人の心に慰さめを送ることができるようになつてくれたら……」としるしてあつた。又、森亮氏は、「二十一回は小説のやうに迫力あり、読んでゐて思はず力が入りました」といつて下さつた。感謝申し上げる。

十三日。棟方志功画伯から、「ナガナガありがとうございました。筆勢の飛沫をあびました。ありがとうございました。またあとをたのみます」と、優渥な手紙を頂戴した。連載中の続篇「開眼、美の法門」は、画伯がオーベールの共同墓地にゴッホ兄弟の墓を尋ねるところまでの予定である。画伯の光耀の日は、その日から今日に続いているが、日に月に進んで留滞することを知らぬ画伯の生涯と芸業を、私の遅筆がはたしてどこまでつかまえることができるか？　改めて自分に問い、その覚悟を言い聞かせている。

二十五日。三島由紀夫氏の三回忌がめぐつてきた。拙著「蓮田善明とその死」に下さつた氏の序を諸家がよく引用されるが、あの序を氏が執筆されたのは昭和四十五年の松の内であつた。つまり、死の十ヵ月前に書かれたことになる。鑑照上の参考にして下されば……と思う。（O）

果樹園　第二〇三号（毎月一回一日発行）
昭和四十八年一月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　八〇円　送料　三〇円

果樹園

第204号

棟方志功(三)　小高根二郎
ハーディ詩抄(四)　森亮
資料紹介「美しき朋輩たち」その他　米田義一
小さな部屋　宮城賢
なつかしさの序　吉本青司
応召日記(三)　蓮田善明
編集後記

果樹園　二〇四号　昭和四十八年二月一日発行（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

棟方志功(三)

―開眼、美の法門―

小高根二郎

4　佐分賞異聞

志功の声価がようやく高まるにつれ、常規で拘束されぬ彼の奔放な言動は、好意と悪意によって色々と取沙汰され、喧伝された。佐分賞の選考に関連して、福島繁太郎の夫人繁子の足に接吻したとか、しなかった……という噂が流布されたのも、その一つだった。

福島はジョルジュ・ルオーをはじめ、その他の野獣派の巨匠の早期発見者であり、コレクターとしても令名があった。つまり、当時の洋画部門の新知識として、工芸部における柳宗悦のように、国画会お抱えの批評家として重きをなしていた。そうした意味からだろう、佐分賞の選考会は福島の借家で行われた。渋谷区松濤町は御木本邸である。受賞候補に指定された作品は、そこのサロンに担ぎ込まれた。志功も六曲二双の「釈迦十大弟子」の大屏風を運びこんだこともちろんである。選考の場に本人が立合うのは面を刺すので、志功は少し離れたサロンの大きなテーブルに頬杖をついて結果を待っていた。支持票は梅原、宮田の二票は確実だが、それ以上に誰が加わるか？　版画部の剣呑な気配を考えると、期待で胸ははずむものの、道はまだ遼遠の思いだった。

そこに、客あしらいのよい慶子夫人が現れた。パリー仕込みの瀟洒なスタイルで、志功より若く見えるが、三つ年長だ。彼女は志功の前の英国農家具風の背の高い椅子に陣取ると、話しかけた。

「棟方さんも、欧州の戦乱がおさまったらパリにいって、本物を見て来なくてはいけないわネ。」

が、皮切りであった。

「そんです。一度はいがねばマイネと思いますが、日本にもまだ見ておがなくてはならぬ物が、あまり多すぎましてね……」

と、志功は答えた。

「わたし、いつも思うんだけど、棟方さんはルオー爺さんに似ているわヨ。梅原先生のお話だと、貴方は少年時代に鍛冶の手伝をしていたというし、ルオーもステンドグラスの徒弟でショ。それに宗教的なモチーフがそっくり……。去年の「観音経」もそうだったし、今ワイワイやってる「釈迦十大弟子」もそうネ。ルオーでいうなら、「郊外のキリスト」「辱しめられるキリスト」「法廷のキリスト」「聖顔」、それこそきりがないワ。」

「そんだァ！」

と、志功は慶子の慧眼に舌を巻いた。

「それに、ルオーの物象を限るセピアやブルッシャン・ブルーの太い線描ネ。あれ、貴方の版画の線にそっくり……」

「ありゃァ！」

と、志功はいよいよ冴えた彼女の鑑識眼に度胆を抜かれた。別室で審査の中心になってる

「宿六」に劣らず、なかなか眼が利くな……と感嘆した。志功も彼女の慧眼に対応して、何かヒットを出さねばならなくなった。ワの「大和し美し」「善知鳥」の絵巻物や物語性は、ルォーの「受難」の続物にそっくり……と言おうとしたが、「受難」という題名が、あいにく口に浮んでこなかった。とっさに、ルォーのマチエールを盛っては削り、その上から塗り、或いは刷き、さらにゴテゴテ盛り上げる彫刻的な技法は、漆を際限なく塗り重ねて、それを磨いて斑らな紋様を研ぎ出す、馬鹿塗と呼ばれる津軽塗にそっくりでないか？　と思った。

「あのねス。あのマチエを盛り上げて削り出すルォーのテキニックだば、漆を重ねて研ぎだす津軽塗コにそっくりですよ。」

と、志功はいった。

「同感！」

と、慶子は叫ぶと、右脚を左膝の上に大胆に組み直すと、女中が卓子に直いていった茶を啜った。

「全く棟方さんの言葉に同感！　突詰めれば、日本もフランスも同じことよ。第一、その境涯に達しなくては、世界的なアルチストとはいえないワ。フジタの看板であるあの線描だって、もともと日本製ではないノ。みんな頑張らなくッちゃア……」

というと、志功に茶をすゝめた。志功は茶をぐっと呑むと、やけに赤くなった口が調子に乗った。

「それに、ルォーがもし日本に生まれていたら、道化やキリストや使徒の代りに、かならず福禄寿や弁天や仙人たちを描いただろうと思いますよ。いいなア。二人のあの奔放自在の点・一線！」

と、この浪曼的な思い付きに、志功自ら酔っていた。

「そうヨ。日本的なものこそ世界的なのヨ。世界性を得る可能性があるのヨ。ほら、あの北斎のように……」

と、彼女の方もいつか興奮していた。二人は異口同音に「同感！」と叫ぶと、「では握手！」「握手といきましょう！」と、互に手を差し伸べた。が、あいにくテーブルが大きすぎて、互の手が届かなかった。志功は及び腰に身を乗りだし、慶子は上半身を捻って手を伸ばそうとした。が、彼女の姿勢は均衡を失って、膝に乗せていた右足の爪先が、テーブルより上へ跳ね上った。その爪先を掌と間違えた弱視の志功は、いきなり摑むと激しく上下に揺振った。あッ！　彼女は仰のけざま裾を乱してひっくりかえるところを、頑丈な椅子の背に支えられて事無きをえた。

その瞬間であった。ガヤガヤ……人の群がサロンに入ってきた。佐分賞の審査がすんだのだ。先頭は宮田重雄だった。「棟方君！　おめでとう」と、誰より先に祝福を志功に浴びせたかったからだ。が、当面した珍妙な光景にサロンの入口でたじろいだ。宮田に続いた二三の者も、この場面を瞥見した。或る者は握手と見、或る者は接吻と判断した。対象が足であるから、接吻より握手の方が奇矯だ。しかも、佐分賞の受賞に関連して考えれば、審査の中心人物である福島繁太郎の夫人に感謝して、足下にひざまずいて爪先に接吻をした……とする方が、推理が自然だ。当然、握手説より接吻説の方が有力に流布した。この流説に尾鰭が付くのに、さして日時を要しなかった。志功は受賞工作として、将を射るにはまず馬を……の、世俗的な典範にのっとって、審査前にぬかりなく福島夫人の足に敬意を表した……というデマが決定的になった。

伝記の尊厳のために、筆者は当の慶子夫人に両説の真偽をお尋ねした。すると如上のように握手説が真実である由回答をいただき、恐らく接吻説を流布したのは「宮田重雄、益田義信その他のタレントどもがいとも芸術的

ハーディ詩抄（四）

森　亮

遺伝

わたしは一族の顔、
肉体は滅びても生きつづける。
人の記憶を乗り越えて
転々と居場所を移しながら、
特色ある跡形を
時間を過つて来たるべき末流に伝へる。

百歳に百歳を重ねて伝へられる顔立ちは
頬の曲線が、
その声が、目付きが
人様々の捉はれの歳月を尻目にかける。
このやうに人間にあつて死ぬを要せぬ
永遠なもの、それがわたしだ。

「ハーディ全詩集」四〇七頁

に宣伝したのだろう」（小高根宛手紙）と書き添えてあった。しかし事実は、宮田は握手説であった。

「Fの家に佐分賞候補の画を持ちこんだ時、感激してF夫人の足に、握手（は可笑しいが）した。」（「棟方志功君いろいろ」）

そう、宮田は真実を伝えている。「釈迦十大弟子」が版画として初めて佐分賞を射止めたいきさつから考えて、接吻説を喧伝したのは、洋画部門の連中ではなく、版画部門のうるさがたたちだったのだろう。

第二章　三つの鯉の物語

1　与重郎から啓示された「夢応の鯉魚」

鯉といえば、志功にとって、初心から得意なモチーフだった。即ち、大正十三年に初めて帝展に搬入したタブローは、合浦公園の藤棚の下、菖蒲が紫に咲き添っている池畔に、鯉が遊泳してる光景だった。又、五年後、筆者が初めて志功と出会った時も、鯉が水面を破って空間に跳躍する場面を描いて帝展に搬入した。しかし、その鯉たちは、油彩や倭絵でこそ主役の地位を与えられたが、板画では、その他大勢の役を与えられたにすぎなかった。つまり、いろは四十七文字を頭韻とする佐藤一英の「空海頌」の「き」の一場面だけで、滝登りの役で登場してるぐらいのものである。

その、永らく髀肉の嘆をかこっていた彼―鯉に、主役を与えてくれたのは上田秋成の『雨月物語』「夢応の鯉魚」であった。そもそも志功がこの作の存在を知ったのは、保田与重郎からの啓示であった。と、いうのは、志功は与重郎の著書『後鳥羽院』（昭和十四年 思潮社刊）の装幀（菊の咲いた野図）をしたのがきっかけで、その中に収録されている「近代文学の誕生」で「夢応の鯉魚」を知ったのである。

「秋成はわが国の国宝的な第一級の古典詩人である。さうしてかういふ文章はもう描かれないものである。『夢応の鯉魚』など、実に近代文学としての絶品である。私はそれをよむたびに人の知らない小説家の悲しみの自覚に心痛む思ひがする。夢応が絵に巧みでよく水中に入つては魚の生態をうつしてゐた。神がそれをめでて魚の姿と性を与へた。欣んで水中を遊んでゐたが、そのうち空腹になつたので釣糸の餌の香しさにひかれる、釣師を見ると己の知人ゆゑ、必ずことわりをいへば放してくれるだらうと思つて、餌に食ひついたところ、ひきあげられてみると、口はあいてもものがいへず、

そのまゝ市に出され台所に運ばれる、この話は、悲しい寓意をもつたいのちの物語である。

「国宝的古典詩人」「近代文学の絶品」という、最大級の宣揚と示唆を含んだ、与重郎一流の文章である。この文章を読んで、同じ鯉の画家をもって任じる志功が、異常な興奮と興味を示さぬはずはない。彼はさっそく野方一丁目に与重郎の新世帯を訪れると、さらに教えを乞うたことは間違いない。志功は「夢応の鯉魚」の原典を借り、又与重郎が現代西欧画家の中で最も好きなルォーの画論をひとくさり聞かされたに相違ない。さらに志功は、典子夫人の心ずかいで供せられた幕の内弁当に、こんなうまいものがまたとあろうか？ と、舌鼓を打ったことは事実であった。ともあれ志功は、好乎な絵巻物の資料として「夢応の鯉魚」を耽読し、鯉の好敵手・画僧興義を知ったのである。

＊

興義は延長年代に生きた三井寺の画僧だった。丁度、菅原道真が配流から赦されて復官し、又小野道風が能書のほまれ高かった頃のことである。彼は仏像・山水・花鳥も描いたが、鯉を描くのを最も得意とした。

動めがひまな折には琵琶湖に舟を浮かべ、漁士が捕った鯉を購っては放生し、彼らがうれしげに泳ぎ回るところを写生した。ところが、或る年病気になると、七日目にぽっこり死んでしまった。弟子や友人達が集って思いがけない死を惜み哀悼した。屍の胸に手を当ててみると、まだ仄かな温みが残っていた。もしかしたら息を吹きかえすかもしれん。そう言い合って見守っていると、三日目に手足を動かしたとみるや、あー あッ！ と、あくびをするなり眼を開けて、むっくり起き上った。そしてあたりを見回すと、「わしは気を失っていた。一体、幾日ぐらい経つたのかね？」と尋ねた。弟子達は「三日たちました」と答え、すんでに葬いを出すところを、もしや？ と念じて見守っていたところだった、と説明した。興義は「そうだったのか……」とうなずくと、檀家である平邸へ使を出し、興義が不思議と蘇生した由を伝えさせ、丁度平邸では鯉のナマスで一杯やってるはずだから、「すぐ酒杯を置いて拙僧の話を聞きにおいで願いたい」と言付けさせた。

主人の助は驚いて、弟の十郎、家来の掃守を連れて寺にやってくると、蘇生の祝を述べた。すると興義は、「まあ、お聞きな

され。貴殿は漁士の文四に鯉を頼まれたことがありましょうが？」と尋ねた。「まさしくありました。貴僧よくご存知で……」と助は吃驚した。「文四が三尺余りの大鯉を持参した時、貴殿は令弟と碁を打っておいでで、掃守殿には桃をぱくつきながら観戦しておいでだった」。そう、興義は情景まで細々と詳述したので、どうしてそんなことまで知っているのか？ と、三人は肝をつぶした。

「さよう。愚僧は自分が息絶えたことも知らいで、熱っぽい苦しさを冷まそうと、杖にすがって門をよろばい出ましたのじゃ。するうち、次第に病気だったことも忘れてしまい、籠から放たれた鳥のように、山となく、里となく浮かれ歩いているうちに、いつか湖の畔に出ていましたじゃ」。と語りだした。興義は涼しそうな水の色を見るとたまらなくなり、衣服を脱ぐとザンブ！ と身を踊らせた。すると不思議なことに、水泳の心得もないのにポッカリ水に浮んだのであった。浮いたら、今度は魚のように泳ぎ回りたくなった。尾や鰭があったらなァ…と欲が出た。すると、近くにいた大魚が話しかけてきた。「よろしおす。わてらの仲間に入りたいのやったら安いこ

とだす。しばらくお待ちを……」と、言い残すと水底に沈んでいった。しばらくすると、冠・装束の人が、さいぜんの大魚に跨り、大勢の魚族を引き連れて現れた。そして湖神の託宣を伝えてくれた。「貴僧はかねがね放生の功徳を積んでおられる。いま魚の遊びをしたいと願っておいでだ。そこでこれなる金鯉の衣を貸し与えるので、ぞんぶんに水中の楽しみを味うがよい。ただし、芳しい餌に惑わされて釣針にかかり、身を滅ぼすことのないよう……」というと、消えていった。これは不思議なことだとわが身を見ると、いつか鱗が生え金色の鯉になっているのであった。興義はうれしさのあまり、今日は堅田、明日は竹生島……と、名所八景を浮かれ回った。そのうち腹が空いてきたので、つい馴染みの瀬田の唐橋までやってきたが、頑固な橋守に追い戻された。しかし、腹の虫がキュウキュウ鳴いて、なんとも我慢ができなくなった。さいわい顔見知りの文四が糸を垂れていた。その餌はたまらなくいいにおいがした。だが、芳しい餌に気を付けよ、といった湖神の警告を思い出した。その上、仏弟子の分際で、どうして生き物を口にできよう、と自戒した。危い。危い。身を飜して再び湖へ引返しかけたが、どうにもひもじくてたまらなかった。考えてみれば、文四と愚僧とは互に目礼を交すほどの顔馴染だ。たとえ捕っても、愚僧だと分れば放免してくれること

「夢応鯉魚」「哭叫」　　棟方志功

自明の理だ。なにの遠慮がいろうと、パクリ餌を一呑みにした。そこをすかさず文四は釣り上げた。「これ、文四！　愚僧じゃ!!　三井寺の興義じゃ!!!」と叫んだが、文四は聞こえぬふりして仮借なく鯉に縄を通した。「これッ！　何をする!!」と、声のかぎり絶叫したが、無体に籠へ押しこんで平邸の門を入っていった。表座敷では主人の助は弟十郎と囲碁をしていた。掃守はかたわらに坐って桃を食っていた。文四が担いできた獲物を覗くと、「これは見事な大鯉だ」と、異口同音に讃嘆した。「皆さん！　この興義をお忘れか？　許してくだされ！　寺へ返して下され!!」と、身を反転させて助命を乞うたが、四人は素知らぬ顔で、何に料ったらうまかろうノウ」と呟き合った。やがて調理人が出てくると、左手で両眼を押えるとマナ板にのせ、引導を渡すように右手にした庖丁で腹を撫でつけた。興義はここを先途と泣き叫んだ。「仏に仕える僧を殺す無法がどこにある！　助けてくれ!!　助けておくれッ!!!」。そう、抗議し助命を乞うたが、誰も聞き入れてはくれなかった。瞬間、切っ先が咽喉元を刺しつらぬいた……と思ったら、夢から覚めていた。

そう、興義が語り終ると、平一党の顔から血の気が引いて震えだした。「なるほど、鯉はしきりとパクパクしておりました。しかし、なにをしゃべっておいでなのか、身共にはてんと聞こえませなんだ」と助はいうと、掃守を邸へ走らせて、残っていたナマスを尽く湖に捨てさせた。

＊

これが「夢応の鯉魚」の荒筋である。興義が化けた秋成のお化け鯉……。これは化物好きな志功にとって、四つに組んで勝負するに足る、恰好なモチーフだ。ところで、残念なことに、興義の描いた鯉の絵は一枚として後世に残っていない。と、いうのは、彼は花鳥山水の絵は人の求めに応じて描き与えたが、鯉の絵だけは、ナマスなどを食う生臭共にはやれん……と手離さなかったからだという。臨終の折に手許に残っていた数枚も、琵琶湖の水に流したところ、鯉たちは紙幅から抜けだし、喜び勇んで湖心へ泳ぎ去ったということである。

資料紹介

「映画見たまゝ『美しき朋輩たち』（伊東静雄原作）」その他

米田義一

昭和三年、そのころ京都帝大生であった伊東静雄に、〈御大礼記念児童映画脚本募集〉（大阪三越主催、大阪毎日新聞社後援）に応じて一等当選した童話「美しき朋輩達」があったことは、昭和三十六年刊の『伊東静雄全集』に教えられた。その童話「美しき朋輩達」は、失われてしまったのかどうか、今なお出現せぬままであるが、それを原作として松竹キネマ蒲田撮影所が製作した映画「美しき朋輩たち」には、「キネマ旬報」（昭和三年十二月一日号）所載の梗概があって、小高根氏が『詩人、その生涯と運命』に、また〈どれほど原作の面影を伝えているか不明だが、参考までに〉とことわりつつ『詩人伊東静雄』にそれを掲げておられる。

偶然に目に触れ、ここに紹介する機会を小高根氏に与えていただいた資料も、同じく映画「美しき朋輩たち」の梗概であるが、「キネマ旬報」の梗概に〈その夜英一は夢を見た。果してどんな夢だったろうか。〉と中断されたままである、その夢以下の筋を補うことができる。その梗概資料を紹介し、あわせて原作者表示、上映期日、原作童話の片影などについて報告することが本稿の目的である。

なお、映画化されたものの題名は、各資料

とも「美しき朋輩たち」であって原作の題名と表記を異にしており、本稿もそれに従う。

まず、梗概資料として加えたいのは、

Ⓐ「映画見たまゝ　大阪三越御大礼記念映画　美しい朋輩たち（ママ）　松竹蒲田作品」　伊東恭雄[注1]

（「サンデー毎日」昭和三年十一月二十五日号・第七年第五十三号）

小さな部屋

宮城賢

北向きの三帖の二階の小部屋
窓にそって机が三つ
大きいのはわたしの仕事用
小さい二つは小学生の子供用
まわりに書棚やらストーブやら
夕方になるとこの小部屋はいっぱいになる
遊びから帰った子らは夕餉のまえのひとと
　きを
絵をかいたり人形をつくったり
ほんのときどき本をよんだり
まだ幼稚園まえの末の息子は
机の下にもぐりこんで必らず悪戯をする
（相手にされない腹いせに）
それがきっかけで小部屋は修羅場になる
叫喚や罵り合いや摑み合い
わずか一帖ばかりの残された空間がけっこう広い
かれらは心得ていて
身に合ったやりかたで戦うので
被害はわたしの仕事の妨げだけだ
そしてその時刻には
窓の外の暮色もにわかに濃く
わたしはペンを摑いて雷を落とす
かれらはこうしてわたしに
一日の仕事の終止符を打たせるために
空騒ぎをしにくるのかもしれない
小さな部屋は窮屈だが
賑やかでそして暖かい
夕方こうしてかれらが必らずこゝに集るのは
かれらなりに一日の遊びに終止符を打ち
かれらなりにその暖かさを確かめにくるのかもしれない
そしてまもなく階下（した）から聞こえてくる
ごはんですよー
の合図を待つために

Ⓑ「児童映画物語　美しき朋輩たち　松竹蒲田作品」

（「映画教育」第十輯・昭和三年十二月二十五日発行）

の二点で（掲載誌はともに大阪毎日新聞社の発行）、Ⓐの梗概部分とB（解説なし）との間には、ⓑはⒶの梗概部分に若干加筆したものである、と思われる程度の違いがあるのみである。それで左にはⓑと対校してⒶの全文を掲げる。対校の結果は(一)角括弧〔　〕でⓑに削除されている部分を、(二)丸括弧（　）でⓑに挿入されている文句を、(三)本文右の丸括弧（　）でⒶと相違して用いられているⓑの語句をそれぞれ示した。[注2]

皆さん。少年の心は、それはきれいなきれいなものなんです。たゞ時々悲しい過ちを犯しやすいのです。

その過ちを過ちと知り、悔と涙で心を浄め、そして誠心から祈願し、決心するならば皆さんは神さまのやうに美しく、世界は天国となるでせう。

〔これが、この映画の坊ちやん嬢ちやんにいひたいことなのです。それでこの映画の一等最初に、その通りの字幕が出て来ます。

さうして物語りに入ります——〕ある日曜日の朝。高い煙突が聳えてゐます。

煙突掃除の三吉君は、顔をまつ黒にして働

いてゐます。

中庭では、この家の坊ちやん稔君とお友達の英一君とが、ボール投げをして遊んでゐます。

と、どうしたはずみか、そのボールがとんでもない方に飛んで三吉君の足に、きつくあたりました。

そして三吉君の傷は相当大きなものだつたので、そのまゝ稔君の家で手当てをして貰ふことになりました。

一週間もたつと怪我は、ほとんどなほりました。

子供には格別親切な交通巡査の友成おぢさんが、人形をお土産に持つて見舞ひにやつて来ました。三吉君の紹介で稔君も、妹のゆりえさんも英一君もすつかり友成おぢさんとお友達になつてしまひました。

そしていよ〳〵あすは算術の試験があるといふ日の夜となりました。稔君と三吉君とは稔君のお部屋で一生懸命に勉強してゐますが、傷のために三吉君は暫く学校を休んだので、分らぬところが多少ありました。時々稔君に聞いたりしてゐるのです。

「僕、あすが心配だよ。もし君が出来ないと僕のせゐだもの」

稔君が心配さうに三吉君の顔を覗き込みます。

三吉君は、大きくうなづいていひました。

「大丈夫だよ。休んだところは君からすつかり教はつたから。きつと出来るよ」

二人はまた熱心に勉強を続けました。

ところが、その算術の試験が来て見ますと、三吉君に出来ない問題がありました。三吉君の困つた顔を見た英一君は手早く紙片に式と答へを書きつけて三吉君に渡さうとするところを先生に見つけられました。

先生は英一君を図書庫の裏へ呼んで慈愛にみちた声で諭しました——「先生、先生の御恩は一生忘れません」英一君は校庭へ出て来ました。

待つてゐた三吉君は英一君の手を握つてお礼をいひました。稔君や外のお友達も「先生が許して下さつてよかつた〳〵」と、みんな肩をくんで帰つて行きました。そしてみんなお互に、友の情といふものをしみ〴〵と感じました。

その夜、英一君は不思議な夢を見ました。窓から空を眺めてゐました。たくさんな星がキラ〳〵と輝いてゐます。

するといつの間にか、まつ白な衣をつけた一人の少女が窓に立つてゐるのを見ました。その少女は星の使で、手に一つの白い、すきとほつた玉を持つてゐます。

「その玉はなに？」英一君が、たづねると、その少女はかう答へました。

「英一さん、けふのあなたのあやまちは、ちやうどこの玉のきずのやうなものよ。きれいな〳〵玉のかすかな〳〵きずよ」

そして少女は、その玉を英一君に渡しながら〔つけ加へました。〕

「この玉を一生懸命にお磨きなさい。この玉のきずが消える時あなたのきずも立派に消えるでせう。消えたら星つくる宮にいらつしやい（ね）」（とつけ加へて窓から消えてゆきました。）

英一君がコスモスの咲き乱れてゐる野で玉をみがいてゐると、そのきずはだん〴〵消えて行きました。いつの間にか三吉君のうしろに来て「おめでたう」といひました。

やがて英一君は三吉君に教へられるまゝに煙突から出る煙に乗つて「星つくる宮」に行きました。空高く雲間に聳えてゐる白いお菓子のやうな宮殿には、まつ白なうすものをつけた少年少女がせつせと玉を磨いてゐます。そして（こないだの少女が）英一君に「この黄金の槌で（その玉を）お打ちなさい」といひました。

英一君が恐る〳〵その槌で打つと、玉はパツと割れてたちまちたくさんの星になつてしまひました。英一君がそれを手につかんで空に投げると闇の空にたちまち銀砂子を撒いたやうに星がキラキラ光り出しました——これで英一君の夢は醒めてしまひました。

こんな美しい夢が稔君にも三吉君にも恐らく繰返されて、やがて展覧会もいよ〳〵あと数日に迫つて来ました。

三吉君は汽船（港の風景）を写生しようと思つて海岸へ出て来ましたが、いゝ絵の具がないので（どうしても空の色が）巧く出来ないのでした。

「いゝ絵の具がほしいなあ」——三吉君は溜息をついて筆を投げてしまひました。

余りいゝ絵の具が欲しい〳〵と思つてゐた矢先のことで、三吉君は稔君の絵の具を学校で盗みました。しかしすぐ悪いと気がついて返しに行きました。

交通巡査の友成おぢさんは三吉君にいひました。

「少年は時々あやまちを犯しやすい。しかしあやまちを悔（い）るなら、それで立派に罪は消えるのだ」

友成おぢさんがいつたやうに稔君は三吉君のあやまちをすべて許してくれました——三吉君もまたもう二度と、こんなあやまちはすまいとかたく〳〵心に誓ひました。

さうしてお天気のいゝ日は続いて行きました。けふも公園で友成おぢさんは五人の子供たちに取りかこまれてお話をしてゐます。

「これから君達みんなを美しい国へ連れて行つてやらう」

子供達はみんな「早く連れてつておくれよう……」とねだります。

「遠い〳〵ところにあるんだよ。さあみんなで眼をおつむり」といふのと同時に子供たちは、ほゝゑみながら眼をつぶりました。

美しい国には「叡智の門」があります。

「親切な門」があります。遊戯場があります。一番奥に「美しい国の売店」があります。

美しい国の売店には店員がゐません。働きさへすれば、なんでも好きなものが買へることになつてゐるのです。

「羊のお世話——一時間」「菊畑の手入れ——一時間」「牧場のお世話——一時間」「驢馬君に乗つて水撒き——一時間」

「あなたのお部屋を掃除しなさい」かういふいろ〳〵な札が（、その売店の玩具や、お人形や、お本などのそばに）立つてゐます。

三吉君は驢馬に乗つて水撒きをしました。稔君はお部屋の掃除をしました。妹のゆりえさんは菊の手入れをしました。英一君は羊のお世話をしました。

総括

三島由紀夫の死

奈須田敬

書き捨てられ読み捨てられ、雑然と積まれたままの〈三島事件論〉。その堆積中から〈死〉の背景への肉迫をみせる「質」を洗い出し、総括的な観点を通して〈事件〉の核質への接近を試みる。

■目次■

「伴・三島由紀夫」の勇み足／11月25日の酒／畳上死と反面同志の思想／戦争を知らない子供たち／剣の道文の道／〝弱虫の大バカ野郎〟／怒りの琴／〝とうとうやったか〟／もう一つの「憂国」／続・怒りの琴／空想的会見記／〝ホナサイナラ〟／反三島論に斬り込む〝三匹の侍〟／天皇「無化」と三島「無化」と／三島の天皇論は政治思想か／三島は生き自衛隊は死んだか／

900円

東京都新宿区花園町一〇六

原書房

さうすると急にみんなの耳許で「さあ、みんな眼をおさまし」という友成おぢさんのなつかしい声が聞こえました。

子供たちは一斉に眼を開きました。するとみんなが望んでゐた品物はめいめいの膝の上にちゃんと乗つてゐます。三吉君の膝の上には、もちろんいゝ絵の具が乗つてゐます。

ゆりえさんはいひました。

「おぢさん、私たちはいつの間にかほんとうに美しい国に行つて来たのねえ」

おぢさんはにこ〳〵してゐます。

「おぢさん、あんな美しい国がほんとうにあるの」

三吉君がかういひました。そこで友成おぢさんは大きな、それでゐて慈愛にみちた声でいひました。

「真心から美しい国を願ふ人にはほんとうに(ママ)あるんだよ」と。

みんなは嬉しさうにして帰つて行きます。

赤い〳〵夕陽が西の山を美しくいろどつてゐます。

×

〔この映画は大阪三越が御大礼記念事業として本社後援のもとに募集した児童映画の一等に当選したものです。原作者は京都帝国大学文学部国文科三年の伊東静雄さんといふ人です。夏休みの中四国の山奥で慈愛にみちたお母さんに励まされ〳〵筆をとつたものだといふことです。

それを松竹キネマの蒲田撮影所で映画化したのです。

監督および出演者は左の通りです。

脚色……水島あやめ
監督……清水　宏
三　吉……小藤田正一
英　一……久良　形真
稔　……半田日出丸
ゆりえ……藤田　陽子
若き教師……日守　新一
友成おぢさん……石山　龍嗣
星の使……高尾　光子
夢の国の少女……小桜　葉子〕

英一の見る「星つくる宮」の夢から一転、過ちを犯す三吉および彼の悔いと決心とを描いたのち、友成巡査の語る「美しい国」の幻想へと結んでいく梗概は、梗概として完結を見せていて参考になる。しかし、原作の面影を知るにはなお遠い隔たりが残されているであろう。むしろ、梗概でない箇所でⒶが伝えている次の二点が注目に値する。

第一には、伊東静雄が〈皆さん少年の心はそれはきれいなものなのです。けれど只時々悲しい過を犯しやすいのです。その過を過と知り悔と涙で決心をしお祈りしたならば皆さんは神様の様に美しく、世界は天国になるでありませう。／わたくしはこの作の発端に、これだけの文句を書きつけました。〉と「作者より」（「大阪毎日新聞」昭和三年十一月号）に述べているが、その序詞が映画の最初の字幕にも（一部を改めて）用いられているということである。

第二には、原作者を〈伊東静雄さんといふ人です。〉と正しく書いていることである。〈四国の山奥で（中略）筆をとつた〉とする誤り（正しくは郷里長崎県諫早）も中にあり、それは例えば一等当選の報を受けたときに伊東静雄が語った談話（「大阪毎日新聞」昭和三年十月十日号）の記憶違いか何かによる誤りであろうが、原作者をなぜか〈壁静〉とする「キネマ旬報」に対し、正しく〈伊東静雄〉とする事例も当時にあつたことを示している。

参考として、映画「美しき朋輩たち」上映館の新聞掲載広告の場合を五紙（大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、神戸新聞、東京日日新聞、東京朝日新聞）について確かめたところ、阪神発行の三紙の京阪神三館の広告に〈伊東静雄氏原作〉とあり、東京発行の二紙の京浜

二館の広告に〈壁静氏原作〉とあつた。したがつて伊東静雄の名は、映画「美しき朋輩たち」の上に、少くとも京阪神では正しく冠せられていたのであり、全く隠蔽されたり抹殺されたりしていたのではなかつたのである。

しかし、ひとしく〈大阪毎日新聞社懸賞募集当選児童映画詩〉などと謳いながら、地域により原作者名を筆名化して伝えているのは何人のどんな意図と必要によるものであろうか。

次に、これまで、映画「美しき朋輩たち」は昭和三年十二月二十日から全国で一斉に上映されたとされているが、(注3)参照した上映館の広告の示すところでは、

十一月二十二日から大阪・松竹座で、
〃　二十九日から京都・歌舞伎座で、
〃　〃　神戸・聚楽館で、
十二月二十日から　東京・浅草電気館で、
〃　二十一日から横浜・角力常設館で

上映されたことになり、その一部についてそれと一致する記録を収める「キネマ旬報」（昭和三年十二月十一日号以下の数号）所載の「各地主要常設館番組一監表」は、名古屋・世界館での上映を翌四年一月十七日からと記している。

大阪三越が主催し〈御大礼記念〉として脚本を募集した映画にふさわしく、即位礼（十一月十日）、大嘗祭（十四日）、ついで伊勢神宮親謁の儀（二十、二十一両日）が終って〈京都御所還幸啓〉

なつかしさの序

吉木　青司

冬のドゥメンを歩いていると　あの
花のときが　うそみたいだ

精　霊

寡黙な小鳥たちの語りかけが
ぼくの胸には　じんとこたえる

愛をめぐって

ドゥメンの丘の
何とあたたかなこと
〈寒さがきびしいとき
丘の日は　いっそうあたたかい〉
羊歯のみどりに　ふいと
目がいったりする
冬はけっして冷酷ではない
枯れるもののいとおしさ
〈交替はいつでも準備されている〉
小鳥の饒舌なこえがして
ここは木の実でいっぱいだ
精霊たちの　にぎやかな
足音もきこえる

シャセ

ずぼんのすそに
草の実をつけてあるくのが好きだ
でも　ときに
茶色いこぶしをのばした
シャセめを避けてあるいている

雪の来るまえに

いつの間に葉を落としたのか
くぬぎの木
静かな軀幹にささえられ
小枝小枝は　もう
春の予感にはやっている　その
せっかちなふくらみが
いのちのいたみを隠している
〈忍耐とは十二月の空をたのむことだ〉
孤独なふかいまなざしが
木末をどっとつつみこむ
今夜　林は雪だろう

の二十二日、それは洋画封切館の大阪・松竹座でいわばロードショー的に封切られたのであった。(注4)しかし、松竹キネマには別に自称〈御大典奉祝映画〉「輝く昭和」(島津保次郎監督オールスター出演)があって、同じ二十二日から京阪神の松竹映画封切館(大阪朝日座、京都歌舞伎座、神戸聚楽館)で一斉に封切られており、「美しき朋輩」がいわゆる特作として製作され興行されたのではない。事実はむしろ逆であって、「キネマ旬報」所載の「日本各社撮影所通信」に、〈清水宏氏は次回作品「今年竹」を準備中〉(十一月二日調査・昭和三年十一月十一日号)とあり、ついでその次号に〈清水宏氏は「山びこ」に次ぐ作品として「今年竹」に着手の予定であつたが準備完成に至らざるため、曩に大阪毎日新聞社が懸賞募集せる際、これに当選せる児童映画脚本「美しき朋輩たち」を映画化することになり、直ちに撮影を開始し、急遽完成を見るに至つた、原作者は壁静氏、水島あやめ氏が脚色し、(以下スタッフは筆者中略)ロケーションには玉川方面を使用した。〉(十一月十三日調査・昭和三年十一月二十一日号)とあるのを見ると、多くて十日足らずの期間で速成されたと思われる。第三の資料の

Ⓒ「児童映画座談会」

(「映画教育」第十一輯・昭和四年一月二十五日発行および第十二輯・昭和四年二月二十五日発行)

は、昭和三年十二月二十二日、東京日日新聞社で、映画教育の専門家など十五氏が児童映画「塙保己一」(注5)と「美しき朋輩たち」を観覧したのち開いた座談会の記録である。必ずしも当日観覧した映画についてのみ発言されているのではないが、原作童話を読んでいる一人が次の発言をしているのは参考になる。

稲田(達雄、大阪毎日新聞社「映画教育」担当記者)……私は原作とか脚色とかよりも、児童映画については、特に全体的にいつて製作の態度が最も大切だと思ひます。さうなつて来ると松竹なら松竹で本当の児童映画を作る必要があつて作つたかどうかゞ問題になる。あれは三越から頼まれて、仕様ことなしに作つたものとしか見られない。

出席者の一人として名前を連ねている六車修松竹蒲田撮影所次長はこれに対してどう答えたのか、記録には発言が全く出て来ないのでわからない。

ところで、Ⓒには原作の一端に触れた稲田記者の発言がある。その前後を左に掲げる。

橘(高広、文部省嘱託。筆名立花高四郎)……「美しき朋輩たち」のタイトルの中で

長尾良作品集

長尾君の仕事は、いつも目だたず、あたかも夜明け前の渚か、暮れ終り間近の波打際に鳴っている遠い潮騒のように聞えていた。その声は、幽暗の底で淋しくあたかも人の世の終りを告げるような響きにみちていた。その声は聴きとりにくいが、ひょっとしたら、彼はそのような状態で、いつも醒めていたのかもわからない。　檀一雄

＊目次＊

入江の辺にて／河畔／復、その人を見ず／いま何処に／ある下士官／汽車のなかにて／白日暮／温泉行／由布子の由来／兄の病気／地下の島

2000円

東京都千代田区九段北三ノ二ノ十一

皆美社

「この御恩は忘れませぬ」といつて生徒が帰つてゆくあそこのタイトルはどうですね

稲田……あすこは原作ではさうなつてゐないで、学校の花畑の中に子供を立たせておく。そして子供に自然に反省させて帰すだけでした。

中条(伊勢吉、東京少年審判所)……その方がよいではありませんか。

三島(章道、少年団日本聯盟理事)……実際の場合子供はあゝはしませぬ。もつとも大人がさうしなさいと教へれば別ですがね。本当に子供が感じたならば、涙で黙つて黙礼して帰るべきですね。そしてそこが子供の純真なよいところではないかと思ひます。あゝいふところは子供が何か感じたらしいといふことでボカしておいた方がよいと思ひます。

先に触れたところの一等当選の報を受けての談話に、〈美しいほゝゑましい滑稽を織込み、善と悪とを対立させながら強ひて善を主張せず、美を眼目としたつもりです〉と作者は創作意図を語っている。〈学校の花畑の中に英一を立たせておく。そして英一に自然に反省させて帰す〉のは、まさしくその創作意図の具象にほかならない。座談会出席者がその描き方を直ちに肯定しているのは、少くともそのほうがこどもの情操を育てるのに適切であることをよく知っているからである。

脚色者水島あやめ、監督者清水宏にはそれがわかつていなかつたのか、あるいはわかつていても製作上の事情で教訓場面に終らせざるを得なかつたのか。いずれにせよ、「詩人伊東静雄」に〈後輩市川に、自作が映画になつた感想を聞かれた静雄は、「自分の考えていたものとはすっかり違ってしまった。他人のものを見るようだ……と、世にも悲しい顔をしていた」(伊東さん)というのは真実であったろう。〉と書かれている作者の悲しみの原因の一部は、この軽薄安易な脚色あるいは演出にあったといえよう。(注6)

雑誌「映画教育」には、「塙保己一」が時折り学校の映画番組に加えられている記録は見受けられたけれども、「美しき朋輩たち」については見受けられず、当時大阪毎日新聞社の新事業として開始された学校巡回映写や貸出のために、それが「大毎フィルムライブラリー」の目録に加えられたしるしも見いだせなかった。そのフィルムの伝わらぬことはさして惜しまぬにしても、その片影を以てしても少年教育の練達者を領かせた、原作童話「美しき朋輩達」を読むよろこびを遂げることができないのは、まことに大きな憾みである。

(注1)当時大阪毎日新聞社映画記者。

(注2)当用漢字体のある漢字はそれを使用し(その他の資料についてもこれに準ずる)、「江」の変体がなは「え」に改めた。また筆者の見たⒷは、裏面記事が切取りの厄を受けていたため、梗概部分の末尾近くの小部分以下は対校を果せなかった。なお場面写真が、Ⓐに一葉、Ⓑに三葉掲載されているほか、Ⓑの掲載誌の表紙写真としても用いられていて、計五葉四種を得る。

(注3)たとえば、小高根二郎『詩人伊東静雄』、小川和佑編『伊東静雄年表』(富士正晴編『伊東静雄研究』所収)。ともに昭和四十六年刊。

(注4)大阪・松竹座の封切広告ならびにⒸ(後掲資料)には、フィルム巻数を〈六巻〉と記している。

(注5)松竹キネマ下加茂撮影所で製作された児童芸術映画協会の作品。藤沢衛彦原作、友成用三監督。昭和三年十一月三十日、東京・浅草松竹館で封切。

(注6)この場合、清水宏の名を佳作「風の

中の子供」（昭和十二年）、「子供の四季」（昭和十四年）、「蜂の巣の子供達」（昭和二十三年）の監督者として想起するのは適切とはいえない。〈「愛慾変想図に初」まり「美しき朋輩たち」に終る清水宏氏の今年は一向映えないものであつた〉（淡路浪郎「霜田映画の一年」。「キネマ旬報」昭和四年一月一日号）、〈彼が現代映画の監督者として多少なり共その手腕を示しはじめたのは昭和四年の「東京の魔術」、「あひる女」あたりからである〉（村上忠久「日本映画作家論」。昭和十一年往来社刊）などとあり、〈凡庸さ〉を脱しきっていなかったと見るべきだからである。

（昭和四七・一二・三〇）

応召日記 (十四)

蓮田善明

そのほかにその瞳は見得ぬものか妹が瞳の美しくして直に吾を見つむ—想像—

○

帰りぬと電報よみしかばますらをのたけき心もほと〳〵死にき

○

妹が手をとるがごとくに電報をとりてよみたり待ちあへぬかも

○

待ちわびしからに一片の電報に千度想ひき妹が面輪を

○

午前二時、めざめて

夜ふかく目ざめて又もあくがれつ妹が目に似て何か見えくる

○

夜ふかく目ざめて又もよみかへす妹が帰りしと小電報の紙

○

電報の紙にならべるむらさきのタイプの文字の妹が名よしも

○

片かなの電報の文ひろひよむ妻帰る夜の心足らへり

○

安寝せぬ幾夜くるしも愛しけやし妹を抱きてば安寝しなむか

○

人間のからだはあはれ妻と子がからだに触りてわが飽かなくに

○

夜ふかくめざめて妹を思ふてふ歌をつくりて二時は経つ

○

妹を思ひ夜長く更けて安寝せずめざめありとは妹知りなむか

○

にくむべきものをあくまでにくむごとますらをさびて吾は妹を思ふ

○

にくむべきものをにくめと思ふ日ぞ妹を愛しみ利心もなし

○

皇軍いくさに勝ちぬこの烈しさにますらをの心もえつゝゆるさじと思ふ

○

書き下ろし長篇小説
木曜島
庄野英二
南紀からアラフラ海の真珠採取に出稼いで、オーストラリアの産業開発に協力した人々が、個人とは全く関係のない開戦によって突如として抑留される不条理に投げかける芸術的な問い。
¥800
理論社

舎より出でて　ながむれば
桜の木立冬がれて
最後の葉も残りなく
散りはてたるを　蓑虫の
あまた　梢にすがりつる
憎みてわれは立ち去りぬ

夕かたまけて凍てしごと
空むらさきに　雪れて　見よ
星の光のまたゝきぬ
あはれ美はし　星は　みな
ひとつひとつに　おのがじし
さやけく照りて　ためらはず

散文
谷川俊太郎
旅と出会い。日々と予感。愛と破片…。詩人の秘められた手帖。生きる歓びと哀しみのあいだにそっと置かれた谷川俊太郎の待望の全エッセー集
晶文社

英雄として立たば　ゆめ
われは許さじ　情けをば
たゞ健くこそ　憎みつつ
伐ちて勝たんと誓ふかな
たゞ死ねとのみ　英雄の
道こそ立てれ　星のごと

あかつき寒く　目をさまし
凍れる窓の　幕ひけば
さくらの梢　霜おきて
声なく星は空をゆき
永遠なるものの歌は　いま
きびしき闇にきこゆなり

十二月二十八日（水）
植木にかへる。皆無事なり。昨日初め電話せしといふ。本部の当番が伝言を怠つてゐたのであらう。

十二月二十九日（木）
中隊の宴会。

十二月三十日（金）
日直。ごて〳〵多くつまらぬ。十二時すぎ就寝、寒くてねむれず、五時に起きて歩き廻る。

昭和十四年一月一日
午前隊に行き、午後汽車で植木にかへる、途中墓参。

一月二日
朝風呂に太二といく。帰ってブラ〳〵し、しようことなし、又フトンに入つて昼すぎまで眠る。疲れまだ癒らず。夕刻、やつとこのペンをとる気起る。
荷風集をとり出して少しよむ。自分の「人磨と荷風」だん〳〵心当りがつくか？

一月三日
午前ねる。午後敏子が箱から本を出してくれる。持つて帰るやうたのんでおいた日本文学大辞典（これはたのまなかつたやうな気がする）、万葉集総索引、国史備要、続日本紀その他少し。原稿類、日記類。何ともいへずなつかしい。本に顔を合せるのがはづかしいくらい。
夜、万葉総索引と続日本紀を抱へて熊本に帰る。

一月四日、雨。
勅諭奉読式。午後既教育兵に学科をやる。三時近く帰宿、山崎氏の家に行き、夕

中の子供」（昭和十二年）、「子供の四季」（昭和十四年）、「蜂の巣の子供達」（昭和二十三年）の監督者として想起するのは適切とはいえない。△「愛慾変想図に初」まり「美しき朋輩たち」に終る清水宏氏の今年は一向映えないものであつた▽（淡路浪郎「蒲田映画の一年」。「マ旬報」昭和四年一月一日号）、△彼が現代映画の監督者として多少なり共その手腕を示しはじめたのは昭和四年の「東京の魔術」、「あひる女」あたりからである▽（村上忠久「日本映画作家論」。昭和十一年往来社刊）などとあり、△凡庸さ▽を脱しきっていなかったと見るべきだからである。

（昭和四七・一二・三〇）

応召日記 (十四)

蓮田善明

そのほかにその瞳は見得ぬものか妹が瞳
の美しくして直に吾を見つむ—想像—

○

帰りぬと電報よみしかばますらをのたけ
き心もほと〳〵死にき

○

妹が手をとるがごとくに電報をとりてよ
みたり待ちあへぬかも

○

待ちわびしからに一片の電報に千度想ひ
き妹が面輪を

○

午前二時、めざめて

夜ふかく目ざめて又もあくがれつ妹が目
に似て何か見えくる

○

夜ふかく目ざめて又もよみかへす妹が帰
りしと小電報の紙

○

電報の紙にならべるむらさきのタイプの
文字の妹が名よしも

○

片かなの電報の文ひろひよむ妻帰る夜の
心足らへり

○

安寝せぬ幾夜くるしも愛しけやし妹を抱
きてば安寝しなむか

○

人間のからだはあはれ妻と子がからだに
触りてわが飽かなくに

○

夜ふかくめざめて妹を思ふてふ歌をつく
りて二時は経つ

○

妹を思ひ夜長く更けて安寝せずめざめあ
りとは妹知りなむか

○

にくむべきものをあくまでにくむごとま
すらをさびて吾は妹を思ふ

○

にくむべきものをにくめと思ふ日ぞ妹を
愛しみ利心もなし

○

皇軍いくさに勝ちぬこの烈しさにますら
をの心もえつゝゆるさじと思ふ

○

書き下ろし長篇小説
木曜島
庄野英二
南紀からアラフラ海の真珠採取に出稼いで、オーストラリアの産業開発に協力した人々が、個人とは全く関係のない開戦によって突如として抑留される不条理に投げかける芸術的な問い。
¥800
理論社

舎より出でて　ながむれば
桜の木立冬がれて
最後の葉も残りなく
散りはてたるを　蓑虫の
あまた　梢にすがりつる
憎みてわれは立ち去りぬ

夕かたまけて　凍てしごと
空むらさきに　霽れて　見よ
星の光のまたゝきぬ
あはれ美はし　星は　みな
ひとつひとつに　おのがじし
さやけく照りて　ためらはず

英雄として立たば　ゆめ
われは許さじ　情けをば
たゞ健くこそ　憎みつつ
伐ちて勝たんと　聲ふかな
たゞ死ねとのみ　英雄の
道こそ立てれ　星のごと

あかつき寒く　目をさまし
凍れる窓の　幕ひけば
さくらの梢　霜おきて
声なく星は空をゆき
永遠なるものの歌は　いま
きびしき闇にきこゆなり

十二月二十八日（水）
植木にかへる。皆無事なり。昨日初め電話せしといふ。本部の当番が伝言を怠つてゐたのであらう。

十二月二十九日（木）
中隊の宴会。

十二月三十日（金）
日直。ごて〳〵多くつまらぬ。十二時すぎ就寝、寒くてねむれず、五時に起きて歩き廻る。

散文
谷川俊太郎
旅と出会い。日々と予感。愛と破片…。詩人の秘められた手帖。生きる歓びと哀しみのあいだにそっと置かれた谷川俊太郎の待望の全エッセー集
晶文社

昭和十四年一月一日
午前隊に行き、午後汽車で植木にかへる、途中墓参。

一月二日
朝風呂に太二といく。帰ってブラ〳〵し、しようことなし、又フトンに入つて昼すぎまで眠る。疲れまだ癒らず。夕刻、やつとこのペンをとる気起る。
荷風集をとり出して少しよむ。自分の「人磨と荷風」だん〳〵心当りがつくか？

一月三日
午前ねる。午後敏子が箱から本を出してくれる。持つて帰るやうたのんでおいた日本文学大辞典（これはたのまなかつたやうな気がする）、万葉集総索引、国史備要、続日本紀その他少し。原稿類、日記類。何ともいへずなつかしい。本に顔を合せるのがはづかしいくらい。
夜、万葉総索引と続日本紀を抱へて熊本に帰る。

一月四日、雨。
勅諭奉読式。午後既教育兵に学科をやる。三時近く帰宿、山崎氏の家に行き、夕

果樹園　二〇四号　昭和四十八年二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価八〇円　送料三〇円

棟方志功
—その画魂の形成—

小高根二郎

一、系譜と土俗
二、遠祖と近祖
三、美の象徴—火と花
四、出発と離別
五、青光画社と貉の会
六、上京と帝展落選
七、拾う神と風の誘い
八、苦闘の日々
九、出会いの季節
十、開花と結実
十一、予期せぬ収穫
十二、詩と版画の交配
十三、浪曼派との通交
十四、画魂ついになる

三月中旬刊　新潮社

食を馳走になつて帰る。

志貴皇子論を書き改め〳〵してまだ定稿を得ない。

林フミ子の「戦線」をよむ。軍服を着、林の本をよむ。これはつねに自分の決意をひきしめてくれる。

夜中にめざめ、又少し原稿を改める。

一月五日

風の音がとても烈しい。七時にとう〳〵起き上つて服を着、兵営に行く。ねて居れなかつた。出発の兵も段々整列してゐる。O・O・Yの三伍長に餞別を渡し、二中隊の兵やその他の知つてゐる兵隊と別れをつげる。

出発前、T中尉が馬上で号令をかけ、東方を向かせて勅諭五条を奉誦させた。実にいいことだつた。それからラッパを先頭に出発。門前で見送る。営外からO少尉もきてゐた。

目の前を兵隊がとほる。新しい服の若い男たち。旗をみんな背嚢にさしてゐる。靴の音。波のやうにゆれてとほる。知つた顔がとほる。雪がちら〳〵交る。最後尾からついて宿まで来た。一緒にあの足音を踏みならしつゝ行きたい。この出発の感激を味はゝずにはつまらないと思ふ。

編集後記

十二月三日。箕面高校で国語を担当しておられる米田義一氏が来訪された。もつとも昨夏、氏の教え子である女生徒数名がクラブ活動だといつてやつてきた折、うちの学校には伊東静雄の教え子の先生がいる……と聞いていたので、氏の存在はかねて知つていた。お話によると、映畫研究のかたわら、たまたま静雄が京大時代に応募当選したシナリオ童話「美しき朋輩達」の新しい梗概が発見されたという。「サンデー毎日」所載のそれと、上映広告のコッピーまで持参された熱心さだつた。私が発見した「キネマ旬報」のそれより遙かに詳しいので、歳末多忙の折にもかかわず執筆発表していただいた。伊東静雄研究家には誠に見逃しがたい好資料である。氏に感謝を申し上げる。

二十三日。たまたま上京した機会に、詩人宮城賢、新潮社の片岡久、青木頼久諸氏と八重洲口の国際観光ホテルで落合つて歓談した。宮城氏の最近の詩の立派なことは、まこと一時期の静雄をほうふつさせるものがあるというのが、かねての私の確信であつたが、片岡氏は朔太郎・静雄・賢……と、明確に現代詩史の系譜の上で宮城氏に期待していることを知り、私と全く同感であつた。

二十六日。かねて伊東静雄の教え子である由の電話をいただいていた京都工藝繊維大学工藝学部でフランス語を担当されておられる阿部哲三教授に、京都ホテルロビーでお目にかかつた。建築科の学生一人を連れておられた。お話によれば、十人ばかりで蓮田善明研究をされてるとのことで、入手した資料は総てリコッピーして立派に製本されていた。研究資料の整備に協力してもらいたいとの御申出だつた。そういえば、京大仏文の生田耕作教授は最も熱心な蓮田善明の支持者である。国学者蓮田善明とフランス。その間になにらかの脈絡があるのかもしれない。（O）

果樹園　第二〇四号（毎月一回一日発行）
昭和四十八年二月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社

果樹園　二〇五号　昭和四十八年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価一七〇円　送料三〇円

果樹園

終刊号

棟方志功(三)　小高根二郎
ハーディ詩抄(五)　森亮
甦った一票　宮城賢
冬の泉　吉本青司
まるのはなし　中野信子
趣味　福地邦樹
アルバム(三)　田中克己
応召日記(五)　蓮田善明
編集後記

棟方志功(三)
—開眼、美の法門—

小高根二郎

2　山仙のトラが噛った鬼存鯉

志功は「夢応の鯉魚」を「善知鳥」に次ぐ物語板画にしようと思い立ちながら、半年以上も宿題になったまま胸の底で眠っていた。興義が化けた秋成の鯉にふさわしい、夢幻的な雛形がなかなか得られなかったからである。昭和十五年の夏は一家ぐるみ懐しい八甲田の鹿湯にきた。まるで明治の昔のようにまだランプをともし、山仙人の辰五郎が篠笛で神鷹を舞わす昔話的な雰囲気で、或いは夢幻の化け鯉の雛形が得られるかもしれん……という期待が、心の奥にきざしたからであった。

男女混浴の馬鹿でかい千人風呂。鳥居のような太柱が支えた大天井の下に、「熱の湯」「冷の湯」「鹿の湯」「四分六分の湯」の湯槽が、ゆったり間配られている。およそ三百年前の貞享の昔、獵師の矢で傷を負った鹿が、疼く傷を湯で癒すや、矢のように逃げていったと伝える「鹿の湯」は、牛の小便のような湯が、露天の昔を偲ばすように、ジョジョ……と間断なく明窓の上の樋から落ちている。洗場は、天井を逆さにして敷いたように、滑り止めの桟がほどこしてある木の床だ。酸性の湯がまったりと浸って、冬でも臀を凍えさせぬための親味な配慮なのだ。

志功は起き抜けに湯に入るのを習慣とした。山の端に仄かに射した暁を反映して、明窓がほんのり浮んだだけで、湯槽も床もまだ沼のように暗く沈んでいた。志功は床を手探りのようにして這っていくと、大きな「四分六分の湯」に身を沈めた。隣の「鹿の湯」に落ちる湯の音で、湯槽ごと次第に渓底に沈んでいくような錯覚を覚えた。鼻をつく硫黄の臭いは、現世を遮断する煙幕のような気がした。四年前に志功が書いた、山仙辰五郎顕彰碑が建っている宿から五分の地獄沼の、一角のような気もした。他の湯槽には、すでに先客が沈んでいた。ときどき交す会話や咳やあくびで、それと知れた。その声は男であったり、女であったりした。たいてい自炊の湯治客なのだ。いや、湯治客と見せて、頭に皿をいただいた悪戯者のメドチや、運動不足でずんぐり太った沼貝夫婦や、髭コを振り振り散歩好きな艶であるかもしれん。いや、いっそ合浦の池の剛染の鯉たちだったらなお面白い。俄雨の氾濫に乗じて池を抜けだし、溝川を伝って堤川へ遁走し、それから荒川を上って城が倉渓流を遡行し、後は渓谷から湧く雲に乗ればいい。そう、空想を猛しくすることは、郷国に帰ってきたな……という、志功の一種の安らぎにつながる思いだった。それは弘前にいる弟の武志郎からだったか、それとも津軽工芸店の相馬貞三に聞いたむがしごだったか忘れたが、「緋鯉のあねさま」を思い出していた。

＊

むかし、ひとり者の、正直でよく働く若者があった。

ある時、山に薪をとりに出かけた。その途中、わらはど（子供）が何人もいで小川の岸で大きな緋鯉をつかまえて、「これァわ（俺）のだ、んが（お前）のだ」とけんかしていた。若者はこれを見ると、「こら、こら、その鯉一匹でけんかすんだら、わさその鯉ごと売ってけろ」と、その鯉を買とり、川に放ってやった。

そうしたことのあったある日、「ごめん下さい」といって美しいあねさまがたずねてきた。「どうじがら？（どちらから）」とたずねると、「わね家（え）コねで、どごさも行ぐごとァならねはで、わごとお前様のかがにしてけへんが？」といって、なんぼしても帰らないので、若者は仕方なくかがにして一緒に暮すことになった。

そのあねさまは次の日から、とてもよく働いた。ことに料理が上手で、若者は生まれてはじめて、うまい料理を毎日食うことができた。

「な（お前）、どうしてこう、うめェ料理出がすんですば、わさも知らせへじゃ」というと、「いや、いや、なんでもへんじゃ。もっと上手にこしらえるはで、けっしてわの料理しているどご見ねェでけへ」といった。

若者は不思議に思った。見るなというと見たくなって、ある日、台所で仕事しているかがの様子を、そっとのぞいて見てびっくりした。一匹の緋鯉が、桶の中でしきりに米をといでいる。若者ははじめて以前に助けた緋鯉が、独りで不自由している若者に手助けするためにあねさまになって、きていたのだとさとった。その晩緋鯉のかがは厚く礼をいって、「今日かぎり暇コけでけへ」といって出ていってしまった。

（「青森県の昔話」川合勇太郎編、津軽書房刊）

＊

このあねさまの化け緋鯉と興義の化け真鯉とが、志功の脳裡でしばらく化けくらべをした。文四の餌を食って捕った興義鯉より、米をといでるとこをみつかったあねさま鯉の方が、遙かに化け上手だと思った。洗場に上った志功は、湯に酔ったように陶然としていた。かわたれどきはすぎた。浴場の側面の明窓はすっかり白んで、洗場に憩っている人影が浮き上った。手拭を禿げた頭頂に乗せた爺さま二人に、萎んだ鐘乳洞のような乳房の婆さま一人だった。身体を洗うでもなくぼつねんと坐っていた。すると志功の背後から、いきなり湯を排して誰か洗場に上った。志功と同じ「四分六分の湯」に浸っていたわけだ。その桃色にゆだった肉塊は、滴を落しながら隣の小さな「鹿湯」の方へ歩むと、こちらに向き直って前に手拭も当てずに、片足ずつおもむろに湯に沈んだ。あねさまだった。やがて三十に手が届く年頃だが、伏鉢のような胸乳、甕様の三角尻は、棚が落ちていぬ堅太りだった。ほの暗さに心をゆるめたせいもあろうが、思わせぶりな羞恥など微塵もない風情が、かえって自然で立派であった。明らかに浅虫あたりの襟足を白く塗った女――昆布巻の類ではない。畑仕事や家事で適当な労働にこと缺かぬ在所のあねさまだ。そこに団体の浴客がどッと繰り込んできた。さいぜんのあねさまは、それを汐に、「鹿湯」に膚接した一番小さな「冷の湯」に、腹這うようにして滑り込んだ。平行棒に両掌を当てて、腰のひねりでひらりと跳ぶ……といった軽妙なしぐさだった。この瞬間的な動作は妙に感じがあった。志功は桶の米をとぐ「緋鯉のあねさま」を感じた。

朝食後、子供たちが植物や昆虫採集にでかけると、志功は墨をすった。永らく胸の底に放りッぱなしになってる宿題に、光彩を与えようと思ったからである。あの「緋鯉のあねさま」のインスピレイションが冷めぬうちに、「夢応の鯉魚」の雛型を得なければならない。

「もう勉強だか？　早いでねェだか……」と、大原誠一社長が部屋に回ってきた。十年前、山仙辰五郎と画仙志功に随行して、仙人岱で神鷹を拝んだあの売店主任だ。神鷹を拝んだ翌年、白戸社長がぽっこり亡くなって、爾来代って旅館をとり仕切ってきているのだ。彼は志功の手から墨を取ると代ってゆっくりすりだした。志功は筆を執って一っ気に描きだした。臍（ひちょ）コのうしろの鬼が描いた鯉。五本の指ではなく三本の爪で摑まえたような鯉。そんな化け鯉でなくてはマイネ。う、うッ！文四にだまされるようなハンカクサイ（薄馬鹿）鯉ではマイネ。文四も、平の親方どもも、だましとうせるような鯉魚でなくてはタブローにならん。うッ！　やっぱしあねさま鯉だ。腰を使って米コをとぐあねさま鯉だ。あんさまに「うめェ」と舌鼓を打たす鯉コだ。「今日かぎり暇コけでけへ」と、この鹿湯サやってきたあねさま鯉だ。

そう、志功はブツクサ何かを呟きながら描き飛ばした。大原には、なんのことやらさっぱり意味が通じなかった。描いては畳の上に飛ばす紙幅で、たちまち部屋が池になったように、鯉だらけになってしまった。志功は一息入れると、腹這いになって、「はて、どれにすべな？」と近視を近付けて一匹一匹を検分した。「ンガだばマイネ」「さア、ガだばよがべかなア？」と語りかけた。が、やがて、寸ずまりのピン！　と跳ねた一匹を取り上げた。滝登りの姿勢のようでもあり、米をとぐあねさまの身振りのようでもあった。鯉と鯛の間（あい）の子のような妙な鯉コだ。チェコスロバキアでクリスマス料理に使う、体長四五十センチ、幅二十センチ、頭から背鰭にかけて盛り上った、鮒との間の子のような鯉にも似ていた。又、ブリューゲルの版画によく出る、化物魚にもどこか似ている。「ガだッ！　ガが興義鯉だ!!　鬼仔鯉だ!!!」と、志功はその一枚を持ってる手をブルブルと震わせた。

「夢応鯉魚」「遊群」　棟方志功

この時、濡縁の方から山仙が愛猫トラを抱いてのっそり現れた。

「早いでねエだか、もう絵コ描きしたか？」と、右親指で洟を飛ばしてから、縁に腰を下した。

「こりゃア、鯛コだけんた寸ずまりの鯉コでねェだか？　スコーは絵コうめえうめえという評判だが、こいだばワの孫コの方が上手だけんた……」

と、無遠慮に批評した。この評言には、さすがの志功も大原も、空いた口がふさがらなかった。この時である。山仙が抱いていたトラは、彼の掌を蹴ると、志功が雛形に選んだ取っときの鬼仔鯉に躍りかかった。

「これッ!!!」

と、山仙は棒立ちになってペットを叱ると、彼女は廊下に跳び退きざま、厨房の方へ一散に遁走した。志功の前の一匹は、美事に鰓の部分が喰い破られているのだった。

「ありゃア、どすべ?」

と、さすがの山仙も青くなった。

「ガの孫コがまとうわげにもいがねべ、さア……」

と、大原は先ほどの身のほど知らずの山仙の批評を皮肉った。

「あのトラの阿魔ッコ! いがねェことして……」

と、山仙は現実にトラを引ッ捕え、打擲するようなしぐさをした。志功は破られた一枚に眼を近付け、喰い破られた場所が致命の咽喉元であることを確認すると、にっこりと頬笑んだ。これでこそ「夢応の鯉魚」。お化け鯉の鬼仔鯉だ。

「よっぽど生臭かったんだべなァ……」

と、相好をくずしたので、山仙は志功の合点がいかぬ寛容さと上機嫌に、ほッと胸を撫でおろした。

これはいささか荒唐の左甚五郎めいた逸話で恐縮だが、筆者がその場の立会人だった大原誠一社長から直接聞いた話であるから、疑う余地がない。ともあれ、志功はトラが実証した妖気溢れた鬼仔鯉を起用して、「夢応の鯉魚」を制作した。「興義」「三井寺」「仮死」「桃喰」「夢遊」「金鯉」「汀」「河泊」「濡裳」「遊群」「哭叫」「膳所」の末尾で、物語にない膳所を創作したのは、平家の所在をそこと推定したのであろう。その館の屋根には、これまた物語に無縁な鷹がとまっている。八甲田の鹿湯でとれた鬼仔鯉を証明するため、仙人岱から神鷹を呼び寄せたのであろう。

3　三木の夜遊び鯉

これはいささか蛇足になるが戦後にも鬼仔鯉の逸話がある。兵庫県は三木の医師・伊東俊一家にある「群鯉図」である。それは昭和三十二年真冬の作であるが、縦二五センチ、横一八〇センチの細長い扁額に、大川にのびのびと遊泳している五匹が描いてある。一番右手に親鯉がどっしり浮んでいる。その左手に、反転したり、互に擦違ったりして、四匹の仔鯉がほたえている。或る朝、操夫人（志功と松木の阿佐が谷の合宿時代、向いの神頭家の三女）は、内庭に面した奥座敷の障子にハタキをかけようとして、はッ! とした。欄間に掲げてある「群鯉図」の中の一匹が足りない。一番左端で反転していたチビの鬼仔鯉である。いや、今まで、一匹、二匹……と、匹数を数えてみたことがあったろうか? もともと四匹だったのではあるまいか? そう、彼女は反省をした。が、確かに死匹というげんの悪い数でなんてなかった。どうしても五匹だった。奥座敷の北側は書斎にも通じる廊下になっており、そこの窓下はいきなり美囊川だ。川幅いっぱいに満々とみなぎった水は、うねりを打って流れている。もしや? と思って、窓から覗いてみると、案の定、チビは浮きつ沈みつ遊んでいる。ご機嫌なのだ。

「チビちゃん。戻ってらっしゃい! もしものことがあったら、どうするノ?」

と、すかさず彼女はたしなめた。すると彼は、「ここまでおいで……」と赤ンベをしながら、遠去るふりをして、いきなり手の届きそうな至近距離に泳ぎ寄ると、反転、水しぶきをあげて水中に掻き消えた。その小憎らしさに、

「覚えてらッしゃい!」

と、彼女はハタキを構えて水面を睨らまえた。

今度はどこに顔をもたげるかと四辺を警戒していると、想わぬ上流にぽっかり顔を覗かせた。そして口に鰭をくわえると、汽笛のような奇声をあげた。見れば阿佐ヵ谷時代の合宿に巣くっていた面々だ。「操たち。気を付けたがいいぞ」と、父が日頃警告した狢の誰かに化けている。

「だまそうたって、もうだまされはしませんからネ!」

そう、本気に怒ってしまった彼女は、ハタキを鉞にして身構えた。今度は、意表に出たつもりで、近くに現れるに決っている。そこを思いきり小突く計略である。透けた水に、悪戯つぼく舌を出した鬼仔鯉が浮き上ってくる。そこに、彼女はハタキを突き出した。その突端の糸房を餌と間違えたかして、彼はうかつにもばくり……と噛みついた。すかさず彼女はハタキを引上げて、チビ奴をむんずと捉まえた。

「さア、観念をし。もう二度と我侭はさせませんからネ!」

そう勝ち誇って、彼女は両掌に掴み直そうとした時、必死に身悶えていた彼はするりと掌を抜けると、再び美囊川に遁走してしまった。

この夢の悔しさを、彼女は朝餐卓で夫に語った。彼は生真面目に「うむ」「うむ」とうなずいていたが、実は自分もこの間、鯉が逃げた夢を見たばかりだと告白した。互に幾度も逃げだされると悔しいから、ひとつ扁額に金網を取付けたらどうだろうと、医家らしく対症療法を提唱した。操夫人も、それがいいワと、その提案に賛同した。その奥座敷の欄間には、「群鯉図」の他に「群梟図」も掲げてあるが、この梟の方も逃げだすといけないという予防策から、一緒に金網が取付けられてしまった。この奇妙な金網付扁額を、筆者は伊東家で確認しているが、『棟方志功芸業大観』（昭和四十五年講談社）にもその写真が収録されている。

ハーディ詩抄（五）

森　亮

一九六七年を想ふ

百年経てば、人々の眼も変り、心も変る。
流行も改まる。新時代の愚者と賢者が生まれよう。
人は新しい悩みを嘆き、新しい喜びに酔ふだらう。

所で、その活気ある世紀の盛況の中で
私やあなたを偲ぶよすがは
一握りかそこらの土の塊りがあるのみ。
かの新しい世紀が素敵かどうかは保証できないが、
その盛りの時にはずつと広い視野がひらけるだらう、
今の馬車馬同様に目隠しされた時代にまさる視野が。
でも、どんなに遠くまで見晴らせようと何になる。
私が百年の後に顧ふことはただこれだけ、
愛しい人よ、
ならうことなら、あなたを食らふ虫に私もやられたい。

「ハーディ全詩集」二〇四頁。一八六七年（慶応三年）にロンドンでハイドパークの近くに住んでゐた時代に作つたもの。百年後の社会の未来像を描くのが目的ではなく、恋の歌であつた。その恋は実らず、詩は一九〇九年の詩集「時のお笑ひぐさ」に収められた。

第三章　鉄斎以上論議

1　志賀直哉の懐疑と反発

昭和十六年の正月三ガ日に、筆者は志功先生を東京は世田ガ谷の父の家に迎えた。家は、小田急の経堂駅と農大の中間、現在は桜と呼ばれている丘陵の、まだ武蔵野の面影がそこここに残っていた閑静な地帯にあった。先生は今まで見たこともない、りゅう……とした羽織・袴の正装だった。十年前に弘前は緑町の借家にも迎えたことがあったが、雲泥の相違だった。あの日、商工会議所で開かれた東奥美術展のために来弘した帰り、筆者の書斎で昼食を供したのだった。先生は母の心尽しの手料理に箸をつけようとしなかった。香の物と汁だけで、そそくさと飯をすまそうとする彼に、それでは母の労作にすまないから、残してもいいから、箸だけはつけてくれ

甦った一票

宮城　賢

週に一度
かれは精神病院を訪れる
かれはじぶんを異常でないとみなすことでは
多くの患者と異らないが
かれはじぶんで発行したI・Dカードによって生きていることで
わずかに患者たちから区別されようか
かれが精神病院へ足を運ぶのは
たとえばチャールズ・ラムのメアリ・ラムへの心情からである
週に一度かれがそこで会うかれのメアリは
無垢の魂のゆえに傷ついたひとだが
いまは仏様のように静穏に生きている
この病院だけでも
そのひとはもう十年選手だが
人間としてはいつも新入りのように水々しい
ミノベかハタノかで全都が湧いていたとき
そのひとは喜色満面でかれに告げたものだ
選挙権が復ってきたのよ！
五十歳の老嬢が
眼を輝やかし胸を弾ませて語るその声には
二十数年まえこの国に回復した選挙権の歓喜があった
あれは民衆の存在証明書であったが
それとおなじく　いまそのひとに
選挙権は一個の人間としての存在証明書でもあった
だれに一票を投じるつもりですか
とどうしてかれは訊くことができたろう
だれに一票を投じてください
とどうしてかれは勧めることができたろう
精神病院へ選挙運動をもちこむな
あそこで醇乎に回生した一票の意味を穢すな
贋のI・Dカードを濫発する時代よ
贋から本物になるにはそんなにも長い心の旅が要ったのだ
それでも世間はそれを通用させまいとする
かもしれぬ
じぶんで発行したじぶんのI・Dカードが
贋造紙幣とおなじく胡散臭げにみられるかもしれないように
週に一度
かれが精神病院を訪れるのは
かれ自身が発行したI・Dカードを正当に査証するのは
そこだけだからなのかもしれないのだ
流通不能の存在証明書はつねに孤独である

汚れた手

汚れた手が世界をものにするのか
男が女をものにするようにか
世界が汚れた手に身をまかすのか

女が男に身をまかすようにか
肉体を穢すことなく愛の実体に到達できない
生理は政治に通じるのか
政治が生理に通じるのか
世界は男なのか女なのか
男でも女でもあるのか
じぶんの汚れた手を知る者は
せめて他者と握手を交わすまい
それがかれなりの礼儀というもので
かれはわが手をみつめて生きるのだ
かれの汚れた手が女を愛撫し
かれの汚れた手が活計を支え
心はそれを耐えて生きるのだ
汚れた手にさりげなく手套をはめて
世界と握手を交わすまい
かれの礼儀は曲解され
かれは非礼と罵られよう
かれはそれを甘受するかわりに
黙々と耐えるであろう
かれの沈黙は汚れた手の沈黙
世界は騒々しい　しかり世界は
手套をはめた手でいつも騒々しい
かれは黙して手套を投げつける
汚れた手の怒りをこめて
かれはつき合いにくい人種である
汚れた手を裸かのままさし出すことは
かれの流儀では非礼であり
汚れた手に手套をはめてさし出すことは
かれの流儀では虚偽であり
洗ったぐらいで落ちる汚れでもない
じぶんの汚れた手を知る者は孤独である
かれはだれにも手をさし出さない
投げつけられた手套で世界は満ちるがよい
ほんとうに世界は黙ってしまうがよい！

血

血は殺意の流体である
生きるとは殺意を絶やさぬことである
殺意を殺そうとするものを凝視せよ
ささやかな昇給やささやかな徳売が
血眼になって血を浪費させようとする
世界は無恥な善意に満ちていて
わたしたちの血さえ買い上げてくれる
血を売ることは殺意を売ることである
血は物々交換の露骨な遺制として
いまだ戦場と病院で商なわれている
血は永遠に未開である
また同類を選別する
血の法則は世界の法則
戦場と病院の関係のややこしさは
血の法則のややこしさである
ナイチンゲールから血液バンクまで
人類は血の処理に手を焼く
殺意の処理に手を焼く
殺意の理念は博愛の理念で被覆される
裸かの血は遠い山林の奥に追いつめられる
惨殺と処刑の聖地
すべての深い森は殺意をしのばせている
人類の原始の殺意
人殺しが罪ではなかった原始の記憶が
燦然として血に点火する
インドシナの山林をみよ！
血の故郷！
殺意の流体はそこへ帰還する
山林は血の禁忌を知らぬ楽園
季節が山林へ退くように
殺意は山林へ退くのか
いな　世界の明かるい暗部にこそ
血はめぐり燃えねばならぬ
しいられた殺意の生存として

ろと……要請した。すると、先生は申訳なさそうにかぶりを振った。今は修業中の身。もしも贅沢な味を覚えたら、そこから志を崩すことにもなりかねないから、我侭を許してほしいと、箸を両掌に挾んで一拝した。

しかし、佐分賞を受賞して欝然とした中堅の地位を確立した今は、さすがに違っていた。応接間で気持よく御節料理を平らげ、屠蘇を祝ってくれた。筆者と兄太郎は相伴した。話は一昨年の正月、大和町の志功のアトリエで太郎が揮毫した、宗達まがいの唐獅子図のことになった。（そのお礼に、兄は「鯉」、筆者は「施無畏」の観音図を頂戴した）。

「チョコ三」で上機嫌になった先生は、書初めに今年も何か描いてほしいと太郎に要望した。同じく「チョコ三」でアルコールに弱い似非宗達は、その気になって得意の鼻をうごめかした。すぐ座敷に毛氈が敷かれ、その上に大鳥の子の全紙が置かれた。母は筆洗の水を満たし、筆者も大硯に墨を融いた。太郎は菊皿や小皿や顔彩を手の届く範囲に配置した。準備はすぐさまできた。

似非宗達は、やおら中筆に水を含ませ、穂先にかすか墨を滲ますと、構想を練る間もなく、福禄寿の頭頂めいた山影を聳やかし、裾には大様に海を横たえた。それから約一時間、志功先生のような速筆ではないが、留滞することのない正確さで、小まめに筆が動いた。山容は皴によって谷を構成し、水を落し、それを跨いで楼閣や回廊を幾重にも渡し、点苔をほどこした険しい丘には、それをやわらげるように桃李を花咲かせ、海は春らしくうねうねと波打たせた。志功は息を舌んで運筆を凝視めていた。似非宗達は顔彩で黄土と藍の淡い色彩を刷き、さらに岩絵具を膠で融くと、要所要所に朱と搗と緑青の光彩をちりばめた。まさに極彩色の仕上げだった。彼は最後に細筆をとると中空に鶴を舞わし、波間に亀を浮かべて筆を擱いた。いや、彼はそれから筆を改めると、象形の中国古字で「蓬萊山之図」とまことしやかに画賛を書き入れた。なんのことはない、似非宗達はいつか似非鉄斎になっていたのである。志功は、太郎の顔にいつか白鬚が靡き、眼は藪睨みになった八十九翁の面影を発見したはずである。太郎は頭の内に蓄積していた鉄斎研究を、そのまま紙幅に吐瀉したにすぎなかったからだ。

「これは、これは、めでたい労作を有難うございました。」

と、弘高サイプレス画会展評で読者も存知のいんぎんさと褒め上手で、志功は満悦して見せた。そこに母が茶菓を運んできた。その茶飲話に、筆者は「文芸春秋」正月号に掲載されている志賀直哉の「早春の旅」の、志功・鉄斎論議を持ち出した。それは河井寛次郎の「鉄斎以上」という例の志功推挽に対し、直哉は首をかしげている個所があるからである。

「河井君の所では田舎造りの爐ばたで、奥さんのおてまいでお茶を御馳走になり、気楽に話した。近江辺の古い民家の話、琉球の話、棟方君の描いた大原孫三郎氏の所の襖絵の話。河井君は

『鉄斎以上ですよ』と云ってゐたが、本物を見ずに反対するのも変で、そんな筈はないと思ひながら黙ってゐたが、その後で、今日午後榊原紫峰君を訪ね、今度造った自慢の庭を見せて貰ふつもりだと云ふと、河井君は言下に、

『それはいい筈はないですよ』と云つた。自分は棟方志功の『鉄斎以上』に遠慮してゐて損をしたと思った。柳が前に木喰上人の仏像の微笑を推古仏の微笑以上だと云つた事がある。一つの運動を起す者の心理で、嘘とは思はないが、さりとて一緒にさう思ふわけには行かない事も時々ある。日蓮上人の『禅天魔、真言亡国』の類である。自分は柳達の民芸運動は後になれば今の人が

考へてゐる以上に大したものになる事は認めてゐるが、自分の性質からいへば如何なる運動にも縛られる事は閉口だ。」

直哉はあてのない旅の途次に京都に立ち寄り、奈良の家を売ってくれた人々に寛次郎の茶碗を贈るべく五条坂を訪問したのだが、たまたま寛次郎口癖の「鉄斎以上」にかかずらわったのだ。それに関連して、宗悦、寛次郎、庄司を含めての民芸運動に対する批判に横滑りして了っている。筆者は、この直哉の舞文に反発を感じた。それは、遠い昔とはいえ、直哉も宗悦も同じ「白樺」の同人として、ヒューマニズム運動を推挽したのではなかったか？　自分の発足を自ら否定しているような直哉の変貌に、筆者は嫌悪を感じたからである。いや、それ以上に、たとえ知名度において比較にならぬとはいえ、榊原紫峰ごとき凡庸の画家と、画仙に類する棟方志功とを天秤にかけるとは、どだい絵が見えぬに等しいではないか？　という、反発を感じたからであった。

「今度『コギト』で鉄斎論議の敵を討ってみせますよ」

そう、筆者はいうと、包紙に丸めた似非鉄斎描く「蓬萊山之図」を宝物のように手に持って玄関に降り立った志功先生に、「早春の旅」所載の雑誌を呈上したのだった。

三ガ日が過ぎて、東京の家から宇治へ戻った筆者のもとに、やがて志功から次の葉書が舞い込んだ。

＊

昭和十六年一月十日

（東京大和町棟方志功から京都府宇治町玲音荘小高根二郎宛ハガキ）

「鉄斎以上先生」の題はうれしいです。そのコギト誌に展開せられるを千秋に待ち致します。私も小高根さんとお会ひの事はケンギュウのよろこび以上ですヨ。大元気に。

＊

筆者は帰着するとすぐに、久々に先生に会えた喜びを伝え、「コギト」に発表する敵討ちの文章の題名は「鉄斎以上先生」に決めた由を書き送ったので、右の返事が来たのであ

冬の泉

吉本　青司

夏草の径のほとりの　ふきでる泉を
蕗の葉にくるんでのどをうるおした少年は
後からくるあなたの姿が　いま
そこの稜線に現われるのを待っていた
失われたびい玉みたいな日のことである
どこかで　カラスが
山葡萄の実を食べていた
≪献身とは　高貴であればあるだけかなし
いものなのだ≫
いまは冬であった
てのひらには雪が降りつもり
老いたカラスのように黒いコートに身を寄
せて
あの日が　凍った泉のほとりを行く
いつも　あなたを残して　遠く離れて行っ
たものに
四季の安否を欠かさず伝えてくれたひと
先に――と少年を歩かせながら
何を思いつづけるのか　そのあゆみは
遅々とはかどらなかった

った。

それから一ヵ月あまりして次のような葉書が舞い込んだ。

＊

昭和十六年二月十二日

（同前　　）

お元気に在られるを祈ってゐます。優しいおこころが湧いて溢ふれて来る様小高根さまをなつかしくなつてゐます。兄上さまの例の絵着々装幀なつてゐます。私もいよいよ岩物を揃へました。兄上さまの指針を謝してゐます。

＊

末尾の岩物とは岩絵具のことである。太郎は褪色することの少いこの顔料の使用を、志功にすすめたのであろう。

翌三月初旬には次の葉書が舞い込んだ。

＊

昭和十六年三月九日

（同前　　）

旅からお帰りになりましたか、四月十二日頃大阪京都に五六日旅いたします。お会ひいたしたく切であります。四月六日附「サンデー毎日」に「床懸」なる小文を書きました。お目通しいたゞけば忝けないであります。又々、

＊

2　「床懸」と「鉄齋以上先生」

志功が「サンデー毎日」に書いた随筆「床懸」には、寛次郎に「鉄齋以上」とはやされるだけあって、彼自身の鉄齋に寄せる関心と好尚とが分って面白い。

「わたくしは自分の床に喜んで掛けて置くものを未だ持つてゐない。色々な絵や字もあるが、心落ちつけて掛替の無いといふところまでのものが無いのだ。想ふて見て鉄齋の景色か観音様あたり、それも字を一杯に書いてあるものなどが置けそうな気がするが未だその人のは短冊すら持って居ない。欲しいとあせつた時もあつたが、こつちで気持を焼かすと仲々見附からないもので、それといつては気がさめては結局、品が進んで来ないと思ふ。その内に一つは探し尋ねて持つてゐる気持で軽く収める心算だ。なぜ、鉄齋がそれ程、好きかといへば「満足をもたなくて筆を擱いた画人であったから」と云ふ。

あの人が九十齢の齢書を入れた絵を見ると、それがよくわかる。紙や絹に、白地を一つも残さないまでに意気と意地を盛り立てて描く以外な遊びを最も嫌つた、画家ぶつた気持が微塵もなかつた所に鉄齋の絵の誉れがあつたともいひ得る。あの年になるまで（八十九歳）あの働いた絵を出来した人は、近代では此の人をおいて一人も無いと云つてよい。鉄齋は逞ましい絵に対しての精進が死ぬまで、純心ばかりで満たされてゐたのだ。あの美しさは実に描いた美しさで、想ひや眺めた姿では毛頭ない。自然に対して、鉄齋の描いた物の位置、高い位置におよぶ仕業、その「絵空事」に他ならなかつた所以の鉄齋の画人としての真実があつたのだ。…中略…

先輩の方や友人等の書画を好みな表装して懸けるのは好きだ。額や屏風などにして楽しむに最も好もしい。身近なだけに同じに歩いて居る生活が識られて来るのだ。貴むも微笑むも、自らその筆者限りが、判つて有難くあつたり嬉しいものだつたりする。

随分、永い間の知人で、今宇治にゐる方の兄さんの絵が知人間で評判なので観に行った。一寸観ると宋時代の趣を具へた、真正統な技法、筆運びで、その真摯な態度には驚いた。「上手を隠してゐる所に、この絵のよさがあるよ」と話して、早速私も依頼して、快よく大作の「蓬萊山之図」を重

厚な岩絵具で（その画人は岩物といつてゐた）敷き詰めた大鳥の子全紙に精進尽して仕上げてくれた。わたくしを驚かしたこの稀有な名人と等しい域を望む作品を、表具師に届けその表装のなるのを心待ちしてゐる。」

先の三月九日付のハガキで、この随筆「床懸」を読んでくれと志功がいってきたのは、一つは、書初めに太郎が鉄齋先生にあやかって「蓬萊山之図」を描いた場面が取り込んでいるからであるし、二つには、筆者が直哉の「鉄齋以上」懐疑に挑んで、「鉄齋以上先生を書くというので、彼の鉄齋観を参考に供するつもりだったのだろう。ともあれ、志功は鉄齋が好きな理由として、「満足をもたなくて筆を擱いた画人」といっている。一枚描き了えるや、すでにそれに不満で、八十九歳の生涯を一枚一枚の精進に賭けた不抜の画魂が

まるのはなし

中野　僖子

ふたつのまるがあって
そのはじまりの日は
同心円だった
大きなまるは
本能的に満足していたが
小さなまるは
不遜な動きを孕ませて
せばまりはじめた
幼年期の薄明から
たえず　脱け出そうと身構えていた

それから　毎日
小さなまるは
同一平面上における
二円のあらゆる形状を
たんねんに　作図しつづけて
ついには
はてしない外円となって
大きなまるを離れていった

かなり難解な
円心の移動を試みたようだが
同心円のままでも
大きなまるを凌駕することは
可能であったはずだ

ある日
小さなまるは
個としての　のっぴきならない
《成長の定理》について
ぎこちなく弁明するだろうか

立体空間の座標上で
かっては　小さかったあのまるが
偶然　おのれの起点を
探りあてたとしても
再び確かに　大きなまると
同心円たることはないであろう

なぜなら
すでに　その時点においては
同一平面上という
必須の条件が
欠如しているはずである

とおい　はじまりの日
いとけないその右手に
いたいほど握りしめられていたのは
ぎんいろの
作図用コンパスであった

好きなのである。又、「画家ぶった気持が微塵もなかった」アーチストとしての誉れに尊敬を寄せている。即ち、「彼は自ら学者を以て任じて居り、一般世間から画工視されることを非常に嫌っていた」(小高根太郎『富岡鉄斎』)、真正なアーチストの気宇を尊んでいるのである。それに、「『絵空事』に他ならなかった所以の鉄斎の画人としての真実」に志功は関心している。いわば、描かなくともそんじょそこらに存在している世界ではなく、描くことによって初めて存在する浪曼的な世界……。その創造的な鉄斎の真実に感銘したのであった。

「床懸」を読んだ筆者は、四月中旬に大阪京都に来遊するという彼に、ぜひ宇治にも立ち寄ってくれるよう誘ったのであった。と、いうのは、筆者は処女詩集『はぐれたる春の日の歌』を夏頃に刊行する予定にしていたので、その装幀をぜひ依頼したかったからである。その装画のモデルは平等院の中堂母屋の長押(なげし)の上の壁に掲げてある雲中供養菩薩にしたかった。飛雲に乗って、琴、琵琶、羯鼓、風琴、尺八、横笛、太鼓などを奏でている諸菩薩。その奏楽に、立ち上って舞い、或いは蓮の花を捧げ、又は合掌している菩薩たち。そのどれでもいい、ふくよかな菩薩像で拙詩集を飾りたかった。その希望を添えて、来遊を誘うハガキに、近く雲中供養菩薩の絵ハガキを送る由を書き送った。それに次の返事がきた。

＊

昭和十六年三月十四日

(同前　　)

お便りありがたくあります。福井のおん旅よき日日であられますを祈ります。雲中供養仏の絵ハガキお恵送とのことたのしみしてゐます。先日兄上さま共々にて肥下氏宅にてその復製本見驚喜したものです(兄上さまのお言葉ではカンタン一字不明なれ共)

あなたさまの詩集生命かけて天晴れに描きませう。又

＊

このハガキによれば、志功はすでに雲中供養菩薩の図版を、肥下恒夫宅――コギト発行所で見ていたのである。丁度、三年前の「コギト」は、この図版から蓮の花を奉持している菩薩を選んで表紙の写真版にしていた。その原本を見たわけである。文中、太郎がこの図版を軽くあしらっているようであるのは、もともとこの図版は、兄が勧める美術研究所の刊行だったからであろう。

志功は約によって花見がすんだばかりの宇治に来訪した。連絡のあった時刻、京阪電車宇治駅まで出迎えに、筆者は橋を渡っていると、和服に袴姿、画具を背負った先生がやってくるのが見えた。合浦時代とさして変らぬ風采である。向うでも筆者を発見したらしかった。挙身微笑になると、二十メートルばかりの距離を互に駆け寄った。

「ようこそ……」

「ひさしぶり！」

と、師弟は、奔流の淙々と、春風がそよろと横断する橋上で相擁していた。

筆者の住む玲音荘は、県神社(あがた)のすぐ南の小山の上にあった。昔、Nレイヨンの工場建設に招いたドイツ人技術者たちの合宿に当てられた山荘だ。そこが、工場の独身の抜術者や事務屋の合宿に当てられていたのである。筆者の部屋は断崖に臨んだ突端だった。のっぽりと聳える喜撰山を遠景にし、中景に稲荷山と釈迦の涅槃像もどきの仏体山が東から西へなだれている。川はあいにく死角で見えないが、松の立樹や町家の甍の海の渚に当るあたりに、鳳凰をいただいた平等院の屋根が指呼の間に眺められた。このいかにも洛南らしい風趣を、まず先生に味ってもらいたかった。頂戴物である「施無畏」図は表装が成って、窓と本棚のはざまの壁に下っていた。その他

趣味

福地邦樹

漢の武帝は卓抜な帝王であったが
趣味といえるものを何も持たず
晩年は残酷な心になり
道士を入れ　部下を疑い
妻子まで自殺に追いやった

唐の玄宗も同じく英邁な帝王であったが
安禄山の乱ののちはすっかり呆けて
やはり道士に凝って
楊貴妃の霊を求めたりした
しかし幸い　作曲の趣味があり
穏やかな生涯を終えることが出来た

趣味を持つことは
人からみると　はかない行為のようでも
心はおのずと鎮まって
無用のことは考えなくてすむし
へたな詩や歌でも
こうして気侭に歌うことに
まったく意味のないことも
なかろうではないか

は、寝台と机と、なにがしかの骨董しかない殺風景な空間に先生は身を置くと、「ネ、やッぱし……」と、いかにも『はぐれたる春の日の歌』の作者らしい佗びしい雰囲気を認めてもらった。茶を一服してから山を降り、県祭のとき梵天が御旅所までいく御成り道を伝って、平等院の裏門から鳳凰堂へ案内した。

図版で先生が驚喜した雲中供養菩薩五十二軀は、本尊・阿弥陀如来像の正面と背後を除いた他の柱間八間の、柱貫(はしらぬき)の下、内法長押(うちのりなげし)の上の小壁に散らばって、手に手に楽器をあやつり一大オーケストラを構成している。しかし、閉された堂内は暗くてはっきりしなかった。案内の僧が、正面の外扉をギギ……と開いてくれたので、格子である内扉を通して射し込む春光で、やっと白い壁面におぼろに浮かび上った。志功は見上げると、図版で体験した驚喜を再現しようと努めるらしかった。が、いずれも一尺五寸から二尺余にすぎぬ楽人たちの身の丈は、本尊の九尺七寸三分の巨像の対比から、あまりに小さく見える。それに、昔は漆箔や粉彩色で彩られていたので、背景の白壁に映えて、その形姿もはっきり見えたに相違ない。弱視の志功には、ただ鬼瓦のような黒ずんだ物体に見えるかもしれない。そう、判断した筆者は、

「あの夢のように美しい彩色はどうです」と、彼の目を天井に残っている宝相華の紋様へ誘った。地色の錆朱に、菫とエメラルドと金泥の繧繝(うんげん)彩色の菱形花群……。その虹のような模様と色調とが、天井や屋根裏の一部に剝落せずにまだ残っていて、平安の昔に造型されたこの世の天国を、さぞ……と偲ばすにたる幽艶さだからだ。この時、開扉を終えた僧が、

「ご覧ください」

と、本尊の真上に当る、燃える太陽のような円い天蓋を指さした。

「あの太陽の中心に当る部分に、銅製の八花鏡がはめこんであります。鏡の周囲には花辨をとりつけて、蓮の花を形作っているのです。それから、太陽の周囲の火焔のような所に、二つの鏡が昔はめこんであったのです。見えますか？　丁度、蓮花の蕾に見えるのが、それです。」

そう、解説すると、この三つの鏡で外光を反射して、阿弥陀如来に真実の後光を投下する仕掛だったと、説明した。

僧の指さす人差指の先を注視していた志功と筆者は、「ほほう」と、思わず感嘆の吐息をもらした。僧はさらに、格子になっている内扉の、丁度如来の顔が対面しているあたり、

大きく丸窓がくりぬかれている事実に、注意をうながした。それは、鳳凰堂前の池の向う、宇治川の低い提防にたたずんでこちらを望むと、内扉の丸窓を通して、後光の射してる如来の尊顔が拝める仕組なのだと、解説をした。時折、拝観にくる筆者も初めて聞く解説だった。

妙に感動した筆者は、同じく感動してる志功を、鳳凰堂の真向いの堤防へ案内した。そして僧の解説どうり中堂を振返ってみたが、すでに外扉は閉されていて、内扉の丸窓を通して如来を拝んだそのかみの趣向は、味うことができなかった。

桜並木のある道を五十メートルも遡ると、塔ノ島へ渡る土橋がある。その直前にいきつけの料亭鮎宗があった。母屋前の道路を距て

「美瑠玖・愛染修羅身」　　棟方志功

て川の中にも子屋がしつらえてあって、塔ノ島で分岐した傍流の中の浮御堂といった感じだった。客足が絶えた早春の夕なんぞ、そこでしょんぼり酒を汲んでいると、寒風にそよぐ枯蘆が瀟々と床下に鳴って、まさに「はぐれたる春の日の歌」だった。赤紙（召集令状）がいつ舞い込んでくるかもしれぬ筆者は、そんな感傷を、時折そこで楽しんでいたのである。そこの川魚料理で先生に一献（いっこん）献上すると、改めて拙詩集装幀の依頼をした。先便で、天晴れに描く約束をしてくれた彼は、心持よげにチョコ三の酌を傾けると、「不肖棟方、身命かけてやってみせますよ！」と確約すると、筆者の手を熱烈に握った。話は自然……十二年前の合浦の出会いになった。さらに藤棚の下の果しえなかった競作の話に飛んだ。チョコ卅ばかりである筆者は、酔いにまかせて、自分もひとつ雲中供養菩薩に取材した挿絵を添えて、十二年前の果しえなかった競作の夢を果しますよ……と、おこがましく放言していた。一番弟子であった筆者が、絵筆を捨てた今も、変らぬ交誼をくださっている先生の温情に、いつか甘えていたのである。

やがて東京に帰着した志功から、丁度国画会展に出品している「閻浮檀金頌・門舞十六

男女神人像」板画屏風の絵ハガキで次のたよりがきた。

＊

昭和十六年四月二十三日

（同前　　）

忝けないことでした。親しい一杯にてのお歓待ありがたきかぎりです。伏して礼をくり返しいたします。あの御まどよりのよろしき美しき景色想ひ出され、小高根さまの美しさを共に仰ぎます。

＊

やがて五月上旬、約束の装幀画ができた由のたよりが、前と同じ「門前十六男女神人像」の出品絵ハガキで届いた。

＊

昭和十六年五月六日

（同前　　）

後れましたが只今肥下氏へ御著装幀「美瑠玖愛染」及扉「雲中躍鯉」（共に素晴らしき出来安心あられよ）届けました。よく描けて私も本望以上です。

＊

肥下宛に届けられた装画は、直ちに筆者に回送されてきた。あらかじめ、志功の装画に競作して、なにか挿絵を描く由を、発行者の彼に知らせておいたからである。

「美瑠玖・愛染修羅身」と銘打たれた表紙絵は、表はミルク肌の女愛染明王、裏はイエロー・オーカーの男愛染明王であった。おもうに、男女二様の表現によって、愛染明王の特性である、外相は忿怒暴悪でありながら、内相は恋愛染着する愛神の二資質を、表現してみせているのである。この表現は志功の発明であるに相違ない。そういえば、男女両明王ともに一軀、三頭、六手である。これは密教が秘伝する、一頭は白、一頭は赤の、二頭愛染明王からの創作で、一頭を加えることによって、さらに霊験あらたかにしたのであろう。

扉絵は「雲中・灼々

「愛染明王の子と飛天」　　小高根二郎

緋赤躍鯉」であった。例の八甲田酸湯でとれた伝説のアネサマ緋鯉だ。尾を反転させながら、まさに美の調理をしている真最中である。

この表紙絵、扉絵に対して、筆者は「愛染明王の子と飛天」を創案した。愛染明王に志功流に男女があれば、その間に当然……子ができねばならない。その子は忿怒・恋着の両親の気質をうけて、箸にも棒にもかゝらぬヤンチャ坊主にきまっている。その愛染童子をキューピッド風に仕立てると、競作に格好な画想になる。向うから菩薩が、阿弥陀如来に献花すべく、手に蓮の花を奉持して、しずしずとやってくる。鳳凰堂の壁間から雲に乗って脱けてきたのだ。雲影に身をひそめて、なにか悪戯の対象がないかとチャンスを狙っていた愛染童子は、すかさず弓に矢をつがえた。菩薩はいい声で、しきりと如来をたたえる頌歌を唱っている。彼女は自分の美声に、自分で酔っているあんばいだ。頃合はよし……と、童子はヒョウ！　と矢を放った。流星のように金色の尾を曳いた矢はまっしぐらに飛んだ。そして、狙い誤たず蓮の莖を貫くと、花を菩薩の手から宙へ弾ね飛ばした。あらッ！と彼女は驚き、花弁は宙間に四散した。してやったり……と童子はペロリと舌を出すと、「ヤァーイ、ヤイ！」とはやしながら、一目散に遁走する。

そんな悪戯っぽいモチーフと奔放な図柄である。筆者は福井で仕入れてきた唐紙に、平等院の梵鐘に彫ってある奏楽飛天の線描をまねて描きあげ、永年の競作の約を果したのだった。

丁度、この月、『コギト』五月号も、これまた年頭に約束した「鉄齋以上先生」を掲載していた。筆者は「早春の旅」が伝える直哉・寛次郎の「鉄齋以上」論議に、次のように結論をしている。

「そもそも棟方志功ほどの神仙のような大物を、凡そ巷間の画伯と云う人種と天秤にかけてみる……と云う事すら、絵が見えぬと云ふことに等しことであると思うが、今の棟方には志賀氏にご覧に入れるような自慢の骨董まがいの庭なぞはない。若し棟方志功を中野大和町の家に訪ねて「お庭は……」なぞと月並みなことでも問おうものなら、棟方は画稿で踏み場もなくとりちらかつているあの二階の画室のガラス窓を、呵呵大笑してガラ〳〵と打開いて広大無辺の大空でも指すことであろう。若し「山は……」なぞと尋ねたなら、床の間に注連を結つて祭つてある一丈もあろうばかりの版木の山で棟方は即座に応答するに違ひない。そうするといかにも東京近郊らしいがさつに浮いた窓外風景も原始のような豪華さになるから不思議である。その画室に棟方志功は赤いチャンチャンコなど羽織り、紬のモンペでも穿いて、異様な模様の入った鼈甲縁の目鏡をかけて、蝦蟇のようにはいつくばりながらウンウンと版木を彫り、一気呵勢に魂だけで日本画を描いている。その腰にしている帯と云えば……もう使用に堪えなくなっている程よれよれになり裂けている鶯色のものである。が、この帯だけは片時も肌身を離せぬ品だと云う。噂によれば十数年前青森での最初のパトロン、謎の失踪をした野間氏より拝領した思い出の品だそうで、今に棟方志功が一生の傑作をものした時はそのよれよれの帯地で表装するそうであるから観物である。これはまた通俗の美談のようになつて甚だ恐縮だが、河井寛次郎作の風雅な大茶碗でガブ〳〵お茶をご馳走になることであるから早速尿意を催す。「はゞかりは……」と、とんとんと階下に下り、便所の扉を開くと大抵の客はこゝで魂消えてしまう。なんと便所の壁にはでかでかと菩薩がおわします。これはまさしく棟方志功の筆である。近頃しきりに壁画をものしたがつている棟方の熱情が、家の中で一番なめらかな壁面を選んだまでの咄であるが、迷惑をするのは誰よりもお客様である。特に女の客なぞはどうしても勿体なくて駄目で、一度謝つてから用をたすそうである。…中略…

だが棟方志功は「鉄齋以上」であるのか、どうであろうか？　河井氏ほどの芸術家が明言するのであるから、大方の読者は、そう……と河井氏の言葉を素直に信憑されるがよい。または志賀氏のように、まだ見ないから判らぬと謙虚に答えるもよい。が、凡そ人や芸術の評価なぞと云うくだらぬものは、その作者滅後の茫々たる星霜に委ねてしまった方が正しいから、富岡鉄斎八十九の生涯の半ばにまだ十年はあろう……と云う棟方志功の天禀と精進を、心たのしく待つているのが何よりの親切である。が、富岡鉄斎のごとき大才にしてその青少年時に、若しも蓮月尼の日夜の薫陶がなかつたら、あれほど亭々たる大樹とはなり得なかつたろう。併し棟方には初めから蓮月尼なぞなかつたのである。鉄斎の絵の売れぬことをしきりに気にして、晩年沢山な絹や紙に先に和歌で画賛をしておいた蓮月尼はなかつたのである。鉄齋の蓮月尼が粋で風流なげてものつくりであつたことと、棟方の絶対な支持者である河井寛次郎氏が当世珍らしい気魄の籠つた大器の陶匠であるということとの、それこそ偶然の一致があるだけのことである。」

アルバム㈢

田中克己

わたしの母方の祖母が船越氏であることは前に記したが、娘二人を生んですぐ亡くなった様子である（没年、病名はもう誰も語れない）。祖父は昭和三十四年が五十年祭といふので、叔父叔母、いとことわたしも墓参りに淡路へ行ったから、亡くなったのは明治四三年だらうか、命日は五月九日である。祖母が亡くなるとすぐ代りが来て、その腹の叔父が三人、叔母が一人、この間までそろってゐたが、中の叔父が一昨年急死した。この叔父だけはわたしに「姉さん」のことを時々話してくれた。明治三二年生まれで、母（一九年生れ）とは年がちがってゐたからあまり信用できない。叔母も三〇年生れで、「わたしがお前の母に一番よく似てゐる」といってくれるが、写真で見る母はこの叔母よりふっくらしてゐる。八つ年下の叔父を歌った母の歌がのこってゐて

強きことといひてかへしし弟の頬の痩せおもひ涙し流る

とあり、きつい姉だったことを示してゐる。祖父も後母や腹ちがひの弟妹との間のことを心配してであらう、大阪のミッション、スクールに入学させた。ウィルミナ女学校といふのがそれで、今は何といふか。ここを卒業したあとプール女学校といふ学校の専攻科？に入学した。明治四一年一二月一八日撮影のミス・ショーのバイブル・クラスの写真といふのがのこってゐる。母は前列の藤井さんと亀田さんとの間に坐ってゐて、皆より少しふけ

言葉なき歌
―中原中也論―
中村稔
「寒い夜の自我像」で強烈な生の自覚を確立した中也が、誠実という「一本の手綱をはなさず」、名辞以前の暗黒の中に揺曳する光を摑もうとする決意――この新しい中也論。
¥860
角川書店

てゐる。数へ年二十三才なのだから当然であらう。母から子守歌を聞いたおぼえもないが、昭和三九年母の五十年記念会を開いた時、わざわざ上京して出席した叔母が「姉は雪よりも白くといふ讃美歌をよくうたひました」と話してくれた。この歌は今も讃美歌集に五二一番として残ってゐて、リフレーンの箇所が、「わがつみをあらいて、雪より白くしたまえ」といふのである。しかし母の負うた罪は何であったらう。母はわたしのやうに洗礼を受け日々罪を悔いることはなかったやうである。

応召日記 (去)

蓮田善明

○

雪がちら〳〵まじつてゐる
夜明けの空はくらく　風が荒れ
出発の兵隊が背に小さな国旗をかざり
若い顔で営庭に並んでゐる
こら、いきのいい顔して
おまへら　美しいぞ

五ケ条の勅諭を奉誦して、おまへたちは
出発した
ラッパの次に　おまへたちの靴の音
旗がおまへたちに負んぶされて
波のやうにおよいで　行く
沿道の人の万歳に　元気に手をふるもの
もある　万歳叫ぶものもある
まただまつてニコ〳〵して行くものもある。
まじめくさつて歩調をとつてゐるものもある
つゝましく挙手の敬礼で答へてゆくものもある
私は涙して見送つた
強い　勇ましい
おまへらは美しい

わたしは宿にかへつて自分の寒い部屋に
興奮して立つてゐる。
ラッパの音と　万歳の声が　遠く〳〵つづいてゐる
おまへたちの　足どりが　わたしの胸の中に
すすみやまない
若い兵隊ら　行け　行け
おまへらは　健く　美しい

一月六日（金）

昨日降りつゞいた雪で真白、まばゆいばかりの練兵場で観兵式予行。しかし日が上るとむざんにとけた。雪で靴をかくと気持よく美しくなる。日直士官。明日の初年兵入隊準備で隊は大多忙、十一時迄延燃。

一月七日（土）

検査。午後講評。帰つて風呂に入り数日分の垢をおとす。

一月八日（日）

陸軍始、観兵式。寒い。午後手紙を六通書き、城戸さんへ行き夕食御馳走になり、九時半辞去。あの家から帰つて出てくる時の気持は何か天国旅行から帰る時の気持、たゞなごやかだけでなく、たゞ人が好いとかいふのでなく、美しく高いものがある。たけしさんの文学鑑賞眼はしつかりしてゐる。昨夜恰度よんで感心した林芙美子の「戦線」の詩をたけしさんの方からほめて話し、本をとり出して来てみせるのだ。

今日又びつくりしたのは、砂糖菓子の鯛が幾箱も買つてあること。毎年廿円くらいあの無邪気な子供遊びに使ふとのことだ。尋常の人の出来ることではない。

今日は城戸さんはこの寒風に鮒釣に昼津

湖に行つてられた。おせつさんももう快い。ヤノスケさんはチョンカケを買つてそれを遊んでゐるし。秀子さんは純真にしてつゝましく、今夜は二へんもミカン買ひに出かけ、いいのをえらんでゝめてくれる。チョコ（犬）は手をとる。

○

美しい家庭で　心弾んで　辞してくると
空はさんらんたる星である
低い小さな家ではあるが　その上に
神は世界一の宝石で飾つた「冠」をかぶせてゐる
たしかにその暗い家の上の空で
神々のにぎやかな祝宴がきこえる
家の前の川の流れも大きな琴となつて
夢みるたのしみの音をかなでてゐる。
美しい人間は守られてある。高く空に位置する星に
きよらかな人は祝福されてある、地から
わく水の流れに

○

明晩は時間があつたらタイを土産に植木にかへらう。

一月九日（月）

帰る。今夜がほんとに心悠かな気持だつた。子供たちをも幸福にながめた。敏子もいき〳〵してゐた。

一月十日（火）

初年兵入営。雨。

○

若いそして最も古い
神々
神の座に
そなたたちは帰つてきた
たくましい弓矢のやうな
純潔なたましひ
それこそ　いかなる鉄壁をも　透す
そなたたちは　牛のやうな額を
素朴な星章でかざつて
その座についた。
最高の神が
そなたたちに魂を頒けると
仰せられる
「万歳」とむかうの方で
親神たちが
さけんでゐる……

一月十一日

○机上の水仙に題す

*

むすめは、くちびるから　おとなになつた
まだ　誰も　男がやつて来ない
しかし　もうすぐ　だらう
むすめは　おとなになつた　くちびるが
さびしい

*

朝の光が　ほのぼの　窓にさし
まだ　誰も　男がやつて来ない
しかし　もうすぐ　だらう
むすめは　おとなになつた　くちびるが
さびしい

*

朝の光が　ほのぼの　窓にさし
水仙は　束になつて　花瓶に
さゝれてゐるのは　つらさうである
ほんとに　ひとりの　むすめになつたら
ひとりで　さびしくても
くちびるが　透くやうに　うつくしい

*

窓をあけておくれ　わたしは　みんなと
なみだで別れて
あの　あをあをと　まぶしい空の下で
ひとりつくづく
蜜蜂の　おとづれを　待ちほけたいのよ

*

水仙よ　おとなになつた　むすめよ

棟方志功

—その画魂の形成—

小高根二郎

現存する日本の画家の中で、棟方志功以上に世界的な真価と声価を誇りえる人は今のところない。少年時代は青森三馬鹿の一人——絵馬鹿とはやされた彼。官展に搬入しても、入選より落選のベテランであつた彼……。その彼が、師匠につけば師匠以上になれぬと英断し、貧とアルチザン達の圧迫に屈せず、独力で未曽有の芸業魂を創造していつた過程を、血統と土俗を通して究明した画人伝。十九歳の少年の日、弟子第一号となつた筆者の感謝と回想の石ぶみ。

3月17日 発売

¥一、一〇〇

新潮社

くちびるだけでは　実のらない
かなしい　水仙よ　おまへは何もしらない
うつくしい水仙よ
蜂はおまへの　黄いろい　花粉を
空高くはこんで
すべての草々の上にまき
広い野に春を
芽ぐませてくれるだらう

夜、今日も初年兵身上調査で点呼後かへる。

一月十二日

忙しくて一日一日がはるかな気がする。午前初年兵の御真影奉拝、入隊式、午後再(ママ)密検査、その後身上調査

昨夜より持統天皇論を書き初む

同宿の五高生と青春、文学、英雄等につき語る

一月十三日

久しぶり快晴、午前幹候生検定試験（練兵場）午後兵器授与式、内務教育計画表を完成。

夜、映画をみにゆく、都会の雷鳴、月光の曲。前者のストーリー後者の音楽。帰つて風呂に行く。

明夜は植木にかへる。「妻とあふ」恋してゐるやうに心にわくものがある。

終刊の辞

二百号の刊行を悲願とし、その後も続刊を決意して五号を加えたが、いちおう本二〇五号をもつて終刊することにした。十七年前の発刊当初、田中克己は「われわれは種子である。培ひびとではない。照りかける太陽でもない。それらの恵みのあるところ、われらは発芽し、花ひらき果実をつけるであらう」と書いたが、はたしてその希望がかなえられたかどうか？

旅立ちは八頁の痩身で、時に特集号として三十二頁に着太つたこともあつたが、概ね十六頁か十二頁の痩せッぽッちで通した。この体軀から判断すると、遅り好んで陽の当らぬ谷間とか、森林を、歩いてきたらしい。そのギギスのところに虫が好いたかして、三島由紀夫氏が「一茎の野草のやうな謙虚な小冊子」といつてくれたことは、忘れられぬ思い出である。

出発当初の同行は十二人だった。終着地点に着いてみたら、ご覧のように八人だけになつていた。しかも、一行の中に、終始、伊東静雄か、蓮田善明の亡霊を加えていたことは、おそらく後世の語種になるだろう。

とまれ、各自手にした果実があれば、それを地に戻そう。それは自然が命ずるモータルの義務、天の摂理だからだ。

終りに、永年にわたる読者各位の愛読と、多くの犠牲をかえりみず刊行を請負つてくれた元市印刷所主に感謝を申し上げる。尚、誌代の剰余は逐次返済いたします。（O）

果樹園 第二〇五号（毎月一回一日発行）

昭和四十八年三月一日発行

編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎

印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社

発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社　〒563（電話〇七二七・六一・八三一七）

定価　一七〇円　送料　三〇円

果樹園　二〇五号　昭和四十八年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価一七〇円　送料三〇円